RECONSTRUCTION

改造

大正九年七月一日發行
大正九年六月廿七日印刷納本

改造講談號

講談と文藝

思想と評論

言論壓迫民衆反抗

虐殺團パルチザン

堺利彦
上司小剣
白柳秀湖
沖野岩三郎
江口渙
久米正雄
芥川龍之介
菊池寛

森戸辰男
河田嗣郎
水野廣德
堀江歸一
室伏高信
昇曙夢
片上伸
谷崎潤一郎

七月號

慶應義塾大學教授 小泉信三著

新刊

社會問題研究

著者は慶應義塾に於て社會問題の講座を擔當する新進の小壯學者にして、本書はその最近研究の成果を公にせんとするものなり。內容左の如し。

一、フエルヂナンド・ラッサルと獨逸勞働者運動。二、集產主義及びサンヂカリズムに對する批評としてのギルドソシヤリズム。三、再論ギルドソシヤリズム。四、勞働の苦痛。五、二種のユウトピヤ。六、學問藝術と社會主義。七、マルクスの價値論と價格論。八、ホジスキンの勞働全收權主張。九、勞働權と國民工場。十、戰費の經濟理論。

菊判四九一頁 ポプリン布裝
定價三圓二十錢
送料內地十八錢

ポール・ピック原著 法學士杉村陽太郎譯
勞働爭議
近刊 菊判約四五〇頁 定價三圓 稅十八錢

法學博士河田嗣郎著
社會問題及社會運動
七版 菊判五一〇頁 定價三圓二十錢 稅十八錢

文學士高田保馬著
現代社會の諸研究
再版 菊判二六六頁 定價二圓二十錢 稅十二錢

法學士森戶辰男著
勞働者問題
五版 四六判三九二頁 定價一圓八十錢 稅十二錢

法學博士佐々木惣一著
普通選擧
十版 菊判五二二頁 定價二十五錢 稅二錢

發兌 東京市神田區南神保町 振替東京二六二四〇番 岩波書店 電話一二八〇 九段一二八一

新刊發賣！

▼吹田順助著　小山周次氏裝

新しき岸へ

藝術、宗教、社會問題に關する論文集。全篇を貫徹する精神は、新しき神への憧憬であり、價値意識と躍動的生命との結合を主張する新理想主義である。附録――ドストエフスキー、ジムメルの諸論文の譯。

四六判三一七頁
箱入美本
定價壹圓九拾錢
送料八錢

▼和氣律次郎譯（勞働文藝叢書第四編）

爭鬪

勞資問題を取扱へる戲曲にしてガルスワアジーの代表作！

定價壹圓四拾錢
送料六錢

東京市牛込區神樂町二ノ一十一　叢文閣　振替東京八二八九

改造七月號目次

クロポトキン原著

馬場孤蝶氏
佐藤緑葉氏
森下岩太郎氏共譯

全譯 露西亞文學講話

露西亞文學を論評紹介して精到凱切、唯一無比の世界的名著を見よ。人間苦の暗黒裡に無數の寶玉を藏せる近代露西亞文學は、この大思想家の深刻なる人生觀と犀利なる藝術觀を透して、玆に廣汎精密なる一大鳥瞰圖を現出す。本書は實に露西亞文學の過去及現在を詳述し、其將來を暗示せる一大名著にして、近代藝術の一大驚異たる露西亞文學を知らんとする人、及び人道的思想を知らんとする人は必らず一讀せざる可らず。

◆四六判總布製箱入美本五百頁◆定價貳圓六拾錢（送料十二錢）◆

目下盛んに愛讀せられつつある思想書類

- ウヰリアム、モリス原著 堺利彦氏譯 改版 **理想郷**（再版）定價壹圓貳拾錢 送料八錢
- 日本一のユウモリスト 貝塚澁六氏著 **猫の百日咳**（五版）定價壹圓四拾錢 送料八錢
- 堺利彦氏著 山川菊榮女史譯 **女性中心と同性愛**（五版）定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 與謝野晶子女史著 **激動の中を行く**（六版）定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 前田蓮山氏著 **社會の黴**（五版）定價壹圓四拾錢 送料八錢

東京神田中猿樂町 合資會社 アルス 電話九段二一六九番 振替東京二四八八八番

復活

世界はナゼ改造を要する乎
復活は即ち此疑問の解鑰

トルストイの大傑作　中澤弘光氏裝幀　前編後編全二冊

内田魯庵氏新譯　縮刷形天金頗美裝　正價各
本文壹千頁以上　金貳圓五拾錢

（千九百二十年改訂版）　玻璃版二十七葉　小包料各十二錢

カチユーシャの歌はれる所、ドンナ片山里でも復活を知らざるは無い。が、復活は物語の筋が面白いばかりでなくて其背景の露西亞の各階層の生活の描寫や其間に挿まれた骨を刺し。肉を抉るやうな深酷な批評が直ちに讀者の腦中樞を衝く鋭どさがある。**ナゼ露西亞が亡びた乎、ナゼ世界は改造を要する乎。**丁度レントゲン線で踊り狂ふ男女を透過するやうな鋭いインサイトが讀者を身柱元から戰慄させずには置かない。**魯庵氏**の他人の追隨を許さない飜譯は既に定評があるが、殊に復活は最も會心の著であるに拘らず更に反覆洗練一年有餘を費やして完成したのが此の改訂版で、殆んど**全部新譯**である。復活の底力の強い批評と鋭い洞察と感激に充ちた大浪のウネリのやうな物語とは此の**魯庵氏**の新譯に由て初めて彷彿する事が出來る

發兌元　東京市麹町區平河町五丁目二　**金尾文淵堂**
（電話特長一〇八五番、電話特二九一番）（振替三八一七）

室伏高信著

ギルド社會主義

（第一巻）

（四六版ポイント組 約三百頁） 定價貳圓參拾錢 送料金八錢

東京京橋區元數寄屋町三ノ一（振替東京四五三四六番） 批評社

最新刊

マルクス派社會主義は理想を畫く力を缺いた。そこで墮落した。新社會の建設はギルドマンの創造的才能に俟たなくてはならぬ。――著者はこうした立場からギルド社會主義の研究にあらゆる精力を傾けた。その結果はこゝに『ギルド社會主義』（全部四巻）となつた。第一巻は今や市に出た。第二、三、四巻も續いて市に出るであらう。そこで現代の社會的及産業的不安の解決に何ものかを貢獻するであらう。――著者は確くこう信じてゐる。

室伏高信主幹

批評

月刊雜誌 社會問題 思想問題

定價一部參拾錢 半年壹圓七拾錢

東京京橋元數寄屋町三ノ一 批評社

クロポトキン原著◇高畠素之氏序◇中山啓氏譯

【最新刊】

クロポトキンの經濟學說

◇四六判五百三十頁總クロース、上製　定價金參圓五拾錢送料十四錢◇

◇田園・工場・仕事場の全譯愈々發賣!!

本誌前號に於て伊藤野枝氏の**田園・工場・仕事場**の梗概を讀まれし人々は本書が**クロポトキン**の思想中に於て如何に重要なるものなるかを知られたるなるべし。實に本書は無政府主義學上唯一の教典なり。今や其完譯は出づ。伊藤氏の梗概を讀みし人々には、更に本譯書に就て、直接に**クロポトキン**の言葉に觸れ其心臟の鼓動を聽かざる可らず。**クロポトキン**の思想は人類を呪ふ惡魔の聲か社會を地獄より救はんとする神の啓示か。無政府主義に對する一切の疑義は本書に依つて始めて釋然と氷解す。必ず新人の一讀を薦む。

高島素之氏曰く『誤譯大流行の當今本書の如きは稀に見る好飜譯』と譯文の正確以て知るべし。

發行所　東京市芝區三田一丁目　振替東京一八一〇一番　三田書房

岩野泡鳴著

悲痛の哲理

四六判六百五十餘頁
裝幀美本函入

定價金參圓八拾錢
送料金拾八錢

内容

▽悲痛の哲理
▽新自然主義
▽半獸主義

岩野泡鳴氏本書の校正を終るや溘焉として逝く、本書は氏の異常なる天才の最初の產物たる『神秘的半獸主義』より明治末期の新興文壇の花形として縱橫活躍せし時代の產物『新自然主義論』の全部を收め、更に氏の思想の最高最完の域に達し一世を驚倒したる名論『悲痛の哲理』を收む。現代日本の產める世界的獨創思想家泡鳴氏の眞價は本書に明々躍々たり。

此永久的名著を江湖に薦むるを得たるは、本社の光榮とするところ、切に一讀を冀ふ。

發行所　東京市京橋區南鍋町一丁目　振替口座東京八五三番　隆文館圖書株式會社



==((改造七月號))==

民衆政治と哲學者の責任

政治は自個生存のための政治、民衆のための政治である、國家のため人類のための政治である。其を人ごとの如く思ふて超然無關係なるを自ら潔しと考ふる不心得ものの多きは困つたものだ。殊に根本的に社會改造を要する現代に對する哲學者の横柄なる態度は少からず余輩をして憤慨せしむるものがある。

彼等は、自ら政治や、社會改造の實際に觸れざる事を以つて、賢明なりとし、また自己の本職を神聖ならしむるものだと考へておるらしい。かくては深山に隱遁して霞を喫ひ、生きんが爲に生きた伯叔の徒と何等の異るものぞ。そうならいつそ死んだがましだ。社會改造にはあらゆる人類の總てが起たなくてはならぬ。哲人も卷を投じて街頭に立てよ。オイケンを追ひ廻はし、ベルグソンと惡戯ることのみが君等の任務ではない。輕薄な翻譯のペンをのみ執らずして、深刻な創意の巷に出てよ。そして世界に溢れる沈鬱と澁滯の空氣の拂拭につとめよ。

「日蓮」はあの時代の卓見者ではなかつた。既に支那から難を我國に避けていた禪僧の總てが、弘安、元弘のことあるを高唱していたのだ。唯だ彼には創意があつた。一の堅い信念があつた。自身の强い哲學があつた。千萬人と雖、我往かんの氣魄があつた。

確乎一片の自信があれば、時に百萬の蒼生を救ふことが出來る。善きにあれ惡きにあれ彼の「綾部の直子婆さん」でもあれ位の信徒を膝下に慴伏せしめて、世界の建て替へとか建て直しとかに腐心しておるではないか、民衆政治と伯叔等を奉ずる哲學者の近時の態度は全く矛盾に充ちておる。

高い國家の祿を食み、高い尊敬を衆愚より受けながら、彼等の國家に奉ずる所は幾千ぞ。人類の福祉に寄與する所は幾千ぞ。思ふて玆に至れば、我等は彼等が血のなき哲學を憫まない譯には行かぬ。

尼港の寒天に一死を捧げた人々に彼等は火の如き熱涙の寄贈者であつたか、恐慌衆と共に水火に投じた同胞に對していかなる感懐の持主であつたか。かくの如き人生の慘禍に何等の共鳴する所がなかつたなら、もうその人達は人類として生存するに價値なき者だ。まして人を濟ふと云ふことに於てをや。

議會政治に對する失望

法學博士　河田嗣郎

一　從來の議會主義と近時の非議會主義

從來議會政治は民主主義の實行には必要缺ぐべからざる政治形式なるかの如くに考へられて來た。從て勞働運動にしても、議會政治の形式に於て政治的改造を行ひ、勞働利益を代表する者を多數に議會に送り、立法の手段に依て勞働に關する既成制度の改革を行はんとした。即ち總べて政治運動とか政治手段とか云へば、それは議會に對する又は議會を通じて行はるべき運動である、又手段であるかのやうに解釋されて來たのである。此の事情は、元來議會政治といへば十分に民意を代表し、民の爲めに事を行ふものだと考へられ、其考は誤らないもので議會政治が發達し圓滿無碍に行はるゝに至れば、事實は必ず其考通りになつて來るものと信ぜられて居たからである。だから獨り勞働運動といはず總て民の利益の爲めにする民衆運動は、議會を目標として進み、之に代表者を送り議會の働に依つて民衆の利益を伸張すべき立法を爲し、又勞働者が政權を握り内閣を組織する迄に進むで、行政に於ても之に依て大いなる改革を成就し、產業組織其他一般社會組織の改造は、此道を進み行くことに依つて遂行さるるを得るものと信ぜられた。

此考は、英國のやうに諸國中に在つても最もよく議會政治が發達して、議會はただに立法の府たるに止らないで、一國統治の主權を握つて居り。内閣は議會に於ける多數黨が之を組織し、從て常に内閣は議會に對して責任を負ひ、其の信任を銜ふ間はよく政權を把持するを得るけれども、議會の信任を失へば輙ち其の地位を去らなければならぬやうな仕組になつて居る國に於ては、最も強い根柢を持て居た。即ち英國では議會は直接に民意を代表するもので、議會の意思

ば取りも直さず國民一般の意思であるとせられ、此考は十九世紀を通じて確定不動のものとせられたが爲めに、議會に多數を占めるといふことが卽ち國民の多數を味方とし其の多數の意思を代表することで、從て其の多數者の形造る政府と之に依る政治とが、國民多數の利益の爲めに多數の意思を行ふことゝなるものと解釋せられたのである。だからして議會に於て多數黨たる地位を失ふか又は議會の信任を失ふかすれば、政府は議會を解散して國民の意思を問ふべきものとせられ、其の選擧に於て又多數を占むることが出來なかつた場合には、其の政府の存立するは國民多數の意思に添はざるものとして、內閣は改造せられなければならぬことゝせられたのである。

斯く議會を以て一國の縮圖なるが如くに考へ、議會の意思は直ちに國民の意思を反射するものと看、從て國の政治を行はんとせば、必ず議會に依り之を通じて行はなければならぬと解釋した英國に於て、勞働運動といはず社會主義運動といはず一般的に社會運動が、議會を目標とし、之に多數を占め其働に依つて社會改造の事業を行はんとしたことは、洵に理由ある所とせなければならぬ。そして現今に至るも此考は尙ほ依然として强き勢力を持て居る。彼の勞働組合主義者の運動や社會主義者の運動が、依然として議會政治に據り、獨立勞働黨を組織して選擧に勝を占め、議場に勝を占め、以て終には政權を乘取つて勞働者支配の政治を行ふを得るに至らむことを只管に希望して、之に向つて大いに努力しつゝあることは、人のよく知る所である。そして又英國以外の諸國に於ても、やはり此道に於ける先進國たる英國を手本として、議會に依り所謂政治的に社會運動の目的を達せんとする努力は廣く行はれつゝある所で、大體の傾向に於ては現時も尙も議會政治の時代と見て大過ない。

一方に於て此の大勢が依然として時代を支配しつゝあるに拘らず、他方に於ては近時諸國に在つて大いに之に逆抗せんとする勢の表はれて來たことゝ、其勢が年と共に漸次に其力を强めつゝあり、又其の勢力の及ぶ範圍を擴げつゝあることゝは、最も注意を要する所である。此の新たなる傾向は人も知る如く勞働運動に於てはサンヂカリズム流の運動として表はれ、議會政治に對して大いなる不信を表白し、之を嘲り之を呪ひ、運動の目的は議會主義に依らないで、所謂

直接行動に依つて之を遂せんと主張し、又其の主張の實行を企圖しつゝある。此の新傾向は可也久しき以前より表はれて來た所ではあるけれども、特に大戰の行はれて以來は、急に其勢が強まつて來た。そして從來は佛伊等の英國以外の國々に於て僅かに之を覗ふべき傾向であつたのが、近くは議會政治の本家本元たる英國に於ても大いに著明に表はれ來るに至つた。英國以外の諸國に於ても近者大いに其勢の著大なるに至つた。

斯くて從來議會主義が專ら行はれた時代に在つては、政治の傾向は、比較的穩和な、合法的な道に依つて徐々に進み行かんとする民主々義の傾向であつたものが、最近に於て直接行動を主張する非議會主義（アンチ・パーリアメンタリズム）が勢力を得るに至つてよりは、政治の傾向は、急進的な、革命的色彩を帶びたものとなつて來た。謂つて見れば革命的民主々義が今や大いに其勢を得、諸國に於て其の羽翼を張らんとするに至つたのである。惟ふに此の情勢は露國に於ける革命の成功と過激主義の建設とに刺激されたものであらうが、一つには實に近時諸國の議會政治が墮落して、漸くに社會民心の期待に反き、議會の意思と國民の意思とが大いに疎隔して、議會と國民とは漸くにして全く別々のものとならんとするの狀態が益々著明になつて來たからのことだとせなければならぬ。即ち今や社會一般は漸くにして議會政治に失望し、之に賴り之に望を囑して居た分では、所謂民衆の爲めにする眞實の民主制は建立し難く、特に勞働運動の如きは、之に依つては永劫に所期の目的を達し難きを知り、多くの人々は議會政治に對して愛想を盡かしてしまうに至つたからのことだとせなければならぬ。そして大戰は大いに此の情勢を刺激したのである。

二　非議會主義者の觀る所

近時諸國の議會が漸くに社會一般の期待を裏切り、勞働運動の如きが議會に對して愛想を盡かすに至りつゝある傾向あることは爭ひ難い事實である。即ち從來議會は國民の意思を代表し、國民一般の利益を代表し、國民の爲めに國民的政治を行ふものと信ぜられて居たのに、實際に於ては、議會は益々以てそんなものではなくなり、國民の意思と利益と

を代表するものではなくて、唯だ僅かに國民中の或階級特に少數なる地主や資本主階級の意思と利益を代表するものに過ぎないで、國民の多數特に勤勞に依て生存する者の意思と利益とは、毫も代表せられないことゝなつた。又議會に入つて議員となる者は、兎角職業的――詳言すれば普通の職業を持た者が選ばれて議員となるのは少く、又そんな人でも選ばれて議員となれば輙ち議員たることを以て職業と爲し、所謂政治屋若くは代議士屋となつてしまうものが多くて、從て議會といふものは、やはり一個の階級を形造ることゝなつてしまい、國民一般の利害とは別個に、一の階級としての議會そのものゝ利害が出來て了つた。かくて議會は國民一般と一身同體たるものではなくなつて、國民一般とは懸け離れたる意思を有し利害を有するものとなつて、其の行ふ所は議會の爲め又は之を組織する政黨の利害の爲めにせらるゝに過ぎないで、口には國家の爲めとか國民の爲めとか唱へられ乍ら、實は政黨政派の爲め又は議會共者の爲め、換言すれば議員共人々の爲めにせらるゝに過ぎざることとなつてしまつたのである。

斯くては國民一般が議會を信任することは出來なくなる。其働に依つて國民一般の意思が行はれたり利益が擁護增進せられたりすることを期待する譯には行かぬ。從て議會に對して殆んど全く之を信頼せず、之を無視し或場合には之を敵視して、國民は國民として自ら事を行はざるべからざるに至るは、洵に止み難い所となつてしまうのである。直接行動といふことは畢竟するに議會に頼らず議會の手を藉らず議會を抜きにして直接に事を行ふといふ意味に外ならぬのだから、國民と議會との意思が離れ離れになつてしまつては、社會の運動が所謂直接行動として表はるゝは、止むを得ざる所とせなければならぬ。直接行動がいゝにしろ惡いにしろ、事實として斯くなるより外はなく、議會が本來の意味に於ける機能を止めてしまう以上、斯くなるは理の當然である。

現今議會政治に對して快からさる者は惟ふやう。

議會政治の標榜する民主主義なるものは、實は之れ、少しも安定せざる輿論と呼ばるゝものと、少しも攷顧計量せられざる目的と無政策との標語たるに過ぎぬ。方今輿論と呼ばるゝものを好く見てみるがいゝ、たゞ當もなく荒れ狂ひ、

所定めず漂ひ行く、海のやうなものではないか。道を定めて流れ、方向を定めて走る、河川に譬へることは出來ぬものではないか。輿論が政治を導かんが爲めには、それは理性に適ひ道理に從ふものでなくてはならぬのに、實際に所謂輿論なるものは、たゞ一時の感情に依つて支配せられ、無責任なる煽動に依つて如何やうにも動くものたるに過ぎぬ。然るに今の議會政治家は一にも二にも輿論といつて其の陰に隱れるが、實は其の輿論なるものは右樣のもので、決して眞面目なものでもなく、國民の意向を示すものでもない。加之輿論と稱せらるゝものゝ多くは、議會政治家が自己や自己の黨派に都合のよいやうに、自ら之を煽動して造り上げたるものに外ならぬ。そして彼等に依つて導かるゝ輿論なるものは、たゞ盲目的に向背し、今日の感情の爲めに明日の利益を犧牲にして顧みないものである。尙又議會政治家の所謂輿論なるものは、大抵は其の手先に使はるゝ新聞記者輩が飴を製造するやうに筆の先で製造するものたるに外ならぬ。

されば現今議會政治が輿論に依て導かれ、從て國民多數の意思に從て行はれつゝありと稱せらるゝとも、そは實は眞實の國民の意向とは殆んど關係ないもので、議會政治は議會政治の爲めに行はれ、輿論は其の避難場として造り出さるるに過ぎぬと。

更に又彼等は惟ふやう。

現今代議士を選出するに當つて、選擧人が如何なる態度を以て選擧を行ふかを見てみると、實に其の政治的良心を疑はざるを得ない有樣である。卽ち選擧人はたゞ選擧といふ事件が與ふる興味を味はんが爲めに選擧を行ふに過ぎぬ。その以上には殆んど何等の利害をも感ぜない。若し之を感ずるとすれば、それは情實や緣故に依る利害たるに過ぎぬ。社會一般の幸福とか、その政治的利害とかいふものに對しては、殆んど風馬牛である。そして代議士候補に立つた者の說を聞くに當つても、其の人々の政治的立場を確め、其の政治上の技能を考ふるのではなうて、たゞ面白半分に演說を聞いて、其の片々たる警句や妙語に喝采する位ゐなものである。然かも此の狀態は普通選擧制であらうと制限選擧制であらうと多く變りはない。斯かる事情の下に選出せらるゝ代議士が、民意を代表したり國家及び國民全體の利害の爲めに

選ばれたものであつたりしてたまるものではない。

特に選擧が買收に依つて行はれ、選擧人は其の貴重なる一票を三圓や五圓の端金で賣つてしまうやうな狀態ある所に於ては、事情は實に言語道斷といふの外はない。かゝる所に在つては、選擧は殆んど政治的の意義を有ち得ない。其の事情の下に選出せらるゝ代議士は、大抵は代議士たることを以て一の金儲事業と心得、選擧に要した費用を計算して、之を幾倍にして取返さんかに就いて常に頭を惱まし、其の機會を捕ふるに苦心するの外、國家の政務を取行ふ上に就いて、其の職責を果さうなどとは、洵に思ひもよらぬ次第である。そして又選擧に當つて所謂運動屋なる者が職業的に選擧の世話を燒くやうな所に在つては、選擧はたゞ之れ一の興業たるに過ぎぬ。一興行毎に運動屋の腹を肥やし、選擧人の角力見物的興味をそゝり、候補者の興業利益を成立たしむる外、選擧は何等の政治的意義をも有ち得ない。

要するに現今選擧は、英國などのやうに主として言論に依る競爭の行はるゝ國に在つても、又買收運動の主として行はるゝやうな國に在つても、餘りに一の手品早業の類と化してしまつた。若し選擧に當つて公明至誠なる競爭が行はれ、眞面目な政治的討論が行はれるならば、道理が勝利を占め、政治上の卓見が勝利を占め、熱誠の人が勝ち政治的技倆ある人が勝つに決まつて居るけれども、當今の選擧の方法は、何れの國に於ても寧ろ斯の如きを妨ぐるに適して居る。

事情斯くの如き有樣であるからして、現今政治上に於ける『多數』は實は之れ製造されたる多數たるに外ならぬ。然かもその製造に際しては、大抵は金のかゝる仕事なのだから、之が製造人は資本主たるが普通である。從て現今の多數政治は實は之れ資本主義的多數政治たるに過ぎないで、恰も商品が製造せらるゝやうに、資本支配の下に製造せられたるものが、民意とか多數者の幸福とか國家の利益とかいふ、美しき商標を附せられて、押賣せられつゝあるに過ぎぬ。

だとして見れば、現今の議會政治に依る所謂民主的方法を以てせんとする社會改革の事業は、たゞ之れ皮相の改革に終るに過ぎないで、眞實國民が要求し、社會の多數者が要求し、勤勞に依つて生くる最大多數階級の要求する所とは、相隔るゝことなきものたるべきや、明瞭至極のことであると。

現時の議會主義を非なりとする者は、右のやうに考へて居る。

三　受働的なる「多數」と少數者の支配力

現時の議會主義を非なりとする者は、又更に進むで次のやうに考へて居る。

代議士たる者は社會一般から選出せられ、社會一般の利益を代表するものなのだから、彼等が眞實に社會一般から選出せられ、たゞ社會の一部分の者より選出されたのではない限りは、其の利益とする所は、社會全體の利益と異るを得るものでないと云はれて居るが、然し所謂社會の利益なるものが抑も一定せざるもので、之が社會の利益なりと指示され得べきものゝ有る筈はない。社會の利益は決して靜的なものではなく、頗る動的なものである。加之社會の利益は纏つて常に一たることは難く、幾多の方面に分岐するものたらざるを得ぬ。即ち例へば所有者階級の利益と無所有者階級の利益とは相岐れて容易に一致し難いではないか。試みに之を攷へてみてもわかる通り、所有者階級は常に既成(スタツスクオー)制度の維持を希望し、之を以て自己階級の利益を衞る所以と心得て居る。然るに新しき思想が動き來るに至れば既成制度は之と調和し得ざるに至つて、新酒を古瓶に盛ることゝなつてしまう。

新酒は古瓶に於て好く醸造さるゝを得るや否や。之は問題ではあるまいか。同じく社會改革を主張する者でも、政治的行動(即ち議會主義)に依らんとする者と、革命を主張する者との見解は、之に關して一致し難い。一方は、革命的思想はそが發展する内に自ら社會の構成を變ぜしむるに足るもの、それだけの力を體有するものと信ずるに反して、他方は、社會の組織は革命に依て之を變ぜしむるにあらざれば、自らは容易に變化せざるほど堅固なものだと考へて居る。何れにしても、社會全體の利益などといふことは、言葉としては便利な言葉で、バスケットを提げて歩くやうに手輕に取扱はれ得るものだけれども、其の内容に就いて詮索してみると、實は種々雜多なものが混然と這入つてゐるわけで、そう手輕に取扱はれ得べきものでは無い。社會全體の利益を代表し、其の利益の爲めに働くなどといつてみた所で

それはたゞ言葉の上で概念を造つて、其の概念を弄ぶものたるに過ぎぬ。從て議會政治を此の意味に於て是認せむとしてみた所で、それはたゞ偶像を作つて禮拜し、强て自ら安神せんとするものたるに過ぎぬと。

扨て又立歸つて民主政治に就いて、彼等の考ふる所を叩いてみると、彼等は倘ほ次のやうにも考へて居る。

現今『多數』と稱せらるゝ所のものは、前に一言したやうに、實は之れ『少數』の從屬者たるに過ぎぬ。そして現今支配者の地位に在る少數者は、彼等の所有する新聞と、習慣の保守的勢力と、民衆の自然的受働性と、飲酒賭博等に依る民衆の性能の頽廢とに依つて、其の勢力を維持する。斯くて資本主義は、一面にはそが社會の現制度たるの理由に依り、他面には其富と其の勢力とが民衆の政治的行動を決定する所の感情と動機とを支配するを得るの理由に依つて、其の地位を保ち得る。斯くて即ち議會政治は資本主義的制度と化してしまつたのである。そして議會政治に立脚する政府は、資本主義者の要塞として維持さるるのである。資本主義は實に『多數』が受動的の性質を有し『少數』の思想や意思を受入るゝものたるを知つて、服從隷屬を旨とする政治を行ひ、然かもその政治をば、其の有する富と現存社會制度の經濟的支配力とに依つて行つて居る。

總べて斯くの如くにして、資本主義制の下に於ける民主政治は純乎たる資本主義的のものたるに外ならぬと。――お寺に住ひお經を唱へ法衣を着て歩く人は僧侶であると彼等は考ふるのである。

大要右の如き考からして現今議會主義を非とし、社會改造の事業を行ふに所謂政治的手段を取らんとする者の迂愚なるを笑ふ人達は、議會主義を排し、政治的手段を捨てゝ、革命に依つて事を行はなければならぬと信ずる。即ち革命に依つてのみ、社會を資本主義の桎梏より解放し舊制度を脫して新制度を樹立することが出來ると考ふるのである。けれども此種の革命論者も亦『多數』が受働的なるを知るが故に即ち資本主義の勢力を打破せんが爲めに、革命の手段を執らんとするものたるに外ならぬ。そして民主政治に對して資本主義の衣の代りに勞働階級の法被を着せんとして居るので

ある。即ち僧衣を着て居るから僧侶なのだから、之に法被を着せ股引をはかすれば勞働者となるものと信ずる次第で。御本尊のデモクラシーは全く受動的で、念佛を唱ふれば佛法となり、アーメンを唱ふれば基督敎となると考ふるのである。蓋し民主政治は多數政治だが、その多數なるものは實は少數の傀儡で、少數者の意思によつてどんなにでもなるものと信じて居るからである。

けれども暫く革命といふことそれ自身に就いて考へてみれば、革命に依つて一朝夕に新社會組織を造り上げ、力（腕力暴力といふやうな意味の力）に依つて建設の功を爲し遂げんとするが如きは、文明が進化的に行はれ、建設の事業が理性の働に依るべきものたるを知らざるの譏を免れ難い。何れにしても力の專制は排斥せられなければならぬ。其力が資本主義的のものであらうと、無産者的のものであらうと、ともかく、力に依つて社會の意思を强制し、之に依て事を行はんとするは文明の旨義に反する。社會改造の事業は、理智的なる建設として、頭の働に依つて行はれなければならぬ。改造の計畫を抑壓するに暴力を以てするの非なるが如く、改造の計劃を暴力の基礎の上に築き、暴力を以て之を實現せんとするの企も亦、無謀にして悖逆なる企とせなければならぬ。

四　議會主義者が必要と見る議會改造の眼目

革命は呪はれなければならぬけれども、然らばさて現今の議會政治と一般的に所謂議會主義とは、果して好く時代の要求を容れて、改造の大事業を成就するの意志と能力とを具有して居るか。此の議論になつて來ると、何人も現今の議會政治に對しては甚だ失望せざるを得ないであらう。

從來勞働者は議會を以て勞働が資本主義に對して行ふ戰の結末を付けて與れるものと見んと欲したけれども、現今の實狀に於ては、議會は到底此の任務を果すに足るものではない。のみならず議會は此の問題に對しては、十分の智識も有せなければ、又その問題解決の任に當らむとする意志も之を有して居らぬ。議會の人々の住ふ天地と、勞働者の住ふ

天地とは、全く別個の天地であることが解かつた。玆に於てか今や勞働者の間には全く議會に對する信賴を捨てゝ、直接に社會に對して行動を取らんとするの氣風が盛になつて來た次第である。

けれども前にも之を述べたやうに、彼の社會主義者と呼ばるゝ種類の人々（コレクチヴィスト之である）は、やはりまだ議會主義を奉ずる者であつて、議會に勢力を得ることに依つて、而して同時に議會を改造することに依つて、其の新社會建設の任務を成就せむと欲して居る。そして社會主義者は國家概念に於ける產業的意義を高調し、國家を產業的基礎の上に築かんと欲すると同時に、政府も其の行ふ政策も之を產業的基礎の上に立たしめんとする者である。從て彼等は議會を構成するに就いては、一國の產業利益が十分に顧慮せらるゝを得るやうに、之を構成せんことを企圖する。

玆に於てか、社會主義者の間に在つては、議會を構成すべき代議士を選出する方法に就いて、之を現時の如く、地方地方に依つて區域を定め、其內から議員を選び出す方法を採ることゝ、職業や產業を基礎として個々の職業や產業の利益を代表すべき議員を選出するの方法を採ることゝの兩者について、其の利害を攻究する必要が起きて來るのである。そして此の兩者何れを採用すべきかに就いては從來色々の議論が行はれて來たが、英國勞働黨のラムゼー・マツクドナルド氏の如きは、兩者の利害に就いて大體次のやうに考へて居る。

各職業の利益を基礎とし其の範圍內よりして議員を選出して其の利益を代表せしむるといふやうな制度の下に造り上げられたる議會は、無能なる議會たるを免れぬであらう。そしてその爲す所は常にとんちんかんのものたらざるを得ないであらう。例へばそが經濟政策として又は社會政策として爲す所を見るも、物價を調節することなくして勞賃引上策を行つたり、生產を保障することなくして物價を調節したり、物價を確保することなくして產業保護を行つたりするやうなことになるであらう。されば誰でも、產業的國家に於ける（社會主義者は既述の如く大抵國家を產業的基礎の上に置かんとするものであるが）政治的勢力の如何なるものたらざる可からざるかに就いて、明瞭なる概念を有する人は、常に社會全體として見、其の全體の利益の爲めに働くべき議會を造り出すに志さなければならぬ筈である。

此の見地からして之を攷ふれば、議會は單純に個々の職業や産業の利益を代表する制度に依つて完全に造られ得べきものではないことゝなる。其の理由は色々ある。

（一）國家の政治的權威は個々の産業的觀念の上には築かれ能はぬ。機械職工、鑛山坑夫、鐵道從業員といふやうな個個の職業者の組合の單純なる結合ではあり得ない。それは固よりそれ等のものゝ結合でもなければならぬが、然し同時にそれ以上のものでなければならぬ。政治上に於ける勞働の意義は個々の仕事場や工場に於ける勞働とは異つたものである。蓋し國家は個々の仕事場や工場の單なる集合ではなく、之等のものが一の經濟的にして社會的なる統一體に組織されたるものたるからである。

（二）されば單純なる職業の代表者は議會の代議士として完全なるものではない。そして各職業を選擧區としてそこから選ばれたる者に依つて造らるゝ議會は、良き議會ではあり能はぬ。

（三）從つて現今の地域を以て選擧區とする制度は（それは産業や職業の觀念を基礎とするものでなく、政治的に見たる市民といふ觀念を基礎とするものだが）國家の統治に要する權威を造り上ぐるが爲めには、全く排斥さるべきものではない。

けれども同時に又現時の地域を以て選擧區とする制度も、色々の缺點を有して居る。

（一）議會は市民權を基礎として選出されたる者に依つて構成せらるゝとはいへ、之を其の代議士各個人に就いて見れば、やはり一定種類の利益階級から、又は或一定の慣習や經驗から、又は社會の或部分から選ばれた者たるに過ぎぬ。從て理論や形式の上では民主的であつても、實質に於ては決してそうではない。代議士等は常に或階級の利害に依つて動かさるゝ者たるに過ぎぬ。

（二）地域選擧區制の實際の働を見れば、それは常に富者と黨派のからくりの優越を齎すに適する。そして選擧をして非實質的ならしめ、感情的で皮相的たらしめ、額に汗して働く普通の人々の利害に取つて最も痛切なるものは捨てゝ

之を顧みる所がない。

（三）されば國内の産業的生活が、其の政治的生活と、今少しく直接にして確實なる接合を爲し得べきやうに、政治機關を改造するの必要は、實に緊要缺くべからざる所である。

氏は大體右のやうに考へて居るのだが、又之を他の方面からいへば、現時の國家と其の統治の機關とは、餘りに消費的利益をのみ顧慮して、生産的の顧慮の足らない嫌がある。然し乍ら今又之を革めて、各産業利益の代表者に依つて議會を組織する制度と爲すに於ては、今度はまた餘りに生産的利益のみ顧慮されて、消費的利益が蹂躙さるゝことゝならざるを得ぬ。けれども兩者はどうしても調和されなければならぬ。双方ともに十分に顧慮せられなければならぬ。元來生産者と消費者とは、截然區別せられた者ではないのだから、社會は一の完全なる組織體として、此の兩方面の利益をば好く調和せる狀態に於て進めて行かなければならぬ。

斯るが故に代議士選出の基礎は、之を地域的區分に置くと同時に、之に産業的又は職業的區分に依る利益を代表せしむるに適する制度を加味する方法を講ずることが必要である。若し然らずして現狀のまゝに押進み行けば、議會に對して社會の人々は段々不信用になつてしまうを免れ難い。併し乍らつらつら之を考へて見ると、議會に對する人民の信任といふことは、社會が革命的でなく進化的に進み行かんが爲めには、洵に必要缺くべからざる所とせなければならぬ。

獨り、ラムゼー、マツクドナルド氏のみではない、現今社會主義者と呼ばるゝ多くの人々は、依然として議會主義を奉じ、其の議會の構成に關する改造の必要條件については、大抵右のやうに考へて居るのである。尤も右はたゞ改造の一眼目についてのことなるに過ぎぬが。

五　議會と國民生活との呼吸一致の必

併し乍ら議會主義者は、啻に右の如き議會の組織上の改造を行ふとも、議會そのものと其の運用に關する國民一般の態度が、現今のやうな有様であつては、議會政治は到底ものになり得べからざることを信ずるのである。

彼等は以爲らく、

議會は統治の機關であるが、從來はたゞ社會の一部分の人々の手に依つてのみ動かされて來たに過ぎぬ。勞働者を主とする一般民衆は、此の機關の運轉には關與する所がなかつた。選擧法や其の制度に如何なる變更が行はれやうとも、所謂統治者階級は從來殆んど同一不變のものであつた。彼等は『多數』に眼を注がなければならなかつたが、此の『多數』なるものは、何等定まつた思想に依て動かさるゝものでもなく、又定まつた目的に向つて進むものでもないことを彼等は好く知つて居る。『多數』は手から口に其日暮しをして居るものたるに過ぎぬ。『多數』は些細なことで煽動されて激情を起すものである。『多數』は容易に欺かれ得るものである。然かもまた『多數』は至つて從順なもので、同時にまた新しき指導者に對しては恐ろしく猜忌心に富むだものである。而して『多數』は叙述も結論も彼等の爲めに作らて與へられたる儘に之を受入れるもので、之に對して自己の批判を下す能力はない。支配者階級は總て右等の事情をすつかり呑み込んでしまつて居る。

そして又支配者階級は、普通教育が如何に行渡るとも、それは人々を精神的に活潑ならしむるに足るものではなく、唯だ人々を彼等の讀む所のものに奴隷たらしむるに過ぎざるものなるを知つた。斯くて人々は選擧權は之を有するともさて之を以て何を爲すべきかを了解することが出來ぬ。たゞ選擧に際して其のお祭騒の一員として其樂みを享くるが爲めに、之を用ゐるに過ぎないことを、支配者階級は見抜いてしまつたのである。

玆に於てか支配者階級は、十分なる民主的傾向と慌ましき社會改革の渦中に立ち乍ら、依然として安穩に其の階級の地位と權力とを維持することが出來た。

されば議會政治に對する失望を表白し其の改造を思ふに就いては、先づ第一に認識すべき事實は、問題は議會それ自

身に存するよりも却つて多く民衆そのものに存すといふことと之である。從來民衆はその與へられたる所のものを十分有効に用ゐるに足るだけ伶悧でなかつたのである。場合によつては革命も起り得るであらう。そして現時の統治の形式の代りに新たなる形式も造り得らるゝであらう。けれども民衆一般が啻に名義の上に於てのみならず眞實にそれ自身が支配者階級となり得ない限りは、如何に組織を變更するとも、何の用にも立ち難い。政權は之を有効に用ゐむが爲めには十分なる智能を要する。其の智能の備はらない所には、何等の統一も考へられぬ。そして統一に對する理解のない所では、政治組織の單純なる變革は、たゞ之れ腐敗せる材料を以て建築の改造を行ふやうなものたるに過ぎぬ。たゞ階級的意識を十分にするといふだけのことは、此の場合其の缺點を補ふには足らぬ。何となれば、其事は勞働者に對して其の階級の重要と其の現在に於ける階級的屈服とを知らしむる爲めには如何に必要であらうとも、又それに依つて人々は現在の階級鬪爭の事實を如何に明瞭に認識し得やうとも、たゞそれだけでは、その政治的價値は僅少のものたるに過ぎぬからである。此の場合缺けたる所のものは智能と道徳と之である。

と斯う云ふ風に議會主義者は考ふるのである。そして民衆一般に對する政治的敎育と政治的訓練との必要切實なるを感じ、民衆の側よりして向上することに依つて、議會の改造は成就され得べきものと信ぜんとして居る。尙又彼等議會主義者は、現今議會と國民一般の生活とが漸次沒交渉とならんとしつゝあるの事實は、一面には現今の國家制度の下に於ける諸多の事情が餘りに紛糾錯綜して、政治的正確を期するに困難なるにも歸因するものだと考へて居る。

　卽ち各地方が地方々々に於て地主や資本主に依つて治められて居た際には、國家の利害は卽ち之れ地主や資本主の利害を意味するに外ならないで、甚しき複雜は出來やうがなかつた。然るに現時のやうに種々の地方的利害が相岐れ、産業上の利害は特に甚しく相齟齬して、輿論にも多くの相違があり、人心の傾向も亦甚だ一樣ならざる狀態の下に於ては諸多の方面から代議士を集めて、之に依て事を行はんとするには、到底調子の一致を期し難い。そして議會の爲す所は兎角國家一般の利害と一致し難いことゝなり、選擧は選擧でまた一の職業的の事務と化してしまひ、代議士に選ばるゝ

人々も多くは黨派的の色彩を持つた人々や、如何はしき彼此屋や、野次馬の類となつてしまうのである。斯くて議會は何等生命なき理想なきものとなり、自己生存の活力をも失つて、漸次無用の長物と化し去るの外はない。

斯やうに考へるのであるからして、議會主義を奉ずる社會主義者の如きは、次の問題を解決することが、最も緊要のことだとする。その問題とは即ち如何にして政治に眞實性を恢復するを得べきか、如何にして議會をば國民と現實に接觸せるものたらしめ、國民生活と鼓動を一にするものたらしむるを得べきやといふこと之である。此の問題が解決せられざる限り、議會政治は終に全く其の意義を失つて、社會改造の事業は所詮之を所謂政治的手段に依て到達することが出來ないで、他の道と他の手段に依つて到達するの外なきに至るものとするのである。

六　議會政治の失敗と其齎す結果

總べて右に論示するやうな次第で、議會主義を奉ずる社會主義者の如きに至るまで、現存の議會政治に對して甚しく失望し、現存の議會政治を以てしては民主々義は形ばかりで、實は資本主義的な少數政治たるに外ならず、議會と國民とは漸次に別個のものとなつてしまうの外はないと考ふるに至つたことは、洵に近時に於ける大いなる出來事とせなければならぬ。最も注意すべき現象とせなければならぬ。一時は議會政治は實に唯一の合理的なる民主政治と考へられて居たものが、漸く其の議會が或種の支配者階級の爲めに惡用せられ、選擧は腐敗し又は一の藝事と化してしまつたに連れて、近頃一般的に大いに世の信用を失墜してしまつたといふことは、政治的には實に之れ見遁しのならぬ一大事件である。斯くて國民生活の全體の運命に關するが如き事柄については、之を議會に委任せず、議會の政治的權能を制限し之に代へ又は之を補充するに、直接行動にてせんとするの考が、益々熾なるに至らんとしつゝある。

更に又或種の人々は次のやうにも考んとするに至つた。

國家は各個人の行爲の總體に渉つて之を支配するを得るものではない。即ち各個人の生存の全體を掩ふて、之を支配

し得るものではない。曾ては國家は宗教までも政治的統治の下に置かんと欲し、宗教的統一は國家的統一の爲めに必要缺くべからざるものと考へたけれども、斯かる時代は既に過ぎ去つてしまつた。然るに現時に於ては又新たなる事情が發生して、更に國家の統治權を分割せんとしつゝある。而して各個人は一の勞働者としては、彼が一の市民として屬する所とは別の意味の國家の所屬員であると。

此の見解を執る者は。政治的國家以外に在る經濟的國家に於ては、議會政治は不必要で、人民の要求は直接行動に依て貫徹せらるべきものと考へんとする。

惟ふに政治といふことゝ經濟といふことゝは、決して互に獨立して存在する別個の存在物ではないのだから、國家を政治的の組織としての國家と、經濟的の組織としての國家とに區別することは、到底出來得べき所でない。國家は政治的にも經濟的にも一つの國家で、一體不可分のものだから、此の意味よりすれば、右のやうに政治的國家以外に經濟的の國家を考へて、後者に於ける直接行動の必要を論じ以て直接行動の正當なる所以を立論することは、聊か揑造的たるを免れぬ。そんなに窮屈な考へ方をせないで國家を以て政治的にも經濟的にも一體不可分のものと見るに於ても、直接行動が或國或場合に於て必要で又有效で、能く議會政治の缺を補ひ、其の爲し能はざる所又爲すを欲せざる所を爲し遂ぐるに足るものなることは、何人も之を認めざるを得ない、

直接行動の是非に就いては隨分色々に論ぜられて居るやうだが、然し直接行動などと云ふものは、社會改造の手段として用ゐらるべきもので、然かもそは議會政治を離れ所謂政治手段以外に立つもので、そが經濟的の目的の爲めに用ゐらるゝ場合は兎も角、政治的の目的の爲めに用ゐらるゝ場合には、そは謂はゞ最後の手段として用ゐらるべきものなのだから、之を今日の社會制度の上に立つ見地より見て、其の正當なるや不當なるやを論じ、その善惡是非を論ずるが如きは、抑も野暮の沙汰である。そはたゞ有效なる手段たるや否やに就いてのみ論ぜらるべきものたるに過ぎぬ。

然し政治的の目的の爲めにせらるゝにしても、直接行動は決して議會政治と全然兩立せざるものではない。翻つて見

れば却つて議會政治をして能く其の終局の目的を達せしめ、又其働きを十分有効合理的ならしめんが爲めに、議會政治が一部の支配者階級の利害の爲めに濫用せらるゝやうの場合に、之を矯正せむが爲めに用ゐらるゝものとも解釋するを得る。だから議會が健實で、能く其の本來の目的に向つて進み、有効に然かも誠實に其の任務を盡す限りは、直接行動は終に之を用ゐるの必要がなくなつてしまう筈である。たゞ議會の爲す所がその本來の任務を誤り、代議士の選出に於ても甚しく不眞面目で、金力や情實や黨派の拘引やに依つて代議士が造られ、其の代議士連の集合たる議會は從て甚しく低能なもので、然かも至つて不誠實で、一部階級者の利益の爲めにのみ盡して、國民全般の利害を顧みず、亂暴の立法や政治をのみ行つて少しも顧慮する所なく、如何に之を警告するも耳を傾けないで、益々以て横暴を働き、國家を驅つて革命の危機に陷らしむるやうなことを爲す場合に於て、甫めて、直接行動は其の事態を救ふの道として用られなければならぬことゝなる。政治的に直接行動の必要で又有効なるは、即ち斯かる場合である。だから議會が健全で誠實に有効に働く限り、直接行動の必要はないものと見られなければならぬ。

然らば問題は事實問題であつて、理論の問題ではない。事實問題として議會が健實で其の政治が誠實で、よく國民の心と一致せる働きを爲すものたるを得て、十分に人心の信頼を博するに足るだけのことを爲し得るや。それとも之を爲し得ないで、漸次に民心の信任を失ひ、益々横暴なる少數政治を行つて、人々をして終に直接行動に訴ふるの外他に之を救ふの道なきを思はしむるに至るや。之が問題である。

然るに現今の事實に於て諸國の議會政治が、益々少數者の獨裁政治に傾いて、之を組織する代議士には、社會改造の大問題などに對しては、殆んど智識もなければ抱負もなく、議會といふものが、まるで蝸牛のやうに小さな不景氣な殼を造つて其中に埋まつてしまい、之を天地として、何處までも之を衛つて歩き、國民一般の精神生活とは全く懸離れたるものとなつて、時代の要求と背馳するやうな政治をのみ行ふ風あることは、右の意味より之を見て、議會自ら求めて世に直接行動の必要を迫るものと謂はなければならぬ。屢次之を述ぶるやうに、直接行動とは畢竟するに議會政治を離れ

政治的手段に依らないで、社會改造の事業を志す者が直接に其有する能力に依つて事業の目的を遂せんとする行動を意味するに外ならぬのだから、議會が此の事業の爲めに無能力のものとなり、不關心のものとなり、議會政治が此の事業の主旨に叶はないものとなれば、直接行動は否應なしに、どうでも行はれなければならぬことゝなるであらう。そして此の議會の無能力が英國のやうな議會政治の本山に於てすら近時大いに暴露せられ、議會政治に對する失望が社會運動の上に其黒い陰を投ずるに至つたことは、最も注意すべき現象といはねばならぬ。議會主義者が依然として勢力を維持するを得て、又終に勝を占めて、議會政治改革の功を成すを得るか、それとも非議會主義者が勝利を得て直接行動に依つて社會改造の業が行はるゝか、それが今後の問題である。問題であるけれども右に述ぶるやうに事實問題なのだから之が國々に於て如何に解決せらるゝかは、之を國々に於ける事實の發展に待つて知るの外はない。（終）

本文を讀まれた方は J. Ramsay mac Donald, Parliament and Revolution, Manchester etc. 1919 を一讀せられむことを希望する。

獨逸の敗因

水野廣德

序言

戰爭は人類の最大博奕である。博奕は本來投機である。投機は明智の判斷に依つて案畫せらるも、其の結果の大部は天運に依つて支配される。古來勝敗は時の運とも云ひ、又人事を盡して天命を待つとも云ふ。人間萬事運の支配より脫することは出來ない。如何に巧妙に計畫せられたる作戰も、防ぐべからざる無心の一諜に依つて洩るゝこともある。如何に適良に指導せられたる戰鬪も、豫期し難き天候の障害に依つて敗るゝこともある。而して一部作戰の漏洩、一局戰鬪の失敗が延びて全戰爭の敗因となることも稀でない。千丈の堤も見るべからざる蟻の一穴より潰ゆとかで、五年の戰爭も一日の天候に依つて敗北することと無しとも限られない、獨逸の敗因に關しても亦人事以外の天運に屬するものが少なくないであらう。然るに天運なるものは人力を以て之を奈何とも爲し得ざるものである。左れば事の成敗を研究するには、天運を拔きにしたる人事に就きてのみ論ずるの外はない。

獨逸の敗因に關しては、世界既に種々の評論意見が發表せられて居る。或は外國人に依つて！ 或は獨逸人に依つて！ 或は又日本人に依つて！ 而して此等の評論中には、研究の爲めの研究でなく、批評の爲めの批評が多い樣である。單に獨逸敗北の結果より遡論して、時の事情と境遇とを察せず、獨逸の爲せる處、獨逸の行へる處、悉く是れ失策過誤と爲し、所謂死屍に鞭つて快とせるが如き狀あるを認める。併し無謀の擧も幸に成功すれば大膽と賞められ、愼重の計も不幸にして失敗すれば怯懦と誹らる。勝利は萬事を善化し、敗北は萬事を惡化する人間の心理上、是れ亦止むを得ないかも知れぬ。

獨逸敗因に就きては、軍事問題あり、經濟問題あり、內政問

題あり、外交問題あり、又社會問題あり政治問題あり、遠因近因、直接因、間接因等、之が因事と認むべきもの、十指を屈して尚ほ足らざるものがある。『エヂンバラ』大學教授某博士は、獨逸屈伏の原因は國民士氣の潰頽、軍事實力の衰弱にあらずして、(一)勃牙及墺洪國の離背、(二)革命の激動に基く喪神的狀態、(三)世界的結合の軍事上並に經濟上の掩壓に歸因すると説いて居る。素より是等も大なる原因たるに相違ない。併しながら(一)は餘りに近因である。(二)は原因の更に原因がある。而して僕の見を以てすれば、國民士氣の潰頽と、軍事實力の衰弱とは敗因の大なるものであると信ずる。若し夫れ今回の戰爭を以て正義の勝利、非道の敗北と爲す者あらば、暴力平和の締結せられたる今日、あまりに人を欺き己を僞はるの甚だしきものと云はねばならぬ。獨逸識者が認めて以て獨逸屈伏の最大原因と爲すもの左の三件を擧げて居る。僕亦其の見を同じうする。

一　海上封鎖

二　米國の參戰

三、敵國の宣傳

以上の三件が、如何に獨逸國民を苦しめ、如何に獨逸國民を失望せしめ、又如何に獨逸國民を惑はし、遂に屈伏の止むなきに至らしめたかに就きて研究して見たい。

一　海上封鎖

開戰後幾干もなく、英國は其の雄大なる海軍力を活用し、獨逸に對して飢餓作戰即ち兵糧攻戰法を採るに決した。先づ天下無敵の大艦隊を以て山海の咽喉を緊扼する傍ら、無數の機雷を亂置して、北海の水路を閉塞した。而して豫て自ら聲明したる倫敦宣言を破棄して、其の戰時禁制品なると非禁制品なるとを問はず、一切凡有の物件を獨逸に輸入することを嚴禁した。物的勢力に於て英の十に對し約六の割合を有せし獨逸海軍は、海軍兵術上に於ける定理的の定則に依り、英國海軍の封鎖を破壞するの實力を有しない、黑鷲の旗影北海に空しく、獨り『ユニオン、ジャック』の跳梁に委かすの已むを得ざるに至つた。之が爲め北海經由の獨逸海上輸送は全然杜絶したるのみならず、北海沿岸の中立國たる和蘭、丁抹、諾威、瑞典の如きも其の海運に多大の不便と不利とを蒙むるに至り、屢英國の國際法違反に對して抗議したるも常に顧みる處とならなかつた。米國も亦一般飢餓作戰により、獨逸の婦人小兒を苦しむるの非人道と、自國海運の利權侵害とに對し、兩三抗議を試みたるも、英國に

軍需品賣込みの爲め莫大の利益を得つゝある米國とて、辭令のみ徒らに鄭重なるも結局八百長の抗議に過ぎず、戰局の進むと共に封鎖は益々嚴密を加へた。是に於て獨逸は地中海方面より墺太利を通じて物資の輸入を圖りしも、是亦伊太利の參戰と共に杜絕し、爾來獨逸は北海及波羅的沿岸の中立諸國、瑞西並に土耳其方面より唯少額の食料其の他の物資を輸入し得るに過ぎざるに至つた。

由來獨逸は農業國として國民の食料は自治自足の國なりしも、最近二三十年間に於ける人口の激增と、工業の勃興とに依り、國民の食料に不足を來し、最近に於ては年消費額の約二割五分を國外よりの輸入に仰いで居つた。戰爭の直前一九一三年に於ける獨逸の貿易表を見るに、輸入總額百八億馬克（マーク）中、三十億餘は各種の食料品にして、其の主要なるものは小麥、大麥、蜀黍、燕麥、植物油、家畜、家畜用食料、珈琲、鷄卵、バタ等である。中にも穀類は最も多額を占め、其の額十三億馬克以上に達して居る。故に獨逸にして一朝外國貿易絕へんか、少くも國民の四分の一は飢餓に陷ゐらねばならぬのである。殊に開戰以來國民壯丁の殆んど全部が軍役に徵集せられ、農業勞働力の減少せる結果、戰爭久しきに亘れば食料の不足は益々大とならざるを得ない。

左れば獨逸は開戰後早くも食料問題に留意し、一方生產の增加を圖ると共に、一方其の消費を節約し、併せて之が最高價格を規定する等、相當努力の跡を見るも、未だ以て斷然たる徹底的政策を講ずるに至らなかつた。然る處一九一五年春頃より一九一六年初に至り、海上封鎖愈嚴なると、國內生產の減少とに由り食料の缺乏漸く大となり、玆に初めて戰時食料省を設定し、根本的解決法を講ずることゝなつた。而かも時期旣に遲く、食料の不足は日に月に甚だしく、遂に一九一六年夏に至り、新制度の下に一般國民に對する食料制限法を斷行し、新に各種食物の日額を規定し、愈食料持久策を取るに至つた。而して醫學上の測定に從へば、獨逸人一人一日の體力保續に要する營養分は、蛋白一五〇瓦、熱量三、〇〇〇乃至三、三〇〇カロリなるに對し、新規定食額よりは僅に蛋白五四瓦、熱量一九八三カロリの養分を生ずるに過ぎなかつた。然るに天獨逸に幸せず、一九一六年は獨逸國民の重要食物たる馬鈴薯の不作の爲め、同年冬に至り更に日額を改定した馬鈴薯及び肉の量額を半減した。其の結果養分は低下して蛋白三一瓦、熱量一、三四四カロリとなり所要營養分の半分にも達しない。食料の不足は獨

り國内の人民のみならず、戰線の軍隊も漸次食物の不足と粗惡とに苦しむに至つた、一九一七年の農作亦豐穰ならず、羅馬尼亞より所期の食料を得る能はず、同年七月復た又日額を減じて左表の如く改表した。

麵包	二二八瓦(約六〇匁)
馬鈴薯	七一瓦(約一九匁)
バタ	一一四瓦(約二五匁)
肉	七二瓦(約二〇匁)
卵	二週間に一個
砂糖	二六瓦(約六匁)
麥粉類	九瓦(二・三匁)

右に依つて生ずる營養分は蛋白三〇瓦、熱量一、一〇〇カロりにして、體力保續に要する定量の僅に三分の一に過ぎず、實に人間生存の最低限度である。而かも價格高騰の爲め此の定額さへも食ひ得ざるものが有るのである。平時に於ける獨逸兵食の定量は麵包七五〇瓦(約二〇〇匁)生肉三七五瓦(約一〇〇匁)馬鈴薯其他野菜類一、五〇〇瓦(約四〇〇匁)以內である。又普通日本人一人の一日に食ふ米を五合とすれば、其の重量は約二百匁である。是等を前記日額表と對照すれば、當時獨逸が如何に食料に缺乏し、獨逸國民が如何に飢餓に苦しみしかは、思ひ半に過ぐるものがあるであらう。戰爭中體量の半減したる人もあると聞くが滿更ら僞りであるまいと思はれる、而して此等の食品は悉く切符制度なるを以て、非常の高價を拂ひ不正手段を講ずるにあらざれば、定額以外に一片の肉、一塊のパンと雖も買ふことは出來ない。唯隨意に買ひ得るものは、野菜と魚類のみである。然かも是とても品不足と高價との爲め、到底一般人民の腹を滿たすを得ず、唯比較的豐富なりしものは、平時豚の食料と爲したる蕪と鹽とのみである。明けても暮れても、食卓に上るものは、平時に於ては到底口にし能はざる蕪の鹽煮ばかりにして、食膳に向ふ度に自己の生存を呪つたとさへ言つて居る。處が此の蕪たるや、頗る發酵性に富み。所謂出物腫物所嫌はずで、公園と云はず、路上と云はず、紳士を問はず、レデーを問はず、伯林城内敵を見ずして砲聲殷々たるの悲劇中の喜劇を演出したと云ふ奇談もある。事情斯くの如し、左れば苟くも口にし、苟くも、腹を滿たし得るものは樹葉草根までも之を食ひ、政府も亦無毒の野草を驗して之を圖に畫き、一般人民の食用を勸告するに至つた。貧家の兒童が餓犬の分捕物を横奪し、人犬相爭ふに至りたるも無理はない。

一九一七年は獨逸食料の最も窮迫を告げたる時にして、飢餓を訴ふる聲は全國に漲り。大人は體量日々に減じてカラ徒に殺く、獨逸國内復た一人の肥人を見ざるの慘狀を呈し、小兒は營養不良の爲め發育充分ならず、爪の無き嬰兒をさへ産むの悲劇を見るに至つたのである。かくて内には食料不足の爲め國民の活動力減じ、外には營養不良の爲め軍隊の戰鬪力衰へ、腹が減つては軍は出來ぬとの諺の眞理を事實の上に證明するに至つた。食料問題こそ實に獨逸に取りて最も恐るべき敵となつた。統計に依れは、一九一五年より一九一八年に至る戰爭四年間に於ける獨逸國民の餓死は七十六萬三千人にして、其の大部分は罪も科もなき十五歳以下の小兒と六十歳以上の老年者である。又戰爭期間に於ける獨逸の出産減少數は約四百萬にして、中百餘萬は營養不良に歸因すると云ふことである。

戰爭中英國人は、獨逸の潜水艇戰を以て極惡非道の野蠻行爲と爲し、舌を爛らし、筆を禿して獨逸の非を鳴した。日本人中にも大分雷同者があつた樣である。元來敵國に出入往來する海運業者は、間接直接に敵國の軍事行動を援助するものか否らざれば自己利益の爲め自ら航海の險を冒すものである。斯の如き者に對して執りたる獨逸の潜水艇戰と、戰爭に何等關係なき數十萬の老幼を餓死せしめる英國の飢餓作戰と、孰れか殘忍にして孰れか非人道的なるかは、後世を待たずして判かるであらう。殊に獨逸潜水艇戰に依りて英國の受けたる人命損失は、僅に一萬三千餘人に過ぎざるも、飢餓の爲め死したる獨逸人は實に七十六萬人を超へて居る。加之聯合國は休戰條約締結以後、何等軍事上の理由と必要となくして十個月の久しき間封鎖を繼續し、更に多數の人間を餓死せしめたのである。之に對しては世界に非難の聲が高い。有名なる瑞典の文豪「エレンケー」氏の如きも、聯合國の不正義非人道行爲の數ある中、休戰後對獨封鎖の繼續と、佛國に於ける獨逸俘虜の抑留とは、其の最大のものであると攻擊して居る。

戰爭中獨逸が如何に食料に窮し、飢餓に苦しんだかを事實の上に知らんと欲せは、伯林若くは漢堡等の動物園を見るに如かずである。此等の動物園こそ獨逸國民の飢餓を照らす反射鏡である。曾て設備の完良と飼養動物の多きを以て世界動物園の一二を爭ひたる伯林動物園も、戰爭中食物缺乏の爲め彼等の大部分は餓死し、珍獸奇鳥の住みたる屋舍は今や主なき空屋となり、雜草茫々として庭を掩うて居る。其の僅に生殘せるものも、何れも腹ペコ〳〵の骨と皮とである。獅子も、虎も、象も、ありし

昔の勇姿失せて股骨峙ち肋骨數ゆるばかりである。獨逸人皮肉つて曰く「由來英人は人間よりも動物を愛護す、若し英人をして此の有樣を見せしむれば、恐らく封鎖は行はざりしならん」と。

斯くの如く戰爭終期に於ける獨逸の食料狀態は殆んど堪ゆべからざる程の極點に達したるにも拘はらず、獨逸當局者は戰後の恐慌に供せんが爲め家畜の如きは其屠殺を最低限度に局限した。然るに平和條約一たび締結せらるゝや、勝利に醉ひたる聯合國は難に自ら唱へたる正義人道を棚の隅に仕舞ひ込み、戰爭中獨逸人が眼前に乳に飢へて斃るゝ幼兒、營養盡きて死する父老の悲哀をば涙を以て送りつゝ、次の國民の爲めに殘したる乳牛其の他の家畜數十萬頭を奪ひ去らんとするのである。米國元老院に於て平和條約反對者が、飢に頻せる獨逸兒童より牛乳を奪ふが如き非人道なる平和條約に調印するは米國の國辱なりと叫び、英國人中に於てすら之を以て、豫期せざる勝利の歡喜に逆上せる聯合國の狂的行爲と非難するものあるも、穴勝ち理なきにあらずである。昨年の「クリスマス」に際し獨逸新聞紙の曰く、「人若し獨逸兒童に物問はゞ彼等は答へん、僕等のおもちやは英國人が持ち去れり、赤ちやんのミルクは佛蘭人が奪ひ行けり」と、三つ兒の心百迄とか、かくて尙ほ永遠の平和を口にする世界の政治家なるものは賢か、愚か。

戰爭中獨逸に於て缺乏したるものは單り食料のみでない。生活用並に軍需用として極めて必要なる棉花、皮革、羊毛の如きは、國內の產出皆無若くは微少にして殆んど全部外國よりの輸入に仰いで居たのである。然るに是等も亦封鎖の爲め輸入の全然杜絕したると、長期の戰爭に國內貯藏品を消盡したるとに依り頗る缺乏を告げた。中にも棉花の如きは國民生活用として必要なるのみならず、火藥其の他の軍用材料として頗る多量を要する。左れば苟くも棉布と名の付くものは、個人日常の生活を脅かさる限り悉く徵發し、伯林市中如何なる大旅館大料理店に到るも、唯一枚の綿製食卓覆、ナプキンをさへ見る能はず、毛の缺乏と共に國民の被服材料不足し、遂に紙織の被服襦袢靴下等の代用品をさへ見るに至つた。幸に空中窒素採收に成功したるが爲め、火藥、肥料等窒素材料には甚だしき缺乏を感ぜざりしが如きも、軍用品たる銅は國內產出絕無の爲め、寺院の鐘、扉の金具迄も取り脫して使用するに至り、皮革缺乏の爲め伯林第一の靴店すら木靴店頭の大部を占むるの悲哀を呈出した。其の他護謨、石油、絹、石鹼等一として缺乏を告げさるは

なく、自働車はタイヤの代りに鐵製發條を用ゐ、石油は惡質の爲め異臭鼻を穿ち、石鹸に至りては全然粘土の塊に過ぎない。從うて軍需品の如きも、人力の不足と、材料の缺乏との爲め、漸次粗惡となり、戰鬪力にさへ影響を及ぼすに至つたと云ふことである。

斯くの如く封鎖の永引くに從ひ、食料其の他の物資の缺乏の爲め、獨逸國內の狀況は日に月に惡化し、戰爭第四年目たる一九一七年の冬より翌一九一八年の初めに掛けては、國民の忍耐力も殆んど其の限度に達し「我にパンを與へよ」の聲は日と共に喧しくなつた。然かも大體に於て尙ほ能く國民的結束を保ち、大敵を支へ得たる所以のものは、國民の大部が此の戰爭こそ獨逸存亡の岐るゝ死活戰なることを自覺したると、一は當局者の唱ふる獨逸必勝の聲に慰められたるに由るのである。然るに一九一八年春に於ける「アミヤン」方面に對する獨逸最後の突擊の失敗に終るや、曩に多大の望を屬したる潛水艇戰の不成功と、新敵米軍の意外に優勢なると相俟つて、最後の勝利に對する國民の信念漸く動搖し始め、前途悲觀するもの次第に多く、革命の氣運さへ生ずるに至つた。

此の間に於て、內には敵國の宣傳（プロパガンダ）と社會黨の煽動漸く烈しく、之が爲め或は軍需工場のストライキあり、或は海軍兵の反亂あり、外には營養不良と軍需の不足とに依り、軍隊の戰意衰へて帷幄の作戰意の如く進捗せざるあり、政府も大本營も、內憂外患の爲めに交々苦しむ處となつた。斯くて遂に一九一八年夏に於ける西部戰線の全軍大退却となり、同年九月には勃牙利先づ碎き、土耳其、墺洪國亦尋で離れ、加ふるに國內の非戰黨と革命氣運とは益々濃厚となり、大勢玆に全く去つて「ヒンデンブルグ」の斷も、「ルーデンドルフ」の智も、今や復た施すべきの策を見出さない。四年餘の勇戰に驍名を世界に轟かしたる獨軍も、最後の一戰に崩れし陣を立て直すの暇さへなく、一九一八年十一月あはれ聯合軍の膝下に無條件に等しき休戰を請ふに至つたのである。

今一息、今一息との詞に激せられ、慰められ、勇氣付けられつゝ、四年餘の久しき、有ゆる缺乏と、有ゆる困苦とに、堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍びたる獨逸國民も、物質的に食料缺乏の苦痛愈烈しく、精神的には最後勝利の望絕へ、失望、落膽、怨嗟、恐怖の情は一時に勃發した。怺へに怺へし忍耐力も今は遂に其の彈力限界を破り、多年養はれたる愛國心も、宣傳と煽動とに攪亂せられ、「後は野となれ山となれ」命あつての物種

子」と、「我にパンを與へよ」の聲に六百年恩顧の「ホーヘンツオルレン」家を追ひ、四年苦樂を共にしたる政府を顚覆し、最後の五分間に臨んで自ら潰へた。斯くて獨逸國民の得たる處のものは何ぞ。パンにあらずして前代未聞の峻厳なる平和條約であつた。

斯くの如く獨逸は最後の瞬間に於て自ら潰へ、背負ひ切れぬ平和條約を課せられて遂に今日の苦境に陷つた。當時若し獨逸國民にして最後の結束を固くし、「ホーヘンツオルレン」家の周圍に集まりて斷然たる決心を示すか、否らずんば過激派と爲つて露國と手を握りたらんには、恐らく今日の如き憂目の如き憂目を見ざりしならん、獨逸國民は最惡の道を擇んで進めりとは、獨逸人の後悔のみならず、多くの中立國民の言である。「吾人に天下を渡さばパンを與へん」との社會黨の甘言に欺かれて革命を起したるは、獨逸國民の同情すべき失敗であつた。空言家「ウイルソン」の十四個條に瞞まされて兩刀を投げ出したるは、獨逸政治家の正直過ぎたる失策であつた。

此の點より觀察すれば、獨逸は封鎖の爲めに食料物資の缺乏を來し、内に國民の忍耐力斷へ、外に軍隊の戰鬪力衰へ、遂に自ら潰へたのである。如何に强き愛國心も、パンの爲めには破れざるを得ない。人間萬事パンに在り、人は生きんが爲めには何物をも破壊す。パンの充實なくして政治も、軍事も、社會問題も、到底完全に解決することは出來ぬ。

「ルーデンドルフ」は戰爭中に於ける獨逸食料の不足を平時農業政策の不良に歸し、吾人にして戰前英國の不法なる封鎖を豫想せば、他に取るべき途ありしならんと云つて居る。英國も亦今回の戰爭に依り食料自給の必要を痛切に感じた樣である。併しながら英も、獨も國運今日の發展は主として其の工業力に待つて居る。農と工と兩立し得れば其れに優ることはない。若し得ずとすれば果して其の孰れを採るであらう？。農業國より漸次工業國化せんとせる我が日本の如きも、今に於て大に考慮を要する重大問題であると思ふ。

二　米國の參戰

米國參戰の理由と目的如何？。と之に關しては世上種々の評論がある。米國人自身の言ふ處に依れば、曰く正義人道の爲め、曰く專政者の下に苦しむ小民族の解放、曰く世界平和の攪亂物たる獨逸軍國主義を撲滅して世界をデモクライズし、以て永遠の平和を圖るに在りと。其の語る處大義名分誠に明らかで

ある。併しながら底に底あり、腹に腹ある現代國家の宣言なるものが、果して幾干程度まで信を措くに足るかは、マキヤベリズム」外交の尙ほ流行せる今日大なる疑問である。而して之ど同時に其の虛僞を摘發し、其の不正を攻擊することも玆には必要を認めない。米國參戰の理由と目的とが眞に果して米人、自身殊に大統領「ウイルソン」の高唱したるが如きものなるや否やは、「ウイルソン」采配の下に議定せられたる「ベルサイユ」平和條約を一讀すれば判かる。如何に米國カブれのしたる痴の痺れたる人間と雖ども正しき判斷が付くであらうと思ふ。米國參戰の眞意が奈邊に存するに拘はらず、玆に爭ふべからざる、又疑ふべからざる一點がある。卽ち米國としては、聯合國が勝利を得るよりも、獨逸の勝利が自國に取りて危險である。何故となれば一は開戰以來米國の執れる聯合國に對する好意的中立が痛く獨逸の恨みを買へると、一は戰後獨逸の發展力に對し、恰かも日本の發展に對するが如き猜疑的恐怖心を抱けるが爲めである。左れば「ウイルソン」は當初「無勝負引分け」を唱へたるも、若し何れか一方を勝たすとすれば、聯合國の勝利を希望するは明らかである。然るに戰爭の經過より觀れば、獨逸側常に優勢にして動もすれば聯合國が敗けそうである。殊に一九一七年の春獨逸が無制限潜水艇戰を開始して以來、聯合國の雲行益々險惡にして、聯合國作戰の大動脈たる英國の海運は日に益危急を告げ、加ふるに露國の倒潰に依りて聯合國の兵力に大缺陷を生じ、『聯合國危ふし』の警報は櫛の齒を引くが如く米國に傳へられた。當時英國の海運が如何に危急を告げたるかは、米國政府が特に『シムス』提督をば實情調査の爲め、英國に急派したるに徵しても想像することが出來る。今春米國政界の大問題となりし『シムス』問題卽ち米國海軍大臣『ダニエル』氏の『シムス』提督に與へたる『英國人に誤魔化さるゝ勿れ、吾人は英國の爲めに火中の栗を拾ふを好まず、米國は獨逸と戰ふ如くやがて英國とも戰ふかも知れぬ』との內訓は、此時發せられたのである。此の訓令に徵するも、米國參戰の裏面を窺ふことが出來る。當時英國は表面對敵の爲めと稱せしも、寧ろ人心動搖を防ぐ對內政策上、潜水艇に依る商船被害の公表を中止せしが爲め、其の眞相を知る能はざりしも、食料缺乏に對する英國政府の狼狽振り並に『ロイドジョージ』以下閣員の悲觀的演說に依りて、其の被害の極めて大なるを略ぼ推知せしめた。而して『シムス』提督の『救英一日も緩ふすべからず』との報告に基つき米國は遂に斷然對獨宣戰を布告するに至つたのである。

獨逸の無制限潜水艇戰は米國をして劍を拔いて起たしめたる直接唯一の原因である、と米人は云つて居る。世人も亦之を信じ、獨逸軍閥なるものが無謀の擧に依りて米國の怒を激成し、遂に之をして敵に廻らしめたるの愚を責めて居る。米國の參戰が果して米人の言ふが如く、世人の信ずるが如く、獨逸潜水艇戰に對する人道的義憤であるか、將た又自國政策の產物であるかは、前記海軍大臣『ダニエル』氏の訓令に依つて察知することが出來る。唯何れにしても獨逸の潜水艦戰が米國の蹶起に適良の口實を與へたることと丈は爭ふべからざる事實である。先きに『ルシタニヤ』事件あり、後に『サセックス』事件あり、無制限潜水艦戰の實施が米國の參戰を誘起すべきは、獨逸政府及び大本營の豫め覺悟したる處である。獨逸宰相『ベートマンホールウツヒ』の陳述を見るも、潜水艇戰に依り米國との國交破斷は避くべからざることであると云つて居る。當時米國の輿論は民族關係經濟關係並に聯合國の宣傳に依り、日々に親英反獨に傾きつゝあつた。之を以て、獨逸識者間には獨逸が戰勝の希望を抛棄して屈辱的平和に甘んぜる限り、米國は早晩聯合國側に加擔すべく、潜水艇戰は唯幾分其時機を早むるに過ぎずとの說が有力であつた。

之を以て獨逸大本營は、米國の參戰到底免れ難しとすれば、寧ろ自國に最も有利なる時機を撰んで潜水艇戰を斷行するに如かずと爲し、遂に一九一七年二月一日を以て英佛全海岸に對する封鎖を宣言し、無制限潜水艇戰を實施するに至つたのである。併しながら獨逸は決して米國を輕視しない。之をして參戰せざらしむる爲めには種々の苦心と努力とを爲した。尤も此等苦心の中には、日、獨、墨の同盟を說き却つて米國の怒を激成したるが如き愚策も交つて居たのである。唯獨逸は潜水艇戰の成功を確信し、從令米國の參戰を早むることあるも、潜水艇戰に依りて必ず戰局を有利に收め得るものと計測したのである。即ち米國の戰闘力整備するに先ち、英國の海運を破滅し、聯合國を屈伏せしめ得るものと確信したのである。之を失敗の今日の結果より見れば、獨逸の爲せる處或は無謀とも非難し得べし、或は不明とも攻擊し得べけんも、當時獨逸の大本營は數字計算の下に潜水艇戰の成功を確信したのである。宰相『ベートマン』も大本營の提示せる計數的證明に對しては、之を駁論するに足るべき理據を有せなかつたと云つて居る。即ち獨逸の失敗は米國を侮りたるに非ずして、潜水艇數を過信したるの誤りである。開戰の理非曲直はしばらく措き、既に戰爭を開始したる以

上、國家は勝利に向つて邁進せねばならぬ。佛國主相『クレマンソー』が内閣を組織するや、施政方針として宣言して曰く、『吾人の目的は先づ戰爭に勝つに在り、戰勝を得る爲めには國家の總てを之に向つて傾注せざるべからず、勝利は萬事を有利に解決す、千の良計も、百の妙案も、戰爭に敗るれば何等の意義を有しない、吾人は先づ勝たざるべからず』と、誠に名言と云ふべきである。昨冬以來獨逸に於て『戰爭責任査問會』なるものが開かれ、當時の要路に在りたる文武の大官が審問せられた。時の參謀總長『ヒンデンブルグ』元帥も亦其の一人であつた。同元帥は獨逸大本營作戰の失敗に對する非難に答ふるに『予は國家より委任せられたる職責の範圍内に於て、勝利を得る爲めに最善と信じたる處を行ひしに過ぎず、予をして再び一同の職責の上に立ち、同一の情境の下に居らしむれば、敢て曰ふ予は再び同一の作戰を繰り返へさんのみ』と云つたと云ふことである。言或は奇矯に失し、或は負惜みの譏を免れずと雖も、大任に處するものは此の位の確信が無くてはならぬ。既に勝利を確信したる以上、之が實行に勇斷するは責任者たるものが執るべき唯一の途である。萬一失敗の譏に受くべき責は別問題である。必勝を確信しながら尙ほ逡巡猶豫して大機を誤まるが如きことあらば、是れ其の職に忠なるものとは云へない。獨逸潛水艦戰の失敗に歸したる今日に於ては、之に對する非難の聲高きも、若し獨逸にして潛水艦戰を實施せずして敗たれらんには、世人は恐らく獨逸大本營の優柔不斷遂に國家を誤りたるを責むるであらう。況して縱令潛水艦戰を行はざるも、米國は早晩參戰すべき形勢明らかなるに於ておやである。獨逸と同じ境遇と同じ狀況とに遭遇したらんには、世界何れの國と雖も、恐らく獨逸と同じ手段と同じ行動を執りたることを信じて疑はない

是より先き一九一五年春、獨逸は英國の對獨一般封鎖に對抗する爲め、初めて商船に對する潛水艦戰を開始した。然るに當時内閣及大本營に於ては是非の議論沸騰し、宰相『ベートマン』の如きは非人道の見地より之に反對したるも、遂に皇帝の裁可を經て制限的潛水艦戰を行ふことゝなつたのである。然るに其の後に至り、『ルシタニヤ』號『サセツクス』號等の撃沈事件の爲め、强硬なる米國の抗議に會ひ、宰相は辭職を賭して潛水艦戰の中止を迫まるに至つた。之に對し海軍大臣『チルピッチ』は極力潛水艦戰の繼續を主張して讓らず、一九一六年三月よりは更に無制限潛水艦戰開始の必要を極言し、爲めに皇帝の

諱む處となり、憤悶の裡に遂に其の職を去つた。獨逸海軍の建造者として二十年間海軍大臣の椅子を占めたる「チルピッツ」元帥の末路こそ哀れである。

獨逸の潛水艦戰は斯くの如き曲折の歴史を有して居る。然るに一九一七年に至り内外の戰局は變化した。當時獨逸にありては内々は食料の缺乏あり、戰爭の繼續永きを保ち難く、外には平和を提議して容れられず、敵國の戰意益々固きあり、戰爭の前途は暗澹として居る。加ふるに一方には夏期の大攻撃に使用すべき聯合軍の兵器軍材は續々として英佛に向ひ輸送せられつゝある。一方には新造潛水艦の數著しく増加し、各軍港に鯨艫を連ねて活動の命を待つて居る。此の行き詰まれる戰局を打開して死中に活を求むるの途は、乾坤一擲、唯此の土俵際の打つちやりの一手あるのみであつたのである。乃ち獨逸の爲めには今や最後取つて置きの無制限潛水艦戰を行ふの外、他に執るべき策なきに至つたのである。殊に潛水艦戰の性質に關しては、國際公法上未だ確たる明文がなく、之が解釋は勝者に依つて決せられるのであつた。

然らば獨逸は潛水艦戰に對して幾干程度の確信を有したるや、世界の強大國たる米國をば新に敵に廻はして迄も、尚ほ且つ勝算を有したるやは、是れ研究を要する問題である。潛水艦戰に關し獨逸大本營が如何なる作戰計畫を有したるやは、獨逸軍事の機密に屬し、之を知る能はざるのみならず、軍事専門の問題に屬するを以て茲に之を避ける。唯其の大綱を述ぶれば、無制限潛水艦戰實施以後、早ければ四箇月、長くとも六箇月以内には英國海運を破滅し得べく、縱令米國參戰するも、軍隊の徴募訓練等に相當の長日月を要するのみならず、世界海運の現狀は一箇月五萬以上の軍隊を歐洲に輸送するの能力を有せない。從うて米國陸軍が歐洲の戰場に現はれて、有力なる戰闘力を發揮し得るまでには、英國を屈伏せしめ戰爭を終結し得べしと測定したのである。

獨逸が無制限潛水艦戰を開始するや、米國は豫期の如く直に獨逸との國交を斷絶して自由行動を採るべきを宣言し、尋で獨逸に對して宣戰を布告した。而して陸には徴兵令を布きて二百萬の軍隊を新募し、海には四十億圓の巨資を投じて六百萬噸の船舶急造を行ふ等、米國式大々的規模を以て戰備に着手した。之と同時に獨逸の無制限潛水艦戰も亦其の成績偉大にして毎月の撃沈船腹數十萬噸を算し、一九一七年四月の如きは實に百萬噸の多きに達し、此の勢を以て進まば獨逸の豫期したる如く六個月ならずして英國の海軍を撲滅し得るの形勢を呈したの

である。此の時に於ける英國上下の恐慌は名狀し難く。食料制限、耕地開墾、船舶急造の聲一時に高く、『ロイドジョージ』をして英國を救ふの道は、一にも船、二にも船、三にも船、到る處に船演說を絕叫せしむるに至つた。然るに世に絕對有利の武器なく、攻むるもの生ずれば從うて防ぐもの現はるで、一時世界を聳動せしめたる獨逸潜水艦戰も、之に對する攻擊武器の發明と、之を避くる防禦法の硏究とに依り、いつ迄も其の猛威を持續する能はず、前記四月を絕頂として漸次降り坂となり。獨逸大本營の計策を裏切つて、六個月經つも一年經つも、遂に英國を屈伏せしむる能はなかつた。

獨逸前海軍大臣『ヒルピッツ』元帥の所陳に從へば、一九一六年の春即ち潜水艦戰が尙ほ極めて局限的なりし際に於てすら一潜水艦一航海の擊沈船舶は平均一七、〇〇〇噸なりしを以て、此の割合を以てすれば無制限戰に加ふるに潜水艦の發達とを以て、一艦一航の平均擊沈數は從前の三倍即ち五一、〇〇〇噸に增加すべき筈なるに拘はらず、實際に於ては一九一七年夏の平均數一四、〇〇〇噸にして、同年秋に至りては僅に九、〇〇〇噸に過ぎなかつたと云つて居る。是れ聯合國艦船の潜水艦に對する攻擊防禦の進步したる爲めにして、獨逸大本營計畫の齟齬したる所以である。誤算にあらずして逆算である。併しながら此の時に於てすら潜水艦戰に依る擊沈船腹は建造船腹を超過し、聯合國の海運は益脅威せられつゝあつたのである。小國の權利擁護を標榜せる英米佛等が横暴にも中立諸國の船舶を强制的に徵發したるも之が爲めであつた。獨逸と利害關係なき諸國をして强ゐて參戰せしめたるも、一は其の抑留せる獨船を沒收利用せんが爲めであつた。

而して此の間に於て、世間より誇大妄想と評せられたる夢想的の米國の大戰備も着々整頓し、軍隊輸送の如きも豫期以上に進捗し、一九一八年秋には佛國の野には既に二百萬の米軍を見るに至つた。米國民が往々半虛榮的に他國の想像し得ざるが如き大規模の計畫を立て、而かも之を實行するの能力を有することとは、米國を勘定する場合に見逃がすべからさる點である。米國ほどの金力と物資とを有する國は如何なる事をも成就し得るの可能性を有することは、我が國民の常に留意せねばならぬ點であると信ずる。

斯くの如く獨逸の無制限潜水艦戰は、事實に於て失敗に終りしと雖も、而かも其の失敗たるや誠に際どき失敗であつた。戰後英國政府の發表せる處に依れば、戰爭中英國船舶の沈沒數は

合計七、七五九、〇九〇噸にして、内潜水艦に依るものは六、六三五、〇五九噸である。又破損したるも沈沒せざりしもの八、〇〇七、九六七噸中、潜水艦に依るものは七、三三五、八二七噸である。而して是等船舶の破損の程度に至りては之を知る能はざるも、其の潜水艦に依るものは大部分水線下に於ける魚雷損害に歸因するが故、其の破損程度は相當に大にして、之が修理には多大の時日と勞力とを要するものと信ぜられる。然るに當時英國に於ては、一方に於ては陸戰用軍需製造並に海軍用艦船の急造（休戰の際建造中なりし英國の海軍用艦船は大小合して一千〇五隻を算す）に忙殺され、一方には材料及人力の缺乏を來し、一般造船能力は大に減退せるが爲め、破損船舶に對する修理工事の如きも著しく敏活を缺きたるは事實である。戰前英國は年百五十萬噸乃至二百萬噸の造船能力を有したるも、一九一六年に於ける新造船舶は僅に五十四萬噸に減じて居る。英國にチャーターせられたる一邦船は五日程の修理工事に對し、一月以上繫船したる例もある。

而して此等破損船舶が果して幾千率を以て航海を休止したるやは之を詳知するを得ざるも、今假りに此等破損船舶中の半數をば無制限潜水艦戰開始以後に於ける損害とし（擊沈船舶の率に依る）毎船修理に要する時日を過少に見積り平均一個月とすれば、無制限潜水艦戰を開始したる一九一七年二月初より、其の終止期一九一八年十一月初に至る迄二十一個月間に於て、航海を休止せる船腹は常に約二十萬である（潜水艦の活動盛なりし時期に在つては、恐らく之に倍加するものがあつたであらう。若し夫れ之に定期の檢査、修理、入渠等を計算すれば、航海休止の船舶は尙ほ著しく增加する。加之普通海難に因る喪失船は平時率を以するも、四年間に於て尙ほ約二百萬噸に達する。故に之等を加算すれば、沈沒若くは航海休止の船舶は少くも約一千萬噸を算する。而して開戰當時に於ける英國の船舶は約二千百萬噸なりしに依り、之に開戰後の新造船約三百七十萬噸、外國より購入したる五十五萬噸及び敵國の沒收船舶差引約五十五萬噸を加ふれば、二千五百八十萬噸にして、之より前記の減少船腹を控除すれば、使用し得る英國船舶は約一千五百八十萬噸となる。然るに英國は陸海軍の用船並に聯合國への貸與船として、全船舶の五割五分乃至六割を徵發したるを以て之を最少限度一千一百萬噸とすれば、英國の一般海運に充當し得るものは、最大限約五百萬噸に過ぎない。即ち戰前の僅に四分の一强である。而かも是れ狀況の幾分改善せられたる休戰當時

に於ける計數である。其の潜水艦の猛威を逞うしたる當時の形勢は尙ほ遙かに險悪であつたのである。『ロイドジョージ』が聲を嗄して船々と絶叫し、英國新聞が英國の嘗て遭遇したる最大危機と悲鳴し、『カイザー』が指を屈して英國の降伏を待ちたるも亦然るかなである。米國の聯合國に加擔して參戰するや、英佛、伊、白先を爭うて特使を遣り、大統領に參候して各哀訴する處があつた。佛は軍隊の急派を請ひ、伊は軍需の供給を願ひたるも、英の求むる處は何を扨て置き、船舶の急造であつた。

休戰後英國の前海軍大臣にして對獨海軍政策の案畫者たる『チャーチル』が、戰爭中に於ける英國の軍事的地位に關して一新聞記者に語りたる言に依れば、

獨逸の潜水艦戰は米國をして吾人に加担せしめたりとは云へ、其の活動の猛威は今一歩を以て吾人をして絶對降伏を據なくせしむるの踵際にまで攻め付けたり。實に英國の運命は風前の燈の如く危くかりき。唯幸に全國民が不撓不屈の大努力に依つて最後の勝利を得るを得たり。戰爭の眞相を知れば知る程如何に危機一髪の急際に於て吾人の運命の轉回したるかを思はしむ。

と云つて居る。當時若し英國民をして英國海運の眞相を知らしむれば、流石の英人も或は意氣阻喪して戰爭繼續の勇氣を失つたかも知れぬ。

之に由つて觀れば、獨逸の潜水艦戰は其の結果こそ失敗に終りたれ、決して無謀無算の暴擧ではなかつたのである。一時は英國を土俵際まで攻め付け、全世界をして汗を握らしめたのである。誠に獨逸の爲めには惜しき敗北、聯合國の爲めに危ふき勝利であつたのである若し獨逸にして尙ほ一年戰爭を持續し、建造中なりし多數新式潜水艦を海に浮べ、水中に猛威を振ひたらんには、聯合國に取りて恐ふべき結果を來したらんは、『チルピッツ』の言を借らずとも明らかである。而して此の苦き經驗こそ平和條約に於て、英國が獨逸の海上武力を根本的に撲滅し、今後獨逸をして一隻の潜水艇をすら所有せしめざる所以である。

必勝を期したる最後取つて置きの潜水艦戰も九仭の功一簣に空しく、一九一八年春に於ける陸上掉尾の一擊も、戰局を有利に打開するに足らず、巴里砲擊の長距離砲徒らに佛人の夢を驚かしたるに過ぎなかつた。斯かる間に米國の戰備は愈充實整頓して、無限の資材を有する新銳の大兵は、大西洋を横ぎつて日々に潮の如く佛國の野に殺到しつゝある。休戰當時佛國の戰線に

在りたる米軍は既に二百萬人を算し、尙ほ月々十餘萬の兵を前送しつゝあつた。之に反し背後に在つては人力物力愈缺乏して外援の待つべきなく、動もすれば同盟國さへ離反せんとして居る。獨逸に取りては眞に孤城落日秋風寒しの感がある。此に至りては流石に豪勇なる獨逸軍隊も、流石に堅忍なる獨逸國民も、最後の勝利に對する四年の夢覺めて前途を照らす光明は全く消へたのである。戰爭繼續の意義を全く失つたのである。肉を削づる苦痛も最後の勝利を望めばこそである。血を絞ぼる犧牲も積戰の意義を有すればこそである。英や、佛や、伊は既に戰に疲れて多く恐るゝに足らない。唯新鋭米軍の殺到こそは、最後勝利の目的を破り、戰爭繼續の意義を無にした。凡そ反動の力は與へられたる力に比例すで、水堰くこと愈多ければ、堤を決する勢愈急である。四年餘の久しき間缺乏と困苦とに堪へたる獨逸國民も、最後勝利の希望絶へては意氣阻喪せざるを得ない。東西の戰線に惡戰苦鬪を續けたる獨逸軍隊も、戰爭繼續の意義を失ひては勇氣挫折せざるを得ない。一九一八年夏以來獨逸の形勢は變化した。急轉直下に惡化した。後の『コルヌ』の戰に浮足立ちたる獨軍は退却又退却、二千餘門の大砲と三十萬の俘虜とを戰場に委棄して總敗北に陷つた。時も時、東方の盟友勃牙利は離反して動もすれば矛を逆にせんとして居る。土耳其との連絡は杜絶した。墺太利は最早足も腰も立たない。事茲に至りては機略縱横の『ルーデンドルフ』も奈何ともする能はず、遂に政府を促がして休戰の索りを入れしむるに至つた。かくて多年飢餓に苦しみたる獨逸國民の忍耐の弦は斷たれて、平和要望の聲は蔚然として全國に漲つた。堤は決し積水は奔流した。『カイザー』の威信も。『ヒンデンブルグ』の聲望も、今や狂瀾を既倒に挽回することは出來ない。沒落の斷末魔に至りて擧國一致の責任内閣を造りしも時已に遲く、唯徒らに時局の紛亂を招き革命の勃發を促がすに過ぎなかつた。斯くの如くにして獨逸は敗られた。獨逸は潰れた。恰かも巨木の風に折るゝ如く。ボツりと！

功名爭と分捕爭とは、今も昔も、戰勝に宿る離き付物である。戰爭中已が苦戰に臨んでや、互に他の不信と我慾とを責め罵りたる聯合國も、一たび戰勝を博するや忽ちにして、功名爭と分捕爭とに醜態を暴露した。英人は獨逸の屈伏を以て海上封鎖の力に依るとなし、英國を以て殊勳第一と稱へて居る。佛人は『ベルダン』『マルヌ』に於ける佛軍の勇戰に依つて獨軍の攻勢を挫きたるこそ、聯合國戰勝の第一因と言つて居る。白國は

「リエーチ」の防戰こそ實に巴里の陷落を救ひ、延ひて聯合國を勝利に導きたるものと稱へて居る。伊國は伊國で、聯合軍の勝利は伊軍が墺軍を南方に支へたればこそ、東西殊に西部戰場に於ける英佛の作戰を容易ならしめるに由ると言つて居る。其他塞爾維、羅馬尼亞に至る迄相當の手柄話に鼻を高くし、獅子の分前の多からんことを望んで居る。戰場を距る一萬哩一發の砲聲を聞かざる我が日本の如きも、日本にして若し中立を維持せば‥‥などの議論を耳にする。

功名爭は別とし、此等の諸國は何れも聯合國の戰勝を形成する重要なる因子にして、其の孰れの一を缺くも或は戰勝は得られなかつたかも知れぬ。日本の如きも若し少くも中立を維持したりとせば、戰爭の結果は今日と大に異なるもがあるであらうと思はれる。されば孰れか殊勳にして孰れが功勞なるやは、之が判定頗る困難である。殊に椽の下の力持と云ふこともあれば努力は必ずしも功績と比例するものでない。公平の見地に立つて考ふれば、疲勞困憊の極に陷ゐれる聯合國に對し、精神的並に物質的の援助を與へ、動もすれば敗戰の非運に沈淪せんとせる聯合國をば、沒落の十一時に救ひ上げたるものは、何と云ふても米國であると云はねばならぬ、聯合國財政の急迫を救ひたるものは米國の金である。英國海運の危機を救ひたるものは米國の船である。伊國人の衰頽缺乏を救ひたるものは米國の人である。伊國軍需の缺乏を救ひたるものは米國の物である。獨逸に精神的打擊を與へ聯合國をして徹底的勝利を得せしめたるものは米國の威力である。實に米國は聯合國の爲めには救世主であり、獨逸の爲めには首切人であつた。當時聯合國民が「ウイルソン」を以て基督再來の如く隨喜渇仰したるも亦所以ある哉である。

之を以て敢て云ふ、聯合國は米國の參戰に依つて、勝ち獨逸は米國の參戰に依つて敗れた。而して英國の封鎖は物質的に獨逸國民の生活を破壞し、米國の參戰は精神的に獨逸國民の意氣を阻喪せしめたのである、其の虛に乘じ敵國宣傳の魔睡劑は愈深く獨逸國民の心を攪亂せしめ、遂に自潰するに至らしめたのである。

三　敵國の宣傳

『プロパガンダ』即ち『宣傳』なる語は、今回の戰爭に依つて廣く世界に紹介せられたる流行的言葉の一である。抑も宣傳とは或る場合には自頌的贊辭となり、或る場合には排他的讒謗と

なり、又時には大義名分の廣告となり、時には反間苦肉の猾策となる。其の時と目的とに從ひ其の方法と手段とを異にして居る。由來英國は宣傳を以て對外政策の秘訣と爲し、獨逸は調査を以て對外發展の要機と爲し、各其の行ふ處に長じて居つた。英國宣傳の巧妙なること、急がず騒がず、恰かも春雨の干土を潤ふすが如く、ジミ〳〵と人の心に食い入らねば止まない。獨逸調査の精緻なること、微を捜ぐり隱を捉らへ、恰かも明鏡の物を照らすが如く、毫末の細と雖ども探知せねば置かない。而して宣傳は不識の間に人の心を攪り、調査は隱密の裡に國の物を捜ぐるのである。左れば一たび宣傳に捉はれたる人心は容易に其の迷より脫するを得ざるも、一度調査したる物件は刻々に變化し時々に推移する。故に前者は永久的にして後者は一時的である。殊に戰爭開始以來英國の宣傳は益々敏活を加へたるに反し、獨逸の調査機能は封鎖の爲め全然其の活動を停止した。

英國は開戰後直に擧國一致の實を揚ぐる爲め、從來の政黨內閣を解散して各派政黨の聯立政府を組織すると共に、雄大なる全國言論機關の總動員を行ひ、部局を對內、對中立對敵の三方面に分ち、大々的宣傳戰を開始した。而して最も重要にして困難なる對敵宣傳には『〇〇〇〇』紙の社主にして反獨主義の本尊たる『〇〇〇〇〇〇』卿を以て其の長に任じた。

先づ對內宣傳としては、世界の正義と國家防衛の爲め開戰の止むを得ざる所以を述べて國民の了解を求め、戰爭の結果の重大なるを說きて國民の結束を促がし、又或は敵の强勇を說きて國民の慢心を戒め、或は敵の蠻行を數へて國民の敵愾心を煽ほる等、常に國民をして悲觀せしめず、樂觀せしめず、慢心せしめず、阻喪せしめず、寛嚴緊弛度を失せず、終始國民の戰爭熱を緊張するに力めた。而して戰報の如きも勝つて誇張せず、負けて隱蔽せず、唯潜水艦戰の狀況のみは一時其の發表を停止したるも、其他は大體に於て比較的正直に公表せられた。由來冷靜は英人の特質である。勝つも狂喜せず、負くるも落膽せず、其の平然として無頓着なる處、彼の一勝を得る每に提灯行列旗行列のお祭騒ぎを爲すも、戰況少しく不利なれば忽ち喪心自失して、投石の惡戯を演ずる國民とは頗る趣を異にして居る。好きと嫌ひとに拘はらず、兎に角英國人は偉大なる國民である。

次には中立國宣傳である。『所謂』正義人道威しの甲冑に身を堅め、獨逸の不義蠻行の刄を眞つ向に振り翳し、演說に、新聞に、活動寫眞に、有ゆる手段を弄して中立國の反獨感情をそゝり立てた。曰く獨逸の野心、曰く獨逸の奸謀、曰く白耳義に

於ける殘虐、曰く浮虜の虐待、曰く平和の攪亂者、曰く專制の暴君、曰く何、曰く何。而して自國を以て世界の平和と文明の維持者、正義と人道の擁護者と名乘り、其の厚顏さ、其の圖々しさ、世界の人間は英國の歷史を知らぬかの如く、眞に人を馬鹿にし切つたものであつた。之に對し獨逸も亦反宣傳の對抗策を執りしも、國境の封鎖と言語の不利に加ふるに、其の手段方法の不撤底なりしが爲め、充分の効果を現はす、能はず、所謂惡口の言はれ損となりしは獨逸の爲めに大なる不利であつた。英國の歷史を知らぬ人間は世界に多い。中立國民の感情は漸次獨逸を去つて英國に向つた。

斯くて一九一七年二月に至り、獨逸は英國に取りて最も恐るべき無制限潛水鑑戰を開始し、尋で同年三月露國に革命起り、其の戰鬪力を喪失した。是に於て聯合國就中英國は米國を起して參戰せしむるの切要を感じた。當時米國の輿論は種々の關係により聯合國に同情を有したりとは云へ、未だ參戰を望む程に緊張して居なかつた。一千萬の獨逸人並に獨系米人は勿論。一千二百萬の愛蘭系米人の大部は、**英國よりも寧ろ獨逸に向つて心を寄せて居つたのである。**併しながら米國の起否は今や實に英國に取りては生存死亡に關する問題である。首相「ロイドジョージ」は大々的對米宣傳の必要を認め、莫大の動物費を齎らして「ノースクリフ」を米國に派遣した。辯力と金力との夾擊に逢うて米國の言論界は見る〳〵戰の叫びを帶びて來た。「ウイルソン」の無勝負引分主義もいつか獨逸撲滅論と變じた。かくて二個月ならずして米國は獨逸に對して戰を宣した。國民の多くは未だ參戰の理由と目的とを知らぬ間に！。米國の參戰は新聞輿論と、兵器製造業者と、聯合國に投資せる資本家の仕事であるとは、當時米國に於て屢耳にしたる處である。由來米國は輿論の國である。新聞輿論の國である。米國は金の國である。黃金萬能の國である。黃金萬能は日本人も近來米國人に讓らない。唯新聞て論の力を解せざる我が國民は、動もすれば米國を誤判する。

第三には對獨宣傳である。英國は戰爭中種々の言辭と手段とを以て、獨逸皇室と國民、獨逸文官と武官、並に獨逸聯邦間の離背に努めた。曰く「吾人は獨逸國民を敵とせず、唯專制的なる爲政者を敵とす。」曰く「吾人は獨逸民族と戰ふにあらず唯侵**略的なるプロシヤ軍國主義論と戰ふ」とは、開戰以來休戰の間**際に至る迄、英の「アスキス」「ロイドジョージ」米の「ウイルソン」等に依つて繰り返へし〳〵唱へられたる常套語であつた。

聯合國就中英人の「カイザー」皇太子等に對する誹謗と侮辱とは實に其の極に達し、人をして往々惡感を催ふさしむるものがあつた。而して獨逸攻撃の急先鋒たりしものは「ノースクリフ」の主宰せる「デーリー、メール」紙であつた。其の筆鋒の辛辣なること針の如く、執拗なること蛇の如く 猛烈なること虎の如く、時に捏造し、時に虚構し、或は流言を放ち、或は蜚語を飛ばし、讒誣中傷殆んど至らざるなかつた。而して是等は獨逸官憲の怠慢に乘じて、中立隣邦を介して獨逸國内に侵潤し、以て獨逸文武間を離間し、獨逸國民の戰意を挫折せしめ、獨逸國民の忠節心を破壞し、反對黨の政府攻撃の種子となる等、獨逸當局者を苦悶せしめたること莫大である。獨逸の一高官は、前線の敵は劍を以て防ぐを得るも、「デリー、メール」の毒舌に至つては我れ之を防ぐの道を知らずと嘆息したと云ふことである。「ルーデンドルフ」の如きも亦英國の宣傳に苦しめられたる其の一人である。彼の述懐に曰く

　獨逸國民は敵の宣傳の爲め、恰かも蛇に睨まれたる蛙の如く全く催眠状態に陷つた。本來沈默の術と價値とを解せざる獨逸國民は、敵の宣傳と悟らず其の術中に陷ゐりて、演説に、出版に、行爲に、敵の宣傳共の儘を宣傳して居る。彼等はプロシャリタリズムの眞僞の何たるを解せずして、徒らに敵の口吻を眞似て罵詈的に之を攻撃して居る。政府の高官すらも非難的に此の詞を口にして憚らない。從うて軍隊並に國民は軍事當局者に對し疑惑の眼を以て眺むるに至り、遂に最後勝利の信念を失つて革命を引き起すに至つた。英國は支那に鴉片に與へ、吾人の敵は吾人に革命の毒を與へた。

斯くの如く聯合國の宣傳は、獨逸國民の精神を蠱惑し、獨逸軍隊の士氣を衰微せしめたるにも拘はらず、獨逸政府は之に對して斷乎たる防遏の手段を取らざりしとは、「ルーデンドルフ」の言明せる處である。其後戰爭の終期に至り、大本營よりの切望に依り獨逸政府は初めて宣傳省を設置し、「エルツベルゲル」を以て之が大臣と爲せしも、成績頗る擧らず、戰後時の大藏大臣「フエルヘリツヒ」は「エルツベルゲル」を責むるに、獨逸國民の敵たる英國宣傳大臣「ノースクリフ」の同盟者なる語を以てし、且つ宣傳費を私して自己の懐を肥やしたるを攻撃した程である。之に對し「エルツベルゲル」は、獨逸宣傳の不成功は政府と大本營との間に於ける意見の相違に因る旨を辯解して居る。即ち大本營の意見としては、名譽の平和を得る爲めには先づ我が武力を以て敵を壓倒するを要す。之が爲めには軍隊の

士氣と國民の敵愾心とを極度まで緊張せざるべからずと爲せるに反し、內閣側に於ては獨逸の戰情が軍人の權勢を增長するを厭ひたるものか、或は敵の宣傳に胃かされたるものか、妥協平和を望むの念切にして、之が爲め聯合國就中英國民の反感と憤怒とを激發せざらしむるに力めたのである。

凡そ戰爭に勝つには、先づ其の第一手段として敵の武力を破壞することを要する。而して敵の武力を破壞するには、我が武力を以て正面より之を擊滅するか、或は又策略を用つて裏面より之を自潰せしむるかである。武力を以てする正面攻擊の到底成功し難きを知りたる聯合國は、極力裏面策に依つて敵を自潰せしむるに努めた。而して敵の武力をして自潰せしむる爲めには、軍隊其のもの丶士氣を破ると共に、軍隊と國民とを離間するを要する。軍隊と國民とを離間する爲めには、文武の官僚をして互に反目せしむると共に軍事當局者に對する國民の信賴を傷ふを要する。是れ聯合國就中英國が、口を極めて獨逸の軍閥を攻擊し、詞を盡して獨逸の軍國主義を誹謗し、戰爭の全責任を之に歸すると同時に、一般國民並に政治家に對しては、寧ろ誑らすに飴を以てしたる所以である。由來恐英若くは崇英病に胃かれたる獨逸官界は、忽ちにして敵の飴に乘り、或は自ら獨逸軍國主義を罵り、或は妥協平和の可能を唱へ、爰に文武間の反目と軋轢とを生ずるに至つたのである。勝利の平和を唱へたる大本營の所見的中せしか、妥協平和を稱へたる內閣の所信實現せしかは、現に締結せられたる否な強制せられたる平和條約を一見すれば、何人にも判斷が出來る。最初より戰爭を爲さゞれば可なり、既に戰爭を開始しながら尙ほも敵の恩惠に浴せんとし、首鼠兩端を持して戰勝に對する徹底的政策を講ぜざりし世の政治家に對する良き見せしめである。

聯合國宣傳の功果漸く顯はれ始めたるは、獨逸戰局の漸く行き詰まり、獨逸食料の漸く缺乏を告け來りたる一九一六年夏頃からである。是れ宣傳の發熱に要する必然的の潛伏時間なるや、或は又前には戰勝の希望滿ち、後には物資の缺乏を感ぜず、國民の意氣尙ほ緊張せる場合には、宣傳も其の効果なかりしに因るものなるやは疑問である。併しながら一旦國民の間に怨嗟不滿の聲を聞くに至れば、蒔かれたる宣傳の種子は恰かも春の草木の如く、國民心理の缺陷を潛つて油然として萌へ出でなければ止まない、斯くて一度發芽したる宣傳の苗は、國民生活の不平と、長期戰爭の苦痛とに肥しされ、更に國內に於ける社會主義者の煽動に働き返へされて、益其の勢を逞ふした。殊に米

國の參戰以來、全に糸目を切らざる對獨宣傳は愈猛烈露骨となり、「世界の民主化」と「民族自決」の大旆を振り翳し、獨逸主權者と國民とを離反せしむると共に、「ポーランド」「チェック、スロアバック」等をして、各其の本國に對し反旗を翻やさしめた。加ふるに東方よりは露國の「ボルセビズム」新に侵入し、「リープクネヒト」の一派之に加はり、勞働者を煽動して「獨逸の勝利は勞働者の不幸なり」と叫ぶに至り、一九一八年の春に至りては政治的並に社會的革命は最早や到底避け難きの形勢を呈したと云ふことである。斯くの如く生活の苦痛と戰勝の絕望と內外宣傳の害毒とは、全國民の精神を潰敗し、國民の思想を惑亂し、遂に一九一八年秋に至り獨逸國民と獨逸政治家とは、英米人の唱へたる「獨逸國民を敵とせず、カイザー一派の爲政者を敵とす」との宣傳に迷はされて、革命を起しカイザーを逐うたのである。英國軍事界に於ては「ノースクリフ」宣傳の功に依り、戰爭の終結をば少くも一ケ年早やめたと云つて居る。一九一八年の夏以來獨逸軍隊は敵國宣傳の熱に浮かされて、全然戰意鬪志を喪失したと云ふことである。

斯くて敵の宣傳に瞞されて革命を起したる獨逸國民も獨逸政治家も、平和條約愈確定するに及びては其の餘りに苛酷なるに驚き、今更ながら聯合國の食言を怒ると共に、彼等の甘言に欺かれて自ら潰へたるを悔ゆるものが尠くなかつた。一九一九年三月對獨平和條約の內容獨逸に洩るゝや、曩に無條件休戰を主張したる獨逸の一內閣大臣は議會に於て

若し獨逸軍隊にして、若し獨逸勞働者にして、十一月五日(休戰申込日)及十一月九日(革命發生日)に於て、平和條約が斯くの如く恐るべきものであるを豫知したらんには、獨逸軍隊は決して彼等の武器を拋つことなく、戰爭を繼續したるならん

と憤慨し、大喝采を博したと云ふことである。何ぞ知らん、當時「ルーデンドルフ」は獨逸軍隊の武器投棄は、やがて暴力平和を强制せらるゝの前提なりとし、無條件休戰に反對したるが爲め內閣の彈劾に依り遂に革職せられたのである。社會黨員たる前の國防大臣「ノスケ」の如きも、英國の不信を責めて『初め英人は獨逸國民を敵とせずと云へり、仍つて吾人は「カイザー」を逐ひ民主共和國を創建せり。然るに今回の平和條約なるものを見るに「ホーヘンツオルレン」にして若し位に留まらば、斯かる不法なる條約を强ゐらるゝことあらざりしならむんと思はる』と、及ばざる愚痴を言つて居る。如何に悔ゐるも、如何

に驚くも、最早や及ばず、花は散りたり、鳥は逃げたり。

獨逸國民は敗戰の苦藥を甞めて今や宣傳の麻睡劑より覺めた、名ばかり戰勝の糜酒に醉うて、今日尙ほ催眠ダンスを踏つて居る國が少くも世界に一つある。某國の宣傳は太平洋を渡つて、そこらあたりに麻睡の毒を蒔き散らして居ると云ふ噂もある、

中立國並に敵國に對する宣傳が、封鎖、言語等の關係と獨逸側に不利なりしは已むを得ないものがある。凡そ宣傳に最も有効なるものは言論機關である。而して中立國若くは敵國の言論機關を利用するに最も必要あるものは金力である。金を使はずして宣傳を爲さんと欲するは、木に椽つて魚を求め、畠を堀つて蛤を探ぐるよりも尙愚である。戰爭中英國が宣傳に投じたる金は恐らく十億圓を以て算するであらう。次に宣傳に必要なるは言語である。世界に於ける最も多くの人に讀まれ、最も多くの人に依つて話さらるゝ言語は、宣傳を爲すに最も有利である。此の點に於て獨逸は必然的に英國に對して數籌を輸せるものと云はねばならぬ。我が日本の如きは最も不利なる地位に之るものである。宣傳には又術と略とを要する。たが要訣としては人をして宣傳の爲めの宣傳ルることを感知せしめざるにある。「ルーデンドルフ」の所謂

Propaganda should form opinion without opinion realizng that it is being so fromed

でなければならぬ。「ノースクリフ」は英國が對敵宣傳に、如何なる術略を用ゐたるは、一部分は語り得るも一部分は永久に語ることは出來ぬと云つて居る。そこに顯はれざる黃金の働きが與ふ。宣傳には又砂地に水を溜める丈の忍耐と根氣とを要する。「ノースクリフ」は過去十五年間に亘り、撓まず飽かず、世界に向つて反獨宣傳を續行したと云はれて居る。殊に戰時應急宣傳には、面の皮厚くして鷺を烏と言ひくるめる丈の度胸と機才とを要する。謙抑なる東洋的消極道德は宣傳には大禁物である。此の點に於て英國人は先天的に宣傳能力を具備して居る。「ビスマーク」は六十年前既に「革命に依つて他國を脅かすは多年英國の取れる慣用手段である」と唱破したとか。先賢の言を無視して宣傳に斃れたる獨逸國民の不覺こそ哀れである。宣傳に懸けては流石に支那人は辯舌の民、反間苦肉の本場丈ありて、馬鹿正直なる日本人よりは遙かに上手である。今日米國に於ける排日論の如きも、支那人の反日宣傳が與つて力がある。聞くが如くんば最近我が國に於ても、外務省に情報部なるも

のが設けられ、獨逸式調査と英國式宣傳とを併せ行ふ由である、姑息なりと雖ども後れたりと雖ども爲さゞるに如かずである。吾人は其の正しき活動を切望する。唯シミツタレと、セツカチと、引つ込思案では成功せざること受合である。而して戰時の應急宣傳は別とし、平時宣傳には誠意と條理が副はねばならぬ。賣藥廣告的や、香具師の客呼的では一時を誤魔化し得んも、却つて後の信用を損ずる。戰時中英國が勝たんが爲め、否な敵を潰さんが爲め、手段を擇ばず取りたる厚顏にして無鐵砲なる自家賞讃と敵國誹謗の宣傳は、平和條約發表と同時に其の假面を剝かれ、英國と英國言論の威信を世界に損じたることは誠に甚大である。

獨逸側の宣傳何等の成果を見ざるに反し、聯合國の宣傳獨り能く效を奏し、「ノースクリフ」をして「言論界の那翁」なる盛名を恣まにせしめたるには、尚ほ他に大なる原因がある。是れ我が國民の大に考慮を要する問題である。世間に的て獨逸の開戰は「カイザー」及軍閥一派の暴擧にして、國民は關知せざるが如く傳へられて居る。斯くの如き誤傳は是れ亦英國宣傳の結果の一である。事實は寧ろ有識無識の國民が、カイザーをして劍を拔かしめたるに近い。左れば開戰の當初は一部の社會主義者を除くの外は、議會も國民も言論界も悉く「カイザー」の周圍に立つて、露佛打つべし、英懲らすべしの旗を振つたのである。開戰反對者は獨り獨逸のみに存したのではない。英の內閣大臣中には戰爭反對の爲め辭職した人もある。佛の平和主義者「ジョーレス」は開戰の間際カフェー店に於て暗殺された。米の上院議員中にも參戰反對者があつた。

然るに戰爭漸く長期に亙り、戰局の進捗意の如くならざるに至るや、先きに戰爭を疾呼したる獨逸言論界の一部には、早くも戰爭に飽きて開戰の責任をば當局者に歸し、戰爭繼續を非難して妥協平和を唱ふものを出すに至つた。開戰後僅に一年を經たる一九一五年に於てすら、普漏士議會の議員にして「ブオルワルツ」紙の記者たる一社會黨員は「獨逸帝國の全勝は社會民主黨の利益にあらず」と自國の戰勝を呪ふの言を公にして憚からざる程であつた。「ブオルワルツ」紙は現獨逸政府の中堅たる社會民主黨の機關新聞である、彼の希望せる如く獨逸は敗北した。帝政は斃れて共和國は實現した。こゝ迄は同紙の爲めに誠に萬歲である。併しながら唯笑止なるは、同紙の本體たる現獨逸政府が今日却つて平和條約の苛酷に泣き、勞働者の跋扈に惱めることである。自ら掘れる穴に自ら陷ゐる。因果應報とは云

へ、天も亦皮肉である。平和條約確定後、同黨員の一領袖は黨員に向つて「今後二十年ならずして獨逸國民は、今日革命の遂行を誇りつゝある黨派に對して呪咀するに至るであらう」と云つたと云ふ。誠に僞らざる自己告白である、自己の權勢を恣まにせんが爲め、忠良なる國民を欺き、國家を破壞したる獨逸政治家の　非難むべく、彼等の所説に惑はされて、孫子の末まで生血を絞ぼらるゝに至りたる獨逸國民の愚や憫まずには居られない。昔は一將功成つて萬骨枯ると云へり、今は一商富成つて萬民飢ゆと云ふ新語がある。獨逸に於ては二三野心家の目的達して、六千萬の國民塗炭に苦しんで居る。

一葉落ちて天下の秋を知るとかで、言論界の軟化は生活難に對する國民の不平と、敵側の誘惑的宣傳と、社會主義者の非戰爭煽動と相合して國民の戰意を攪亂蠱惑し、擧國一致の籬漸く弛み初めた。戰爭中「リープクネヒト」一派の過激派社會主義者の行動は、尠なからず獨逸當局を苦しめ、獨逸軍隊を毒した。開戰前「ジョーレス」を暗殺したる佛國人は革命後に「リープクネヒト」を殺したる獨逸人よりは賢であつた。世界何れの國にも侵略主義者もあれば非戰主義者もある。積極主義者もあれば消極主義者もある。口辯の如く世界の平和を唱ふる英米に却つて侵略主義者帝國主義者が多く、侵略國と呼ばるゝ日本や獨逸に非戰主義者の案外尠なからざる如きは其の一例である。本來主戰の異同は文明の賜である。主義の異同に依る討氣論駁に依りて、社會の改造と世界の進步とは保たれるのであると信ずる。不法なる官權の威力や群集の暴力に依り反對者を壓迫することは考へ物である。併しながら主義の自由は平時のことである、國家一朝大事に際會せば、大なる國民の自由の爲めには、小なる個人の自由を束縛せねばならぬ「獨逸國民を專政者の奴隷より解放す」と號呼したる英米は、今獨逸に對して如何の自由を與へたであらうか。一千萬の獨逸民族は他民族の餌に供せられた。五十萬の獨逸の民族は政治經濟の死命を敵に握れて、食ふことの自由さへも得られない、己の欲する政體を樹立するの自由さへも許されない。唯彼等の有する自由なるものは、空腹を抱へて牛馬の如く稼ぐことばかりである。獨逸は小なる個人の自由を生かさんが爲め、大なる國民の自由を犧牲にしたのである。「獨逸は今や國家にあらず、國民にあらず、唯利益配當に預からざる勞働供給の商專國に過ぎず」とは、獨逸に對する英人の評である。

獨逸は戰爭中、種々の應戰法規を制定した。糧食法の如き、

補助勤勞法の如き、其の制度組織は極めて適良にして、英國の如きは範を獨逸に取りたるものも尠くない。然るに獨は逸形式のみ徒に美なるも、政府は完全に之を實行するの勇と力とを缺ゐて居た。聯合國より專制の惡魔、「デモクラシイ」の敵と惡罵せられたるカイザは、戰時米國大統領「ウイルソン」の如き絕對的專政權を有せざりしは勿論、獨探の罪名を負せして前首相たりし政敵「カイヨー」を監獄にブチ込みたる佛の「クレマンソー」の辣腕と堅志をも有さなかつたのである。飢餓に迫まれる國民の食料品をば、買占、賣惜する不正なる食品成金をさへ征伏し得ざる獨逸政對、國家存亡の秋に際して敵國英國の提灯持を爲せる前駐英大使たりし「リヒノフスキー」さへ處分し得ざる獨逸政府が、自國の敗戰を望む不逞の言論や、國家を呪ふ社會主義者の妄動に對し、斷然たる撤底的處置に出て得ざりしは是非もなき次第である。此の政府の無力と、國民の內幸との間隙に乘じて、敵の宣傳は國境の四方より毛細管引力の如く國內に滲み込み、內應者の助を得て益廣く精神的「バチルス」を撒き散らしたのである。

獨逸の軍隊は陸軍も海軍も勇敢であつた。世界の大敵を引受けて四年の難戰に到る處敵を破り、危險至極の潜水艇戰を繰り返へして强敵英國に悲鳴を擧げしめたる獨逸の軍隊は僅に强かつた。獨逸の國民は男子も婦人も國を愛した。有ゆる困苦と缺乏とに堪へつゝ國の爲め最愛の良人と子弟と古戰場に送りたる獨逸國民は慥に國を愛した。唯彼等を弱くし、彼等を惑はし、遂に自ら潰ゆるに至らしめたるは、內外よりする反國家的宣傳の防遏に對する政府の無氣力なりしが與つて力がある。軍人と雖ども人間である限り命は惜しい。其の惜しき命を捨てゝ顧みざるは、國の爲めと思へばこそである。同胞の爲めと思へばこそである。國家國民が戰勝を望まざるに至れば、誰が好んで塹の埋め草となるものがあらりぞ。

是に於て問題は起る。曰く「獨逸政府は何故に然かく弱かりしや？」答は簡單明瞭である。曰く「獨逸政府はカイザーの政府にして、國民の政府でなかつた」、曰く「內閣と大本營と對立反目して、政令の統一を缺いだ」。尤も獨逸政府の無力は、一部に於て優柔不斷無爲無策との評ある時の宰相「ベートマン・ホールウエツヒ」の人物にも由るべしと雖ども、しかも斯くの如きは獨り獨逸に於てのみでない。英國に於てはウエート、アンド、シイ主義の君子人「アスキス」に代ふるに、印時斷行主義の猛者「ロイド、ジョージ」を以てして國民の戰意益昂つた。

佛國に於ては溫和主義の「リボー」を斥けて、獰猛の老虎「クレマンソー」を迎へ、國民の結束愈固くなつた。之に反し獨逸に於ては「ベートマン」を逐うて「ミカエル」を引き出し、更に「ベルトリング」と取り代へたるも、議會は依然として政爭に沒頭し、內閣は冷然として大本營と反目して居る。上下一致文武合體、以て國難に當る的の緊張氣分は殆んど見ることが出來なかつたと云ふことである。英の「ロイドジョージ」は「勝利を得ざれば斷じて劍を收むべからず」と說き、佛の「クレマンソー」は「餘事は扨て置き、先づ戰爭に勝たざるべからず」と叫べる際、獨り獨逸の政治家のみは、自國の勝利を喜ばない。少くも自國の勝利を恐れて居る。英國の宣傳大臣「ノースクリフ」は英國政治家の反獨演說を評價して「英國政治家の宣傳演說は、一回二十萬圓に價する、若し其の演說が獨逸新聞に掲載せらるれば、五十萬圓に騰貴し、獨逸政治家にして之に答辨せされば、更に百萬圓に倍騰する」と云つたそうである。以て其の對敵效果の如何に大なりしかを窺ふことが出來る。然るに「グーデンドルフ」の記錄に依れば、勝敗分岐の急期に際し、獨逸の政治家中國民の士氣を鼓勵するに足る如き演說を爲したるものは殆んど無かつたと云ふことである。

政治問題に關しては僕今之を語るの自由を有しない。唯要するに獨逸政府の無力と、獨逸國內の政爭とは、主として政治制度の缺陷と、聯邦組織の弱點とに歸因するものと言はねばならぬ。政治家は互に權勢を爭ひ、聯邦は互に他を嫉視し、加ふるに文武の軋轢あり、敗らんと欲するも敗れざるを得ずである。凡そ國運を賭して國家の大事を爲すに際しては、國民全體を基礎とし、彼等と共に責任を分つの政府にあらざれば、到底徹底的政策を强行することは出來ない。之と同時に國民は信賴せる政府に對しては、專制的權力を附與せねばならぬ。極端なる自由主義の米國が、彼の廣大なる國土と雜多なる民族とを結束して、克く短日時間に雄大なる戰備を整理し得たる所以のものは、國民が大統領に與へたる絕對專制權の力である。英國が動もすれば倦怠せんとする國民を激勵し、戰勝に向つて邁進し得たるは、「ロイド、ジョージ」の專制的少數軍事內閣の力である。佛國が萬難を排して國民的結果の下に戰爭を繼續し得たるは、「クレマンソー」の獨裁的權力の賜である。之に反し獨逸政府は政黨に氣兼し、國民に遠慮し、大本營に憚かり、カイザーに制肘せられ、逡巡遲疑、左支右吾、勝利に向つて進む能はず平和に向つて步むを得ず、因循姑息の間に遂に倒潰したのであ

る。軍人として「ヒンデンブルグ」、「ルーデンドルフ」、「マッケンゼン」を有したる獨逸は、政治家として遂に一人の「ロイドジョージ」、「クレマンソー」を有せなかつた。是れ有せざるにあらず、獨逸の政治制度が其の出現を許さなかつたのであらう。

素より國内に於ける内爭は、獨逸のみの專有物でなく、英國に於ても、佛國に於ても、戰爭中政黨の爭權、文武の軋轢等は其の類例決して乏しくない。英國「フッシャー」元帥の回顧錄の如きは、明かに其の一端を洩らせるものである。佛國が罪なき「ジョ フル」將軍を閑地に祭り込みたるが如きも、文武爭權の反影である。殊に戰局少しく不利なるや、平和論者、非戰主義者は忽ち頭を擡げ來り、佛の「カイヨー」の如き前首相の身を以て、獨探の嫌疑をさへ受くるものを生じた。併しながら勝利は總てを美化すで、是等の暗鬪明爭も祝勝の三鞭酒に流されて、今は多く永久に秘密の筐底に葬り去られた。獨逸と雖ども若し戰勝を博せば、或は斯かる失態醜狀を暴露せずに終つたかも知れぬ。唯異なる點は英佛に於ては、兄弟牆に鬩ぐも外侮を禦ぐ丈の自覺があつた。從うて敵の宣傳も反間も喰ひ込むべき隙と虚とを見出さなかつたのである。之に反し獨逸に於ては兄弟内に猜んで外侮を禦ぐを忘れ、却つて敵の宣傳を助長したのである。吾人は既に葬られたる聯合國の秘密を捜り發くの必要なからんも、白日の下に明示せられたる獨逸の失敗に對しては、自ら目を閉ぢて其の覆轍を踏むに忍びない。重ねて曰ふ、國家の大事に處するに際しては、政府は國民全體と其の責任を分たねばならぬ。既に彼等と責任を分つ以上、彼等に對して間接と直接とを問はず、政府擁立の權利を與へねばならぬ。而して之と同時に政府は國家の存立と國民の自由の爲めには、個人の自由を束縛するの力が無ければならぬと信ずる。

決言

以上は獨逸敗戰の三大原因である。軍事的の外よりの壓迫と、經濟的の内よりの破滅と、併せて内外よりする精神的攪亂とに依り、中歐の大要塞たる獨逸帝國は陷落した。開戰以來殆んど連戰連勝、敵都を拔くこと四、敵地を侵すこと十萬方哩、四年の勇戰に世界を驚殺したる獨逸國民も、遂に最後の五分間に於て自ら潰へた。戰鬪に勝ちて戰爭に敗れたるものは實に獨逸である。「マルヌ」の會戰、「ベルダン」の攻擊、潜水艇戰等仔細に成敗の跡を尋ねれば、獨逸の爲めに惜しみ、聯合國の爲めに

觀すべきものが多い。戰爭は今や人の力にあらず、大砲の力にあらず、軍艦の力にあらず、形而上下の一切を包合したる國其のものの力である。國民たるもの、劍を拔くに先ち冷靜に愼重に自國の力を計量せねばならぬ。今や我が國の問題は如何にして戰爭に勝つべきかにあらずして、如何にして戰爭を避くべきかにあると思ふ。

楚の項羽、江南に兵を擧げてより十年、大小七十餘戰悉く勝ち、楚軍向ふ處靡かざるなかつた。而かも垓下一戰時利あらず騅逝かず、拔山の英雄も空しく盖世の氣を抱ゐて遂に亡んだ。獨逸の斃るゝ恰かも項羽の死に似たるものがある。唯項羽に虞美人あり、千歳の下尙ほ人をして悲壯の涙を濺かしむるものがある。漢高に仁俠の氣あり、王者の禮を盡して敵將を葬つた。獨逸の斃るゝや、醜態暴露人をして其の自業自得たるを憫ましむるものがある。聯合國の之を遇する殘忍酷薄、恰も野獸の骨をしやぶるが如き思あらしめる。戰爭の發達か、將た戰爭の墮落か。

近代科學と無政府主義

大杉榮

六

クロポトキンはいつも此の一大傾向を說いてゐる。彼れは、彼れが再び西ヨオロッパに旅して、スヰツルのジュラ同盟にはいり、其處で無政府主義の機關『謀叛人』を創めた時の事を語つて云ふ。

『社會主義の新聞はとかく現代諸制度に對する泣言の年代記に過ぎなくなる傾向がある、鑛山や工場や田園の勞働者の壓迫されてゐる事が書かれてゐる。同盟罷工の際の勞働者の窮迫や苦痛が目に見えるやうに語られてゐる。勞働者が其の雇主と鬪爭する孤立無援の有樣がくどくどしく記されてゐる。そして、斯く毎週毎週此の孤立無援の努力が續けさまに書かれると云ふ事は、其の讀者をして甚だしく意氣銷沈させる。そこで其の新聞の記者等は、それを防ぐ爲めに、主として熱烈燃えるやう文字を使つて、それによつて其の讀者に元氣と信仰とを鼓吹しようとする。

（此間十三行を削除す）

歷史家は往々吾々に語つて、これこれの哲學が人類の思想に、從つて又其の制度に、或る變化を生ぜしめたと云ふ。しかしこれは本當の歷史ではない。偉大なる社會哲學者は、たゞ來るべき變化の兆候を捉へて、其の間の內的關係を察し、そして歸納と演繹とによつて將來を豫言したに過ぎないのだ。社會學者は又、若干の或る原則から出發して、丁度若干の定理から幾

何學上の結論を引出すやうに、其の必然の結果に推論して社會組織の設計をつくる。しかしこれも本當の社會學ではない。精確な社會的先見と云ふものは、新生活の幾千の兆候に目をとめて、其の一時的事實と有機的の本質的事實とを區分し、そして此の基礎の上に概括論を建てなければ出來るものでない。

私は明晰な分り易い享樂で、讀者をして此の思索方法に親しませ、其の最も遠慮がちなものにも猶社會が何處へ進みつゝあるかを自ら判斷させ、思想家等が誤まつた結論に達した時には讀者をして自らそれを矯正させるよう馴れさせようとした。』

斯くしてクロが一八七九年から一八八二年までの間に、『謀叛人』の爲めに書いた幾多の論文は、一八八五年卽ち其のフランスでの入獄中に、友人エリゼ、ルクリュスによつて『謀叛人の言葉』と云ふ題の下に出版された。尤も其の中の大部分は、その以前若しくはその以後は、一つ一つ小册子となつて出版されてゐる。

クロは其の小册子に就いて云ふ。『私は、實際白狀するが、自分の思想を述べるのにどれ程のペエジを使つてもいゝ人達、卽ちタレエランの有名な『私は短く書くひまがなかつた』と云ふ言譯を許される人達が、折々うらやましかつた。數ケ月の研究の結果を——たといへば法律の起原に就いての——一ペンニイの小册子に縮めて書くには、それを短くするのに非常な時間がかゝつた。しかし私達は勞働者の爲めに書くのだ。そして此の勞働者にとつては、一册の小册子にニペンス出すのでも高すぎる位なのだ。其の結果私達の一ペンニイ。半ペンニイの小册子は、數萬部も賣れて、猶各國の國語に飜譯された。』

猶當時クロは、ルクリュスの『大地理學』の編纂を助ける爲めに、『謀叛人』の發行所のジエネバからは少し離れたクラレンスに住んでゐた。『其處で私は、妻の助力の下に、私が『謀叛人』の爲めに書いた一番いゝものを書きあげた。妻はいつも私と有らゆる出來事や問題に就いて議論をし、且つ私の文章の嚴格な文學的批評をしてくれた。其の中の『靑年に訴ふ』の如きは、有らゆる國語に飜譯されて、數十萬部も撒がつた。實際私は、其後私の書いた殆んどすべてのものゝ基礎を、其處で築きあげたのであつた。』

此の小册子の中でも、殊に『法律と强權』は、其の後に出た『國家論』と『裁判論』(詳く云へば『裁判と稱する復讐制度』)と共に、非國家論の三部作として有名なものだ。

そしてクロは、此の『謀叛人の言葉』の出版された翌年、即ち一八八六年に出獄すると直ぐ、『監獄論』（詳しく云へば『ロシアとフランスの監獄にて』）を書いた。クロはロシアの舊式監獄とフランスの新式監獄とを、いづれも親しく囚人として經驗した。『監獄論』は此の經驗の結論である。

七

やがて『謀叛人』は、其の非軍國主義的傳道の爲めに發行を禁止され、『謀叛』の名の下にパリで其の發行を續ける事となつた。

クロポトキンは出獄後イギリスに行つて、二三の同志と一緒に『自由』と云ふ月刊新聞を創めた。そして同時に入獄の爲めに中止した無政府主義論の著述に取りかゝつた。

『謀叛人の言葉』は主として無政府主義の批評的方面を扱つたものであつた。で、こんどは、無政府主義其者の說明と共に、無政府主義の建設的方面を豫想し得る限り書き出す事に努めた。

其の前者は、一八九一年の『無政府主義の道德』一八九五年の『無政府主義、其の基礎と主張』、一八九六年の『無政府主義其の哲學と理想』等となつて現はれた。

そして其の後者は、始め『謀叛』に連載され、後更に詳述されて、一九〇六年の『パンの略取』となつて現はれた。

『これらの研究は、私をして今日の文明諸國の經濟的生活に就いての或る點を、更に十分に研究させた。

從來多くの社會主義者は斯う云つてゐた。今日の文明社會では、實際吾々はすべての人の物質的幸福を保證するに必要な以上に生產してゐる。たゞいけないのは分配だ。で、若し社會革命が起きれば、社會は今資本家の手にいつて了ふ剩餘價値や利潤を自分の手に收める事になるので、各人はたゞ其の工場に歸りさえすればいゝのだと

しかし私はそれと反對に斯う考へた。今日の私有財產制度の下では、生產其者が間違つた方向に進んでゐて、十分な生活の爲めに最も必要なもの丶生產を蔑しろにし又は往々妨げてゐる。其の如何なる必要品もすべての人の幸福を保證するに要する以上には生產されてゐない。よく話に出る生產過剩と云ふのは、民衆が今日其の相應な生存の爲めに必要だと見做されてゐるものすら買へない程に貧乏だ、と云ふ事を意味するに過ぎな

い。有らゆる文明國では、其の農工業のいづれの生産も、すべての人の充足を保證するよう更に大に增さなければならず、又容易に增す事が出來るのだと。

そして此の研究は、近代農業の可能性と、何人にも筋肉勞働と頭腦勞働とを同時に行はせる敎育の可能性とを考へさせるに至つた。私は此の考へを雜誌『十八世紀に連載した論文の中に詳述し、今それは『田園、製造所、工場』と云ふ題で單行本になつてゐる。』

要するに此の『田園、製造所、工場』(一八九八年)は、現代社會の農工業に於ける或る傾向を說いて、其の傾向の助長の上に無政府主義の經濟的可能性を論じたものである。

『猶もう一つの大問題が私の注意を集中させた。ダアヰンの『生存競爭』と云ふ定式が、其の多くの祖述者によつて、しかもヘクスレエの如き其の中の最も聰明な人によつてまでも、どんな結論に導かれてゐるかは、周知の事柄である。文明社會に於けるどんな醜惡事でも、白人と謂はゆる劣等人種との、又は『强者』と『弱者』との關係のどんな醜惡事でも、此の定式の中に其の口實を見出さないものはない。

既に私は、クレエルヴオ(監獄)滯在中に、動物界に於ける『生存競爭』の定式其者と其の人類社會への適用とを全部修正する必要を考へた。此の方面に就いての二三の社會主義者がやつた企てはまだ不十分だと思はれた。其時私は、ロシアの動物學者ケスレル敎授の一講演の中に、此の生存競爭の法則に就いての本當の說明を見出した。

ケプレルは云ふ。『相互扶助は相互鬪爭と等しく自然の一法則である。そして一種の進步的進化の爲めには、前者の方が後者よりも遙かに重大である。』此の數言——それは不幸にも僅かに二三の實例で證明されたゞけで、先きにも云つた動物學者シエフエルストフがそれに更に二三の例證を加へたに過ぎないものであつた——が私にとつては此の全問題の鍵となつた。

そして一八八八年に、パクレエが其の兇暴な論文『一宣言、生存競爭論』を公けにした時、私は動物界及び人類社會に於ける生存競爭に就いての其の見方に對する駁論と、數年間貯へてゐた材料とを、人の讀めるやうな形ちにまとめようと決心した。私は其の事を私の友人等に話した。しかし『弱者は禍なるかな』と云ふ喊聲の意味に『生存競爭』を解釋する事が、科學によつて啓示された自然の命令のやうになつて、それが殆んど

宗敎のやうに深く此の國に根ざしてゐた。たゞ二人だけが自然現象の此の誤認に對する私の反抗に賛成してくれた。『十九世紀』の主幹ジエムス、ノオルズ氏は其の優れた炯眼から、直ぐに問題の要點を捉へて、本當の若い元氣で私にそれを始めるよう勸めてくれた。もう一人は、ダアキンが其の自叙傳の中に彼れの曾つて會つた最も聰明な人の一人だと書いてゐる、エチ、ダブルユ、ベエツであつた。彼れは地學協會の幹事をしてゐた。それで私も彼れを知つてゐた。私が其の話しをすると彼れは喜んで云つた。『さうです、本當にしつかりとお書きなさい。それが本當のダアキニズムです。彼等がダアキンの思想から造りあげた事は考へるだけでも恥しい事です。お書きなさい。それが發表される時には。あなたが發表してもいゝやうな風に手紙を書いてあげませう。』

私にはこれ程いゝ奬勵はなかつた。で、直ぐに仕事を始めて、『動物界の相互扶助』、『蒙昧人の相互扶助』、『野蠻人の相互扶助』、『中世都市の相互扶助』、『現代の相互扶助』の題で『十九世紀』に發表した。』

此の諸論文は、一九〇二年に、『相互扶助論』の名の下に一まとめになつて出版された。

『相互扶助論』は、クロのいろんな著述の中でも恐らくは彼れが最も骨を折つた、そして其の無政府主義論の科學的根本基礎をつくつたものである。

クロは此の研究によつて、其の社會哲學の基調とする自由發意と自由合意とが、動物の相互扶助生活の中に、又人類史の民衆生活の中に、常に最も有力な進化の要素となつてゐる事を見た。無政府主義が人類史を一貫する一大傾向である事を見た。

『猶此の研究の間に、野蠻時代や中世自由都市の諸制度と親しむ爲めの研究が、更に重要な一問題、即ち國家がヨオロッパに最近に體現されて以來三世紀間歴史の上に勤めた役目の上に、私を導いた。そして又、文明諸國人の間の相互扶助的諸制度の研究は、人間の正義觀及び道德觀の進化論的基礎の研究に私を導いた。』

此の國家の研究は、先きに云つた『國家論』(詳しく云へば『國家、其の歴史的役目』)及び『裁判論』の中に、又人間の正義觀及び道德觀の研究は、やはり先きに云つた『無政府主義の道德』の中に發表された。

……………………

八

最後に僕は、クロポトキンが國際勞働者協會内の一大傾向から學んだと云ふ、其の傾向の實際的及び理論的方面に就いて、クロ自身が『一革命家の思出』の中に語るところを取次がう。

新しい社會が文明諸國に萌生えつゝある。それが舊い社會に代はらなければならない。新しい社會とは平等人の社會だ。其の平等人は自分の腕や頭を、彼等をいゝ加減に選んで雇ふ人間共に、賣らなければならぬやうな事はないだらう。すべての人の最大限の幸福を得る爲めに、有らゆる努力を協力させるよう組立てられた組織の中で、自分の知識や能力を生産に應用する事が出來るだらう。そして各人の個人的發意の爲めの廣い自由な餘地が殘されるだらう。

此の社會は、各々の聯合の要求する有らゆる目的の爲めに結合した、多くの團體に組織されるだらう。有らゆる種類の——農業上、工業上、知力上、藝術上の、——生産の爲めの同職聯合。住宅や、瓦斯や、食料や、衛生品などを供給する消費の爲めの自治町村。此の自治町村の聯合。自治町村と同職團體との聯合。及び最後に、或る一定の土地に限られてゐない經濟上、知力上、藝術上、道德上の欲望を滿足する爲めに協力する人々より成る、全國内若しくは數ケ國内に亘る大團體。そしてこれらすべての團體は、今日ヨオロッパ諸國の鐵道會社や遞信省が、或は單なる利己的目的に驅られ、或は往々仇敵同士の違つた國家に屬してゐながら、中央鐵道政府とか中央遞信政府とか云ふものなしに協力してゐるやう、又は氣象學者等やアルピン倶樂部やイギリスの水難救濟會や小學校教師や自轉車乘りなどが、科學上の目的や或は單に娛樂上の目的の爲めに有らゆる仕事を協力してゐるやう、互に自由合意の方法で直接に協力するだらう。新しい生産や發明や組織の發達は全く自由であるだらう。個人的發意は奬勵されるだらう。統一や中央集權の傾向は排斥されるだらう。

それに此の新社會は、變へる事の出來ない一定の樣式に結晶する事なく、絶えず其の光景を變へて行くだらう。生きた、進化して行く、有機體であるだらう。統治團の必要は感じられないだらう。自由合意と聯合とは、統治團が今日自分の仕事と見做してゐる一切の仕事を、代はつてする事が出來るだらう。そして各團體間の衝突の原因が著しく其の數を減じて、猶生じ得べき衝突は仲裁々判に附する事が出來るだらう。

私達の中の誰れも、私達が求めてゐる此の變化の大きさや深さを小さくは見なかつた。土地や工場や鑛山や住宅などの私有制度が工業の進歩を保證する手段として必要であり、又賃銀制度が人間を働かせる手段として必要であるとする今日の學說が所有權や生産を社會化すると云ふやうなもつと高い思想に、直ぐに讓歩する氣づかいはない、と云ふ事は私達も分つてゐた。私有財産に就いての今日の思想が變る前に、くどくどしい傳道と、長い間の引續いての闘爭と、今日支配する財産制度に對する個人的及び集合的の叛逆と、自己犧牲と、社會改造の部分的企劃と、部分的革命とを經なければならない、と云ふ事も私達は知つてゐた。又、今日吾々が皆なそれに養はれてゐる强權の必要に就いての思想は、文明人が皆な直ぐに棄てゝ了ふ事もあるまいし、又そんな事は出來もしない、と云ふ事は私達もよく分つてゐた。本當は自分等の社會的感情や習慣から出たものを其の支配者の法律から出たものと思ひ違へてゐた、と云ふ事が人間に分るまでには、長い年月の傳道や、强權に對する幾度もの叛逆的行爲や、今日歴史から引出して來るいろんな教說の全部の修正を經なければならない。私達はそんな事は皆なよく知つてゐた。が、私達は又、此の二つの方面の改造を說きつゝ、自分が人類の進歩の潮流に乘つてゐるのだ、と云ふ事も知つてゐたのであつた。

私は勞働階級の人達や又それに同情する知識階級の人達と親しく交はつて、其の人達が自分の自由を其の一身の幸福よりも重く見てゐると云ふ事を、直ぐに知つた。五十年以前には、勞働者は其の物質的幸福を與へられると云ふ約束と交換に、有らゆる種類の支配者に、專制的暴君にですらも、其の一身の自由を賣つた。しかし今はもうそんな事はない。選擧された支配者に對する盲目的信仰と云ふやうな事も、ラテン諸國の勞働者の間には、其の支配者が勞働運動の最もいゝ首領等の中から選擧される時にすらも、だんだんに消滅しつゝあつた。『吾々が何にを要求してゐるかは、先づ吾々自身が第一に知らなければなら

ない。さうすれば吾々は吾々自身でそれを最もよく成就する事が出來る。』と云ふのが、彼等の間に廣く擴がつてゐる——普通に人の思つてゐるよりも遙かに廣く——思想であつた。國際勞働者協會の規則の中の、『勞働者の解放は勞働者自らが成就しなければならない』と云ふ言葉は、一般に共鳴されて其の心の奥深くに根をはつてゐた。

一八七一年三月廿五日に選出されたパリ、コムユン政府委員程に、有らゆる進歩した政黨を明白に代表した政府は、未だ嘗つてなかつた。ブランキ派も、ジヤコビン派も、國際勞働者協會派も、皆な其處にうまく權衡して代表されてゐた。然るに勞働者自身はまだ、其の代表者等に强要する程の明白な社會改革の思想を持つてゐなかつたので、コムユン政府は此の方向には何んにもしなかつた。されば社會主義の成功其者の爲めにも、個人の自主、自持、自由發意の思想、即ち無政府主義の思想が、所有權や生産を社會化する思想と相並んで說かれざるを得なくなつた。

各個人の思想や行爲の表現を全く自由にすれば、主義の多少の誇張が生ずる、と云ふ事は私達も確實に豫想してゐた。しかし私達は又思想や行爲の腹藏のない正直な批評に支持される社會生活其者がいろんな思想を脫殼させて、避け難い誇張を免かれしめる最も有力な方法になると信じてゐた。そして經驗は其の正しい事を證據立てゝゐる。實際私達は、自由は其の一時的弊害の最も賢明な治療法だ、と云ふ古い言葉に從つて行動してゐた。

人間には、まだ其の本當の値打は世間に分つてゐないが、無理强いに維持されて來たのではない、そして其の無理强いには屈しない、社會的習慣の神髓がある。過去からの遺傳がある。人類の一切の進歩はそれに基づいてゐる。人類が肉體的にも精神的にも墮落し始めない限り、此の習慣と遺傳とはどれ程非難され又どれ程一時的の反抗に出遭つても破滅される事はないだらう。

それと同時に又、これ程の變化は一人の人の天才の臆測から生じ得るものでもなく、一人の人の發見でもあり得ず、民衆の建設的行爲から出なければならない、と云ふ事も私達は考へてゐた。丁度、中世初期に出來た訴訟法や、財産共産制度や、ギルドや、自由都市や、國際法の基礎などが、民衆によつて創り出されたやうに。

多くの先輩は、或は强權の原則に基づく、或は稍く稀れに無

政府の原則に基づく、理想の社會を築からうとした。ロバアト・オウエンとフウリエとは、ロオマ帝國やロオマ敎會に型どつたピラミツト式社會の理想に反對して、有機的に發達する自由社會の理想を發表した。プルウドンは此の事業を續けた。そしてバクニンは、其の歷史哲學に就いての廣い明晰な理解を現社會制度の批評に適用して、謂はゆる『破壞しつゝ建設した。』しかしこれは皆な要するに準備的事業に過ぎなかつた。

然るに國際勞働者協會は此の實際的社會學の諸問題を勞働者自身に訴へて解決する新方法を始めた。協會に加はつてゐる知識階級の人とは、勞働者に世界各國の事情を知らせ、勞働者の獲得した結果を分析し、そして後には勞働者が其の結論をつくるのを助けるだけの仕事をした。私達は『社會は斯うでなければならない』と云ふやうな私達の理論的見解から理想社會を畫き出さうとはしなかつた。私達はたゞ勞働者に勧告して現存社會の諸弊害の原因を探究し、其の討論會や大會で吾々が今生活してゐる社會よりももつといゝ社會組織の實際的狀況を考察するよう、促がしただけだ。國際大會で起つた問題は有らゆる勞働團體の硏究題目として選ばれた。即ち其の年ぢうに、其の問題は全ヨオロツパに、各支部の小集會で、各自の職業や其の地方の十分な知識を以て討論された。そして此の各支部の結論が各聯合の次ぎの大會に提出された。そして最後に、それが更に緻密なものとなつて、次ぎの國際大會の討議に附せられた、

私達の憧がれてゐる新社會の構造と云ふのは、斯くして理論に於ても實際に於ても、上からではなく下から造り出されたのだ。

私自身は、斯うした都合のいゝ事情の下に置かれてあつたので、此の無政府主義が自由社會の單なる概念や單なる行動方法よりもより以上のものを含んでゐる、と云ふ事をだんだん分るようになつた。無政府主義は、人類社會に就いての諸科學に用ひられて來た形而上的若しくは辯證法的方法とは全く違つた方法で進まなければならない、自然哲學及び社會哲學の一部分である。即ちそれは諸自然科學と同じ方法で取扱はれなければならない。しかしそれは、ハアバアト・スペンサアがやつた單なる類推法の飄簞鯰のやうな基礎の上にではなく、歸納法を人類社會の諸制度の上に適用した、健實な基礎の上にでなければならない。そして私は此の方面に私の出來るだけの最善を盡した。

革命的サンヂカリズムの研究に就て

文學博士　米田庄太郎

拙著『革命的サンヂカリズムの研究』前篇『革命的サンヂカリズムの起源及び發達』に就て、幾多の雜誌に於て、我國の社會問題研究者が御高評を賜はつた様ですが私は先づ拜見したのは『著作評論』創刊號に於ける佐野氏の御高評でした。其の中の二三の點に就ては、御答へ申す方がよからうかとも思ひましたが、私は是れまで嘗て拙著の批評に答へをしたことはないし、又佐野氏の云はるゝことは後篇が出れば判ることだから、別に答をする必要もあるまいと考へて打ち捨てゝ置きました。然るに此頃『勞働運動』第五號の御惠贈を受けて閲讀して行くと、其の中に大杉氏の御高評のあるのに目が着きました。そうして一讀して見ると、同氏は別に拙著其の物を批評されるのが目的ではなくして、外に目的がある様です。私は甚だ嫌な氣持が致しました。勿論打ち捨てゝ置くつもりでしたが、併し其の中に只一點だけは打ち捨てゝ置き難いとも感じました。夫れは拙著はレヴイン氏の著作の燒き直しであると云ふ非難です。それで其の點だけに付て簡單に辨明した書面を同氏に送り、『勞働運動』に御掲載を願ふて置きましたが、尚ほ其點に付ては、佐野氏の批評中にも拙著は其の方法をレヴイン氏の著作に仰いだものと云はれて居つたことを憶ひ起しました。それで更に其の點に付ても辨明する爲めに、玆に本雜誌の一部分をかりて此の一文を公にすることに致します。

元來私は『輓近社會思想の研究』中卷に於ては、緒言中にも述べて居る如く、革命的サンヂカリズムの思想の發達とベルグソンの哲學との關係を究明することを主意と致して居るのであります。それで革命的サンヂカリズムの歴史的起原及び發達に就ては、さきに京都法學會雜誌明治四十五年六月及び七月號に於て發表せる論文、『革命的サンヂカリズムと現代生活』中の第二節、『革命的サンヂカリズムの歴史的起源及び發達』を拙著の

第一章として收めるぐらいに止めて置くつもりでありました。但し此の論文はレヴイン氏の著作に先だちて私の發表したものですが、尙ほ夫れは雜誌に發表する五六月前に社會學會で講演したものであります。又此の論文は大に大杉氏の御賞揚に預る光榮を有し、同氏の論文及び著作中に盛んに引用されたものだ相です。但し私は只同氏が早稻田文學に於て發表されました論文中に盛んに引用されて居るのを見ただけです。

然るに右論文の第二節はあまりに簡單であり、且つ千九百九年頃までの事しか書いて居りませぬ。それで私は其の以後の分を書き足す必要を感じました。殊に私は同年以後の革命的サンヂカリズムの形勢を明らかにすることは、其の眞相を理解する爲めに甚だ必要であると考へましたから、之を書き足すことに決心しますと同時に、更に同年以前の分をもつと詳しく書くことが必要であると考へて來ました。そこで改めて『革命的サンヂカリズムの歷史的起源及び發達』を書き直し、之を一冊の書物として出版することに致しました。但し大體は右の論文に書いたこととは變らないのであります。此の點は拙著の構造はレヴイン氏の著作に倣つたものだとか、又之を燒き直したものだと批評せらるゝ人々が、特に御注意あらんことを願ひます。

併し今革命的サンヂカリズムの起源及び發達を、一冊の書物として書くには、之を章節に分つ必要がある。全體革命的サンヂカリズムの起源及び發達は『勞働總同盟會』の成立及び發達に結び付けて研究しなければならないのであります。然るに該同盟會は千八百九十五年に成立したものです。隨つて同年に於ける該同盟會の成立から書き始めるのが順序であります。併し此の同盟會は突然同年に成立したものでなく、夫れ以前の勞働運動の發達の結果として生れたものであります。それで夫れ以前に遡つて研究せねばなりませぬ。然らば何處まで遡る可きかと云ふに、少くも千八百八十四年三月二十一日の法律まで遡らねばなりませぬ。現にアムペールの書は夫れから書き始めて居ります。併し外國人にはそれだけでは尙ほ不充分です。又佛國に於ても革命的サンヂカリズムの起源を研究して居る論文や著書は更に千七百九十一年のル、シャプリエ法律まで遡つて居ります。私のもとの論文も矢張りル、シャプリエ法律から書き始めて居るのであります。（此の事は其の論文を盛んに引用された大杉氏が知らない筈がないと思ひます。）それで私はル、シャプリエ法から始めて千八百六十四年五月二日の法律發布までを第一章とし、次に夫れより千八百八十四年三月二十二日の法律

發布までを第二章とし、次に社會主義及び無政府主義の分裂を第三章とし、次に千八百八十四年三月二十二日の法律發布より千八百九十五年の『勞働總同盟會』の設立までを第四章とし、更に『勞働取引所の起源及び發達並に勞働取引所聯合會の成立』を第五章として書き上げたのです。併し拙著を六百頁以内に止める必要上右の五章を一章につゞめ、而して第一章を第一節、第二章を第二節、第三章は之を省きて、其の極大要を第三節とせる第四章の始めに述べ、而して第五章を第四節としたのであります。是れはメルメー、フランク、ゼヴアエス其他の佛國の學者の著作を參考して立てたものであります。レヴィン氏は千七百八十九年から千八百七十一年までを第一章とし、千八百七十一年から千八百九十五年までを第二章とし、勞働取引所聯合會（千八百九十二年より千九百二年）を第三章として居りますが、此の千八百九十五年に勞働總同盟會の成立するまでの勞働運動の發達を、千八百七十一年を中心として二期或は二章に分つことは、稍々レヴィン氏の創意と見做し得らるゝものでありますが、私は之を採用せず、上に述べし佛國の學者の書き方を參考して、新たに三期或は三章に分つことにしたので、レヴィン氏の二期に分つことが創意であるならば、私の三期に分つことも同等に私の創意と云ひ得られるかと思ひます。但し私の三期に分つたのは、我國に於ける勞働運動の發達を考察する上にも便宜であると云ふ意味も含まれて居るのであります。併しレヴィン氏の二期の區別も、私の三期の區別も、何れも佛國の學者の書いて居ることを簡單につゞめる便宜上の區別で、大したことではありません。

抑も拙著第一章の構造は、右の如くにして出來上りましたが、次に其の內容に付て述べます。先づ第一節は始めは拙著參考書目中に舉げて居ります佛國勞働運動史の幾多の大著作によりて書きましたので隨分長いものになつて居ますが、之を殆んど四分の一程に短縮するに當つて、私は主としてゼヴアエス、メルメー及びレヴィン等の諸氏の書き方に倣ひました。一番多くゼヴアエス氏の書き方に倣ひました。現に大杉氏が拙著のル、シヤプリエ法に關する記事を以て、レヴィン氏の著作の『飜譯である。原文と對照して見れば直ぐ明白に分る事であるが、殆んど原文其の儘の隨分まづい飜譯である』と評されて居りますが、夫れは決してレヴィン氏の著書を飜譯したのでも亦之を換き直したのでもなく、ゼヴアエス氏の著書に倣ふて私のもとの原稿をつゞめたものであります。それは『ゼヴアエス氏

の著書と照らして見れば、直ぐ明白に分る事であります。」現に私の書き方とレヴイン氏の書き方とが異なつて居ることはレヴイン氏の著書に照らして見れば、直く明白に分るのでありませんか。其の異なれる處を私の翻譯のまづい罪に歸せられるのは、隨分ひどい批評の仕方と思ひます。但し私が玆に書き方の差異と云ふて居るのは、拙著レヴイン氏の著書に於て、ル、シヤブリエ法に付て書いて居ることぐらいは佛國の學者の何れの著作にもあるので、何もレヴイン氏が始めて書いことでないのみならず、同氏も矢張り佛國の學者の著作によりて書いたのであらうと思ひます。同氏が其の著書の第一章中に書い居ることは、同氏の參考書目中にある佛國の學者の著作の何れにかあるのです。其等の書物を讀んだ私は、同氏の著書より一も新しき知識は得なかつたのです。尚ほ第一節中私が直接レヴイン氏の書き方に倣ふて書いた處もありますが、又其のもとが同じ爲めに似た處もあります。まづい翻譯だと批評される前に御注意を願ひます。

第二節は私のもとの原稿を三分の一程につゞめたのでありますが、其の際レヴイン氏の書き方に倣ふた處もありますが殊にウエールル氏、メルメー氏、ゼヴアエス氏、アムペーア氏等の書き方に倣ふた處が多いのです。尚ほレヴイン氏はウエールル氏の著書より多くとつて居る樣でありますが、私も其の著書より大分とりましたから、其の點で書き方の似た處も出來て居ります。此の節に書いた事をあまりに詳しくはないが、併し相當に詳しく學ぶには、私はウエール氏の著書が一番よいと思ひますから、玆に同氏の著書を讀者に勸めて置きます。

第三節は隨分つゞめたのです。それでも第一章中最とも長い節になつて居ますが、始めの八頁程につゞめた無政府主義者と社會主義者との分離や社會主義者の分裂の事は、私は大に興味を以て隨分長く書き上げたのです。殊に此の問題に付ては私はレヴイン氏の參考書目に見へない左の讀書を閱讀しましたから、餘程詳しき知識が得られたのです。

Zevaès, Les Guesdistes.
Charnay, Les Allemanistes.
Da Costa, Les Blanquistes.
Humbert, Les Possibilistes.
Orry, Les Socialistes Iudependents.
Breton, L'Unité Socialiste.
Ibels, Les Communistes Anarchistes.

併し之をつゞめるに當てウエール氏の著書によりましたが倘ほ一層つゞめる必要を認めて、遂にレヴイン氏の書き方に倣ひました。レヴイン氏もウエール氏の著作に付て之をつゞめたものと思はれます。佐野氏の批評を見ると私が此の部分を詳しく書かなかつたのが、非難されて居ります。若し拙著がもし百頁も增すことが出來たならば、私は切角の苦心を捨てゝ、レヴイン氏の書き方に倣ふて、僅か八頁餘につゞめる必要もなかつたのですが、已を得なかつたのです。此の節の殘り五十頁程はゼヴエス、ラガーデル、フランク、セイヤク、レヴイン、アムベール、ルルア等の諸氏の著書によりて簡單に書いたのです。

第四節はレヴイン氏の著書を參考し、又其の書き方に倣ふた處もありますが、主要なる材料はペルチエー、フランク、ルルア等の諸氏からとりました。云ふまでもなく此等三氏の著書は、今日の處では勞働取引所の起源、發達、組織、等を論述せる最とも詳しきものであります。レヴイン氏はルルア氏の著書は參考して居ない樣で、他の二氏の著書より主として材料をとつた樣であります。

次に第二章に就て述べますが、今レヴイン氏は『勞働總同盟會』の發達を千八百九十五年より千九百二年までと、千九百二年より其後との二期に分つて居りますが、是れは既にラガーデル氏の立てた區別で、又フランク氏も之れに從ふて居ります。レヴイン氏も私も其等の人々の立てた區別に從ふただけです。私がレヴイン氏に倣ふたのではない、私もレヴイン氏も共に佛國の學者の立てた區別に從ふたのです。そうして其の時期の區別は誰れが見ても自然なのです。是れ該同盟會は千八百九十五年に設立されましたが、併し千九百二年に勞働取引所聯合會が之れに加入するまで、或は之れと合同するまでは微々として振はず、千九百二年から始めて盛んに活動して來たからです。隨ふて兩者の合同は革命的サンヂカリズムの發達上甚だ重要なる意味を有つて居るのですが、どうしたかレヴイン氏はあまり之を論じて居りません。私は其の重要を認めて特に第二章第一節を之れに當てたのです。其の內容はフランク氏及びルルア氏の著作からとりました。是れ私の調らべた處では此の二氏の著作は、此の問題を最とも詳しく論じて居るからです。倘ほ私が兩者の合同問題に殊に興味を感じたのは、是れ我國に於ても今後の幾多の勞働組合聯合會や同盟會が發達するに於ては當然起る問題であらうと思ふからです。

第二章第二節の問題は始めて之を組織的に論じて居るのはラ

ガーデル氏の著作であります。夫れで私は主として同氏の著作により、色々な他の著作を參考して書きました。勿論レヴイン氏の著作も參考しました。併し大體はラガーデル氏の著作に依つたものです。レヴイン氏も多分そうであらうと思ひます。

第二章第三節の問題も矢張り之を始めて組織的に論述したのはラガーデル氏であります。それで私は矢張り同氏の方法に從がひ、そうして色々の著作を參考して、本節を書き上げました。勿論レヴイン氏の著作も參考しました。又其の書き方に倣ふた處もあります。

第三章(「勞働總同盟會」に於ける社會思想の二潮流――革命的サンヂカリズムと改良主義サンヂカリズム)に付ては、革命的サンヂカリズムの思想の詳しき理論は後篇に於て論究するつもりですから、玆では只其の一般を簡單に述ぶるに止めたのでありますが、其の書き方は私の前論文と同じくミヤレイ氏の書き方に從ひ、そうして色々の著作を參考して書き上げたのです。

改良主義サンジカリズムの思想に付ては、幾多の著作中に其の簡單なる敍述が見出されますが、併し之を特に研究題目として詳細に論述したるものは、カルカナグ氏の著作だけです、それで私は主として同書により、又其他の諸書を參考して書き上げました。尙ほ後篇には別に改良主義サンヂカリズムには論じ及ぼさないつもりですから、此處で可成り詳しく說述して置きました。

第四章の問題も之を始めて組織的に論述したのは矢張りラガーデル氏です。それで私は矢張り主として同氏の著作を土臺とし、其他の著作を參考して書き上げました。但し同氏の著作は千九百六年のアミアン大會を以つて了つて居ります。それで同大會より千九百九年までの事（本章第二節）は色々の材料から書いたのです。

第五章及び第六章の問題に付てはレヴイン氏は云ふまでもなく、佛國の學者も誰れもまとまつて書いて居りません。佛國でも特に勞働總同盟會の起源及び發達を論究せる書物は千九百十二年頃までに出版されて居りまして、其後の形勢を組織的に書いたものは一も見當りません。又千九百二年より千九百九年か十年頃までを一期とし、夫れより今日に至るまでを又一期として區別したのは私が始めであります。そうして此二章を書く爲めに私は最とも多くの時間を費やしましたので、先づ參考書目中にあげて居ります雜誌や年報を採りましたが、只斷片的な材

料しか得られませんでした。それで遂にルタン紙及フィガロ紙の如き京都帝國大學にとつて居る佛國の日刊新聞や又ジュルナル、デ、デバの如き週刊雜誌の十箇年分程を一枚一枚調らべて材料を集めました。夫れは非常な苦勞でした。そうして集めた材料を整理して、拙著百三十頁程につゞめて書き上げたのです。それで日本に居ながら研究したものとしては、終りの二章だけでも相當に認めて頂いてもよいかと思ひます。とにかく佛國の學者の公にせる著作の何れにもない最近十箇年程の部分を私の微力で補なふたのであります。

私の革命的サンヂカリズムの研究前篇は以上述べし如くにして出來上りましたのです。然るに單にレヴイン氏の著作の燒き直しに過ぎないものの如く、又は只レヴイン氏の著作に基づいて書いたものの如く、批評されるのは私にとりては甚だ面白くないのです。

レヴイン氏の著作は革命的サンヂカリズムの起源及び發達を簡單に學ぶには實に良い本であります。又英語だけで之を學ぶには此の本の外に適當なものはないと云ふてもよいかも知れませぬ。併し同氏の著作は主として佛國の學者の研究を組織的に說述して、英米人にまとまつた知識を與へるのを主眼としたものと思ひます。同氏の著作中に書いて居ることで、佛國の學者の著作の何れかに出て居ないものは一もないと云ふてもよいかと思ひます。私は同氏の著作からして、何等新しき知識を得ませんでした。併し私は同氏の書き方に大に注意しました。それは同氏が佛國の學者の研究の結果を組織的に論述して佛國人外即ち英米人にまとまつた知識を與へようとすると同じく、私も矢張り佛國の學者の研究の結果を組織的に論述して佛國人外即ち日本人にまとまつた知識を與へることを目的としたからです。全體一國の社會運動に付て其の國の學者が書くと、外國の學者が自國の人々に之を知らせる爲めに書くのとは、自から書き方が違ふ可き筈です。そうして其の點から考へて私はレヴイン氏の書き方に大に注意したのです。又之れに倣ふた處は少なくないのです。佛國の學者の書き方に其の儘に倣ふと、外國人には十分會得し難い處が澤山出來て來るのです。是れは外國の事を書くに就て吾々の大に注意す可き點であると思ひます。尙ほ私がラガーデル氏の論文の書き方に倣ふた處の多いのも同一の理由によりますので、其の論文は獨逸人に革命的サンヂカリズムの組織的知識を與へる爲めに獨逸語で書いたものです。

是から少しく特に佐野氏の御高評に對して申し上げます。同

氏が私の研究全體に付て仰せられた事に付て色々申上げたいことがありますが、夫れは直接御目にかゝる機會を得た場合に個人的に申し上げた方がよからうと思ひますから、此處では只特に『革命的サンヂカリズムの研究』前篇に付て同氏の批評して下さつた事だけに付て申上げます。

佐野氏は『米田氏は大體の構想と記述の順序とをレヴイン氏の著作に仰いだことと思ふが、此の種の英米式の記述方法を其の儘踏襲せられたことは大なる遺憾である』云々と云はれて居ります。之を一讀じまして私の不思議に思ふたのは英米式の記述方法と云ふとです。佐野氏はレヴイン氏以外の英米の學者も革命的サンヂカリズムに付て論ずる場合には同氏と同樣な方法を用ゐて居つて、特に英米式と云ふ樣なものであると云はれるのでしようか。若しそうすればレヴイン氏以外に同氏と同樣な方法で論述した英語の書物が澤山なければならぬことになりますが、そんな書物がありませうか。私の見る處ではさきに述べました如くレヴイン氏は佛國の學者が一般に用ひて居る方法を大體上其の儘に用ひて居るのです。只詳細の點に於て多少異なれる處があるぐらひです。夫れは決して英米式と云ふ可きものでなく、若し强ひて云ふならば佛蘭西式とでも云ふ可きものです。そうして私も矢張り佛國の學者の一般に用ひて居る方法に從がひ、我國の事情を考へて多少修正を加へただけです。レヴイン氏の構想と記述の順序と私のとが大體上似て居るのは、夫れは同氏も私も共に大體上型としたのは佛國の學者が一般に用ひて居る方法であるが爲めなのです。佐野氏は社會學的に革命的サンジカリズムの起源及び發達を論述する方法を私に御敎へ下さつたのは實に感謝致します。併し同氏の望まるゝ樣な知識は拙著を熟讀されても得られないのでしようか。私は本篇は歷史的叙述を主として居りますが、夫れは後篇に於て余の社會學的考察を組織的に論述するつもりであるからです。併し決して事實の羅列に止めて居るのでありません。そうして私の豫期以上にまで不知不識の中に理論的批判がまぜつて居るのを後に發見して、其の點で非難を受けるのを恐れて居りましたが、却て理論的考察が足らぬと云ふ非難を受けて甚だ案外でした。尙ほ佐野氏は拙著は佛國の勞働運動史を書いたものゝ如く考へられて居る樣ですが、併し私は決してそんなつもりではないのです。ルヴアサー氏やジョーレス氏の大著作を見慣れて居る私には、四六判六百頁以内の書物で、佛國勞働運動史を書かうなぞとは夢にも思ひませんでした。私が佛國大革命以後千八百九十

五年頃までの佛國勞働運動の發達に付て説述して居るのは、夫れは只革命的サンヂカリズムの起源を理解する爲めに、否なフエルシユテーヘンする爲めに必要缺く可からざる部分だけです。佐野氏が其のつもりで御閲讀して下さつたなら、同氏の仰せられる樣な不平はない筈だと思ひます。隨手に玆に拙者の書き方に付て少しく申上げて置きます。

私は多年間歐米諸國にワンデールヤーレを送つた結果として、今日の歐米諸國民が共同の現代文明の下に生活し、共同の根本的思想感情慾望等を有しながら、而も各々特有の氣分或は情調或は香ひ或は色彩とか云ふ樣なものを有つて居ることを直接に感得したのです。そうして夫れが各國民の國語に於て比較的によく現はれて居ると思ふのです。是れ私が多くの歐洲語を學ばんと努力する一の理由であります。例へば露西亞語により露西亞人に接して露西亞氣分を味はずしては、露西亞の何物をも會(フエルシユテーヘン)得することが出來ません。(假令之を理解することが出來ても。)私は歐米諸國の社會思想や社會運動に就ても同樣な考へを抱いて居ります。一定の思想一定の運動を概念的に言葉で云ひ表はせば、何處の國に於ても夫れは同一である樣に思はれます。併し其の思想、其の運動が各國民に於て實際に生きて活動して居る具體的な箇別的な實相に付て之を考察すると、其處には到底概念的に明白に云ひ表はすことの出來ない或物があります。そうして其の或物が卽ち其の國民の生命であります。私は佛國の革命的サンヂカリズムなるものは、そう云ふ意味で佛國特有のものであつて、他國に其の儘移し得られるものでないと思ひます。併し夫れは佛國の革命的サンヂカリズム中に含まるゝ特定の概念が他國に移り得ない、世界的になり得ないと云ふのではありません。そう云ふ意味では私は確かに佛國の革命的サンヂカリズムには世界的な或概念の含まれて居ることを認めるのです。其の事は後篇に於て論ずるつもりです。併し若し其の概念が他國に移るときには、始めは佛國的氣分を帶びて居つても、其の國民の精神に深く入り込んでくると、自から其の國民の氣分を帶びてくる。又そうなるまでは其の概念は決して深く其の國民を動かす力を得ることが出來ないと思ふのです。そうして私は前篇に於ては先づ佛國特有の生きた具體的箇別的な有機體として、或は社會的力として革命的サンヂカリズムが周圍の勞働者階級の一定の部分に於ける特有の氣分にむされ、同國特有の事情によりて生れ又生育する其のありのまゝの姿を寫し出したいと思ふたのです。概念的に明白に云ひ表は

すことの出來ない佛國勞働者階級の一定の部分の特有の氣分が自から生み出す又發達させる生きた具體的な社會思想、社會運動として、革命的サンヂカリズムを讀者の頭に浮べたいと思ふたのです。それからして又近來同國に於ける事情の變遷するにつれて其の一定の氣分が勞働者階級の一部分に於て益々濃厚となると同時に其の全體に於ては稀薄になりて革命的サンヂカリズムが弱はり行く姿を寫し出したいと思ふたのです。私は佛國の革命的サンヂカリズムは單に一定の概念の團塊ではなくして、生きた力と見て居るのです。そうして其の生きた力を生きた力として讀者の頭に浮ぶ様に書いて見たいと思ふたのです。併し文才のない私がそんな大それた試みをしたのは間違ひであることを覺りましたが、とにかくそう云ふつもりで書いたのですから、佐野氏が御暇なときにはも一度讀み返して單に概念的にベクライフエンしやうとするだけに止めず、フエルシユテーヘンすることを試みて下されば幸ひです。

尚ほ概念的には同じ採る思想を奉じながら、米國特有の社會的事情から生れる氣分によりて、實際上生きた力としての社會思想が、どんなに變はるかを示す爲めに、別冊として『米國I、W、W、の研究』を公にしましたから、合せて御一讀を望みます。

以上述べし事を御會得下さるれば、佐野氏が私が今日革命的サンヂカリズムは弱はつて居ると云ふたことに付て下された批評に付ては、私は改めて辯明する必要はないと思ひます。尚ほ佐野氏はセーヌ勞働組合會や鐵道從事員組合の晩近の運動などを擧げて、革命的サンヂカリズムの弱はつて居ない證據を示さんとされて居る様ですが、併し同氏はセーヌ聯合會や鐵道從業員組合の性質をよく御存知の上での事でありましようか、若し之をよく御存知であり、又私が第五及び六章中に書いて居ること殊にペリカやモナットの運動に付て書い居ることを御覧になれば、そんなことは云はれない筈だと思ひます。尚ほ私は勞働總同盟會中の今日の過激派の思想及び氣分は、ボルシエヴイズムの影響によりて大に變動し、もとの革命的サンヂカリズムを固持して居るとは云はれないかと思ふて居ります。併しボルシエヴイズムもI、W、W、もギルト、社會主義も革命的サンヂカリズムも一所くたにして考へる人々はそんな點に注目しないかも知れません。

勝手に佐野氏が『晩近社會思想の研究』上卷中に收めた『新カント派と社會主義』は、『我國に於て修正派社會主義を初めて

系統的に論じた文献』であるが、『フォルレンダー社會主義に於ける新カント派運動とどうやら親密な關係がある』と云はれたことに付て、御答へ申して置きますが、同論文は決して修正派社會主義を系統的に論じたものでありませんので、只新カント派と社會主義者との交渉が如何にして發生し發達したかを簡單に吾國の識者に示さんとしただけのものです。又フォルレンダーの著作との關係に付ては、同書はさきに二三度注文しましたが、どう云ふものか終に到着しなかつたのです。併し同書は『カント研究』や『社會學及び社會政策學寶庫』に出た同氏の論文を集めたものであると云ふことです。そうして私は其等の雜誌で右の論文を見て、夫れを材料にして私の論文を書いたので、私の論文の半分はフォルレンダー氏の論文に依つたものです。併し私は同氏と多少見る處を異にして居りますから、同氏の論文に依りながら私の書いたものは少しく違ふて居ります。殊に同氏は露國のスツルーヴエやツーガン、バラノウスキーなその説を重要視して居りますから、同論文の半分程は私が特に兩氏の著作によつて新たに書いたのです。尚ほ新カント哲學と社會主義との交渉に付ては今日でも、まだフォルレンダー氏ほど詳しく研究した人はないので、其の問題に付ては獨逸の學者でも同氏の研究に依賴して居るのであります。かのハムマーとヤーのマールス主義に關する大著作に於ても、同問題に付てはフォルレンダー氏の研究を其の儘に紹介して居ります。併し私が同論文の半分程はフォルレンダー氏の論文を材料としたものであることを書いて置かなかつたのは、實に私の失念でしたから、茲に改めて記して置きます。

尚ほ佐野氏は私が嘗て經濟論叢に連載した『露國に於ける資本主義の發達』はヘッカー君の『露國社會學』と大變類似して居るので、不快な幻滅を味はれたと云はれて居りますが、是れは實に御氣の毒です。併し始めに主として（Masaryk, Zur russischen Geschichts- und Religionsphilosophie, 1913. 2 Bd. 及び Hecker, Russian Sociology, 1915 になることを書いて置いたのですから、夫れを御注意下されば宜かつたと思ひます。私は同じ頃に『哲學研究』に『ミハイロウスキーの社會學的思想の創始性に就て』を公にし其の始めに京都大學の圖書館や研究室に於て露國の社會思想や社會學に關する書物は、社會學研究室にミハイロウスキー全集中の二冊とカリエフの『社會學序論』及び『歷史哲學論』と四冊あるだけであること、並に英獨佛語で書いたものは相當にあることを述べ、且つ特にミハマロウスキーに關するものの目錄をあげて置きました。夫れで經濟論叢には其事に就ては重ねて述べなかつたのである。經濟論叢の論文の前半は主としてマーザリク氏の右の著作により、又後半主觀主義の部のラヴロフの思想はヘッカー氏の著作及び

獨佛書四、五冊を材料として書いたもので、ミハイロヴスキーの思想は『哲學研究』に讓つて極簡單に論じただけです。次に客觀主義の部の『露國に於けるマールクス主義の輸入並に傳播の歴史一般』は、色々の書物を見ましたが、主として Mavor, Economic History of Russia の第二卷及びマーザーリク氏の著作によりて書いたものです。それからプレハノフの思想はヘッカー氏の著作と、プレハノヴが獨逸語で書いた著作とによりて書いたのです。それから新マールス派のスツルーヴエ及びツーガンバラノウスキーの思想はヘッカー氏の著作は勿論參考しましたが、其の內容は主としてスツルーヴエが獨逸語で書いた論文及びツーガン、バラノウスキーの著作で獨逸語及び英語で出版されて居るものに依つて書いたものであります。

尙ほレヴイン氏の事に付て少し述べて置きたいと思ひますが、私は同氏とまだ一面識もなし、又文通したこともありませんが、併し私がコロムビア大學院を去つてから六七年後に同大學院へ入學された人の樣です。それで日本流に云ふと私の後輩に當る人であります。又當時私の友人中に醫學士で生物學上より社會學に興味を有する露國の猶太人レヴイン氏がありましたが、同氏と關係のある人の樣です。それや是れやで私はレヴイン氏の著作には特別な親しみを感じて居ります。尙ほ同氏は私の友人であつたレヴイン氏と同じく米國へくる前に獨佛等に佛國で勉强した人の樣でして、私は同氏の著作を讀むと英語で書いてあつてもあまり英米の香ひがしませんで、寧ろ佛語或は佛國で敎育を受けた露西亞人の香が强い樣に感ずるのです。夫れは私の錯覺であるかも知れません。とにかく右の次第で私はレヴイン氏の著作には特別な親しみを感じて居るので、同氏の『露西亞革命』も私が最とも興味を有つて讀んだ書物の一です。されば大杉氏が同氏の著作を天下無類のものの如く書き立てゝ居らるゝのを見て心潜かに喜んで居るのです。

終りに私の晩近社會思想の研究に付て一言致して置きますが、私は中卷前篇及び別冊を公にするに當て受けた經驗によりて、今日の我國の事情に於て後篇を公にすることは到底不可能であると感じましたから、夫れは當分公にしないことに致しました又下卷として公にせんとした國民的ギルド制度の研究も同樣に當分は公にしません。そうして下卷として『社會連帶思想の發達』二冊を公にして一先づ『晩近社會思想の研究』を完結することに致します。但し上卷別冊として『カントの歷史哲學と晩近の歷史哲學』を近々に公に致します。そうして其の後は主として私の社會學上の著作『現代社會の研究』『集團心理の研究』、『社會制度の研究』及び『社會學體系』等の原稿を整理して、續々公にすることに致します。（大正九年五月二十五日記之）。

普選遂行、言論壓迫、民衆反抗
臨時議會と當面の諸問題

法學博士　堀江歸一

年度の豫算は公債の募集が好都合に行はれなければ實行されないこと〻爲る。數月前までのやうに經濟社會が裏面は兎に角、表面に於て順調に運んで居り、商工業社會は好景氣で、到る所に遊金が流動して居つた場合には、募債計畫を包含する豫算案も實行の可能性を有するものとして、承認されたかも知れないが、今日では經濟社會の局面は著しく變つて居る。現下の經濟社會に於て病根とも云ふ可きものは、金融の梗塞であるが、此事は必ずしも我國銀行業者の臆病であるが爲めのみに基いたものではない。銀行が從來の如く僅小な支拂準備金を基礎として過度に信用を膨脹させたのは、明白の事實であるが、既に經濟社會に反動的趨勢の端緒を發した以上は、銀行が自衛の必要か

公債募集計畫

臨時議會に提出される政府案は追加豫算案を始めとして、所得税法並に酒造税法の改正案が其重なるものであつて、勞働組合法案も次第に依ては提出されるかも知れない、又在野黨からは普選案なり、警察法第十七條を撤廢する法律案が提出されるであらう。是等諸案の議會に於ける運命は何と爲るであらうか、又其運命の如何に依て、國民は如何なる影響を蒙るであらうか、是れは吾人が充分に論究しなければならぬ問題である。

政府が前期の議會に提出した豫算案に示したと同様の財政方針を取るものであるとしたならば、臨時議會に提出される豫算案にも亦巨額の公債募集が計上され可き次第であつて、詰り今

ら云つても、又信用機關としての社會的責任を果す必要から考へても、金利歩合を引上げて、貸出割引を制限するのが當然である。或は此狀態が金融の緊縮に止まらずして、金融の梗塞と爲つたのは、放漫なる金融政策に對する反動の然らしめる所と見なければならぬ。斯くて銀行が昨今の如き警戒的方針を以て、市場に臨んだ結果として、手元の金銀在高増加を來したと云ふ說もあるが、私は之を以て近き將來に金融上の面目を維持するに至るものとは考へない。何故かと云へば、今度の經濟的反動は内外二樣の原因から惹起されたものであつて、此内の對外的原因である米國經濟社會の反動、之に伴う我國貿易の逆勢、正貨の減却は今後益々其勢を逞うす可き次第である。然らば日本銀行の如きも正貨減却の大勢に支配されて、金融を引締めるであらう、市中諸銀行も亦之に伴つて、大勢の赴く所に從はなければならぬからである。

斯る場合に政府が金融緩漫の時代に可能であつた公債募集を依然として財政上の一計畫とするのは、甚だ無責任の次第であつて、公債募集は結局預金部の資金を流用するか、日本銀行に引受けさせるか、孰れかの方法に依らねばならず、斯くすることの爲めに、財政を通じて、金融市場を壓迫し、經濟社會の救濟を標榜しつゝある政府をして却て經濟社會を困憊させる手助けをする結果を生ずることゝ爲るのである。今私の机上に在る某株式商店の營業日報に據ると、五分利付公債の時價は八十三、四圓、四分利付公債の時價は七十八、九圓であつて、何れも六分内外の利廻に當つて居る。昨今の金融狀態や金利歩合の高低から考へれば、此位の市價は相當の處であらうが、今後政府が新に公債を發行する場合には、必ず此利廻りを標準としなければならず、斯る高い利廻りで公債の發行を續行することは、即ち求めて金融市場の波瀾を大ならしめる所以に外ならぬ。前期の議會に於ても、貴族院は政府に公債募集の成算があるかどうかと云ふに就て、深刻な質問を試み、大藏大臣は之に對して曖昧な答辯を爲し、世人をして豫算案實行の成否に疑を懷かしめることゝ爲つた次第は今日尙ほ吾々の記憶に存する所である。今春の經濟狀態の下では、貴族院の方では近き將來に反動の起ることを豫想して立論したのであるし、財政當局者の方では、樂觀論一天張りで之に對しても、答辯の形は備はり、水掛け論位の處で、始末を告げたのであるが、今日の如く既に反動が經濟社會に襲來し、金利も上れば、金融も梗塞する、流動資金は何處にか隱れて仕舞ひ、民間では公債の應募どころか

寧ろ政府に公債の償還を要求して、金融の疏通を付けて貰うと云ふ場合に、尙ほ依然たる公債募集計畫を包含する豫算案を提出し、是れで所謂政友會の四大政綱を實行しやうとするのは、一方に豫算の實行を不可能ならしめると共に、他の一方に於ては求めて金融市場なり公債市場なりを壓迫しやうとするものである。政府としては時勢の變化を見ることが、大切である。

所得稅改正案

豫算案に關聯して、重大な問題と爲るのは、所得稅法の改正案であらう。原內閣が前期議會に提出した所得稅改正案は甚だしく杜撰のものであつた。之に對して政友會や新政會に籍を置く實業家議員共が勝手な修正を加へ、所謂型式のものが兎に角衆議院を通過することゝ爲つたのである。夫れで今度政府が臨時議會に提出する改正案は即ち今春衆議院を通過した例の型式改正案と同樣のものと思はれるが、私は民衆の見地から觀察して、此案には大なる修正を加へなければならぬと思ふ。第一に政府案では所得稅の免稅點を現行の五百圓から六百圓に引上げたやうであるが、是れが民衆の現に苦しんで居る生活難を緩和する幾分の効果があるであらうか。今日の生活難は專ら俸給衣食者の階級を襲つて居る現象であつて、俸給一千圓以下で、數人の家族を率ひて、都會で生活を營んで居る者の如き、甚だ慘憺たる狀態であつて、斯る階級の者が一方に種々の消費稅を代價購買の形で負擔しながら、他の一方に所得稅。之に伴う地方稅の負擔を强ひらるゝが如きは、甚だ殘酷の次第である。隨て所得稅法を改正するならば、免稅點を少なくとも一千圓の見當まで引上げなければならぬ。又此位の處まで免稅點を引上げた所で、爲めに國庫の失う收入は四百萬圓ばかりに過ぎないのである。然るに政府は此些細な收入を失うことすら恐れて、免稅點を六百圓に留めて置かうとするのは、卑吝極まる根性と云はなければならぬ。是れも原內閣が民衆の利害を顧みず、寧ろ之を蹂躙して顧みない所の政策を暴露したものに外ならない。

第二に所得稅法改正案に對しては、民衆の賛成がないばかりでなく、金權者階級の間にも今や猛然たる反對が起つて居る。現に八大商業會議所の聯合會、東京手形交換所、工業俱樂部などは反對意見を公表し、所得稅改正の延期を主張して居り、政友會內部に於ても、實業家系統の議員中にも延期賛成者があるやうに傳へられる。政友會は平生から極端な金權政治を信奉して居るものであり、原內閣の如き成立以來碌な政治を遣らない

が、金權者階級と結託したり、彼等の意に迎合したりすることは終始一貫、殆ど怠ることはなかつた。物價も調節しなければ金利も引上げず、勞働運動が起れば、極力官權を以て、壓迫するなどは、**即ち原内閣の金權政治の最も露骨に暴露された所である。**其原内閣が所得税法の改正を企てたばかりで、平生馴れ合つて居つた金權者階級の反對を受ける地位に立つたのは、所謂上手の手から水が漏つたのであるか、猿が木から落ちたのであるか、誠に近來の滑稽事としなければならぬ。

唯吾人の一ツ考へなければならぬのは、斯る金權者階級の所得税改正案に對する非難攻撃は正當に認められるかどうかと云ふ點である。一體日本の金權者階級は我儘であり、横着であり、慾張であり、議論をすれば、我田引水で、少しも公共的見地から立論した根柢を認められない。私が多くの場合に於て、金權者階級と正反對の立場に居るのも、己むを得ざる次第であるが、今度の所得税改正案に對する反對論に於ては、金權者階級の議論にも存外眞理の存することを認めるのである。即ち改正案に於て、八分以上の利益金を收めた法人に對して、超過所得税を賦課しやうとすることの如き、法人の社内留保金に課税しやうとすることの如き、金權者階級の反對を誘致するに至つた規定であるが、私の如き金權者階級には何等の縁故なく、最も公平な立脚地に居る者が觀察しても、上記二個の規定の如きは、甚だしく道理に反して居るものと斷定するに躊躇しない。何故かと云へば、政府は改正案で、所謂綜合課税法に據り、法人の利益金が配當金として株主たり、出資者たる個人の懐に這入つた場合に、他の所得と合算して、第三種所得に對する税率を適用すると云ふ案を立てたのであるから、年八分以上に達した法人の利益金に對して超過所得税を賦課するのは、明に課税の重複を來すものと云はなければならぬ。法人の留保金に課税するのは、例へば富豪連中の出資した會社で、一季半季の配當金の多寡などを眼中に入れず、利益金があれば、其大部分を積立金や後期繰越金に充て、只管會社の基礎を鞏固堅實にする方針を行つたならば、利益金が配當金として個人の手元に這入つて、之に對する課税を行う譯に行かぬから、留保金其ものに負擔を加へると云ふ趣向と見られる。然し會社經營者の方で、新税法實施後利益を配當金とした所で、個人所得として税が課せられ、留保金とした所で、會社に就て税が課せられる。孰れにしても課税の負擔を免かれないとしたならば、會社の經營者は利益金の大部分を配當金に於て、配當率を高くし、以て株主の

歡心を結ばうとするであらうし、株主も亦會社に配當率の増加を迫り、留保金を殖すことに反對するであらう。斯う爲れば所得税改正案は殊更に法人の基礎を薄弱ならしめる次第であつて、金權者階級が之に對するのは必ずしも自家擁護の私心から來るのでなく、國民經濟を擁護する公共的精神に基くものと云はなければならぬ。少なくとも公共的精神と利己的精神と相一致して、反對の態度に出でしめたものと判斷されやう。

今や我國に於て經濟社會は反動的狀態に陷り、株式會社の間には經營難を訴へるものも少なくなく、相當の收益ある會社の株式も市價に非常の下落を來して居る。此際に政府が更に法人に負擔を加へるとか、負擔を重くするとか云ふだけでなく、此以上に一歩を進めて、法人の基礎を動搖させ、之を薄弱にさせるやうな税法改正案を提出するとは、何事であるか。是れでは政府自ら求めて民間の反對論や反對運動を挑發するものに外ならぬ。

勞働組合法案

政府は勞働組合法を何と始末する積りであるか。勞働組合法の草案に就ては、既に農商務省案と内務省案と二つあり、何れも官僚の頭から割り出したもので、不滿足の點は多々あるがそれにしても内務省案の方が多少勝つて居る。同案第十條「勞働組合の組合員は勞働條件に關し組合又は組合員と締結したる契約に付き、損害賠償、違約金又は保證の責務を負ふことなし」とした規定を削除し、一方に勞働組合をして組合員たる勞働者が勞働契約に違背して、傭者に蒙らせた損害に對して、賠償する民法上の責任を免がれしめる明白なる規定を追加したならば、先づ既設の勞働組合も勞働運動者に此位の勞働組合法で折合つた方が得策であるかも知れない。然るに世間の風說では、内務省の勞働組合法案のやうに、勞働組合に對する官憲の監督權の微弱のものに對しては、政府部内に異論があり、何としても農商務省案のやうに、政府で組合設立の認可權を持ち、又組合に對して解散を命ずる權能を持つことにしなければならぬと云ふ意見もあると云ふ。即ち政府は政黨で云へば、政友會のやうに始終政府の御用ばかり勤めることに心掛け、政黨としての本來の任務を閑却して居ると同樣の御用勞働組合を政府の力で作り上げて、自由に之を操縱しやうとする考であるが、私共の疑を懷く所である。

内務省案の第九條に「雇傭者又は其使用人は勞働者が勞働組

合員たるの故を以て、之を解雇し、又は組合に加入せず若しくは組合より脱退することを雇傭條件と爲すことを得ず」とあるのは、所謂「勞働組合の公認」を立法上に現はしたものであつて、勞働組合法の規定として、最も肝要の點であるのに、道途の傳へる所に據ると、政府では斯る規定を設けては、資本家に不自由であり、勞働組合の勢力を以て資本家を壓倒するに至らしめる恐があると云ふ理由から、右の規定を削除する意嚮であると云ふことである。果して然らば政府は何の見る所あつて、態々勞働組合法を制定しやうとするのであるか、殆ど其意の存する所を知るに苦しまざるを得ない。斯る勞働立法の問題に對して、今日の議會が我々民衆の期待に背かざる態度に出るであらうか、私の心細く感ずる所である。

何れにしても治安警察法第十七條を廢止するのは、勞働組合の運動を自由ならしめるに必要であつて、勞働組合法の制定を好機會として、政府は必ず此處置に出で、勞働組合に對して、誠意を示さなければならない道理であるが、勞働問題の解決に就て、着眼點の違つて居る原内閣が斯る態度を取ることは、到底望まれない所であつて、是れ亦在野黨の鞭韃を要する次第である。

財界救濟と失業問題

經濟社會は今日の儘で小康を保つか、或は惡化するかは、一個の問題である。此問題を解決するには、政府が如何なる救濟策を取り、又此救濟策が如何なる効果を生ずるかと云ふことに着目しなければならず、隨て輕卒の判斷を下すことを難しとするやうであるが、經濟社會の救濟が假令ひ出來たとした所で、是れだけで經濟社會の惡化することを防ぎ得るや否や疑問とせざるを得ない。何故かと云ふに、經濟社會の救濟と云ふのは、株式なり、綿絲なり、蠶絲なりを高値で買つて、今其價格の低落した爲めに、苦しんで居る人々を差當り救濟するだけの話であつて、救濟の方便と云へば、是等の人々に金融の便を與へるに外ならない。詰り救濟策なるものは目前に困つて居る當業者に一時の凌ぎを付けさせるだけで、何等經濟社會の形勢を根本的に一變させ様とするものでない。而して目前に困る當業者は其一つを救へば、他の一つが現はれると云ふ有樣で結局政府として應酬の煩に堪へざらしめるのは、分り切つたことである。

然らば何か政府に經濟社會救濟の根本策があるか、公債を償還して、金融を流通するのも、一策であらう、輸出貿易の資金を

供給して、輸出貿易を奬勵するのも、他の一策であらうが、何分日本の一大輸出市場たる米國の經濟社會が反動的趨勢に襲はれ、他の一市場たる支那の經濟狀態も不振の趣を免かれないものとすれば、我國が對外經濟上の關係から、有利な刺戟を受けて、易々と經濟社會に一陽來復の春を見ることを想像し得ないのである。即ち今日端を發しつゝある不景氣は兩三年の將來に亙るものと覺悟しなければならぬ。斯く考へると、原敬とか、高橋是清とか、政府の要局に立つて居る人々が兎角今日の不景氣を輕く見て、或は一時の現象であるとか、或は遠からず景氣を恢復するとか、揚言するのは、詰り之に依て不景氣に對する自家の責任を輕くしやうとか、不景氣に伴うて生じた政府不信任の氣勢を抑へやうと云ふ目的を包藏して居るのであらうが、一方に不景氣に對する國民の覺悟を弱くし、又國民をして將來の形勢を打算するに、大なる遺漏あらしむる所以であつて、誠に不都合の沙汰としなければならぬ。不景氣の來るのは、世界的趨勢の已むを得ざる所としやう、其我國に於て勢の強いのは人爲的に好景氣を續けた反動であると諦めもしやう、只今日と爲つて原高橋の輩が詭辯を弄して、國民の知慮を瞞過しやうとするのは、甚だ怪しからぬ所であつて、彼等は責任を以て第一義とする立憲政治の要旨に反するの甚だしきものである。

既に今日の不景氣が永續性を有するものであるとすればゞ爲めに生ずる慘害に對して、豫防救治の計がなければならぬ。不景氣の場合に、社會に及ぼす慘害の最も甚だしきものは失業であつて、今や金融梗塞輸出不振等の影響を受けて、新事業は倒壞するし、既設事業は規模を縮小するし、事業界全體を通じて悲風慘雨の下に曝されて居る。斯る場合に職工勞働者の間に、多數の失業者の發出するは、當然の勢であるが、我國に於ては失業者は如何にして生活上の危機に當るであらうか。外國のやうに、勞働者の爲めに失業保險法があり、勞働組合に失業惠與金制があれば、失業者は保險金なり、惠與金なりで、一時の窮を凌ぐことが出來やう、其間に勞働組合は全國の支部に通牒して、失業者の爲めに職業を搜し、國立の職業紹介所も亦活動して、失業者に授職の道を講ずる譯であるが、我國に於て是等の施設は果して如何なる狀態に居るであらうか。市立職業紹介所を除いては、一として失業救濟設備の存するものはない。即ち我國の勞働者は甲冑を被らずして、失業と云ふ恐る可き、戰場に赴かねばならぬ次第であつて、失業者は失業と共に、直に生活にも窮するであらうし、新しき職業にも、就くことが出來な

い、是れでは失業者は社會上に最も忌む可き浮浪者とも爲らう窮して亂する小人とも爲るであらう、失業と共に社會上に大なる混亂を生ずるも、亦怪むに足らないのである。

斯る狀況であるとすれば、失業者を救濟することは、經濟社會の救濟と同時に、否寧ろ之に先だつて必要とする所であつて政府が既設の勞働組合に補助金を與へて、組合員中の失業者を救助さすなり、事業主で失業者を救濟する爲めに、特に多數の勞働者を雇ひ繼いで居る場合とか、解雇するにしても相當の救助金を支給すると云ふなやう者には、政府で幾分の補助金を與へるなり、又は政府自ら大規模の職業紹介所を起すなり、又は土木事業の內、豫てから計畫中のものの仕事を繰上げて、多數の勞働者に就業の便を與へるなり、又全國の鐵道汽船等に向つて所謂運輸の動員を行つて、失業者の全國に於ける移動を容易ならしめるなり、適當の施設は幾らでもあるのに、內務省も農商務省も鐵道省も遞信省も大臣の頭は揃つて居りながら、今日まで是等の點に於て、何事をも爲さないのである。一體彼等には勞働問題と云ふ觀念が缺けて居るのであらうか、失業者が愈々窮乏の極、最後の悲鳴を擧げるまでは、失業問題などは高閣に束ねて、顧みざるのであらうか、斯の如く國務を怠つて、平然たる國務大臣の揃つて居るのは、誠に吾人の驚嘆する所である此點も議會に於て一ツ痛撃を加ふ可き所と見なければならぬ。

民衆の對議會感情

原內閣は金權者階級の問題と云へば、血眼に爲つて騷ぐが、其以外の問題と爲れば、極めて冷靜である。今春市場に反動來の兆候を生じたときに、原氏は大阪で開かれた政友會近畿大會の席上で、政府は經濟社會の救濟を等閑に付するものでないと言明した。其同じ政府は中產階級の生活問題に對して、將に又勞働者の失業問題に對して、金權者階級に對すると同じ熱心、同じ勤勉を以て、解決に當るの誠意があるであらうか、彼等に此點に就て一片の誠意があつたならば、國政は今日よりも餘程圓滑に行はれて居る筈である。

近頃經濟社會に反動が起つてから、大阪では何銀行、橫濱では何銀行が支拂を停止し、其銀行の經營者は全財產を投げ出さなければ、整理を付ける望みがないとか、其成金は株式の暴落で、痛手を蒙つて、破產の外に、道はなからうとか、不祥の噂が世間到る所に傳へられて居る。人の本性から考へると、他人が大變な損失を負うて、如何ともすることの出來ない境遇に陷

つたと爲れば、其人を知ると知らぬとに論なく、一片の同情を寄せるのは勿論時には一肌脫いで其人を救つて遣らうと云ふのが、當然であつて、是れが卽ち社會共存の理であるのに、今日我國で或る成金が沒落したと云ふ風說に接したときに、之に同情する人が果してあるであらうか。私共は屢々世間に於て、相當の敎養あり、地位ある人の口から、成金の沒落を興味ある事としたり、痛快の出來事とする樣な談話を耳にすることはあるが、同情ある言を聽いたことは殆どない。一ツの國民として、一ツの社會に於て生業に從ひながら、他人の不幸を自分の不幸とせず、寧ろ之を幸とするやうな感を懷くとは何事であるか。斯る反社會的事相を生ずるに至つた原因は如何なる邊に求む可きであるかと云へば、要するに原內閣が從來經濟調節の政策を怠り、富者は益々富ませて、貧者は愈々貧しくするやうにし、貧者の食を奪つて、之を富者に供へるやうな政策を政府自ら率先して行つた爲めに、富者と貧者との間に階級的反感を强くしたことに基くものと斷言するに憚らないのである。過般の總選擧に於て、新に選擧權を得た納稅額十圓以下の階級に屬する人や俸給衣食者が原內閣に反對の態度を取つたことも亦怪むに足らないのである。

今度の臨時議會で果して民衆の利益が充分に保護されるやうな立法を實現させ得るであらうかどうか。原內閣は兎に角民望を失して居るとは云ひながら、衆議院に二百八十幾名の黨與を擁し、是等の黨與は自已の意見とか、感情とか、苟も自已の發揮し得べき個性は總て之を沒却し、兵卒が士官の命令に從ひ、人足が親方の指揮に服するが如くに、黨議に拘束されて、黨の領袖の欲する儘に進退する次第であるから、如何に不合理な法案にした所で、又如何に實行不可能の豫算案にした所で、原內閣の發案したものである以上は、必ず衆議院だけは通過すること丶爲る。然し其衆議院を通過した法律案なり、他の議案、なり、必ずしも民衆の欲する所でなく、又民衆の利害に適うたものでもないとしたならば、民意は如何にして政治上に實現され得るであらうか。其方法は二つある。卽ち一つは貴族院に賴ることで、他の一つは民衆の院外運動を興して、時の政府當局者を動かし、更に貴族院に輿論の所在を示すことである。衆議院では始終優勢で、反對論の領袖の質問や、攻擊を一蹴して、憚らない原內閣も貴族院の正論を如何ともすることが出來ず、國民も亦貴族院の正論を通じて、民意の政治上に透徹するに至ることを欲すると云ふのは、立憲政治の本筋ではなく、間道を

歩んで居るのであるが、原内閣の如き、變則の手段で、政治上に横恣を逞うして居るものに對しては、此手で正論攻めにするより、外に方法はないのである。

國民の政治上に於ける直接行動例へば第三次桂内閣や山本内閣を倒す時に行はれたやうな盲目的行動は立憲國の體面から云つて、其根絶を希望するのが當然である。私共は平生から議院政策即ち「パーラメンタリズム」の信奉者を以て、終始したいと思つて居る。即ち國民全體の希望する所は彼等を代表する議員を通じて、議會で公けにさせ、立法として之を實現させ、其立法が善かれ、惡かれ、自分等の代表者の作つたものである以上は、國民は之を遵奉する、之を惡いと信ずる者は更に立法の力で變改させるやうに努力する狀態の出現することを希望するものであつて、國民の間に今日以上に遵法的精神を強くすることを以て、最も必要な事と思うし、而して此目的を達するには普通選擧の實施を以て、當面の急務と考へて居るのである。然るに日本の現狀に就て考へるに、我國民は今日「パーラメンタリズム」を行うまでに、議會に對して、充分の信用を置いて居るであらうか。政友會が幾ら絶對多數を衆議院に制して居つても、民衆は却て政友會の擁立する原内閣を敵として居るではないか、世間でも絶對多數を率ひて居る原内閣を以て、基礎の鞏固なものとは考へず、近く其地位を去るものと認め、次野とか、後藤とか、後繼内閣を組織す可き人を物色して居るではないか。即ち一の政黨が衆議院に絶對多數を占めた所で、其れは浮ひた雲か、朝日の前の白雪と異ならざるものに過ぎない民意と多數黨との間には幾何かの距りがあるので、此缺陥があるから、少し活潑な民衆運動が起れば、一溜りもなく内閣が野倒れ死にをすることゝ爲るのである。

經濟政策で民衆の生活を脅し、普選案反對で、民衆に與へ可き權利を與へず、物質上に精神上に民衆を苦しめつゝある原内閣としては、民衆運動を恐れるのが當然であらう。然し、民衆の方から云へば、幾ら何としても民衆の微力殊に團結し難い民衆の力が官權に壓倒されて、民意を發揚することが出來ないとしたならば、彼等は如何にして自己の利害を防衛する手段を取るであらうか、私は民衆をして飽くまでも議院政策の信奉者たらしめたい、議會に頼り、立法の力に求めたならば、自分等の願意も達することが出來ると云ふ信念を持たせたいと希望して已まないのである。

今や時勢は次第に切迫し來つた。政治の局に當る者は心して

民衆の思想に同化し、又彼等の感情を尊重しなければならぬと同時に、民衆に接觸し、言論文章を通じて、彼等を指導する地位に居る人々は彼等をして議院政策の信奉者として、合理的合法的運動の圏外に逸せしめざることに意を致さなければならぬと信ずる。全國の大都會には政府反對の氣勢が次第に強い、經濟社會の反動は金權者階級をして政府から離反するに至らしめる、臨時議會で政府は更に傷痍を蒙つて、其威信を失墜する。然も依然として政權を擁して居つたならば、民衆の反政府感情は、何時かしら何かの形で爆發することを免かれないであらう。當面に發生す可き失業者が生活に窮して、自暴自棄の、狀態と爲つたならば、政治運動と勞働運動と相重なつて、社會上に混亂を招きはしないであらうか。斯る場合に巧に舵を操つて行くだけの覺悟や用意が今の政府に在るであらうか、唯一日でも永く政權に噛り付き、當局の時には其日暮しの政治を遣つて居るやうな今日の原内閣に對して、吾人は何等の信用を拂うを得ないのである。

堰けば溢るゝ民衆の普選運動

法學博士　末廣重雄

一

中傷讒誣を逞ふし、政敵を陷れる事は、世界各國中最も政治道徳の發達したと云はれる英國に於てすら往々にして行はれ、我國の如きに至りては、少しも珍らしからぬ事である。最近普通選擧問題に關しても、政友會が、其の政敵たる憲政會を始め汎く普通選擧論者に對して、此の陰險惡辣なる手段を取り、言論上彼等に甚だしき壓迫を加へた事は顯著なる事實である。今其の一二の實例を擧げて見るに、政友會某領袖の如きは、普通選擧論者は露西亞の過激派と通じ、其れから少からぬ運動費を

取つて居ると云ふて、其の信用を傷けやうとするのである。如何にも倒すか爲めに手段を擇ばぬとて、克くも斯かる馬鹿々々しい事を、臆面もなく、思ひ切つて云つたものである。何故に馬鹿々々しいかと云ふに、露西亞の過激派は、現在のところ、プロレタリアート――實は主として工業勞働者より成る少數者の獨裁政治を主張し、デモクランーには全く反對して居るのである。其の擁護せんとする階級利益こそ、同じくないけれども、單にデモクラシーを排斥すると云ふ點から見れば、過激派は寧ろ我が政友會に近いのである。此の過激派がデモクラシーの思想に甚く普通選擧の宣傳の爲めに、運動員を出すのは恰も敵に糧を與へるやうなものである。勿論あり得べからさる事である。假に我國の普通選擧論者中、不心得な者が有つて、運動員を欲しがるとしたところで、過激派の方で呉れる筈がない。政友會の領袖とも有らう者が、此位の事を解する事が出來ず、仕たり顏に、普通選擧論者を、過激派の仲間呼はりする其の迂濶さ加減は、實に驚き入つた次第である。

二

更に又、『露西亞に見よ、獨逸に鑑みよ、普通選擧には革命が伴ふ、國家の安全の爲めに、斯かる危險ある普通選擧は、絶對に反對しなければならぬ。』と云ふ事は、總選擧の際、政友會の一二の有力者が田舍の人の世界の事情に暗きに乘じて、頻りに說廻つたところである。然し乍ら、露西亞の革命が、普通選擧の結果で有るなどゝは、如何に鐵面皮な者だからとて克くも恥かしくもなく云へたものである。今、此處で、何故に、露西亞の一九一七年の革命が勃發したかを詳しく述べる遑がないが、露西亞の革命は、決して論者の云ふ如うな事で發生したものではない。露西亞の歷史を一冊でも讀んだ者ならば知つて居る通り、露西亞の革命運動は、多年ザアの專制政治に對して行はれた。日露戰爭後、人民の要望の一部が容れられ、議會（デューマ）が創設せられる事になつたけれども、其の議員は甚だしき制限選擧に依て選出せられた。而かも其れにも拘らず、第一議會と第二議會とは時の政府に對して、甚だしき反抗を試みたから、第二議會解散後、政府は亂暴にも議會の協贊を俟たずして選擧法を改正し、議會を政府の走狗、有產階級の爪牙たるもので固め、立憲政治を名あつて實なきものにした爲め、政治上の弊害愈繁く、人民の不平益々甚だしくなり、遂に革命が勃發して、ロマノフ家が倒壞する事になつたのである。さうして見ると、露西亞の

革命は普通選擧に伴ふたのではない。制限選擧の下に行はれたのである。事實は論者の云ふところに全く反して居る。

然らば獨逸は如何。革命前の獨逸帝國議會の議員は、普通選擧に依て選出せられて居た。けれども、一千九百十八年の獨逸の革命は、普通選擧とは何の關係も有りはしない。然らば、革命が行はれ、帝政廢止となつたのは何故かと云ふに、十分勝ち戰と思つたのが俄かに負け戰となつて了つたから、國民は失望の餘りに、其の責任者たる皇帝を逐ふ事になつたのである。戰敗が革命の原因で、普通選擧は其の原因ではない。若し普通選擧が、多少たりとも、革命に關係が有るとするならば、其れは普通選擧に依りて選出する帝國議會位ゐの力では、當時到底國家を救ふ事が出來なかつたから、獨逸人は終に非常手段を取るの已むなきに至つた點にある。若し制限選擧が行はれて居たら、國民の皇帝に對する不平は一層甚だしく、革命或は一千九百十八年以前に破裂したかも知れぬ。序ながら此の論者に注意したい事は、人口から見ても、面積から見ても、獨逸の約三分の二を占むる。普魯西に於ては、革命前普通選擧が行はれて居なかつた事である。

斯の如く、露西亞に於ても、獨逸に於ても、革命は決して普通選擧に伴つては居ない。論者の云ふ所は全く事實を枉げて、普通選擧者を陷れんとする者で有つて、實に怪しからぬ話である。然し眼明き千人、盲千人の世の中であるから、斯る馬鹿々々しい中傷に依りて、騙される者もある、普通選擧反對熱が昂まり、自然普通選擧論者に對する壓迫となる事がある。論者の乘ずる所は實に玆に在るのである。

三

此の他侚ほ、政友會が普通選擧論者に對して、言論上で加へる壓迫は色々あるけれども、何れも右に擧ぐるもの同樣の中傷讒誣であるか、又は全く取るに足らぬ愚論である。

私が本誌六月號に云へる如く、關西地方の演説會に於て、政友會の壯士が、何れも聽衆の爲めに彌次り倒されて、演壇に立往生の醜態を演出したのは、彼等が斯かる理由にならぬ事を理由として、民衆の正當なる要求を蹂躙せんとしたからである勿論民衆が、彼等の言論に對して加へた壓迫は、決して正しい事ではない。今後大に愼しまねばならぬ事であるが、聽衆をして、斯くの如く怒らしめたるは、詰りは彼等の罪である。

普通選擧運動に對する壓迫は、右の如く言論の力を以てした

許りでなく、更に官憲の力を以てした事もある。

東京に於て、今春議會開會中に行はれた普通選擧促進の示威運動は、多少常規を逸し、粗暴に流れたところもあらうから、或程度の取締は、蓋し已むを得なかつたであらうけれども、場合に依ては、必要以上に出た事があるやうに思はれる。而うして、最近に至り、漸く其の壓迫が甚だしくなる形勢が見へぬでもないが、正當なる要求を遂せんが爲めにする運動に對し、官憲が古い頭で、過去に於けるが如く、無闇に壓迫を加へるが如き事あらば、民衆は決して何時迄も默して居ない。斯くの如きは、民衆が政治上、社會上、經濟上、現代に對して不滿の心を抱き、思想甚だ險惡なる今日、非常なる危險があるから、官憲は餘程注意すべきである。

其他、今次の總選擧中、官憲の壓迫は、種々なる形式に於て議員候補者中の普通選擧論者に對して加へられたにも拘らず、普通選擧論は燎原の火の如く擴がり、市部に於て大成功を收め郡部に於ても、青年の間には漸次普通選擧論の勃興を見るやうである。今後普通選擧論者が相呼應して奮鬪努力するならば、假令官憲の加へる壓迫如何に甚だしくとも、普通選擧論は極めて近き將來に於て、天下を風靡する事になるに相違ない。壓迫の加はる程、之に對する反抗も甚だしくなり、民衆の要求は遂に抑ふべからざる事となるであらう。之を抑へんとするは恰も河水を堰くやうなものである。堰けば必ず溢れる危險がある。政友會と官憲は、此の危險を冒しても尚、民衆の正當なる要求に壓迫を加へんとするのであるか。若し敢て是をなす時は普通選擧論者を罵つて、國家の基礎を危ふする、と云ふ者自らが、國家の基礎を危くする者になるのである。

四

普通選擧運動の將來は、今日已に十分明かであつて、如何に之に壓迫を加へても、壓迫し切れるものではない。第二十世紀も五分の一を經過したる今日、民衆に對し、不合理な制限選擧に滿足せよと求むるは、出來ない相談をするものである。であるから、普通選擧論者の運動次第では、數年後に普通選擧の實行を見る事なしとせない。其の時には我が政界の改造が行はれ政黨の勢力に大なる變化が起り、今日、普通選擧運動の先驅となり、民心を得た黨派が、大なる勢力を得る事になるであらう。

流石に、國民黨は此の機微を察して起つた。然し惜むべし、同黨は種々の理由よりして、此の機會を充分に利用し、將來の

大政黨として發展する事が容易でないやうに思はれる。然らば憲政會は如何。憲政會は、事務家としては、其の幹部に少なからぬ人材を有つて居るけれども、政治家として敬服するに足る者は一人も居ない。此事たる昨年末より今日に至るまでの、其の普通選擧に對する極めて不徹底な態度に照して明かであつて、折角、好機會が來て居たのに、今日まで之を捉へる事が出來なかつた。けれども、未だ必ずしも、遲くなつた譯ではなく若し今後決然起つて普通選擧の爲めに奮鬪するの勇氣が出るならば、其の將來は必ずしも悲觀するに及ばぬ。

殘るところの政友會は如何。政友會が今後永く我國の最大政黨として存續し得るや否やは繫つて其の普通選擧に對する態度如何にある。政友會が上に述べたやうな、中傷讒誣の言を弄し普通選擧論者に壓迫を加へて、時勢に逆行するやうな馬鹿な事をせず、翻然として其の態度を改め、普通選擧運動の味方として蹶起するならば、人心は翕然として之に向ふ事になるに相違ない。

所で、此の態度の一變と云ふ事は、政友會に取りて決して難しい事ではない。原總裁の如きは、前期議會に於て、憲政會等が提出した普通選擧法案に反對したけれども、其れは、昨春選擧法を改正して、未だ之を一回も實行しないうちに、改正するのは輕卒に失し、且同法案の提出理由其ものが過激に失するから、反對すると云ふに過ぎないのである。主義としては、普通選擧に反對して居るのでないから、既に新選擧法が一回實行せられた事でもあるし、其れから、新らしき普通選擧法案の提出理由が穩健なるものとならば、贊成しても一向に差支へのない筈である。

否、反對黨の提出する法案に贊成すると云ふよりも、機を見て、自ら進んで提案し、憲政會等に先手を打つては如何、之れが既に大なる政友會をして益々大ならしむる所以であつて、而かして原總裁の政治的生命を益々長からしむる所以となる。

到底、何時までも壓迫し切れぬものを、壓迫し、民衆の敵となつて自滅するか、又は大勢に順應し、民衆の味方となつて益々黨勢の進展を圖るか、政友會の執るべき道は、此の二ツの何れかである。政友會は果して何れを取らんとするか。政友會は今や實に盛衰の十字路に立つて居る。

普通選擧の必然性と民衆運動

室伏高信

一

議會萬能主義は近代國家の發達の一定の狀態においては殆んど各國に共通の政治的原理をなしてきた。近代社會主義者またこの議會萬能主義を奉じてきた。この議會萬能主義のもとにおいては、普通選擧は萬能効（パナシーア）である。曾つてチャーチスト運動の指導者達は普通選擧は凡ての貧乏の問題を解決することができると信じた。

二

議會萬能主義の時代は去つた。少くとも去りつゝある。それは一元的國家觀とともに去りつゝある。今日の世界に於いて、尙ほ議會萬能主義を奉ずる一派の政治學者達は、彼等が未だホッブスやオースチンやヘーゲルやボーダンの境を脫却することのできないことを暴露してゐる人達である。議會萬能主義は、今日においては、民主主義の正面の敵である。それとともに、普通選擧萬能論もまた今日の民主主義の思想と兩立することはできない。

三

普通選擧が、勞働階級解放の手段として、萬能効でなかつたことは、各國の歷史によつて證據立てられた。この事實は普通選擧反對論となるものではないが、また普通選擧に對する勞働階級の狂熱を打ち消す力である

四

普通選擧萬能の時代が去つたとともに、普通選擧に對する狂熱の時代も去つた。今日の勞働階級は、普通選擧に對して寧ろ懷疑的である。これ現代民主主義の特質である。それは既に地理的集中主義から脫却するに至つてゐるからである。

五

しかし普通選擧の狂熱時代が去つたといふことはたゞ普通選

擧萬能時代が去つたといふまでゞある。それは決して普通選擧反對論ではない。それは普通選擧の部分的職分論である。私はこの立場から普通選擧を主張する。

六

普通選擧を主張する人達は、先づ普通選擧の職分を明らかにすべきである。普通選擧の職分を明確にすることのできない人々、その人達は、如何なる熱心なる普通選擧の宣傳者であるにしても、決して眞實なる普通選擧の指導者ではない。

七

今日の日本における普通選擧論なるものは、主として虚僞である。學者にして普通選擧を主張する人々は、未だ何人も明確に普通選擧の原理を示すことができない。今日の普通選擧論は原理に缺けた普通選擧論である。今井嘉幸君の普通選擧論、吉野博士の普選論は、この種の普通選擧論の典型的のものである。政治家にして普通選擧を主張するものに至つては、たゞこれをもつて政爭の具に供するものであるに過ぎない。その不眞面目なことにおいて、その心事の卑劣なことにおいて、政府と在野黨との間に、何の相違するところもない。

八

今日の普通選擧問題は一部の人達の間における玩弄物である。政治家はこれによつて民衆を欺く。學者はこれによつてその政治哲學の空疎であることを暴露する。在朝政治家は、これに反對することによつて、貴族に媚び、富豪に媚び、三圓級のペチイ、ブルジョアの心理に訴へ、そしてブルジョア・スポークスマンとしての任務を完うする。普通選擧こそ彼等に適した玩具である。

九

眞實に普通選擧を愛することは、今日における一切の普通選擧論を一蹴することである。虚僞と淺薄とは一切の破綻の源泉である。普通選擧はありのまゝの普通選擧として示されなくてはならぬ。普通選擧にあらざる者を以て普通選擧であると僞瞞する政治家――憲政會――の狡猾はこれを無遠慮に指摘しなくてはならぬ。また萬能効にあらざる普通選擧を萬能効のごとくに吹張する煽動學者の誤謬は躊躇するところなく指摘しなくてはならぬ。普通選擧は、そのありのまゝの効用と原理とが、民衆の前に示された時に、智慮ある民衆はこれを受取るであらう。

十

民衆は、普通選擧に對して懐疑的である。就中、勞働階級は普

通選擧に對して懐疑的である。私はこの勞働階級の態度のうちに無政府主義があるとは見ない。私はこゝに、民主々義が芽ばえつゝあることを信ずる。勞働階級をしてこの心を失はしむることなかれ。これ勞働階級の指導者の最高の任務である。

十一

勞働階級が普通選擧について懐疑的であることは、彼等が普通選擧の效用について、學者や政治家よりも、よりよく理解してゐるからである。この懐疑的精神は、普通選擧の原理が示される時に、普通選擧の支持者となることができるであらう。その原理が蹂躙される時に、無政府主義または過激主義となるであらう。

十二

勞働階級が如何に指導せられるかの問題は、國家が如何に處分せられるかの問題である。こゝに勞働階級指導者の仕事の重要性が存在するとゝもにまたわれ等の社會生活の重要な危險が存在してゐる。しかし勞働階級を指導する力がたゞ勞働階級の名義上の指導者のうへにあると思ふことは徹底的に誤謬である。勞働階級運動の方向は概して彼れの環境によつて決定される。勞働階級運動の方向がゴムパース主義となり、シドニイ、ウエッヴヰキヤリズムとなり、無政府主義となり、過激主義となり、サンヂカリズムとなり、マルクス派産業の組合主義となることは、主として彼れの環境の賜である。この意味においての環境の製造は、主として資本家階級または政治家である。ツーリズムの舊ロシヤからソヴヰエットの新ロシアが生れたことのごとき、または quasi-democracy の英國にギルドソーシャリズムが發達しつゝあることのごとき、みなこの事實を證據立てゝゐるものである。

十三

民主々義の政治が發達の過程に置かれてゐる國家では、暴力革命は不可能である。專制政治の行はれてゐるところでは平和的革命は不可能である。

十四

カウツキイは達識の士である。彼れはその近著のうちで日本は暴力革命の可能性があるといつてゐる。悲しむべき豫言である。私はカウツキイの豫言が必ず適中しないことを確信する。しかしかくのごとき悲しむべき豫言が達識の士によつて行はれてゐることは、その豫言者の見識を疑ふことの前に、われ等自ら、自らを反省すべきである。われ等は反省に價ひする多く

の缺陷をもつてゐる。この缺陷を悟ることのできない政治家は、日本の國家にとつて、最も不忠實な政治家である。かくのごとき政治家は日本にあまりに多くはないであらうか。日本に愛國の士と稱するものは多い。しかしこの人達は、果して自らを反省してゐる人達であるか。普通選擧に反對する政治家の諸君は、彼等の政治的生涯のうちにおいて、たゞの一日と雖も、彼れ自らを反省したことがあるか。

十五

原首相は普通選擧論をもつて『國家の基礎』を危うくするといふた。國家とは何んぞや。原敬曰く、普通選擧論は階級打破論である。……それゆえに國家の基礎を危うくすると。彼れの謂ふところの國家なるものが、國家でなくして階級であるとは、彼れの幾度か繰返した演說によつて明白である。しかし國家と階級との同一視こそ、眞に『國家の基礎』を危うくすることではないか。

十六

不幸にしてわれ等は原敬を首相に戴いた。彼れを首相に戴いた日本の國家は不幸な國家である。彼れを首領とする政友會が絕對多數を占めた日本の政治は不幸な政治である。

十七

原敬の國家論と、クロポトキンの國家論とはその本質において同一である。原敬の國家論とレエンの國家論とはその本質において同一である。原敬の國家論とサンヂカリストの國家論とはその本質において同一である。國家と階級とを同一視することがこれである。クロポトキンは國家は必然的にブルジョア階級の機關であると信じた。レエンは國家は必ず階級的であると論じた。プロレタリアンの國家とブルジョアの國家とがこれである。原敬もまた國家とは階級――ブルジョアの階級であることを主張した。『階級打破』が『國家の基礎』を危うくすると公言したからである。この國家觀の結論は、クロポトキンにおいては凡ての國家は階級的利益を代表する壓迫の機關として排斥することとである。レエンにおいては、プロレタリアンの階級的國家を創造することとである。これがレエンにとつてはマルキシズムの眞髓である。レエンと福田博士とは意見を同じくしてゐる。しかし原敬の結論は正反對である。國家はブルジョア階級である。ブルジョア階級を打破することは『國家の基礎』を危うくする。それゆえにブルジョア階級擁護のために國家の基礎を擁護しなければならないと。私はこゝに斷言する。國家と階級

とが同一であるとするの見解をとるとすれば、われ等はレニンとともにあらねばならぬ。或はクロポトキンとともにあらねばならぬと。しかし私のいはんとするところはレニン主義の謳歌でもない。クロポトキンの謳歌でもない。

十八

クロポトキンもレニンも、そして原敬も、國家についての見解が根本的に誤つてゐる。彼等の國家とは、たゞ近代的國家の特質に適中してゐるまでゞある。しかし近代的國家の滅亡は、國家そのものの滅亡ではない。私はこの頃レニンの『國家と革命』を讀んだ。それはレニンがロシア革命の進行中に書いた物である。そして革命の書物を書くことよりも革命の實行の方がより多く有益であるといふ立場から、筆を中途に絕つた。私はこの書物を讀んで、レニンがマルクス主義に透徹した學者であることを承認しないではゐられない。彼れは慥に大事業に適した偉材である。レニンはクロポトキンのごとくに文學的ではない。文字の修飾によつて、人心に訴へる力をもつことの點において、クロポトキンは天才である。クロポトキンは未熟なる青年を動かすべく充分な才能の持主である。しかし彼れの頭腦は決して論理的ではない。論理の明快と透徹とにおいて、レニンは當代第一であらう。しかし彼れの國家論は、國家の職分を正しく理解してゐるといふことはできない。そはマルキシズムの國家論として透徹してゐる。しかし國家の職分を眞實に理解するものはレニンの國家論に一致することはできない。その同じ立場が、原敬の國家論を否認する。原敬の國家觀の效用はたゞレニン主義への道であるに過ぎない。

十九

今日の世界において普通選擧に反對しつゝある代表的政治家は、西洋においてはニコライ・レニン、東洋においては原敬である。レニンは學者である。原敬は通俗政治家である。レニンは革命主義の結晶である。原敬は反動主義の結晶である。レニンは百二十圓の薄給に甘んじて革命の事業に一身を献げてゐる。原敬は所有階級の代辯者としてその所有欲を充足しつゝある。彼れとこれとは兩極に立つてゐる。否なこの二人を比較することは比倫である。しかしこの兩極の政治家が普通選擧に反對するの點において全然一致してゐることは、われ等の眼前における厳然たる事實である。そは決して偶然の一致ではない。そは一致すべくして一致したものである。何となれば彼等はその國家觀において既に一致してゐるからである。

廿

所有階級の立場から普通選擧に反對した世界最初の政治家はロード・ヂョン・ラッセルであつた。ロード・ヂョン・ラッセルはベルトランド・ラルセルの祖父であつた。彼れは所有階級の精神を忠實に代表して、一八三二年の改正選擧法は、最後性のものであるといふた。このことは世界の普通選擧史のうへに重要な記錄の一つである。爾來九十年。ロード・チョン・ラッセルの豫言は世界の到るところに飜覆された。そしてたゞ一人、東洋の一角において、彼れの代表的な相續者を發見した。現內閣の首相原敬がこれである。ロード・ラッセルは世界における最初の普通選擧の反對者としての名譽を擔つた。原敬は世界における最後の普通選擧の反對者としての名譽を擔ひつゝある。この名譽ある達識活眼の人物を首相に戴くことのできた日本國民は、今また何を考へつゝあるか。

廿一

ロード・ヂョン・ラッセルの孫にベルトランド・ラッセルが生れた。彼れは祖父の凡ての事業を葬るべき使命を遺憾なく果しつゝある。原敬の孫に、ベルトランド・ケイが生れるであらうことは想像に難くない。しかしかれ等の問題は、最早や數十年後を待つべき問題ではない。今日の世界は一八三二年の世界ではない。約一世紀の間に、世界の人間生活は大きな一回轉を試みた。それに從つて政治思想も大きな一回轉を試みた。一八三二年においてはチャーチストの政治運動は最左端の思想の具現であつた。九十年後の今日においては、政治的の運動は寧ろその一切が右翼である。或は右翼のごとくに見ゆる。政治的社會主義は產業的社會主義へと讓りつゝある。第二インタナショナルは見苦るしい滅亡を現じつゝある。そして第三インタナショナルがモスコウにおいて世界の勞働階級に訴へつゝある。獨逸の獨立社會黨を中心として第四インタナショナルが勃興しようとしつゝある。

廿二

今日の世界の政治的二大思潮は、普通選擧か制限選擧かの問題ではない。普通選擧と制限選擧とについて、政治家が判斷すべき時代は、英國においては一八三〇年代であつた。大陸においては一八四八年であつた。今日の世界においての問題は普通選擧か勞働階級の獨裁政治かの問題である。即ちデモクラシイかプロレタリアン・ディクテートアシップかの問題である。國際社會主義の一部はモスコウを中心としてプロレタリアン・デ

イクチークアシップへと赴いた。世界は今やかくのごとき境に立つてゐる。それは國際社會黨の危機であるとともに世界における一切の政治生活にとつての危機である。

廿三

世界の形勢に盲目なる政治家は、「國内の政治についても盲目なる政治家」である。われ等は今まこの盲目なる政治家を戴いてゐる。『國家の基礎』を危うくするものは、レニンよりも、クロポトキンよりも、かくのごとき政治家の獨裁政治である。『ローマは民主的國家として發達し、專制的國家として滅亡した』——とはダンニングがその政治學史の大研究において喝破したところであつた。日本は今まこの專制國家への道を歩みつゝある。現代を支配する政治家は、ブルジョア的所有慾に興奮しながら、『階級打破』は『國家の基礎』を危うくすると叫びつゝある。こゝに大なる危險は存在しないであらうか。私は民主主義を愛する人々に訴へるとともに『國家』を愛する人々に訴へる。眞に國家を救ふの道は國家を階級から救ふことである。眞に國家を愛するものは、階級と國家とを區別する人々である。

廿四

ヴァンダアリップは決して賢明な人物ではない。What happen to Europe の目次だけを一瞥しても、彼れが決して賢明な人物でないことを證據立てゝゐる。彼れが日本へきた時に、彼れの接觸した人達は眞に日本を代表することのできる人達でない。彼れは日本のブルジョア階級だけを見て行つた。その觀察の後に、日本には二つの政府が存在するといつた。軍閥とそして政黨とがそれである。この觀察は五年前の日本に當つてゐる。しかし今日の日本においては、軍閥と政黨とは一致してゐる。政黨は軍閥の傀儡である。日本に二つの政府が存在するといひえられるとすればそは支配階級と被支配階級の二つがこれである。

廿五

日本の支配階級はその支配慾において興奮しつゝある。日本の被支配階級は、その傷ましい狀態のもとにおいて、政治に對する懷疑的の態度を示しつゝある。私はこゝに重大な危險が存在すると信ずる。支配階級の政治家こそ、『國家の基礎』を危うくする。

廿六

議會制度を維持するものは、普通選擧の必然性を信じなくてはならぬ。この必然性に逆行することは議會制度そのものの破

壞である。そしてそは非政治的運動への道である。從つて非國家への道である。

廿七

普通選擧は國家の基礎を危うくするものではない。そは世界の歴史が證據立てゝゐる。そはたゞ『原敬の基礎』を危うくするに過ぎないであらう。

廿八

國家の基礎を危うくするものは、民主主義の壓迫者その人である。英國の歴史を一讀したものは知るであらう。チャーチストの熱叫がブルジョア政治家によつて壓迫された時に、英國の勞働運動がモリソンやスミスを產んだことを。また近代においては、オスボーン判決によつて知らるゝとほり、所有階級が陰險に勞働階級の政治運動を抑壓した時にトム・マンの狂熱的サンヂカリズム時代のあつたことを。

廿九

フェルヂナンド・ラサーレ、がその『勞働者の綱領』のうちでいつたことは今日においても眞理である。『普通選擧を語る人は協調の叫びを吐露する』と。普通選擧は協調の叫びである。そは危險思想ではなくして安全思想である。そは決して萬能効ではない。しかし秩序ある發達は普通選擧を迎えて發達する時に、一切のディクテータアシップは廢止せられるであらう。ブルジョア、ディクテータアシップも、プロレタリン、ディクテータアシップも。レニンもこれを信じてゐる。

卅

議會萬能主義の時代は僅に去つた。しかしそは一切の政治生活の廢止ではない。一元的國家の時代は去りつゝあるであらう

卅一

ベルンシタインの言葉は正しい。階級的支配は『低い文明』であると。プロレタリアン・ディクテータアシップは決して高度の文明生活において存在することはできない。ロシアのごとき半野蠻國においては不可避的存在である。しかし民主々義的精神がある一定の程度にある。しかしそは國家そのものゝ廢滅ではない。

卅二

私は普通選擧運動に對して懷疑的である勞働階級が、今日の政治家に比べてより多く普通選擧について理解あることを述べた。しかし普通選擧の職分的原理について更に一段の理解が與へられる時に、勞働階級は萬能効としてゞはなしに、勞働運動

の一方法として、普通選擧運動に加はるであらう。政治運動は決して萬能効ではない。しかしそはダニエル、デ・レオンのいつてゐるとほり、勞働運動を陰謀から救ふことができるであらう。

卅三

普通選擧は民衆の力によつて獲得しなくてはならぬ。普通選擧そのものよりは民衆運動そのものが重要である。妥協は惡德である。妥協は人間の高尙な精神の破壞者である。憲政會案のごとき僞瞞こそ民衆運動を墮落させるものである。われ等は民衆運動を墮落させる一切のものと戰はねばならぬ。われ等の歷史において最も悲しむべきことはこの民衆運動の記錄に缺けてゐることである。民衆運動の缺乏した歷史はその國の文明生活の低調であつたことを示してゐる。

卅四

普通選擧が輿論であるかないかを語るほど愚鈍なことはない。そは無產者に向つて分配を公平にすることが、その無產者の歡迎するところであるかないかを問題とすると同一の程度において愚鈍である。しかしこうした愚鈍なことこそ今日の政治家に適した問題である。今や總選擧は終つた。そして三圓級のペティ・ブルジョアは、選擧干涉と相俟つて、豫定のごとくに普通選擧に否と答へた。しかしペティ・ブルジョアはペティ・ブルジョアである。彼れは決して國民そのものではない。國民中の小部分である。

卅五

今や勞働階級が答へべき時機がきた。われ等は勞働階級の聲を聽かなくてはならぬ。そは民衆運動によつて與へられるであらう。彼れはその偉大なる數によつて答へるであらう。

卅六

民衆運動は、言論とともに、今や限りなき抑壓のもとに立つてゐる。勇氣ある人々は、悲しむべき犧牲となりつゝある。われ等の友は一人去り、二人去り、そしてみな去るかもしれぬ。しかし民衆は失望することを用ゐない。民衆は遂に勝つであらう。

ウキリアム、モリスは歌つていふた——

What is this, the sound rumour? What is this that a llmen hear, Like the wind in hollow valleys when the storm is drawing near, Like the rolling on of ocean i nthe eventide of fear? 'Tis the people marching on.

新政治の踏みだし

早大教授 杉森孝次郎

政治そのものが生まれ更はる時機に刻々近づきつゝある。よい事だ。生まれ更はるとは進歩改良の意だ。生物學者の謂はゆる飛躍的進化即ちミユテーシヤンに似た現象だ。志ある議員は、勢力を院外に張る用意あるを要す。手と耳を院內に置いて、足をば國民の政治的良心と聰明の上に二王立ちに踏んばつてゐなくてはいけない。足までをも院內に置く人なら、政治上の道德的退潮に浮んだ舟にのつて親舟にのつた積りでゐる人だ。院內に於ては孤軍奮鬪の人たれ。國民の最善意思を代表するの自覺に於てだ。これだけの識力もない人には、吾人の註文も頗る低い。

院外の政治的自信が充張して來る事が肝要だ。けれども解散前の普選運動のやうに、外形が內容よりも遙かに餘計に仰々しい歷史をば繰り返したくない。禮儀あり、節度あり、品位自尊ある普選運動が國民の政治的常識の次期の發達でなくてはならん。普選は理想の徵候であつた、本體は內外政の根本的改善を孕む哲學と實行目錄とでなくてはならん。空騷ぎであつてはならんのだ。烈日一とたび雲を破つて現はるれば、燭光色を失ふが如くに、院外の政治の新生命は院內の油盡きたる政治燈に臨むべきだ。

西伯利問題と經濟界の恐慌問題とが使用されたら、內閣も倒れるかも知らん。解散も再び來るかも知れん。けれども願はくばすべての政變をして意義あらしめよ。きまつた土俵內の角力であつてはならん。足跡未到の地域に向かつての競爭でなくてはならんのだ。黨人に果たしてその意思と脚力とありや。

この意思と脚力とを敢て黨人に期待する權利を持たない。國民自身が、自己に待期すべき事柄だからだ。

新黨が出產されるやうでなくては、時節未到來だ。國民の聲は、衆口金を鑠かす力を帶んで來なくてはいけないが、同時に

また組織される事が有用だ。

直接行動とや。實力は直接行動でない。國民の意思を形成する事が直接行動だ。議會の解散もその結果としては容易に得られ、議員の理想淘汰もその結果としては容易に得られる。信州では政友派候補はつとめて普選尙早に言ひ觸れる事を避けたさうな。昨日の信州は、明日の全國だらう。非政友派が、なるべく普選論に近寄らぬやうにした昨の全國が、明日の全國であつてはならん。

けれども普選そのものは神ではない。吾人は制度上の機會をば公平に開放し、內容上の經濟を理想的に營むべきだ。實を言ふと、內容上の經濟を目的としての制度上の機會完備だ。意思と聰明を國內に總動員する方法として、普選制が有價なのだ。

政治をして淺薄にして低劣なる虛榮心の具たらしむるなかれ。普選を號ぶ者が、また實に滔々として、この弊を多少有するが如かりしは、普選の威信を傷づけた事實であつた。塵芥も肥料に使ふ事が出來る。いかなる勢力をも善用すべきであるが、全體の普選熱を純化しなくてはならん。滔々としてとは概觀であつて、その實まじめな人も分子もかなり隱見した。吾人はこの純眞分子に普選運動の支配權を與へるやうに努めねばならない。

政治を商賣にする事は、普選の場合に於ても禁物だ。新政治の精神は、政治を正業化するにあるのだから。そして普選は新政治の踏みだしとしての意義を有するのだから、普選運動者は藝術家の如くに個性に忠實であり、農夫の如くに生産的でなくてはいけない。



藝術一家言

谷崎潤一郎

その三

凡そあらゆる藝術に於いて、技巧や形式は抑も末の問題であつて、それらの奥にある精神こそ最も肝要なものたることは云ふ迄もない、が、玆に忘れてならないのは藝術は一つの表現であると云ふ事實である。それが心の中に起り、心の中に終つてしまふのでなく、心の外へ發露する過程に於いて始めて藝術と云ふ形を取る。表現することが即ち藝術であつて表現を離れて藝術は有り得ない。だから繪を畫かない畫家、詩を作らない詩人など云ふ言葉は、形容詞としては受け取れるが實際そんなものがある譯はない。いくら藝術家的素質があつても、それを表現しなければ決して其の人は藝術家ではないのである。正しく視ること、深く感ずること、美に憧れること、想像に豐かなること、――此れ等も藝術家としての要素ではあるが、同時にそれらの結果を何等かの形に於いて生み出さうとする創作慾が伴はなければ、こ藝術家にはなれない。一と口に云へば感ずる力と生み出す力と、此の二つがどうしても必要である。而も此の二つは別別のものでなく實は一つの力であつて、感ずる力が強ければ強いほど其れを生み出さずには居られなくなり、生み出す力が働けば働くほど感じがハツキリと生きて動いて來る。故に藝術家に於いては、感ずることが生み出すことであらねばならない。生み出すことが感ずることでなければならない。歌はずに居られなくなつて歌ひ、描かずに居られなくなつて描きつゝある間に、歌ひ或は描きつゝある美の形がだんだん明瞭になり、それに對する感激がますます高揚して來るのを覺える、――さうして實に其の時こそ、藝術家の魂が永遠の世界に翺翔する瞬間であり、彼の全生命が無限の歡

喜に浸される刹那である。生み出すことの歡びを知らないで、どうして藝術家たるの資格があらうぞ！

私はこゝに繰り返して云ふ、——藝術家は常にその憧れの對象たる美の幻影を腦裡に描いて居る、が、それを生み出すところに藝術家の眞の生命があり、生み出す時に始めて、彼はその美をハツキリと感じ、正しく覗、完全に自分の物とすることが出來る。生み出す迄はまだ其の美をほんたうに掴んでは居ない。そこで藝術上の技巧とか形式とか文體とか云ふものは、美が生れると同時に當然備はるべき肉體であり、皮膚であり、骨格であつて、抑も末の問題であるとは云ふものゝ、それらがなければ美が存在しないことも事實である。技巧と云ふ言葉は屢々美を表現する方法であるかの如くに見做されるが、方法ではなくて寧ろ表現その物——美それ自身である。恰も皮膚や骨格が人間を作り出す方法ではなくて人間それ自身であると同樣である。卽ち或る形式を考へ、或る技巧を用ゐ、或る文體を練ると云ふこと其れ自身が直ちに美を生み出すことになると云へる。此れを逆にして云へば、生み出すことが直ちに形式を考へることであり、技巧を用ゐることであり、文體を練ることであつて、生み出されべき何物かはそれらの技巧や形式に卽して存在するのである。勿論生み出すべき何物をも持たないで徒らに技巧の末に苦心することは無駄であるが、ほんたうの意味での技巧と云ふものは、靈魂を離れて人間が有り得ない如く、精神なしに有り得るものでない。技巧や形式のある所には必ず何等かのエスプリがあり、生み出すことの歡びがそれらのあらゆる部分に滲透してゐなければならない。然らずんばその技巧や形式は死物であり贋物である。

技巧のうまいまづいや、組みたての上手下手や、文章の巧拙は、多く其の人の理智に依るもので、藝術家でも技巧のまづい人があり、藝術家でなくても組み立てのうまい人や、名文家があると云ふ風に思はれて居る場合が多いが、それは少くとも藝術の範圍に於いては間違つた考へである。藝術上の技巧、藝術上の組み立て、藝術上の文體なるものは、必ず藝術的感激それ自身が迸り出たものであつて、冷めたい理智から編み出されるものではない。藝術は事實の記錄ではなく美を創造するのであるから、其處に生み出された美は一個の生物で——一個の有機體でなければならず、既に生

物である以上それはそれ自身に於いて統一された完全なものであり、部分は全體を含み全體は部分を含まねばならない。部分が成り立つと同時に全體が成り立ち、全體が成り立つと同時に部分が成り立つ。たとへば色と光の如きもので、その本質はもともと一つである。この故に眞の藝術品に於いては、一點一劃の間にも作家の全生命が宿つて居ない筈はなく、既に全生命が宿つて居るとすれば、その技巧なり文體なり組み立てなりは、たとへ一見して拙劣のやうに見え不均整のやうに見えても、その作家が現はすところの箇有の美に取つては完全なものであり、その美が生きて行く爲めにはさうでなければならない筈のものである。だから『技巧はうまいが内容は乏しい』などと云ふ事實は有り得ないのであつて、内容が乏しければいくら技巧がうまさうに見えても實は拙劣なのである。技巧や形式は抑も末の問題だと云ふのは、實に此の意味に於いてのみ眞理である。

上述の如き譯であるから、私が或る作物を批評する場合に、技巧や組み立てを論じて居る時でも實は精神を論じて居るのであり、精神を論じて居る時でも實は技巧や組み立てを論じて居るのだと云ふことを、讀者は暫くも油斷なく念頭に置いて頂きたい。嚴格に云ふと藝術品の如き生物の機能を部分々々に分けて見て何處がいゝの何處が惡いのと指摘することは不可能であつて、惡ければ全體が惡くよければ全體がよいと云ふより外はないのだが、便宜上已むを得ず解剖して見るのである。で、私が假りに『明暗』を惡いと云つたとして、『何處が惡い?』と突つ込まれた時に正直な答をすれば「何處が惡いと云ふ譯に行かない、全體が惡いのだ」と云はなければならない。それ以上精しく説明すると、どうしてもその説明はうそのものになる。それは言葉と云ふものが或る固定した概念をしか現はすことの出來ない不完全な代物だからである。私はその不完全を承知の上で敢て批評して見るのであるが、どうか文字にのみ囚はれずに、文字の蔭にある機微を理解して貰ひたいと思ふ。

さて、私に云はせると『明暗』はその組み立てがうその組み立てであつて、其處にはたゞ作者の巧緻なる理智の働きがあるのみである。しかし作者は頭腦の明晰な學者であるから、その理智に依つて編み出された組み立ては、頗る整然

たるものであつてもいゝやうに思はれるが、その實『明暗』の組み立てたのや恰も息切れのする老人の歩調のやうに、よろよろした、力のない、見るも氣の毒なものである。分量から云へば可なりの長篇であり、中に出て來る人物も多いに拘らず、作者は明かに此の複雜なる建築材料を持て扱つて、到るところでてこ摺つて居る。此の事實は、いかに明晰な理智の持ち主であらうとも、作者に藝術的感激がない時には、決してほんたうの組み立てを編み出すことが出來ないと云ふことを、適切に證據立てゝ居るやうに思へる。

凡そ完全なる組み立てと云へば、一部分の絲を引けばそれが全體へさし響くやうな、脈絡あり照應あるものでなければならない。一局部を壞せば全體が壞れてしまふほど密接な關係で、部分々々がシツカリと抱き合つて居なければならない。組みてと云ふと、或る靜的狀態――或る形を想像するが、形よりは寧ろ力である、緊張し切つた力の持ち合ひである。然るに『明暗』の組み立てはどうであるか？　何處にそれほどの力があるか？　あの中の部分々々は、其の一つを削り去つたら全體に影響するほど充分に絡み合つて居るか？　徒らに幹を太くし、枝を繁くし、葉を多くしても、全身に行きわたる生命がなかつたら、それは畢竟枯木であるか造り物である。

『明暗』の作者は、物語の筋を進めて行くのに滑稽なほど論理的であつて、その爲めにちよいと見ると組み立てが整然として居るやうに感ぜらるけれども、實はその論理が却て筋を不自然にさせ、凡べてを造り物にさせてしまつて居る。あの中に出て來るいろいろの眩しい事件にしても人物にしても、凡べてがトゲトゲしく堅苦しい理智に依つて進行し動作して居て、而もその事件や人物が一向生き生きとした感銘を與へない。それは作者が眞の人生眞の人間を見ず、理智以外の何物をも持つて居ず感じて居ないからである。たとへば主人公の津田と云ふ男の性格はどうであるかと云ふに、極めて贅澤な閑つぶしの煩悶家であるに過ぎない。作者は第二回の末節に於いて豫め物語の伏線を置き、津田をして下のやうなことを獨語させて居る。――

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行たに違ひない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ひない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに。偶然？　ポアンカレーの所謂複雜の極致？　何だか解らない」

彼は電車を降りて考へながら宅の方へ歩いて行つた。

此れが津田の煩悶であつて、事件は此れを樞軸にして廻轉し、展開して行くかのやうに見える。が、作者は此の伏線の種を容易に明かさないので、ところどころに思はせ振りな第二第三の伏線を匂はせながら、津田にいろいろの道草を喰はせて居る。若しあの物語の組み立ての中に何等か技巧らしいものがあるとすれば、此れ等の伏線に依つて讀者の興味を最後まで繫いで行かうとする點にあるのだが、その手際は決して上手なものとは云へない。讀者は第一の伏線に依つて、津田が現在の妻に滿足して居ない事と、彼には曾て他に戀人があつた事とを暗示される。さうして其處から何等かの葛藤が生ずるのであらうと豫期する。ところが津田はそれとは關係のない入院の手續きだの、金の工面だのにくよくよして、吉川夫人を訪問したり、妻の延子と相談したりしてぐずぐずして居る。と、第十回に於いて、突如として吉川夫人の口から第二の伏線が現はれる。

「嘘だと思ふなら、歸つて貴方の奥さんに訊いて御覽遊ばせ。お延さんも屹度私と同意見だから。お延さんばかりぢやないわまだ外にもう一人ある筈よ、屹度」

津田の顏が急に堅くなつた。唇の肉が少し動いた。彼は眼を自分の膝の上に落したぎり何も答へなかつた。

「解つたでせう、誰だか」

細君は彼の顔を覗き込むやうにして訊いた。彼は固より其誰であるかを承知して居た。……

此の第二の伏線は、津田が吉川夫人に暇乞ひをして自宅へ歸る途中に於いて、再び彼の頭の中で繰り返される。――

彼は歩きながら先刻彼女と取り換はせた會話を、ぽつりぽつり思ひ出した。さうして其或部分に來ると恰も炒豆を口に入れた人のやうに、咀嚼しつゝ味はつた。

『あの細君はことによると、まだあの事件に就いて、己に何か話をする氣かも知れない。其話を己れは聞きたくないのだ。然し又非常に聞きたいのだ』

彼は此矛盾した兩面を自分の胸の中で自分に公言した時、忽ちわが弱點を曝露した人のやうに、暗い路の上で赤面した。

が、此の先へ來ると又も金の工面だの病院の光景だの、それに關聯して岡本だの藤井だの堀だの吉川だのと云ふ家族の人々や一種不思議な小林と云ふ人物だのが飛び出して來て場面はます／＼賑やかになるが、所謂あの事件なるものは當分の間何處かへはぐらかされてしまつて居る。けれどもはぐらかされたが爲めに讀者の好奇心は愈々募るかと云ふに、さう註文通りには行かない。なぜなら、その金の工面を中心にして開展するところの光景や人物が餘りにくだ／＼しく下らないからである。津田にしても、延子にしても、津田の妹の秀子にしても、僅かばかりの金の調達や遣り取りをするのに、恐ろしく面倒な議論を戰はしたり、技巧を弄したり、智慧くらべをしたりする。出で來る人間も出て來る人間も物を云ふのに一々相手の顔色を判じたり、自他の心理を解剖したり、妙に細かく神經を働かせたりして、徹頭徹尾理智に依つて動いて行く。

其時津田はそれ迄にまだ見出し得なかつたお秀の變化に氣が附いた。今迄の彼女は彼を通じて常に鋒先をお延に向けてゐた。兄を攻撃するのも嘘ではなかつたが、矢面に立つ彼を餘所にしても、背後に控へてゐる嫂丈は是非射留めなければならないと云ふのが、彼女の眞劍であつた。それが何時の間にか變つて來た。彼女は勝手に主客の位置を改めた。さうして一直線に兄の方へ向いて進んで來た。

此れはお秀が金を懷ろにして病院へ見舞ひに來た折の一節であるが、一例を擧げると先づこんな風である。彼女は結局その金を兄に貸してやらうと思ひながら而も容易にそれを出さない、津田も金が欲しいくせに中々それを受け取らうとしない、さうしてお互ひに腹の中を搜りつこして居る。勿論其處には金の問題に纏綿して、津田と兩親との仲違ひと云ふ事實があり、お秀はそれに就いて兄に忠告をしに來たのでもあらうけれども、その忠告を云ひ出す前後にさまざまの小うるさい懸け引きがあつて、肝心の忠告が出て來る迄には非常に入り組んだ手數がかゝる。一體お秀と云ふ女は、忠告するのが目的なのか兄貴をヤリ込めるのが目的なのか分らないほど無闇矢鱈に理窟を云ふ。彼女は金の問題や兄の親不孝を痛切に心配して居るのでなく、たゞ議論の爲めに議論して居るのだとしか思はれない。

『解りました』

お秀は鋭い聲で斯う云ひ放つた。然し彼女の改まつた切口上は外面上何の變化も津田の上に持ち來さなかつた。彼はもう彼女の挑戰に應ずる氣色を見せなかつた。

『解りましたよ。兄さん』

お秀は津田の肩を揺ぶるやうな具合に、再び前の言葉を繰り返した。津田は仕方なしに口を開いた。

『何が』

「何故嫂さんに對して兄さんがそんなに氣を置いてゐらつしやるかと云ふ意味がです」

津田の頭に一種の好奇心が起つた。

「云つて御覧」

「云ふ必要はないです。たゞ私に其意味が解つたと云ふ事丈を承知して頂けば澤山なんです」

「そんならわざわざ斷る必要はないよ。默つて獨りで解つたと思つてゐるが可い」

「いゝえ可くないんです。兄さんは私を妹と見做してゐらつしやらない。お父さんやお母さんに關係する事でなければ、私には兄さんの前で何にもいふ權利はないものとしてゐらつしやる。だから私も云ひません。然し云はなくつても、眼はちやんと附いてゐます。知らないで云はないと思つてお出でだと間違ひますから、一寸お斷り致したのです。」

讀者は此れを讀んで、女書生が揚げ足の取りつこをして居るんだと早合點をしてはならない。此れが作者に從へば「器量望みで貰はれた丈あつて、一つ年下のお延に比べて見ても」若く美しかつたところの、さうして一面には又お延よりも心が世帯染みて居て、四歳の子持ちであるところのお秀の口吻なのである。——

然し二人はもう因果づけられてゐた。何うしても或物を或所迄、會話の手段で、互の胸から敲き出さなければ承知が出來なかつた。ことに津田には目前の必要があつた、當座に迫る金の工面、彼は今其財源を自分の前に控へてゐた。さうして一度取り逃せば、それは永久彼の手に戻つて來さうもなかつた。勢ひ彼は其點だけでもお秀に對する弱者の形勢に陷つてゐた。彼は失はれた話頭を、何んな風にして取り返したものだらうと考へた。….

話は容易く二人の間に復活する事が出來た。然しそれは單に兄妹らしい話に過ぎなかつた。さうして單に兄妹らしい話は此場合彼等に取つて些とも腹の足にならなかつた。彼等はもつと相手の胸の中へ潛り込まうとして機會を

待つた。

然し、彼等は斯くの如く口を利く度びに機會を待つたり、形勢を覗つたりして、互ひに弱者になるまいとして苦心してゐる、まどろつこしいこと夥しい。

『兄さん、あたし此所に持つてゐますよ』

『何を』

『兄さんの入用のものを』

『左右かい』

津田は殆んど取り合はなかつた。其冷淡さは正に彼の自尊心に比例してゐた。彼は精神的にも形式的にも此妹に頭を下げたくなかつた。然し金は取りたかつた。お秀はまた金はどうでも可かつた。然し兄に頭を下げさせたかつた。勢ひ兄の欲しがる金を餌にして、自分の目的を遂しなければならなかつた。結果は何うしても兄を焦らす事に歸着した。

こんなに手數がかゝつては焦れるのは兄ばかりでなく、讀者も亦焦れざるを得ない。津田と云ひ秀子と云ひ、全く入らざる事に智慧を使つたり技巧を弄したりして居る。さうして作者は、かう云ふ會話なり人物なりのいきさつを御鄭寧に描くことを以て、何か高尚な意義のある事とでも思つて居るらしい。思つて居ない迄もさう見せかけて居るらしい。それが私には溜らなく不愉快に感ぜられる。

(以下次號)

虐殺團パルチザンの研究

パルチザンの正體と露國人の虐殺性

昇曙夢

今日問題となつて居るパルチザンは、パールチヤと云ふ語から出た言葉で、パールチヤは、本來黨派、若くは徒黨、同類と云ふ意味を持つた言葉で、それが更にパルチザンと云ふ語になつて、軍隊で用ひられて居る。パルチザンは正規軍に對して遊撃隊、若くば別働隊とでも譯すべき言葉で、戰爭の場合には奇兵隊の任務を行つて居る。此のパルチザンの起りは一千八百十二年ナポレオンが、露西亞に侵入してあの通り非常に見苦しい敗北をして、撤退する折に普通の人民や農民が、パルチザンなるものを組織して、諸所方々でナポレオン軍の退路を遮つて非常に彼等を苦しめたものである。之れが露西亞に於けるパルチザンの起りであるが、しかし同じパルチザンでも、今日西比利の山野に出沒して良民に危害を加へて居るパルチザンとは違つて、ナポレオン侵入當時のパルチザンは愛國の至情から發したもので、唯一意祖國をナポレオンの魔の手から救はうと云ふ熱心に動かされて、普通の民衆が起つたのだ。さうして到る所に於て、其當時も非常なる慘虐な事を行つた事は行つたが、それが爲めに、ナポレオンの敗軍は散々な目に遭つて、遂々アノ通りの見苦しい敗北を遂げたのである。此の時のパルチザンの功績は、殆んど哥薩克兵と並び稱せられたもので、ナポレオンの大敗も一にパルチザンのお蔭であつたとも云はれて居る位である。

其の後久しくパルチザンの事に就ては、餘り歷史の上に現はれて居ないが、最近西比利の政變に乘じて現はれた一種の土民軍、即ち赤衛軍を稱して、パルチザンと云つて居る。勿論ナポ

レオン侵入當時のパルチザンと、何等の關係もなければ、何等の系統を有して居るものでない。唯彼等は、外國の干渉を郤けて、外國の束縛から祖國を救ふと云ふ、一つの望みを以て居るからして、ナポレオン軍を苦しめたパルチザンの名を借りたものであらうと思はれる。西比利に出沒して居るパルチザンなる者は決して今日始まつた譯ではない。新聞紙などではニコライエフスク事變から、特に注意を引いて居るやうであるが、しかし、之れは要するに、コルチヤツク政府當時、之れに反對した土民軍の變形したもので究り革命軍である。其の頃から之れを過激派と稱して、日本軍などは盛んに討伐したものであるが、今年二月オムスク政府が沒落して、西比利の政情が一變し、革命軍も益々惡化した丈けの話で、モウ既に此の種の徒黨はオムスク政府時代に、彼地此地に蜂起して居つたのである。

而して此のパルチザンの內容——組織は、素と鑛山に使役されて居つた坑夫や、同じ鑛山に勤めて居つた支那人や、朝鮮人、それに免囚露人とマギヤール人と、それから更に農村の壯丁を狩り集めて組織した土民軍で、其の隊長には、外國の干渉や、或は、西比利の政府に對して、不滿を懷いて居る人物などが當つて、かなり相當な人も居るやうに思はれる。現に去る四月四五日頃の、浦鹽騷動の際に、行衞不明になつたラゾーの如きは、パルチザンの總大將であつて、彼れはセミヨノフと共に極東の兩傑と言はれて居る程の人物で、ラゾーは無論變名であるが、素と露西亞の大地主の長男に生れ、何等の不自由なき身であつたのに、一旦共產主義に傾いてからは、露西亞の革命の擾亂に乘じて、極東に現はれ、西比利の山野に出沒して、頻りに機を狙つて居つたのである。之れが今年初頭に西比利政變の際浦鹽に現はれて、メドウエーゼフ政府の軍事會議員となつて、非常なる勢力を振つて居たのであるが、遂に此の間の騷動の時行衞不明になつたのである。巷說の傳ふる所に據ると、日本の俘虜になつたと云ふ話もあれば、又、日本軍の爲めに殺されたと云ふ說もあるが、今日に至る迄、行衞は依然不明になつて居る。恐らく姿を晦まして、例のパルチザンに加はつて林中生活でも送つて居るものであらうと思はれる。セミヨノフですらラゾーには一目置いて居ると云ふ位の奇傑で、パルチザンの總大將としては、最も適當の人物であるらしいが、斯う云ふ人物がパルチザンの中に這入つて居る所を觀ると、必ずしも之れを馬賊のやうなものだと見下る譯には行かないものである。尤も露西亞でも、最近のパルチザンを稱して、露西亞馬賊とか、

又は政治ゴロの集團だと稱して居るけれども、之れは反對側の言ふことで、實は却々侮り難い勢力を有する赤衛軍なのである。其の多くは言ふ迄もなく共産主義を奉じて居るもので、極東共産黨員が大部這入つて居るやうに見受けらるゝ。と云つて必ずしも中央露西亞のボルシエウヰキーと直接の聯絡があるものとも思はれない。何にしても彼等が非常に兇暴なる性質を持つて居ることは事實で、最初から資産階級や、知識階級を脅かし、聯合軍を惱まして居つた事は隱れもない事實で、場合に依つては虐殺もすれば、掠奪もし、强姦もすると云ふ不逞の徒の集團である。確か昨年の一月であつたと思ふが、ブラゴエシチエンスクの北方アレキセフスク近傍で、我日本軍の一個小隊が此の土民軍の爲めに全滅した事實もあり、又露西亞の所謂民軍が、二十五名も渠等の毒手に虐殺された事もある。さう云ふ事實を考えて見ると、渠等はどうしても既に相當の訓練もあり軍隊の組織を爲して居つて、何處から手に入れたかは判らぬが、兎に角武器も相當に有して居るやうである。斯う云ふ不逞の兇徒の中にどうして農民の壯丁が多數を占めて居るかと云ふに、それは無論進んで此の團隊の中に這入つた者もあらうが、又一つには强制的に渠等を狩り集めたものらしい。さうしてさう云ふ殘忍なる空氣の裡に馴されて、平和な農民までが遂々あゝ云ふ兇暴なる性質を受けるやうになつたものと見へる。

　渠等は普通森林生活をして居ると言はれて居るが、必ずしもさう許りとは限らない。西比利の如き森林地帶でも、三里とか或は五里とか云ふやうに隔つて、大抵小さな農村の部落が出來て居る。それに農民の壯丁が既にパルチザンの中心を爲して居る以上、農民の同情があるから奥深い部落で自由に生活することが出來る。幾等パルチザンの如き徒黨でも、零下何十度と云ふ西比利の酷寒に於て、單に森林生活をすると云ふ事は受け取れない話である。斯う云ふ徒黨は前にも言つた通り、既にオムスク政府時代から諸所方々に起つて居るので、今日は唯變形してパルチザンと稱して居るといふ丈の違ひで、近頃遽に筍のやうに現はれた譯でない。さうして此のパルチザンは大體に於て、烏蘇里（ウスリー）地方のパルチザンと。アムール地方のパルチザンとに別ける事が出來る。

　アムール地方のパルチザンは鑛山坑夫や、免囚者を中心として居る丈けに餘程兇暴な性質を持つて居る。以前から我軍を苦しめた徒黨も、アムール側に屬するもので、此の側のパルチザンの中心はブラゴエスチエンスクを中心として居る地方で、

從つて此の邊りでは以前から慘澹たる虐殺や、掠略や强姦などが絶えないやうである。烏蘇里地方のパルチザンは、アムール側に比較すると、餘程溫和で、之れはイマン地方を中心として居るらしい。尤も蘇城（スーチャン）地方には兇暴なる團體が居るやうであるが、之れを外にしては、兎に角蘇烏里（ウスリ）線に沿ふたパルチザンは比較的穩健で、中には日本軍に厚意を表して居るものもあると聞いて居る。又其の內には俠客肌を備へて居るやうな連中も尠くないやうである。

ソコデ話はニコライエフスクの事件に移つて行くが當の問題となつて居るニコライエフスクのパルチザンなるものは、どう云ふ徑路を以て居るかと云ふに、今日未だ確實なる詳報に接して居ないが、惟ふにアムール側と烏蘇里（ウスリー）側のパルチザンの中で、最も兇暴なる連中が、ニコライエフスクの方へ出掛けたらしく思はれる。それも此の多季中は氷雪の爲めに通行は出來ないから、昨年の遲くとも秋あたりには既にニコライエフスクに這入つたものと見なければならぬ。それ以來渠等は、ア、云ふ政權の行き屆かない、そして守備の不完全な處へつけ込んで、段々惡い事をして居つたらしいが、遂に三月十二日の革命紀念日に乘じて言ふに忍びない慘劇を演じたのである。之れは渠等に假令如何なる理由があるにせよ、人道の上から言つて到底許すべからざる大罪惡であつて、露西亞革命の一大汚點である。其の事に就ては、既に事實其のものが充分に語つて居るから、餘り多くを言はないが、唯渠等が烏合の衆とでも云ふべき寄せ集めの團體でありながら、アレ程に强いのはどう云ふ譯であるかと云ふに、それは主として渠等の行動が、卽ち命懸けであるからで、渠等は素々不逞の徒であるから、平素命を惜しいとは思ふて居ない。其の上に若し一旦敗けたとなれば、無論命はないものと覺悟して居るから、一度渠等が、敵に當る場合は、背水（はいすゐ）の陣を張つて、一命を賭して死物狂ひになつて當るから、充分訓練を經た軍隊に取つても、渠等は非常なる大敵として現はれる。況んやニコライエフスクの如き、守備隊の少い所に於ては、到底渠等に敵すべくもないのである。ニコライエフスクのパルチザンの隊長は、トリヤピーチンとか言ふ者であるさうだが、此の人物の素性に就ては、未だ充分判つて居ない。恐らく極東共産黨の一人であらうかと思はれるが、彼れの下に參謀長となつて居つたニーナ・レベジョワは婦人共産黨員で、未だ年は二十四五歳ではあるが、餘程兇惡なヒステリックな女のやうに見受けられる。彼女は男裝して居つたと云ふことであるが、

それは共產黨婦人に取つて有り勝の事で、さう云ふ種類の女は未だ外にも幾人か加はつて居たゞらうと思はれる。不思議にパルチザンの方では、隊長の助手となつて居るものは大抵女で、而も容貌の最も綺麗な婦人を二人位選んで使つて居る。それは要するに共產黨員の中に婦人も澤山這入つて居るから、自然それがパルチザンの方にも這入つて來たのだらうと思はれる。唯渠等の此の行動がニコライエフスク事件に觀るが如き、餘りに殘忍酷薄を極めて居るので、世間往々之れをどう云ふ譯であるかと問ふ人もある。

之れには無論色々の原因があつて一概には話されないが、第一は露西亞人の國民性からも來て居る。露西亞國民性の特徴は、一口に言ふと、矛盾と云ふ一語に盡きる。卽ち露西亞人は、同じ心の內に二つの反對な性質を宿して居るのである。彼のドストエーフスキーや、其の他の文豪の作物に現はれて居るやうに、渠等の中には神と惡魔とが、同時に宿つて居つて、或時には、神のやうな極めて善良な性質が現はれるが、或時には、惡魔のやうな兇惡な性質が現はれると云ふ風で、常に渠等の生活は、極端から極端に走つて居る。中庸と云ふ事を、全く知らない國民である。それは一つは渠等の內に意志の力が缺けて居るので、統禦力とか、或は、自制力と云ふものが少しもない、それが爲めに渠等の性情は、何時も中心を失つて、一旦一方に傾くと、極端まで行かなければ止まない、それを抑止することが出來ないのである。であるから渠等は時としては、神のやうな、聖者に觀るやうな、實に氣高い、崇高な性質を以て現はれるが、また時としては同じ人物が、まるで惡魔のやうな、殘忍な野獸性を發揮することがある。假令ば今敎會に這入つて、心から涙を流して、神に祈つて居つた人が、一旦敎會を出て酒の匂ひでもすると、忽ち居酒屋に入り込んで、散々飲だくれた揚句の果てには、人殺しをすると云ふやうな事が能く有る。それが永い間の政治上、社會上の原因と、其の國の自然の影響とに依り、凡ての事が最も深酷な、最も沈痛な色を以て現はれて來る。であるから露西亞人に於ては善良なる性質も極端まで達するが、惡魔のやうな野獸性も極端まで、ドン底まで行かなければ止まない。其の場合渠等は最早人間では無い、全く野獸となつて居るのである。故に露西亞に於ては、元來宗敎國でありながら、犯罪も隨分多く行はれて居る、其の犯罪が亦一通りの犯罪でなく、隨分獰猛な性質を以て現はれる。假令ば其の一例を取つて見ると、ドン河地方で起つた事であるが、或田舍の婦人

が、自分の夫が、教母と通じて居ると云ふ事を知つて、或日、復讐しやうと云ふ目的で、其の教母をお茶の御馳走に招いた。で教母は行つて見ると、食卓には茶の仕度はなく、鞭や、ナイフや、馬の毛を掻く括淨器のやうな物騒な器具が乘かつて居る。軈て件の主婦が出て來て、是からお茶を御馳走しやうと云ふが早いか、直ぐに教母の胸倉を攫んで、散々髮の毛を挘り、鞭を取つて太たか叩き付け、そこへ主婦の甥も加はつて、二人で一緒に教母を毆つた上に、眞裸體にし、土間へ引摺出し、甥が對手を押へて居る間に、主婦は括淨器を取つて脚の肉を骨の出るまで削り落し、更にナイフを以て顏と言はず身體と言はず手當り次第に斬り虐んだ上、更に硫酸を呑まして、甥と二人で、其の屍骸を人通りの少い往來の眞中へ擔ぎ出して晒したと云ふ事である。斯う云ふ事は露西亞の田舍で能くある事で、日本あたりであれば、僅かに痴話喧嘩位で濟むのを、露西亞に於ては、一旦感情が激發するとドン底まで行かないと止まないのである。しかし渠等は一面に於て、神のやうな性質を以つて居るから、一旦野獸性が靜まると、神の性質が現はれて來て、今度は極度に前非を悔ゐることになる。さう云ふ點は有名な露西亞の皇帝で、イワン暴帝の性格にも代表されて居る。或る時彼れが發作に陷つて居る所へ、ヘオドル王子が這入つて來ると、突然王子に向つて鉾を投げた。其の瞬間、彼れの發作は止んで、自分の今の仕打に、非常な恐怖を懷いて、傷付た王子を抱へた儘、眼の飛び出る程驚くところがある。そこをレーピンと云ふ有名な畫家が描いたのが、或美術館に揭げられて、今でも人の心膽を寒からしめて居る。斯う云ふ矛盾性と云ふか、極端性と云ふか、兎に角他の國民に觀る事の出來ない性質が露西亞人には、誰にでもあるので、單に其の一面を觀て、露西亞人を評すると云ふことは出來ないのである。要するに西比利や、乃至、ニコライエフスクに於けるパルチザンの行動は、露西亞人の此の深刻な野獸性、若くは極端なる殘忍性が、最も極度に現はれた一例と見て宜からうと思ふ。

しかし國民性と云つても普通の露西亞人に於ては、アレ程慘虐な、深刻な所までは行かない。假令そこまで行つた所で、直ぐ眼覺めて悔い改めるのが普通である。假令ば革命後は、能く露西亞にある事實だが、途中で强盜や、剽盜に出會はす事があある。或時一人の貴夫人が、途を通つて居る處を剽盜が狙つて、其の着物から、持ち物全部を掠奪しやうとする。冬の事で、且つ夜間ではあるし、非常に寒かつたので、夫人が其の事情を訴

へると、覇盜も同情して、それでは家まで一緒にお伴しやうと云つて、夫人の家の門前まで來ると、もう此處なら凍え死にするやうな虞れはあるまいと言つて、夫人の着物を脫がせ裸體にさせて持つて行つたと云ふ話もある。又或人殺しは野獸性の發作した儘に人を殺して、其の持ち物を取らうとする瞬間、俄に菩提心を起して、十字を切りながら、殺した屍骸にしがみ付いて、頻りに詫びをしたと云ふ話もある。斯う云ふ風で露西亞人の殘忍性なるものは、一時の發作に依り、隨分極端まで行くには行くが、直ぐ後から善心に立ち歸るべき性質の殘忍性である。所が近來西比利や、ニコライエフスク事件などで見るパルチザンの虐殺性は。普通の露西亞人の殘忍性と餘ほど違ふやうに見受けられる。それは無論違ふ筈である。と云ふのは、元來、西比利の住民なるものは、多くは元の政治犯とか、强盜殺人と言つたやうな兇惡な種類の罪人の子孫であつて、歐露の露人と比較して、餘程兇暴な性質を以て居る、其の中の更に最も兇暴な分子がパルチザンの中心を爲し、それに、支那人や、朝鮮人の如き不逞の徒が加はつて居るから、アレ程の、殆んど之れを考へるだに戰慄するやうな慘劇を演じたものであらうと思ふ。であるから之れを一概に露西亞人の國民性の表現として見る譯にも行かない點がある。それと今一つ斯う云ふ事態を現出した主なる原因がある。それは五ケ年間に亘る歐洲戰爭から引續いて革命となり、其の後今日に至るまで數年間も戰爭と、流血と、饑餓と、疫病とに苦しめられ、其の上、又意に滿たない政府を戴いてその束縛と、壓迫との下に、長い間苦しんで居る結果、渠等の心には、非常な不滿と、不平と、復讐の焰とが、燃え立つて、到底尋常一樣では解釋の出來ない心理狀態に到達して居る。それでなくてさへモウ好い加減神經過敏に陷つて居るのだから、渠等が、或機會に於て兇行を演ずるのも無理ならぬ所もある。ア、云ふ狀態に七八年も苦しめられて居つては、モウ大抵半狂者位になるべき所を、未だ幾分平靜を保つて居るあたりは、本來呑氣な露西亞人でなければ見られない現象であらうと思ふ。けれども、幾等呑氣な露西亞人でも、斯う云ふ狀態が永い間續いて居ては、全くの狂人か野獸に陷らざるを得ない。それに毎日眼の前に於て、同胞の流血を眺め、一方からは生活の脅威に威かされて、一家眷族離散して、殆んど惱むるものもないと云ふ極端なる境遇に置かれては、氣が狭くなるのは、自然の結果であらうと思ふ。此の點に於ては、充分渠等に平素から同情を表して居る私の如きも、ニコライエフスクの

慘劇を聞いては、實に戰慄せざるを得ない。
　無論それには日本の出兵と干涉と日本軍の行動とに對する露人側の妙に拗き違へた不平と遺恨と復讐とが主なる動機を爲して居るには違ひないが、それにしても斯かる慘虐な行動に對しては殆んど辯解の餘地がない。唯露人側の情報で見ると、パルチザンが尼港附近のチヌイラフ要塞を占領したのは二月始めで、それから約一ヶ月の間彼等は戰鬪を交へずに尼港を包圍して居る。そして其間に三回ほど日本軍に勸降使を送つて平和の局を結ばうとした。所が日本側からは何等の回答に接せず、おまけに勸降使は殺されたとなつて居る。そこで止むを得ず砲擊を開始したが、その開始後に至り始めて日本側から講和を申込んで來たので、そこで平和條約が成立した。そして双方の關係は爾來極めて親密であつたが露國革命紀念日(三月十二日)の前夜パルチザンが特に外宿を許された日を選んで夜半三時頃日本軍の大部隊が突然襲擊して來た爲に遂にあゝいふ大慘劇を演ずるに至つたとなつて居る。是れはロシヤ側の報告で素より之を信ずることは出來ないが、然し斯くなる以前に於て何等か解決の途、救ひの方法はつかなかつたものかと思はれんでもない。然し今は後の祭りでいくらくやんでも致方がないことだが。

　何にしてもアゝ云ふ世界的犯罪を、生み出しつゝある露西亞――特に最近西比利の狀態は、實に困つたものである。之れを露西亞人自身の手に任して置いては、百年淸河を待つやうで、何時片付くか到底判らない。と云つて大兵を繰り出して、危險地帶を占領すると云ふ事も、國際の關係上面白くない事であらうと思ふ。と云つてアノ儘放任して何十年も、西比利の狀態が片付かないで、自然隣接して居る日本が永い間脅威を受けるやうでは、日本の爲めにも、露西亞の爲めにも良くないことであるから、此の際、私の考へとしては、日本がモット積極的に出て、充分に援助を與へて、完全な政府を一日も早く極東に建設することが必要であらうと思ふ。それが爲めにはモット出征軍を增員しても差支へないと思ふ。侵略とか、占領とか、又は土地の割讓とか云ふ野心を、全然ヌキにして、正義人道の名を以て、極東西比利の亂脈狀態を平定して、露西亞人を安心せしめ、同時に彼の地にある我同胞を安堵させると云ふ事は、今では全く、我帝國の上に掛つて居る義務であつて、之れに向つては諸外國も、決して口を差挾むやうな事はなからうと思ふ。

パルチザンとは何？

大庭柯公

今度の尼港の慘劇に限つて、我が陸海軍公報は、過激派軍の名を一切用ひずに、特にパルチザンの稱呼を以てしてをる。米國系の英字新聞アドヴアタイザーから、西伯利問題について目の敵のやうに言はれてをる高柳少將の如きも、哈爾賓からの電報によると、その感想談中に『目下内地ではパルチザンと過激派とを同一視し居る傾あり而もパルチサンは過激派とは別種の虐殺團とも稱すべきもの』と言つてをる。つい最近まで過激派を不倶戴天の仇のやうに言ひもし、扱ひもしてゐた高柳少將――過激派の眼から見たら、時には日本のパルチザンのやうにも見えたであらうアノ高柳少將が、今更過激派をパルチザンから區別するなどは、時勢の推移に促されてのことであらうが、陸軍省の公報が今度に限り、急に敵の稱呼をパルチザンと改めたことは、露西亞事情研究の結果か、抑も亦過激派への遠慮か。クラシンといふ露國勞農政府の代表者が、倫敦で殆んど國賓のやうな、又一國の大使のやうな待遇を受けてをる昨今、過激派の稱呼が他の名稱に變へられたとしたならば、それに就て此際一ト研究を要すると思ふ。

パルチザンとは何であるか、先づ其字義やら用法慣例について一應の吟味を要する。語源は拉丁語の Partisanus から出たもので、露語として用ひられてをるやうに、英語としても用ひられてをる。たゞ後者では多く政治的に使はれてをるに反し、露語に在ては軍用語として慣用されてをるやうである。無論英語としてもパルチザンといふ言葉に、「遊撃隊」といふ意義もあるには相違ないが、Partisanism とか Partisan Policy などと政治的に用いられる場合が多いやうに思はれる。丁度政友會の陣笠連のやうに、是が非でも黨議に盲從する風の政黨政治が、パルチザン・ポリシーではあるまいか。之に反して露西亞では從來多く軍用語として用ひられてをる。今私の手許にある

露國外來語辭書に就て、この語の註釋を見ると、『糧食所在の敵の本部隊より、敵の一部を隔絶せしむる目的を以て、其翼又は背後へ襲撃を試むる輕快なる獨立支隊』と註解されてある。此の解釋によると日露戰爭當時、かの營口を襲撃したミシチエンコ支隊のやうなものも、亦一種のパルチザンと謂へば言へると思ふ。

併し夫等は餘りに正式過ぎた解釋であつて、露西亞で常用されてをる「パルチザン」又は「パルチザン的（スカヤ）戰鬪（ワイナー）」といふのは、決して正式な軍隊ではなく、寧ろ有志的、義勇的な素人部隊を指すものである。有名な奈翁の莫斯科陣中日誌の一八一二年九月十七日——佛軍のモスクワ入都は九月十四日、同市の大火は其夜の事——の條に『三四百人の暴徒が市の諸所に火を放つた、それは莫斯科總督ロストプチンの命令によつて』とある。此場合こゝに謂ふ所の三四百人の「暴徒」こそは、露西亞で所謂「パルチザン」に相當する。

過激派軍東進後の西伯利に於ては、何時から又如何なる場合に、パルチザンの名を唱え始めたのか。所謂過激派の人々は、彼等同志の間には、お互に「タワーリシチ」（友、同僚、仲間の意）の稱呼を以てし、一般人民は過激派をボリシエウイキーと稱へてをることは勿論である。然らばパルチザンの稱呼は、露人が呼び始めたものであらうか、それとも日本軍人間の露西亞通が唱え出したものであらうか。恐らくは本舞臺（例令へば浦潮のやうな）から隔絶した場所（丁度ゼヤ地方のやう尼港方面のやうな）で、烏合的集團の出沒してゐたものを指して、本舞臺の者共がパルチザンと呼び做したものを、我が陸海軍の幹部で、何等かの目論見を立てゝ、尼港の事件に就て、殊更此の稱呼を專用することにしたのではあるまいか。

併しながら私は飽まで浦港の過激派も、イルクーツクの過激派も、尼港のパルチザンも、皆全然同一のものであることを確信するものである。言ひ換へれば私はパルチザン過激派同視論者である。結局浦港の蘆と尼港の濱荻とに過ぎぬものと確信する。たゞ疑問は何故それを、我が軍事當事者が今度に限つて、パルチザンと呼び始めたかに在る。現に事實に就て考へて見るがいゝ、勞農政府の成立以來、その軍事的支持者である所の所謂赤衞隊の編成如何を見よ。畢竟民衆が烏合的に武裝した集團に過ぎぬではないか。即ちこの場合本隊にあるものが赤衞軍で、敵の背面や翼やに出沒する獨立集團が、パルチザンであることは、見易き事實である。

唯この點に於て、歐露の事情と西伯利の事情との上に多少の相違はある。歐露の現在に於ては、本隊と支隊とは、假令如何にかけ離れてゐても、同一物であつて相互に聯絡を有するものであるが、西伯利現在の事情下では、多少とも趣を異にする。即ちゼヤのものはゼヤ、尼港方面のものは尼港附近のもので、孰れも其土地々々での自由集合武裝民に過ぎぬ。たゞ主義者としては、飽までもボリシエウイキーに相違ない。そして彼等が武裝し集團して、襲撃し來つた場合の彼等は、或意味に於て土匪であり馬賊であり野盜であるとも謂ひ得る。併しながら彼等は主義者としてはボリシエウイキーであるが、斯かる地方的の烏合集團であるために、特にパルチザンと稱呼するといふのなら、曩に黑龍江方面への我陸軍の出動の際、ゼヤ河方面へ敵を追撃した際の如きも、何故パルチザンの稱を以てしなかつたのであるか。ゼヤ方面へ出沒したものは過激派であつて、尼港の敵がパルチザンであつたとは、どう云ふ論理から言ひ得るか。

私はモー此の以上書くことを欲しない。たゞ倫敦には勞農政府代表のクラッシン氏が、案外重望を負ふて國際的商議に任じてをる。尼港の對岸サハリン（北樺太）には大石油田がある。この二つの全然かけ離れた事實が、案外かけ離れずに結び付いた結果が、今度に限つて特にパルチザンの稱を用ひるに至つた眞の理由ではあるまいか。（一九二〇・六・一四）

淫蕩なパルチザンの女

大泉黑石

パルチザン（Партизанъ）とは西伯利に居る過激派の別働隊のことである。昔モスクワがナポレオン第一世に襲はれた時に、モスクワの市街に火を放つて逃げたパルチザンが、今西伯利北端のニコリスク港で邦人を慘殺し市街を燒き拂つて逃げた

連中の先祖だとは思はぬ。私の考へではパルチザンなどゝ云ふ特別の軍隊又は團體が露西亞に始終存在するものとも思はれぬからである。元來パルチザンと云ふ露西亞語の意味は、「奇兵隊」とか「別働隊」とか「朋黨」と云ふことであつて、この二三年西伯利を荒し廻つてゐた過激派の中には、過激派の主隊でもなんでもない、云はゞ火事泥棒見たやうな手合が頗る多かつた。強いと云へば、これもパルチザンかも知れない。新聞で見るとこのパルチザン一味の團長株は妙齡の婦人で、名前をニーナ、ビジョーワと云ふさうであるが、悪い意味の勇婦だらう。元來露西亞は、氣候とか自然の變化が非常に急激で、而も一方の極端から極端へ走つてゐる故かも知れないが、兎に角、男も勿論のことだが、特に女の情性が周圍の情況に從つて、すぐ極端に走る傾きがある。聖人が居るかと思へば、今度の西伯利パルチザン一派のやうな野獸にも劣らない性格の人間が少なくないのである。これほど恐ろしく隔絶した性格の人間は、恐らく露西亞以外に見ることが出來ないだらうと思ふ。女で見ると、一方には理智的な理想で出來上つた女革命家アンナ・ペロヴスカヤやソフイヤのやうな女性もある。反對に非常な肉慾的な、亂淫放埒極まる女性がある。前者は概ね上流社會の婦人に多く、後者は下流に頗る多いのである。私の見當を以てすればパルチザンの女參謀ニーナ・ビジョーワといふ女は、乾度、この鈍重な低級な頭腦の女に相違ない。こんな部類に屬する女性は得て北部に多い處から考へて見ても左樣だらうと思はれる。所謂貴婦人型の女性には少ない。今度のニコリスク港の慘殺事件のやうな出來事は露西亞にはよくある事だ。曰く、ユダヤ人の大虐殺、曰くアルメニア人の大屠殺などゝ、露西亞の歴史は虐殺の連續で、他人から殺されないまでも、南露西亞のバク地方へ行くと「自己殺傷祭」などゝ云ふ宗敎的の盛大な儀式さへある位だ。それは、白衣を着て、自分の背中や首を斬つて流血のまゝで、市街をぞろ／＼列んで歩くことで、女でも子供でも拍手して見物する。こんな國に虐殺が流行するからと云つて少しも不思議ではないだらう。斬られたり、斬つたりすることに性的の嗜好を持つてゐる彼等彼女等のことだから、今度の事件のやうに、我々が戰慄すべき計劃も、案外平氣でやつたのかも知れない。どの小説であつたか今一寸失念したが、例のマキシム、ゴリキーの作物にユダヤ人大虐殺の光景を描寫したものがあるが、今回の出來事と少しも變る所がない。パルチザンが日本人に對する憎惡の念が高潮に達したので、丁度數百年前に

ナポレオンをやつつけたやうに、過激派の中から、こう云つたやうな非道な人間が出て來て、暴れ廻つたこと丶思ふ。今度の事件に就ても人種上の爭ひは別として置いて、たとへ敵とは云ひ乍ら、行り方が餘り酷過ぎると云ふので、パルチザンは悪魔のやうに憎まれ恨まれてゐる事は、丁度十七八年ばかり前に、キシネフと云ふ處で、ユダヤ人が虐殺された時に、その噂が各國に傳つて、ロシヤ國民は人道の上から大變非難されたことがあるのによく似てゐると思ふ。今度はユダヤ人でなくて、日本人だ。而も可なり大仕掛だ。悪い奴はパルチザンに違ひないが忠良なる日本人が、何百人となく悲業の最後を遂げたことに就て、責任が何處にあるかと云ふやうなことを私は、此處で言ふのではない、只パルチザンといふものと、例の女參謀長から、露西亞の特殊な女によく見る。こう云つたやうな悪魔的性格に就て感想を列べたに過ぎない。アルメニア人慘殺が、ビビ、エイパで演ぜられた時などは、とてもお話になつたものではなかつたのである。こう云ふ事件は主として地方に多い。而も國境の近くで行はれる。と云ふのも、ユダヤ人と云ひアルメニア人と云ひ、今回の如く日本人と云ひ、大低が、人種的の爭ひであるからだらう。彼等は大いに人道の上から責めなければならぬだらう。露西亞で行はれる虐殺事件とか、それに類した出來事には必ず無教育な淫奔な女が、關係してゐるのは、注意すべきことであらうと思ふ。ニーナ・ビジョーワにしたところで、さうだ。恐ろしい事だ。パルチザンの一味が犠牲者の女を裸にして躍らせたと云ふやうな新聞記事を見ても、この一味がいか、に無教育な低級な野良犬同然の烏合の衆だと云ふことも略察することが出來る。私はモスクワ市からナポレオン大軍を走らせた當年のパルチサンと此手合とを同一視する事が出來ない。

何故かと云ふと、ナポレオンのモスクワ占領以後に於て先年の歐州大戰爭にも、獨逸との戰線に出沒した所謂パルチザンなるものがあつた。けれども、それはナポレオン時代のパルチザンと何等の系統も何等の交渉もない。また讀者も知つてゐるであらうが、ペトログラードで組織された女兵士の大隊や職工の志願兵團なども、パルチザンだ。然し、お互に何の血脈も通じて居なかつた。女兵士の大隊にしても、女大隊長マリア、ボチカレワ女史は無學な勞働者の女房であつたが、品性の高潔な處は、ニーナ・ビジョワと比較することが出來ない。勿論ニコリスク港のパルチザンと何の關係もあるべき筈ではないのである露西亞の勞働社會（と云つて農民ではない）に多く見る獣のや

うな女、殆んど肉塊同然の女、淫蕩虐殺の崇拝者である女、その精力に於ても、策略に於ても男性を遙かに凌駕してゐる女の一人として私はニーナ・ビジョーワを觀てゐる。要するに牝の狼だ。

「パルチザン」の虐殺

片上伸

さういふことになりはしないかと思つてゐたことが遂に事實となつてしまつた。ニコラーエフスクに於ける不幸な出來事がそれである。この出來事の原因、その責任の所在、その善後の處分といふやうなことに至つては、吾々は十分靜かに考へて見なくてはならない。當面の事に熱狂して、深くその不幸の由來するところを究めることがなかつたら、この種類の不幸は、形を異にして將來も尙幾度か吾々日本人の生活を脅かすに違ひない。この不幸の犧牲者に對しては、眞に氣の毒とも何とも言ひやうがない。この不幸が、どうしても避けることの出來ない、もしくは國家の生存上必須なものであつたといふ保證の確かで[redacted]聰明不公正な心持ちがあつて、その暗い力の犧牲となつたといふ疑ひの一掃せられないだけに、尙更この不幸の犧牲者に對して深く氣の毒に思はずにゐられない。しかし、犧牲者を氣の毒と思ふが故に、たゞ當面の暴力——パルチザン一派の暴力を罵り憎み、これに報復することによつて、一時の氣安め腹いせをしてばかりはゐられない。この不幸は、その原因が單にパルチザン一派にあるのでもない。またその責任が偏へにパルチザン一派にあるのでもない。また從つてパルチザン一派を打つことによつて十分善後の處理が出來るわけでもないのである。自分はパルチザンといふ一派の暴力團を寸毫も辯護せうとするものではない。しかし、この悲慘な犧牲が、日本政府の不聰明、無[redacted]の連續から、だん／＼引くに引かれない深みへ陥つたために、

ロシヤ人の日本に對する反感憎惡が激發した結果であるかぎり、その根本の原因が反省せられ除去せられない間は、いくら當面の不幸を糊塗して始末したところで、將來いくらでも同一原因からの形を異にした不幸が生れて來るに違ひないのである。當面の不幸の始末も、出來るだけ將來の不幸を豫め取り除き避けるやうな方針でせらるべきであるが、それとともに根本の禍因を内から根絶するといふ方針が立てられなければ、不幸の犠牲者は犬死になる。不幸の犠牲者を犬死にさせないためには、一時當面の報復報償といふやうなとだけに拘泥し甘んじないで、かういふ不幸を生み出だすに至つた内部的原因を、この機會に於いて明らかにし、その禍因を芟除することによつて、將來の日本の生活を正しく明るいものにするとを努むべきである。今回の不幸が國民の心をこの方向に導くに至つて、はじめて犠牲者は犬死にをしたことでなくなる。外國關係の事端に於いて、暗黑政治家はいつでも國民の心を外に向はしめて、自家の暗黑をごまかさうとする。日本人は殊にそのごまかしにかかりやすい傾向を多く有してゐる。自分はパルチザンの所業に對して寛大に許してよいといふことを主張するものでは決してない。ロシヤ國民の代表者としての一定の政府主腦者の存在を公認してゐない日本の政府は、今回の事に就いて何人を相手に文句を言ふつもりであるか、さぞ困つてゐるであらうとも察せられるが、——また一旦ボリシエヰキを討つことを名として兵を動かした以上、その敵が味方に對して慘害を加へるであらうことは覺悟の前であつた筈でもあるが、而して今回の不幸はあまりに殘酷であるといふ點で異常のショックを與へたものとも見られるが——しかしロシヤ人が悉く日本人の敵になつてゐないのが事實である以上、また日本政府の忌み嫌ふボリシエヰキといへども悉く日本人を害することを快しとするものでもないであらう限り、心あるロシヤ人が、恐らくは大多數のロシヤ人が、今回の不幸に對して、日本人のためにロシヤ國民として責めを感ずるであらうことは疑ひないところである。しかしロシヤ國民が、何等かの形でその責任の感じを日本人の前に表明さへすれば、それでこの不幸の犠牲者が慰められたことにはならない。ロシヤ國民が日本人の犠牲に對して責めを感ずることは當然であるが、それ以上に、日本の内部に於いて責めを感ずべきものが責めを感じ、その不聰明、無知、私慾心などを一掃する氣にならなければ、不幸の犠牲者は眞に慰められたとはいへない。事が外國關係であるが故に、國民は暗黑政治家及び

それの走狗によつて眼つぶしをされるやうなことがあつてはならない。

今回の殘虐を行つたパルチザンといふ一團が、どういふ人々のどういふ性質の團體であるかは、正確に精しくは分つてゐないが、ロシヤでパルチザンといふ言葉の用ひられたのは可なり古く、世間にも既に傳へられてゐるやうに、千八百十二年の十月、ナポレオンのモスクワ侵入當時に、軍事上の言葉として用ひられてゐる。もとより外來語で、もとはフランス語から來てをり、フランス語としてもロシヤ語のと同一の意義を有してゐる。正規の軍隊でなく、敵の側面もしくは背後から奇襲して或ひは連絡を斷ち、糧道を斷ち、少數ながら急所を衝いて敵に大害を與へるといふ風の一隊を言つたものであるらしく、字書にもさういふ說明がある。ナポーレオンがモスクワ退却後、クーツーゾフのためにカルーガ方面への道を塞がれて、已むを得ずスモレンスクの方面へ道を取つて退いた際に、沿道の住民はあらゆる手段によつてフランス軍の運輸を妨げ、糧食を奪ひ、到るところに奇襲を試みて害を加へた。この民軍の蜂起と相俟つて、騎兵及びコサック兵の小人數の分隊が隱顯出沒してしきりにフランス軍を苦しめたことは、有名な事實であつて、この奇襲の戰ひが卽ち謂はゆる「パルチザンスカヤ・ワイナ」(パルチザンの戰爭)であつた。この奇襲隊中の錚々たる士官としては、フイグネル、ダウイドフ、セスラーキンなどの名前が記されてゐる。(プラトーノフ敎授『ロシヤ史講義』第十版)この奇襲隊に屬する人々が卽ちパルチザンであつて、その中のフイグネルをモデルにして描いたのが、トルストイの『戰爭と平和』の中に出て來るドロホフであるといふことである。(『戰爭と平和』第十四編、八章あたり以下參照)ドロホフとペーチャとが退却中のフランス軍へ、フランス士官に化けて出かけて行つて、その軍の實狀を探つて來るところなどが、トルストイの筆で精細に心理的に描かれてゐる。またパルチザンの一人ダウイドフの作つた詩に『パルチザン』といふのがあつて、戰場の夜のものすごい靜かな情景と、靑年士官のロマンテイツクな心持とが歌つてある。歷史物語を書いてゐるので有名なザゴスキンの物語の中にも、パルチザンとゝもにフランス軍を苦しめた沿道所在の民軍の蜂起を描いたものがあつたと記憶する。トルストイの『戰爭と平和』とを軍事上の立場から批評研究したドラゴミーロフ將軍の小書(一八九五年、キーエフ版)の中にも、このパルチザンのことがあるが、その方の專門的なことは自分

にはあまり興味がない。今度のニコラーエフスクのパルチザンと名乘る一團も、恐らくはこのナポーレオン戰爭當時の奇襲隊に自からなぞへたものであらう。卽ちあの當時の民軍やパルチザンのやうに、いろ〳〵の種類の人々が、あらゆる苦肉の奇計に出でて、手段を選ばず敵に害を加へるといふ考へから名づけたものであらう。たゞ今度のは、相手の敵が中產階級以上のロシヤ人であり、資本家的軍國主義的侵略的の日本人であり、またその日本人に好感を持つロシヤ人たちであつたのである。

しかし、ナポーレオン戰爭當時の民軍やパルチザンが、今度のニコラーエフスクでのやうに殘虐を行うたかどうかは、詳しいことが分らないが、いづれその頃のことであるから、可なり亂暴も行はれたらうと察せられる。ロシヤ人(今度のパルチザンの一團はロシヤ人でない異種族の浮浪民も加はつてゐるらしいが、とにかくロシヤ人)が、今度のやうなひどい殘虐を行つた例は、今までにも度々あつた。ロシヤ本國では、ロシヤ國民となつてゐるユデヤ人に對して加へた殘虐の事例が一再ならずある。ロシヤ語でいふ pogrom 卽ち荒掠破壞をユデヤ人に加へたことは、千八百七十三年に於けるオデサでの事變以來、千八百八十一年にも、千九百三年にも、千九百五年にも、隨分殘虐なユデヤ人苦しめが行はれた。千九百三年のは、有名なベッサラビヤのキシユニヨフのユデヤ人虐殺で、千九百五年のは、ワルシヤワの東北にあるグロードニエンスカヤ縣のビエロストーク市でのユデヤ人虐殺である。ギリシヤ正教を奉ずる純粹のロシヤ人のユデヤ敎徒たるユデヤ人に對する宗教的反感、ユデヤ人が都會にのみ居住を許されてゐて自然商工業その他各方面で生活經營上純ロシヤ人の恐るべき競爭者であるといふところから來る反感、ユデヤ人のロシヤに於いて受ける不公正な待遇に對する不平とユデヤ人の智力的水準の高いことが相俟つて、ユデヤ人の間には革命思想を懷くものが多いといふところから官憲がこれを深く忌んでゐるといふ事實——からいふ事情が集つて、官憲の內々の示唆、僧侶の煽動が、都會住民たるロシヤ人の暴動のわづかの口火に油を注いで、野火の如くにその殘虐が廣がつたといふ次第であつた。當時の內務大臣プシーウユが、ユデヤ人虐殺の內々の示唆者であつたことは、かくれもない事實である。而してこの示唆が、民衆の政府に對する不平を轉ずるため、革命運動の氣勢を他に轉ずるためにせられたものであつたこともまた事實である。千九百三年のキシユニヨフのユデヤ人虐殺に對しては、ゴーリキーも『社會に對する抗議』と題

する一篇の文章を書いてゐるし、トルストイも『キシユニヨフ事件に就いての公開狀』を書いてゐるし、コロリエンコも『十三番地』といふ短篇でその當時の樣子を描いてゐる。トルストイがその慘害を受けたユデヤ人救濟のために『エサルハドン』その他の短篇を寄附したことも世間の已に知るところであらう。

　ロシヤ人は實際火や水や風のやうに、その性情に元素的なところを多く有してゐるやうである。風が東から吹くかと思ふと、忽ち西から吹くやうに、その行動にエレメンタルなところが多い。ロシヤ人も風とともに平氣である。樹をたふし家屋を飛ばして置いて平氣でゐるやうなところがある。ユデヤ人の虐殺や、今度のニコラーエフスクの殘虐な所業で、ロシヤ人の性情をすべて鬼の如くに思へば勿論間違ひである。ロシヤ人ほど人種的偏見のない國民はないといふこともよく言はれる。ハーヴードのキーナー敎授などもこれを力說してゐる。その人種的偏見の乏しいロシヤ人がユデヤ人とドイツ人とに對しては、昔から隨分深い反感を懷いてゐる。これも世間周知の事實であらう、それはつまり人種的偏見のないロシヤ人のエレメンタルな小兒のやうな性情を見くびつて、それにつけ込んで、ドイツ人やユデヤ人などが、いろ／＼の方面から、惡意があつてか、やむを得ない四周の事情からか、とにかくロシヤ人の生活の中へいつの間にか深く喰ひ込んで、あのロシヤ人にさへも自分を侵されてゐる不安を感ぜしめて來たためではなかつたらうか。その點で日本はどうか。小供だましのやうな口實で、ロシヤ人の生活の中へ喰ひ込んで行かうとはしなかつたか。そして喰ひ込み切れないでマゴ／＼してゐたやうなことはなかつたか。おまけに大局を洞察するにドイツ人ほどの聰明さへなく、眼前の私慾に昏迷して、どうせ末の見込みのない一部局的なアヴンチユリストなどを助けたりはしなかつたか。火を弄んで大事にいたり、そのためになまなか烈風を呼び煽るやうなことになつたのではなかつたか。風の如く火の如く水の如きエレメンタルな性情を有するロシヤ人の前に立つて日本の、少くとも國民は靜かに自から反省する必要がある。（九、六、一七）



水四題

霞ヶ浦を思ふ

田山花袋

湖水や、潟や、沼は多いけれども、水郷といふ感じから言つては、日本では、何うしても指を霞ヶ浦に屈しなければならないと私は思ふ。

琵琶湖は大きいけれど、またところに由つては、いかにも水郷らしい感じに富んだところもあるけれども、しかし、霞ヶ浦に比べては、とてもその右に出ることは出來なかつた。琵琶湖は、水郷としてよりも、寧ろ感じが海に近かつた。

その他、出雲の宍道湖、羽後の八郎潟、岩代の猪苗代湖などが、それにつゞいてやゝ大きい。また、多少の水郷味も持つてゐると言へる。しかし、とても、其處には、潮來、牛堀、または利根川の津の宮河岸、息栖あたりの水郷の美を發見することは出來なかつた。

霞ヶ浦の中でも、そこらは、殊に水郷の味に富んだところであつた。もし、霞ヶ浦が、その大きな霞ヶ浦しか持つてゐなかつたならば――土浦から麻生(あさう)に來るまで

のものしか持つてゐなかつたならば、その感じはぐつと劣つたものになつて了ふに相違なかつた。つまり、霞ケ浦の勝は、一方に、利根川を持つてゐるために、その複雑した川潮を持つてゐるために、あの水郷の味が出て來てゐるのであつた。さうかと言つて、利根川ばかりでは、決してこの水郷の味は出て來ない。兩者互ひに相待つて、そしてこの天下の美觀を成してゐるのである。

　何はさておき、水郷としては、潮來、牛堀、息栖がその中心を成してゐた。ことに、潮來の狹斜街がその水郷の色彩を一層濃かにしてゐるのは、爭はれない事實であつた。その後の丘陵――即ち稻荷山あたりから見た水郷の眺望、これを麻生の後の丘の上から見たのと比べて見ても、その感じのすぐれてゐるのがよくわかる。

　この水國の勝をつぶさに探らうとするには、一度は土浦から佐原に航し、更に一度は高濱から麻生に航し、また更に一度は牛堀から鹿島に航し、佐原からは和船で川を潮來に出たり、また一度は津の宮河岸から、利根川を銚子まで下つて見なければならなかつた。否これだけではまだ十分とは言ふことは出來なかつた。もう少し深く水郷の美を探らうとするものは、利根河畔の神崎から、更に江戸崎に行つて見なければならなかつた。そしてその附近にある浮島に渡つて見る必要があつた。

　更に一度は、曩にも、私が書いたやうに、常陸の大洗、磯濱から五六里の高原を鉾田に出て、そこから汽船で佐原まで下つて見なければならなかつた。

　この路は春先など歩くのにはちよつと面白かつた。麥畑の中から雲雀が揚つたり、菜の花が美しく咲いてゐたり、涸沼などといふめづらしいところがあつたりした。それに、北浦を圍んだ兩岸の丘陵が、霞ケ浦の諸勝の中では、やゝ他と趣を異にしたやうなところがあつた。

　一方潮來があると共に、他に、大舟津の水郷のあるのが面白かつた。こゝは、鹿島への上陸地點であるために、ちよつと感じの他と異つてゐるのを私は見た。勿論、潮來、牛堀あたりに比べては、蘆荻は少なかつた。水村らしい感じにも乏しかつた。しかし、その靜かに湛えられた北浦の水は、一種霞ケ浦とも違つたのどけさと靜けさとを持つてゐた。大舟津の大華表の前から望むと延方あたりの低い丘に、白い雲がふわりとなびきわたつてゐて、何とも言はれないなつかしさを感じさせずには置かなかつた。

こゝから長い渡しをわたつて、延方から潮來の方へと歩いて行く路も、決して面白くないことはなかつた。

それに、鹿島の一區劃は、凡そ他に見ることの出來ないほどそれほど滑らかな感じを持つてゐた。何處に、この他に、かうした滑いところを私は發見することが出來るであらうか。伊勢大廟の境内はそれは靜かで滑らかであるけれども、しかもその持つた町は、市街は、決してかうした滑らかさを持つてゐるといふことは出來なかつた。出雲の大社も、とてもこれには及ばなかつた。では、宇佐八幡か。太宰府天滿宮か。香取神宮か。氣比神宮か。否、否、何處に行つたとて、とてもかうした、鹿島附近の持つたやうなその滑らかさと古さとを見出すことは出來なかつた。

私には何となく數千年の昔のまゝに、依然として、この一區劃の地が殘されてあるやうな氣がした。一歩一歩入つて行くにつれて、私は靜かな靜かな心になつて行つた。ことに、大舟津からずつとあの長い綺麗な阪を鹿島町へと入つて行つた感じは何とも言はれなかつた。それに、樹木の多い影の多い鹿島の町は、いかにもさうした古い大きな社に伴つてゐるやうに思はれた。

それに、鹿島の社は、古い社としても、決して多く他にその壯嚴を、清淨を、美を譲らないやうなものであつた。あの大きな樹木は。あの深い林は。あの境内の潤さは。私は『常陸風土記』にある遠い昔を憶はずにはゐられなかつた。

晩夏の支笏湖畔

南部修太郎

「さうさ、もうかれこれ十年經ちますかね。何しろその時分は熊までが荒つぽうござんしたよ。一度なんか機關車に喰ひ著いて來たのがありましたつけ、向う見ずな奴もあつたもんですよ……」と、私と膝を突き合して腰掛けてゐる、五十格好の、ゴ

て鹽頭の工夫頭と云つた型の男が鉈豆煙管をちよいと口に銜へながら私を振り返つた。北海道へ渡つてからもうさんざん苦勞をし抜いたとでも云ふ、小氣味好く落ち著き拂つた詞附である

「ほお、それでどうしました……」と、私が訊ね返した時、同行のK――工學士もにこにこ笑つてゐる工夫頭の顔を見詰めてゐた。

「いやあ、少し車輪で手負になつた奴を、工夫達が梶棒で毆る火夫はシヤベロで叩き著けると云ふ譯、とうとうお陀佛でさ。尤も、四尺ばかりの子熊でしたがね……」と、工夫頭は紫烟の輪を吹いて、頓狂に笑ひ出した。

砂を一杯積んだ輕便列車は亭々と聳えた、薄暗い唐松とど松の森林地帯を呑氣さうにのろのろと走つてゐる。苫小牧の町外を出る時草原の上に深く罩めてゐた濃霧は、幾らかうすれ始めた。が、今にも泣き出しさうな雨もやひの空が、樹々の茂みに遮られて線路の上に見えてゐる。森林の間を氣持の好い程一直線に貫いたレエルは、遠くで綠の中にぼかされて、消えてしまつてゐる。秋草の赤や紫や白や黄が處々にこぼれたやうに咲いてゐる。ちつと暗い密林の奥を眺めてゐると、自然の威壓と云つたやうな薄氣味惡さが私の胸を襲はずにはゐなかつた。

「この頃、熊は出やしませんかね……」と、K――工學士が青白い顔の中の、神經質らしい眼で、私達の乘つた無蓋貨車とすれずれに走つて行く森の奥を見詰めながら、ふと云つた。からみ合つた蔦蔓や、何千年の間人の足跡も印した事のなささうな雜草の茂みの蔭から、今にもその向う見ずな子熊ぐらゐ飛び出して來さうな氣配だつた。工夫頭は茶色になつた麥稈帽子の庇の下に蔑むやうな眼を細めて、からからと笑ひ出した。

「何の檀那、出てくりやあふん摑まる、ちやんと知つてまさあ文明開化でね、奴さん達も利口になりましたよ。何しろこんな森の奥に二萬馬力も出る發電所が出來ようつてえ世の中ですからね……」と、反身になつて工夫頭はまた鉈豆煙管をぷかりと吸つた。が、熊よりももつと熊らしく見える彼の粗野な赭顔には、野獣的な影がさつと閃いた。

冷酷な自然の影響、北海道稼ぎの勞働者生活の感化――そんな事がふと彼の上に想像された。喧嘩、酒亂、發狂、强姦、殺人――北海道へ來てから幾度か聞かされた、彼等の間に起る陰慘な挿話、さうした空氣を太つ腹に突き抜けて工夫頭になり上つた彼、その彼もやがてはかうした自然の中で雪の解けてしまふやうに死んで行く人間に相違なかつた。私は譯れない不思議

な氣持で、ぢつと彼の樣子を見守つてゐた。

丁度眞晝近くだつた。發電所の方への分岐點で貨車から降りて、工夫頭に、もう一生相會ふ事も無さゝうに思はれる彼に別を告げて、私とK——工學士とは支笏湖畔の方へひつそりかんとした道を山の峽間傳ひに歩いて行つた。水色の嵐氣に包まれてゐた山の針葉樹や、楓、栂、檜の森林の綠が鮮かな色に光つてゐたのが、ふと山霧に曇り出したかと思ふと、灰を降らすやうな冷かな雨が頰に觸れて來た。肌寒さに雨外套の襟を立てながら、私達は詞もなく足を急がせた。

「寒いやうな色ですね……」と、堰堤にせき止められた千歳川の水の、枯木や幽朶の枯葉が深い水底まで澄んで見える水の蒼さに眼をくれながら私達は囁き合つた。行き合ふ人もない寂々たる視野が凉たい山霧の中にすつかり包まれてしまつた事に、私の心は變に臆病に顫へてゐた。

湖畔の、O——製紙會社山林課の事務所に著いた時、私は灰色の雨に涯もなく蔽はれてしまつた湖面を見詰めながらほつと息づいた。切り出された製紙原料用の角材が川口にはぷかぷか浮いてゐた。荒くれた、陰重な顏附の工夫達の五六人が、その側で寂しい調子の小唄を唄ひながら働いてゐた。彼等は遠見に無氣味な眼を光らせて、私達を嘲むやうに時々見詰めるのだつた。何となくその樣子に敵意が含まれてゐるやうに感じられるのが、私の氣持をまた變に落ち著かせなかつた。

「こんな處で一生働くやうに運命づけられた人達もある……」と、私はそんな事を寂しく考へながら、また嘲むやうにその彼等を見返るのだつた。

山霧は濃くなつてはうすれ、また濃くなつては小波の立つ湖上を這つて過ぎた。ぢつと見詰めてゐる時折に、對岸に織り重なつた山々の襞が南畫のやうに明滅して行つた。雨音さへ響かない山の雨、湖水の波の神秘を語るやうな囁き、その間に、背後の挽材工場の環鋸の咽ぶやうな響が不思議に冴えて私の皷膜を打つたのだつた。その刹那に私の身を取り卷いた自然の姿はまるで冷たい牢獄の壁のやうな氣がされた。光も、輝きも、温かさも、潤みもない。たゞ威服するやうに偉大な、死のやうに靜寂な、そして、悶えある人のやうに憂鬱な自然の姿——私の心にはもう靜かにそれを味つて眺めるやうな餘裕はなかつた。譯もなく不安な、ひしひしと迫る寂寥に胸一杯だつた。

「これは湖水で取れましたひめますでございます……」と、私達が辨當を開いた時、平たい、無表情な、ただ物寂しげな感じ

のする山林課の人の若い奥さんが、皿に盛つた燒肴を持つて來てくれたが、私はもうしみじみ箸取る氣持も持てなかつた。しきりにさうした環境から遁れたい思に心せかれた。
間もなく、私達は線路の分岐點の林の中に佇みながら、歸りの輕便列車を心待ちに待つてゐた。何時か山霧は忘れたやうに霽れて、西の方の空の雲切の間から晩夏らしい、頼りなげな日光がこぼれ始めた。
「もう秋ですね……」と、ふと傍の草叢で啼き出した蟲の聲を聞きつけて、K——工學士は私を顧みながら呟いた。
——五年八月日記の一節から——

浦鹽斯德

小島政二郎

やつと昨日の朝浦鹽へ着いた。まだ何が何やら薩張り分らない。しかし、積荷をしてこゝを立つまでにはまだ一週間も間があること故、せい〴〵其間に方々を見て置きたいと思つてゐる。

今私が君に通信し得る範圍は、昨日の朝早くこゝへ入港する時見た浦鹽の前面（ファサード）と、今日の午後二三時間上陸して散歩した時見て來た横顔（プロフィール）とに過ぎない。

浦鹽の氣候がよくない位のことは日本にゐた時分から知らないではなかつた。しかし、こゝへ來て人に聞いて見ると、豫想以上に激しいらしい。一口に土地の人は、氷と霧と雨とに一年中苦しめられ通しだと云つてゐる。半年の間も張り詰めてゐた氷が溶けて、やれ嬉しやと思ふ間もなく、今度は、日本海を渡つて吹いて來る南風を、こゝ等一帶の沿岸に流れ寄る北海の寒潮が冷却して、丁度梅雨のやうな鬱陶しい雨の日か霧の日かを作り出す。そしてたまに晴れたかと思ふと、日蔭にゐても百度に近い溫氣に苦しまされるさうな。

さう云へば、昨日の朝船がピートル大帝灣に這入つた時にも港の中は一杯の霧だつた。しかし、その霧のために、我々は浦

陸に對してい丶第一印象を得たと信じてゐる。元來、こ丶の港は、だん〳〵層をなして高くなつて行く丘陵の胸から頂へ掛けて、いろんな色の家が建て連ねられてゐるので、平地に低い瓦屋根が押し潰されたやうに立ち並んだ陰氣な日本の港を見慣れた目には、いかにも外國の港らしい外觀の整齊美を持つてゐる。殊にそれを霧といふ薄紙を一枚通して見たのだから、色も浮ッ調子な粗さを隱せおほせたし、不調和にデコボコした家の角度なども、ぼやッと幻燈式に美化されてゐた。

　幸ひ今日は其霧が霽れた。それと同時に、午後一時になつて漸く上陸が許可された。私は眞つ先に船を飛び出した。何しろ生まれて初めて外國の土を踏むのだから、嬉しくつて仕方がない。ぶら〳〵當てもなく町を歩き廻つてゐるうちに、ふと、——丁度魚河岸を通り抜けた時のやうな、厭な匂に襲はれた。——跡で聞くと、何でも稅關波止場のぢき傍に、毎日市の立つ支那人街があるのださうな。そこへ行くと、百軒ばかりの小さな家が、兩側に穢い軒を並べてゐる。勿論狹い巷路である。ところが、永い間市場になつてゐるので、土にも壁にも吹く風にもすべての物に胸を惡くさせるやうな厭な匂が染み込んでゐる。その中を、異種異樣な風俗をしたそれ〴〵國籍の違ふ貧しい人達が、平然として、魚をあさり肉をあさり、野菜をあさり日用雜貨の品々をあさつてゐる。

　打ち見たところ、この國の人は皆無愛想な顔をしてゐるが、接して見ると、また此位邪氣のない國民も少からう。今日一人で海岸通りをぶら〳〵してゐると、もじや〳〵髯を生した大男が、何か僕には分らぬことを云ひながら、近寄つて來た。で、分らぬながらも、度胸を極めて煙草を出すと、いかめしい其顔に子供のやうな笑ひを浮かべて手を出した。

　稅關の役人なども、ちよつと見ると、むくつけな顔をしてゐるが、波止場から程近い銀座通りとでもいふ處にあるバーへ連れて行つて酒でも飲ませれば、赤い顔をしてにこ〳〵笑ひながら、平氣で變な歌を唱ひ出したりする。

　若い士官もよく町で見掛ける。彼等は二重の注意を以て髮を縮らせたり、軍服の胸に花を挿したりして氣取つてゐる。何氣なく夕方公園を抜けて歸つて來ると、もう仄暗くなつた木立の中に四五人寄り集まつて、時々小鳥のやうに通り過ぎる若い女の朦朧とした後姿を見送りながら、流行唄らしいものを合唱してゐた。

　要するに、こ丶の港は、いろ〳〵の點から云つて、決してい

ゝ處だとは云へない。しかし、そこに住んでゐる人の無邪氣な氣風のために、幾分その酸味が中和されて、稍居心地のいゝ處に化せられてゐる。（大正四年七月十四日、信濃丸にて）

今日はプーシキン、セアターへ行つて見た。しかし、夏の間は休んでゐるとかで、樂しみにして行つた芝居は見られなかつた。せめて中だけでも見せて貰はうかと思つたのだが、相手の男と言葉が通じさうもないので、それも斷念した。外から見たところでは、有樂座位の大きさしかない。それに文飾もなくて、當り前の家のやうにすぐ入口の壁が往來に面してゐる至つて粗末な建物である。

こゝが駄目なら、どこかオペラ劇場へでも行かうかと思つたのだが、在りかを探すのが面倒臭くなつたので、飯を食ふつもりで又公園へ出て見た。すると、仄暗い木下路を、白い着物をすんなりと着た若い女が、影繪のやうに行つたり來たりしてゐた。いづれも長く曳いた白衣の裾を翻してさも輕げに歩いて行く。中には、ちらとこちらを振り向いて行く女もあるが、皆云ひ合はせたやうに黑いしつとりとした瞳を持つてゐる。――君これ等はみんな所謂ストリート、ヲーカーなのだ。

芝生の間に付けられた細い小道を一人でぶら〳〵歩き廻つてゐるうちに、ふと軍服姿のいかめしい若い男が、ブロンドの處女を品よく抱へて、靜かに歩いて行くうしろへ出た。一歩〳〵歩を運ぶ度に、着物の裾を蹴つて、女の白い足がちら〳〵見える

公園を出ると、カフエ、ド、パリといふ家が目に付いた。自分はどんなに懷しく思つたらう。やつと自分と言葉の通じる人間を萬里の異域に見出したやうな氣がしたのである。しかしそれは束の間の喜びに過ぎなかつた。自分が椅子に腰をおろすや否や、傍へ擦り寄つて來た二人の女は、佛蘭西語も英語も解さなかつた。それでも片言まじりに喋つてゐるうちに、相手がユダヤの女だといふことだけが分つた。二人とも遠い昔、いろ〳〵の迫害を身に受けた悲慘な國民の間から、かういふ一點曇りのない表情をした女性が生れようとは夢にも思はれない位華かな顏立ちをしてゐた。

輕い夜食を濟ませて外へ出ると、空はいつしか天鵞絨色に霞んで、眞ん丸い月が出てゐた。北の海から吹いて來る風が、のび〳〵とした肌を柔く撫でゝ行く。

氣が付いて見ると、自分はどこか場末らしい所に迷ひ込んだと見えて、見渡す限り人通りもない。九時過ぎてから、ぼんや

り一人歩きなどしてゐると、どんな目に逢はされるか知れないぞと昨夜船で威かされたことを思ひ出して、慌てゝ時計を引つ張り出して見た。しかし、まだ八時を過ぎて間もなかつたので安心をして又ぶら／＼と歩き始めた。

やがて四つ辻へ出た。

と、目の前を、月の光の柔かな街の中を、赤い服の御者に曳かせた小さな馬車が、幾臺となく通り過ぎる。夜氣に打たれてしつとりと大地が潤つてゐるせいか、轍の音も聞えない。それが土地柄わざと轍の音を盗んでこつそり行くのだといふやうな氣味惡さを思はせた。唯不思議なことには、どの馬車もどの馬車もどこへ行くのか、町筋を出外れると、みんな云ひ合はせたやうに、どこへか消えて行つてしまふことである。私は急に氣味が惡くなつて、賑かな處を求めて駈け出した。（七月十八日）

遠くに小山の頂が見える。しつとりとした夏の宵闇の中に、日の落ちた跡の沙漠の砂が晝の熱をすつかり放散してしまつた時のやうな色をしてゐる。その滑かな肌の中あたりから、どこからともなく、夕べの私の鐘が聞えて來る。あたりが餘り靜かなので、すぐ近い處で鳴つてゐるやうに明るく聞える。とても形容の出來ない程柔かな音色をして、いかにも穩かに一しきり打ち續いて鳴るかと思ふと、次第に、微かに鳴りを靜め沈んで行く。かと思ふと、また間近に朗かに鳴り響くのである。丁度それは、青い／＼五月の草原を、もく／＼と雲のやうに打ち重なつて行く羊の首に附いてゐる鈴が、鳴るともなく靜かに空へ上つて行く時のやうな音色、とでも云はうか。

ちいつと耳を澄まして聞き入つてゐると、目の前へ、近い／＼平和な喜の狀が浮かん來くやうな氣がした。しまひには、遠くから唯聞き入つてゐるだけでは我慢が出來なくなつた。で鐘の音を便りに、ふら／＼とその方へ行つて見た。すると、そこだけ明るく灯のともつた會堂の中で、木蓮の花のやうな清麗な姿をした若い娘達が、つゝましげに牧師の話を聞いてゐた。

その狀を一目見ると、お互に言葉の通じる世界に住んでゐるそこの人達が急に妬ましくなつた。そしてそれと對照的に、誰からも見送られずに、明日の朝早く、こゝの港を出帆して行く自分達のことが寂しく顧られた。

波を蹴り
風を突く

船人に
海は家。
風にも
船縁に
青い水を
唯見る。

どこかで聞き覚えたこんな歌を口ずさみながら、私はそこの丘をそろ〳〵と下り始めた。（七月廿日夜、珊瑚珠店にて）

とう〳〵海へ出た。運惡く、昨日も今日も霧に苦しまされてゐる。船乘は、霧といふと、まるで魔の手か何ぞのやうに恐れてゐる。私には生まれて初めての經驗だが、霧と風が吹いて、暦の霧が大きく揺いだかと思ふと、もやツとガスの中へ乘り入れる時の心細さと云つたらない。太陽が眞ん丸い眞珠のやうに見えて、自分は海の底へ深く沈んでゐるやうな氣がして來る。

その中を船は盲探しに進むのである。さういふ時、海で聞く霧の警笛程物悲しいものはない。あのおとなしい手が、何かの拍子にふと心を打たれて、あのうつとりとした目を潤ませながら、夜もすがら泣き明かす時の聲とでも云はうか。──私達の船は、今、その霧の中にゐる。（七月二十二日、海上にて）

山の雨

與謝野晶子

私は山の雨が好きである。私が源氏模様の傘をさして歩くと四國の山の青が皆その傘の紫に吸ひ込まれて行くやうだと、同行した詩人の藻風氏が云つて呉れたのも箱根に雨が降つて居たからである。その夕方友の伊作氏が湯元の洞門の中で笛を吹いて居た面白い形も、雨が降らねば見られなかつたことであつたに違ひないた。たとへまた底倉温泉で泊つた晩にも降つた雨が

樓屋の薄い金屬性の屋根に當つて、ばさ〳〵と騒がしく鳴らせたことを思ひ出して見てもやはり雨は懐しい。雨が降れば降るほど、先を光らせた、杉の木のやうな形をした霧は溪から早い速度で次へ次へと昇つて來る、浴室の棟の上に居る湯氣の常よりも濃くて、雲の眠りと見えるのも雨の朝、雨の夕の山に多いことである。底の深い所に懸つて頼り無げな山峽ひの橋の雨に濡れて居る時、私はその雨を美くしい人の白い頬を濡す涙と同じやうな微妙なものに思はれるのである。黒木の橋が紫色に見えたりするのも唯だに光線から受ける感じばかりではないやうである。或時はあらずもがなに思はれる山中の朱塗の橋なども雨に濡れた時はいい感じで見られるのである。また伊香保の湯の澤川とか、赤城の頂上に近い川とか、武庫山の溪合の川とかの、赤い金銹色の石の多い流の上に雨の煙つて居る景色は面白いものである。人間に近い自然の匂ひをそんな所で私は嗅ぐ。少し雨が早く烈しく降つて居る時などには、あの石の銹やしみがすつかり洗ひ落されはしないだらうかと私達は迷つたりもする。

豐後の日田の里の雨も私には懐しい思ひ出である。橋から三町程下の川の中島、それにも名はあつたであらうが私はよう聞かなんだ。遠うから見ると蓬萊山のやうな島の高い所は水面を三百尺も離れて居ようと思はれた。岸の宿屋の座敷から見て居るよりも、かうした島の端の岩の上などに立つて見る筑後川は靑い。廣い海のやうにも見られた、小石の多い河床へすつかり降りてから、更に牡若の中の八つ橋をきちやうめんに眞直に並べたやうな切子形の橋を渡つて、もとの岸の方へ歩いて行かうとする頃に雨が降り出して來た。この切子橋の幅は五六尺もあるのであるが、水と板とには五寸の間もないから、早瀬を渡る人は目眩もしさうである。凉しい雨と川波の飛沫（しぶき）に打たれて旅人の着物は濡れ通つた。宿々の欄干緣（てすりえん）の下を走つて私達の宿へ驅け込んだ。夕方の白い雨の中を、良人と友の二人は川向ひの石人を見ん爲めに橋を渡つて行つた。私は疲れて寢入つた子供を抱いて居た。肥後の山と筑後の山の河鳥かの翅のやうに重つて美くしいのを後にした向ひの里には一つ二つと灯が見え出して來た。雨の中でも船を出して遊んで居る人影も見えないでは無かつた。鮎膾は鮎の骨を齒で噛み碎くものかと晩餐の膳に向つて人々は尋ね合つたりなどした。友の一人の肝いりでその晩私達は鵜飼を見ることになつて居た。七時頃までも雨はかなり烈しく降つて居た。丁度目を覺した子供を毛布で包んで、晝間人々と魚を釣つた石段を降りて私達は鵜飼の見物船に乗つた。

そして鵜飼の長の乗つた船と二つが並んで川下を行き、川上の瀬々を巡つた。時々は橋下へ雨を除けたりもした。漆黒の闇夜の川に鵜船は篝の火の雫を砂子のやうに美くしく散らして居た。その敏捷い鵜飼の長の火事頭巾のやうに包んだ頭はこの世のもののやうに見えなかつた。私達は一時間餘りも水の上に居たと記憶する。石段を上る時に見返つた鵜船の底には澤山の鮎が猫眼石のやうな光を放つて居た。翌日は既に晴れて居た。私達五人は一人の博多の友と日田の街外れで別れて山の馬車で森町へ向つた。昨夜の鮎の詰められてある辨當を、或赤土山の峠茶屋で開いた頃の暑さは、私達に昨夜の雨を思はせることが頻りであつた。森町から新耶馬溪へ馬車の進み入る頃になつて、私達はまた山峽の雨の寂しい足どりを眺めるやうなことがあつた。流は逆に見つつ歩くべきものである。水に添つて歩く時に人は多く目に見ず、耳に多く溪谷の音を聞く人となると私は思つて居る。私達は耶馬溪に對して淋しい見やうをした。淋しい愛しやうをして通つた。山移と云ふ所で泊る筈だつたのを柿坂まで出ようと云ふその馬子の云ふ儘になつて、私達は夜の八時過ぎまでも馬車をよう離れなんだ。夜の道は山の道も野の道もよく解らない。私はどんな道を通つて柿坂へ着いたかと云ふ人があつたなら、唯だ墨の海の中を通つて行つたことだけは確かであると云ひ得るのである。

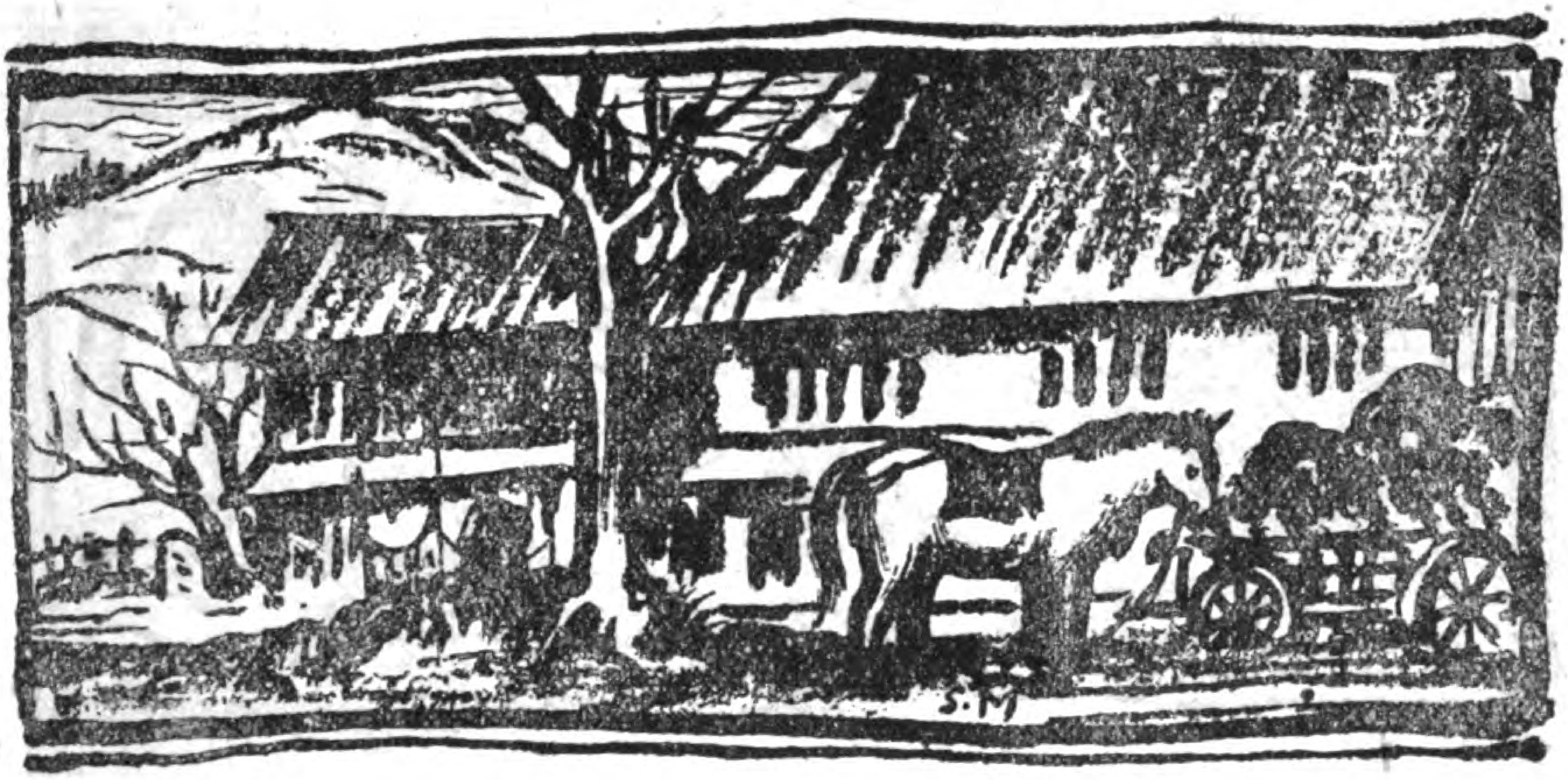
武庫山の苦樂園溫泉の雨の日のことを私は短い言葉で書いて置かう。小松原の上を撫でて通る夜の雨を私はよく扶桑庵で聞いた。久方庵に寢る夜の明方の山の雨は水の音に紛れ易いものであつた。石が皆お納戸色に濡れた庭を見て雨の降つたことを知つても、猶降りつつある雨は霧とも霞とも云つていい程の姿で、其れとも見えないことが多かつた。武庫郡に散在した松林の濃く淡くぼかされ向うには打出の濱の磯の白波が鮮かに立つて居る。こんな景色を下に見ながら傘をさして浴舍へ私はよく通つた。ホテルで朝の食事をして居る時に、バルコンの前のかみへ、ピヤノの低音の音を彈くやうな雨の落ちて行くことのあつたりするのを私は喜んだ。山上の水源地の瑠璃色の水に山を描いたり消したりする氣まぐれな雨も私は好きだつた。

謹告

本號の卷頭論文として、森戸辰男氏の「二種の人權宣言」と題する勞作長論文を頂いたのであるが、止むを得ざる事情に依り、一時掲載を見合せたり。表紙の訂正不能の爲め其儘とせり。乞諒承。



創作



異なる世界

江口渙

故海軍大佐三槻一郎氏の第三十回忌の追悼法會が、大佐の友人や後輩諸氏の手に依つて、六月三日の午後二時から、芝の××町にあるその菩提寺に於ていよいよ行はれる事になつた。

恭一もその日は大佐の甥の一人として、法事に列席しなければならなかつた。殊に、長男である恭一は、郷里にゐるため列席する事の出來ない彼の兩親をも代表すると云ふ意味に於いて、是非とも引つ張り出される事になつてゐた。

法要の事は、大佐に最も世話になつた事のある、四五の海軍將校によつて、一年も前から計畫されてゐたらしい。大佐は四十年ほど以前に兵學校の練習艦の艦長をしてゐた關係上、現在ではその敎へた生徒の中から、將官級の人をかなり出してゐる。その中から數人の大將が名義上の發起人となり、格別愛撫を受けた人達が特に幹事になつて、盛大に式を擧げると云ふ事であつた。

大佐は恭一の母の長兄であつた。實子の無かつた大佐は、大將の弟妹の家から最初に生まれた男の子として、少なからず恭一を可愛がつたさうだ。そのため、大佐が喉頭癌で芝の白金の自邸で死んだ時、まだ漸く四歳にしかならなかつた恭一も、

母の膝に乘つてしくしく泣いたと云ふ話である。

然し、現在の恭一には叔父の記憶は殆ど何も殘つてゐない。唯、叔父が白布に覆はれた病床の上に臥てゐた事と、叔父の柩を載せた砲車が正裝した海軍將校に衛られながら白金の阪を降りて行つた事と、その少し後から白無垢を着た母や叔母が馬車に乘つて行つた事と、そして、それ等のものを路傍の寺の石段の上から女中の背中に負はれながら恭一自身が眺めてゐたと云ふ事とを、千斷れ千斷れに記憶してゐるだけである。

最初、法事の話を聞いた時、恭一は故人に對する思慕の心から、少なからずその企を歡んだ。殊に、その人となりが一方では可なり烈しい疳癖持であり、氣短かであつたけれど、他方に於いては頗る恬淡で、落磊でその上、甚だ情誼に厚かつたと云ふやうな事や、もしもつと長命であつたならば確かに海軍部内の首腦になり得た人であると云ふ事や、日本の海軍の最初の歐洲留學生であつた關係上、海軍そのものの建設に盡すところが少くなかつたにも關らず、死んだ時機が惡かつたため、世間的にはあまり酬ひられてゐないと云ふやうな事などを、子供の時分から母に聞かせられてゐたので、恭一は尚更こんどの企を歡んだのである。

法事に就いての計畫は、H氏と云ふ海軍の後備中佐が殆ど一人でいろいろと盡力してくれた。H中佐は故人の舊藩主であるH侯爵の同族であるため、故人は特に中佐をその學生時代から、極めて懇ろに世話してゐた。その關係上、中佐は恭一の母や叔母達とは以前から親戚同樣に親しかつた。こんどの法要に就いても、H中佐が力を盡して奔走した結果、參列者の中には、故人に關係のある有ゆる海軍の將星と、同藩の名士とを網羅する事が出來たらしい。そして、故人の菩提寺と往來一つを隔てて向ひ合つてゐるH侯爵家でも、その日は特に法要後の園遊會に自分の庭園を貸してくれる上に、費用の全部をも負擔してくれると云ふやうな事までも確定した。法要の日が近づくにつれて、その相談に就いての親戚の間の往來が、漸く盛んになり始めた。恭一の姉が故人の妹である母の代理として上京して來たり、H中佐が

打合せのためわざわざ恭一を訪ねて來たり、叔母が墓地の修繕に就いての相談を持つて來たりした。その度に、故人に關する追憶が大勢の人に依つて、いろいろと又新しく繰り返へされた。

故人は慶應二年の十一月に、蘭學修業のために他の二人の秀才と一緒に長崎へ行つた。そして、明治二年七月に東京へ歸つて開成學校へ入り、やがて間もなく現在の兵學校の前身である兵學寮へ入つた。するとたまたま明治三年三月に、英國の世界一周艦隊が横濱へ入港したので故人ともう一人、前田十郎左エ門と云ふ薩藩出身の青年とが、兵學寮から選ばれて、實地研究と云ふ名目で、その艦隊へ乘組を命ぜられたのである。

その艦隊は　ホルンベーと云ふ水師提督の指揮の下に、三十何隻から成つてゐた大艦隊であつたらしい。故人の乘組んだのは、補助汽罐を持つた三檣の帆走艦ヒーベであつた。艦隊は三月十九日に横濱を出ると、北太平洋を横斷して五月十五日にバンクバーに着き、六月十六日にホノルルへ引き返し、八月には智利の沿岸を南下して南太西洋に出て、九月六日のブラジルのバイヤへ着いた。そして最後に北太西洋を一氣に縱斷して、十一月十五日に英國のプリイマウスに着いた。これが故人の最初の航海であつた。

その後、明治八年まで英國にゐたが、四年にはサブリューテナントになり、邊防艦隊の一艦、ハーキュレスに乘り組み、スペインの内亂當時にヂブラルタルの攻撃に參加したと云ふ話もあるし、又、後には地中海艦の旗艦ナンシスの一員としてクリミヤ戰爭に從軍したと云ふ話もある。そして、八年になつて、英國支那艦隊の旗艦、オーデシヨウスに乘つて日本へ歸つて來た。

歸朝後は所謂最新知識の所有者として、海軍將校養成のため、重に練習艦に乘つてゐた。唯、明治十一年には大尉でありながら日本に於ける最初の歐州訪問艦であつたところの軍艦淸輝の副長として行つたのは、先の留學の結果、地中海や英國沿岸の事情に精通してゐたため、特に選ばれたものらしい。歸朝後、かなり長い間、練習艦の艦長をした後、更に英國公使館附武官となつたが、明治二十四年六月に芝白金の自邸に於いて、病のために死んだのである。

子供の時分、好く母から聞かされた故人の生涯の中で、恭一にとつて一番興味の深かつたのは、明治三年に日本の海軍に於ける最初の海外留學生として、英國の軍艦に乘組んだ時代の事である。いよいよ乘組む事に決つた時岡外務卿は故人と薩藩出身の前田十郎左エ門と云ふ侍とを伴つて、わざわざ自身で横濱へ出懸けて行つた。そして、直接、水師提督に會つて二人の事を萬端依賴したものらしい。その時、外務卿は莫大小の洋服にだぶだぶの長靴を穿いてゐたと云ふ事や、故人は白地の小倉袴に朱鞘の大小を差して行つたと云ふ事や、一端乘組んでからは、多くの水夫の中へ交つていつも甲斐甲斐しく働いたため、士官達に少からず愛されたと云ふ事などを聞いた。その度に恭一は當時二十二歲にしかならなかつた、小柄な日本の靑年が如何なる形に於いて歐洲人の眼に映じたであらうか、と云ふ事を考へては、何時も一種の微笑を浮べざるを得ないのであつた。

その時一緒に行つた前田十郎左エ門と云ふ靑年は、何の都合でか、同じ艦隊ではあるが、故人とは別の艦に乘り組せられた。ところが六ケ月の後、艦隊が遠く南米の沿岸を廻つてブラジルのバイアへ入港しやうとする前日、精神に異狀を呈したものか、夜半に突然自分の船室で自刄した。そしてバイヤ入港とともに、故人の手に依つて同市の一基督敎寺院へ葬られたさうである。何でも自刄の當時は、同艦隊の僚艦互に相見失ふほどの大暴風、大雷雨で、故人の乘つてゐたヒーペにも二度まで雷が落ち、ランプが覆つて火災を起したと云ふ話である。怖らくそれ等の凄慘な出來事が矢張前田氏の艦にも蒞つたため、長い航海に疲れ切つた異國の靑年の心は、止むを得ざる自刄にまで追ひやられるほど、痛ましく傷けられたのであらう。

恭一は何時も母から故人の最初の洋行の話を聞く度に、艦中で自刄した靑年の事が、必ず痛々しい色彩を帶びて心の上に浮ぶのであつた。そして、小柄な快濶な日本の一靑年として英國の士官達に愛された故人の事よりも、痛ましい運命を脊負つてブラジルの土となつた前田氏の方が、何故か遙かに強い力をもつて彼の心を壓するのであつた。こんどいよいよ故人の三十回忌が盛大に行はれる事が確定した時にも、恭一が何よりも先に憶ひ浮べたのは、前田氏の名前であ

つた事は無論、今更云ふまでもない。

法要の事には、故人を記念すべきものを成る可く多く蒐めて陳列したいと云ふ事になつた。そのため、二三の近い親戚からも、形見の品を出す事になつた。恭一の許へも、北海道にゐる故人の第三の弟から一包みの品が屆いた。その中には、重に最初の航海に關する手記や、艦や、港の寫眞や、手紙などが入つてゐた。

寫眞で見ると當時の英國艦隊は、大部分、補助機關を備へたスクーナー型の帆走艦から成つてゐる。中には奈翁戰爭時代の海戰圖に見るやうな、舊い型の艦さえある。これ等が何十隻と云ふほどの大きな隊を造つて、一齊に總帆を張りながら、海上を進んだ時の姿を想像すると、現在の艦隊運動などとは全く趣を異にした、特殊の味があつたらしく思はれる。

故人の手記は四六版位の大きさの日本封紙約二百枚に、日本文で綴つた日記と、英語で書いた航海記錄との二つがあつた。英語の方は、風位だの天候だの、航程などを、極めて記錄的に記したものであるが、その手跡は、如何にも日本人ばなれのした、見事なものである。それに較べると、日本文の方は書體がひどく汚ない。その上、文章も可なりに亂暴を極めてゐる。然し、それにも關はらず、開國時代の日本に育つた一靑年が、生れて始めて太平洋を横斷し、想像だもすることの出來なかつた外國の風物に接した時の、喜と驚きとが、到る處に散見される。その上、日本字で記された外國の地名が、現在の日本人が用ゐてゐるものと、可なりに異つてゐるのも、恭一に對して特殊の興味を與へた。例へばバンクバーをバンクブス、ホノルルをハナルル、智利をチリア、ブラジルをブリヂと記してあるなどが、その一例である。

殊に恭一の心を引いたのは、前田十郎左エ門氏の自刄に就いての記錄であるのは、云ふまでもない。その場所には封紙の下の方に北海道にゐる叔父の字で、一枚の附箋が張つてゐる。

「前田十郎左衛門死去の事。先年海軍省より取調べ方仰せ付けられ候も、文書の所在不明のため、その意を果し得ざり

し旨、御答へ下され度候』

と、註が入つてゐる。そして、その日の日記は『九月十三日晴』と云ふ文字を以つて始つてゐる。

『九月十三日晴。今朝六字ニ水師提督ヨリ唯今非常ノ事出來致候間直グ樣罷越候樣希望有之候間罷越候處前田氏昨八ツ半時ニ割腹被致候旨甲比丹ヨリ達シ有之候。逐一取調べ候處胴ニ三ケ處腹部ニ二ケ處疵有之候。如何ノ事有之候テ是ク相成候哉更ニ難分故、僕幾ンド當惑致候。尤モ野僕ニハ何ノ咄モ無之候間、一々諸士官ニ問合致候處更ニ不知。

前田氏昨夜十二字頃迄、新聞紙ヲ讀ミ終リ寐床ニ至リ候處、間モ無ク甲板上ヲ徘徊致候ヲ當直士官見候故、最早深更ニモ及候間休ム方宜敷ト申候ヘ共、何ノ返答モナク、其ママ甲板上ヲ下リナガラ『ムガイ』『ムガイ』ト叫ビ候間、士官不審致シ直樣見習士官並ニ砲術士一人ニ命ジ唯今前田氏ノ樣子一方ナラズ候故氣ヲ付ケ張番ヲ致セト申候、依而兩人前田氏ノ寐床左右ニ□留シ候處、前田氏士官ノ間ニ行キ到ル。士官ノ間ニ衣服等ヲ仕舞有之候間、其處ニ到リテ單子ヲ開キ候故、兩人モ附添參リ候處、豈計ランヤ前田氏小短刀ヲ拔キ候爲、兩人驚キ甲板上ニ飛上リ當直士官ニ訴ヘ候處、士官直グ樣馳付ケ見レバ最早割腹致サレ候後ニテ候。同時ニ醫師三人馳付ケ種々親切に□□候ヘ共、療治不叶何ト方法モ無之、氣ノ毒千萬ノ事ニ御座候。

水師提督初メ士官ノ咄ニテハ横濱ヨリ北亞米利加、並ニ南亞米利加ニ至ル迄ハ勉強致候ヘ共、何ノ事故カ『バルボライソ』出帆以來、更ニ咄等モ不致、勉強ハ勿論、唯寐テノミ居リ今日ノ事情ニ押シ至リ候、全ク永キ航海ニ屈シ狂氣被致候事ト士官共ノ咄ニ候。尤モ不絕、頭痛等有之甚ダ難澁ノ義ハ野僕ニモ御咄シ有之候間、野僕モ直グ樣醫師ニ御賴ミ被成候方宜敷ト申候處醫師ニ賴候程ニモ無之ト咄シ有之候。サレド野僕、醫師ニ賴ミ藥ヲ我ガ朋友ニ與ヘ吳候樣申候處、醫師曰ク汝ノ朋友前田君ニ度々我々ヨリ採藥候樣申候處、更ニ不用候ト醫師ヨリ申サレ候。昨夜洋中ニテ水師提督ノ船迄參リ候時ノ咄ニ御座候。

九月十四日。甲比丹ヨリ呼懸ケ有之候間罷越候處、當港ニハ釋迦教無之候間汝如何候ヤ、『ローマカ セテツ キ』或ハ

『プロテシタント』ノミニ候故、兩寺ドチラニ葬リ度思ヒ候哉ト質問有之候間暫時考ヘ候處甲比丹『プロテシタント』宜敷樣考ヘ候ガ汝如何哉ト被申候間、『プロテシタント』宗ニ賴ミ呉レ候樣申候。此宗ノ賴ミ英『コンソル』引請呉萬事、親切ノ事ニ御座候。

葬式ノ義は『リユーテナント』一人、見習士官四人、次ニ僕、外ニ水夫十八人ニテ同月午後四字ニ『ブリチツスセルプス・ブリユアルグロンド』と申寺ニ葬リ歸艦ス。

前田氏ノ墓ノ義ハ龍動ヨリ送ル積リヲ『コンソル』ニ約シ候處、唯今、墓石無之候間其代リ板ノ石碑建テ候ニ付テ十三兩彼ニ渡シ證書ヲ得テ歸艦歸路英『コンソル』ノ適子『モール』君ヲ同行シテ我々ノ艦ニ歸リ厚ク饗應ス。

と、ある。隨分大まかな書き方ではあるが、それでも自ヌ前後の樣子相當に彷彿させる。

法要に就いて問題になつたのは、誰が施主になるかと云ふ事であつた。

故人には實子が一人も無かつたので、死後家督は四番目の弟が繼いだのである。然しその人も日清戰爭で死んだので、現在では恭一達と同じく故人の甥の一人のSと云ふ男が相續をしてゐる。ところがSは五年程前に、北海道にゐる叔父の家を出奔して、勝手に外國航路の社外船の火夫になつたまま、今では殆ど行衛さへも知れずにゐる。或は、手を分けて探せば探せないとも限るまいが、社外船の火夫を施主に立てては故人の面目にも關る。それよりも故人の二番目の弟の長男である、Mと云ふ海軍の飛行將校を代らせやう。どうせ甥同志の事ではあるし。その上、故人と同じ海軍軍人である點に於いて、一層都合が好いだらうと云ふ事になつた。それには親戚中誰も異議を差挾む者はなかつた。そして、恭一自身もその事には、むしろ進んで賛成した位であつた。

ところが恭一にとつて、一つの困つた事が惹つた。それは恭一に法事の當日までに故人の傳記を出來るだけ詳しく書けと云ふ事と、その書いたものを當日の式上に於いて朗讀しろと云ふ事とである。これは日中佐の發議に依るもので、

然かも叔父や叔母が進んで賛成したものらしい。

これには恭一も實際當惑した。或は施主を飛行將校のM君に定めたために、甥の中の一番歳嵩である恭一に何とか華を持たせやうとして、そんな事を思ひついたのかもしれない。然し、恭一にとつては、むしろさう云ふ好意は有難迷惑であつた。第一、多忙な恭一にとつて、速急に故人の傳記を書くと云ふやうな事は、到底不可能であつた。その上、法事の式場などで朗讀をすると云ふやうな、自分自身を殊更他人の眼に立つ位置に置く事は、恭一の性癖として元來あまり好まなかつた。然かも恭一にとつてあまりに好ましくないそれ等の事が、凡て親戚同志の釣合と云ふやうな、むしろ一種の固陋に近い心やりから出て來てゐる事を思ふと、恭一にとつては尙更一層迷惑であつた。

そのため恭一は何とかしてさう云ふ役目を逃げたいと思つて、いろいろ考へた結果、とうとう一つの方法を案出した。それは『さう云ふ式場で親戚の者が故人の業績を自賛するに等しいやうな、傳記の朗讀などと云ふ事は、むしろ參列者に對して禮を失するものである』と云ふのであつた。それにはH中佐は不服であつたらしかつたが、恭一が何より強硬に主張したので、親戚側の人達は、とにかく不承不精に承諾した。

然し、その事のために、法要に對する恭一の心持は、だんだん突き崩されて行き始めた。殊に恭一を迷惑がらせもし、又、不愉快にも思はせたのはこんどの法要と云ふ事を中心にして、叔母が再び姪や甥の上に中央集權的な態度を取り始めた事であつた。大した用もないのに、恭一の姉や妻に對して、前の晩から叔母の家へ泊りがけで來てゐるとか、女達はどう云ふ形の髮に結へとか。母の代理として上京して來た姉が、夏の紋附を持ち合せてゐないのを見て、叔母の家の嫁の持つてゐる二揃の中の一揃を貸してやるとか、やらないとか、惡い方なら貸してやるとか。事をいろいろと五月蠅く口に爲始めた。

元來、叔母は自分の姪や甥に對して、格別用もないのに有るらしく云つては召集令を下す癖があつた。そして、所謂時々の御機嫌伺ひに行かなければ、とかく苦情を云ひたがる女であつた。それが不愉快なばつかりに恭一はここ十年强

情に寄り附かないでゐたのである。無論叔母の方でも、それを知つたためか恭一に對してだけは全く召集令を下さなかつた、ところがこんどの法事を機緣にして、又々それが復活したので、恭一は少なからず避易した。そして、それ等の事がいやに小五月蠅くこんがらかつては、恭一の周圍に渦を卷くので、法要そのものに對する最初の心持は、何時か妙に突き崩されて終つたのである。

『一層の事、その日自分だけは病と稱して缺席しやうかしら、故人に對する思慕の心は、法要に出席するとせざるとに依つて格別變りがあるわけでもない。唯、自分自身の心の中にそれだけのものを湛へてゐれば好いわけである。その方がここに故人の親戚の一人がゐるぞと云ふやうな顏をして、未知の人々の中を押し歩くよりはましかも知れない』

恭一は日が迫るに從つて一人こんな事も考へて見た。然し、周圍の事情は、恭一にとつて、矢張、是非とも列席しなければならないやうになつてゐた。その上、どんな形式で法要が行はれるものなのか。又、H侯爵邸に於ける園遊會とは、果してどんなものなのか。殊に、日本海々戰に於いて雄名を轟かした海軍の星將達は、果してどんな風姿の人なのだらうか。この機會に見て置かなければ、或は一生見る事が出來ないかもしれない。それに故人の最初の航海日記にはつてある附箋に依ると、前田十郎左衞門と云ふ人の最後に就いては、海軍省に於いて、まだ十分な調査が出來てゐないらしい。航海中に發狂したため、所謂國家から托せられた英國海軍術の實地研究と云ふ重任は遂に果す事が出來なかつたとしても、とにかく日本の海軍にとつて謂はば最初の悲慘な犧牲者である。その人の最後の事跡、殊に墓地の所在などが知られずに終る事はあまりに痛々しい。故人の手記に依つて當路の人々が、凡の事を明かにする事が出來たら、これほど歡ばしい事はあるまい。事實、このまま機會を逸して終つたら、後は如何なるか解らない。

かう思つた恭一は、叔母の態度や何かで多少の不愉快を感じるところがあるにしても、自分が故人の手記を提て當路の人に示すために是非とも法要に列席する必要があると感じ始めた。そのために、一端突き崩された法事に對する心持が、又新しい別種の力に依つて築き直された事を、一人ひそかに歡んだのである。そして、彼は再びその日の來るのを

心待ちに待つやうになつた。

法要の日がとうとう來た。空は降るとも降らないともつかないほどに、どんよりと曇つてゐたが、六月とは思はれないほどに涼しかつた。

恭一は姉のために、前夜近所にゐる、友人の妻君から夏の紋附と丸帶とを借りたが、紋附は姉にあんまり華出すぎたので、恭一の妻のを姉に廻わし、借りた方のは妻が着て行く事にきめた。そして、女達二人は菩提寺に近い叔母の家で式場に出る仕度を整へる可く、紋附の包みを抱へて一足先へ出て行つた。

恭一は弟と打合せて、當日は叔母の家へ寄らずに、ぎりぎり一杯の時間に直接式場へ行く事にきめてゐた。それは用もないのにあるやうな事を云ひたがる叔母の召集癖に對する反感が大部分を占めてゐたのは無論である、その上、恭一の家に同居してゐる從弟のT君が、先に行つてゐるのだから、恭一は格別時間前に行く必要はない。かう思つたので、彼は殊更悠々と構へた。ところが悠々としてゐる裡に、どうも雨になつて來るらしいので、彼は紋附を借りた友人に併せて自分のための夏外套をまでも借りた。どうせ一つ借りれば二つ借りるのも同じだと思つたからだ、そして、彼が少し長目な外套の裾を氣にしながら家を出たのは、もうかれこれ十二時過ぎであつた。

芝までの電車は、立派に一時間かかつた。そして『寺へ着く時間が早すぎても困るが遲すぎても困るなあ』と云ふやうな事を考へながら、彼が或る橋の袂の停留場に降りた時には、平生餘り人通のない工場横の往來の上に、恭一と同じ方角へ向つて、紋附を來た老年の紳士が四五人ばらばらと行くのが見えた。で、或は少々遲すぎたかなと思つた彼は、早速慌てて辻車に飛び乘つた。無論、人力を要するほどの距離ではなし、その上、寺までの路の半分は阪であるから、時間に代りはないのであるが、實は、これほど急いで來たと云ふ申譯のためであつた。ところが寺の山門から玄關までの降り阪がだらだらとした石段になつてゐるので、到底人力を玄關へ横附けにする事が出來なかつた。そして、遲刻申

譯の急策が結局車賃の損失に終つた事を知つた時、彼は自身自分に對して、實際一種の愉快なる苦笑を浴せざるを得なかつたのであつた。

玄關横の受附にはH中佐と三人の從弟とがゐた。芝の叔母の義息と、M君の弟と、T君とがゐた。

「どうも遅くなりました。でも電車を降りると車で飛んで來たんです」

恭一は少々てれ隠しの氣味だとは思つたけど、こんな辯解をした後で、用事を云ひつけられない裡にさつさと玄關へ入つて終つた。入つて見ると、奥の方の廣間には、もう既に四五十人の老紳士が集つてゐて、座談に花を咲かせてゐる。大部分は羽織袴であつて、フロツクや軍服は殆どない。軍人のかう云ふ會合は當然金ピカの禮服によつて飾られるのであらうと豫想してゐた恭一は、一寸意外の感じがした。然し、それは恭一にとつて、むしろ甚だ氣持の好いものであつた。無論、來會者の多數は故人の知己と云ふ年頃の關係上老齢の退役軍人であるため、こんな時にも、殊更、軍服などを用ひないのかも知れないが、又、一面に於いて比較的に形式主義を取らない海軍々人の平易な心持を現はしてゐると思はれたからである。

玄關にも、玄關の次の間にも、幹事側の人々が大勢立働いてゐて、それぞれ來會の應接に忙しかつた。その時には流石に恭一も親戚の一人として、少しは何かの手傳をしなければいけないやうな氣持がした。然し、格別役目を振り當てられてゐないのに、自分の方から勝手に出しやばる譯にも行かなかつた。そのためかなりの間ぼんやり玄關の右手の片隅に突立つたまんま、廊下越しに大廣間の方を眺めて、寫眞や繪端書で見覺のある日本海々戦の雄將達の顔を探し出さうとしては、頻りに眼を配つて見た。然し、みんながみんな同じやうな和服姿でゐるので、とうとうはつきり見出す事が出來なかつた。

暫時すると玄關の左手の片隅で、一人の若い海軍將校が、小さなトランクの中から勳章を出して、頻りに胸に懸けてゐる。見ると最近伊太利から歸つて來た飛行將校のM君である。

「やあ、どうも暫時」

二人は顔を見合はすと、殆ど同時に兩方から聲を懸けた。實際、從兄弟同志でありながら、十年位も顔を合せなかつたのである。

「こんどはお目出度うございました」

恭一はM君が大尉になつた事と、無事に歸朝した事とを並併せてから云つた。

「いや。お蔭樣で……外國(あつち)にゐた時分にもあなたのお書きになるものを、雜誌で好く拜見しました」

「さうですか。それはどうも」

二人の挨拶は至極簡單であつた。然し、その簡單な裡にも、恭一はM君の風貌から極めて氣持の好い印象を受けた。日に焦けた顔や、形の整つた高い鼻や、鮮かに光る黑い瞳や、すらりと高いながらもかつしりしとゐる體つきには、如何にも海軍の青年士官らしい、そして飛行機乘りらしい、精悍な、颯爽たる感じが、一面潑剌と溢れてゐる。その上、純粹な、生一本らしい心の影が、凡ての上に動いてゐる。

一體、恭一は風貌から受ける印象によつて相手の人格を、直覺的に判斷する一種の力を持つてゐた。そして、その判斷は多くの場合、大して外れる事はなかつた。實際、M君を見た時、叔母達が君の事を飛行機の話しかしない男だとか、いやにぎすぎすしてゐるとか云つてあまりほめてゐないのは、婆さん達の淺薄な判斷にすぎないと云ふ事を知つた。その上、あまり大した人物のゐない從兄弟達の中から、たつた一人のM君を見出す事が出來たのは、恭一にとつて內心少なからざる歡であつた。

若し故人が生きてゐて、自分の甥の中からM君を出した事を眼のあたりに見たならば、殊に海軍同志である關係上、どんなに深く歡んだかもしれない。實子のなかつた故人は、恭一を始め多くの甥や姪を實子同樣に可愛がつたと云ふ話を思ふと猶更である。

こんな事を考へた時、恭一は何と云ふ事もなく突然センチイメンタルな氣持になつた。そして、その瞬間、始めて自分も故人の三十回忌をいとなみにここまで出懸けて來てゐるのだと云ふ意識を、不思議にはつきりと心に感じた。

その裡、玄關で突然大勢がごたごたと立つたり坐つたり爲始めたので、何事が起つたのかと思つた恭一は、不圖とM君の方を見た。

『誰か偉い人でも來るんですか』

『えゝ。これから殿樣がお見えになるさうです』

M君は玄關の方を見ながら、かう答へた。

『殿樣で誰です』

『H侯爵です。今直ぐお見えになるんで、お邸の方が知らせに來たんでせう』

『はあ。さうですか』

成程、『先觸れの大名……』と云ふ言葉は子供の時から聞いてゐるが、自分の邸から道路一つしか隔ててゐないこの寺へ來るのにも、殿樣と云ふものは、かうしてわざわざ先觸れを必要とするものなかと思つた時、恭一はそのあまりにぎやうぎやうしいのに、むしろ感心した。それとともに、現在自分達の住んでゐる世界……愚劣な形式を改廢し、固陋な階級を打破しやうとしてゐる世界とは、全く趣を異にした別種の世界の一端を見せられたやうな氣がして、一種の興味と、一種の反感とを覺えた。

『ここにゐると、餘計な頭を一つ下げなければならなくなるかも知れませんから、僕は一寸失敬します』

かう云つて突然恭一が一揖すると限でもつてそれに答へたM君は一寸輕い苦笑を浮べた。

本堂の一隅には、叔父や叔母や、恭一の姉や妻や、その外、親戚のものが五六人一とかたまりになつてゐた。

『みんな何處にゐるのかと思つたら、こんな處にゐるんですか』
恭一はかう云つて、直ぐその方へ近附いて行つた。
『だつて、親類のものは本堂へ行つてろ、あつちへ出て來てはいけないつて云ふんで、みんなここへ來てゐるのよ』
姉は笑ひながらこんな事を云つた。すると叔母は少し苛々しながら、
『知つてゐる方に御挨拶をしやうと思つたつて、これぢや出來やしないぢやないか』
と云ひながら、可なり不愉快らしい眼付を見せた。そして、恭一がみんなに對して一と廻り挨拶をするかしないに、叔母は鋭く彼を見上げた。
『隨分遲かつたんですね。あなたの弟さんはずつと先へ來てゐますよ』
かう云つた叔母の聲は可なりにひどく尖つてゐた。
『さうですか。ぢや何處にゐるんです。一向見えませんが』
『何でも大變に忙しいので軀を惡くしてゐるとか云つて、お藥を貰ひに行つたさうですよ』
『さうですか。僕も腹が痛んで先刻まで寐てゐたのを、無理に起きて來たんですが』
午前中に腹が少々痛んだのは事實であるが、それは近頃胃を惡くしてゐる恭一にとつて、むしろ一種の習慣であつて格別、大した譯でもないのだ。然し、この場合、殊更それを大袈裟に云つたのである。
『そんな事で少し遲れたものですから、電車を降りると車で飛んで來たんです』
恭一はあまり効能のなかつた辻車を、どうかして少しでも利用しやうと思つたので、故意にこんな事までつけ足した。然し、叔母は相變らず不愉快さうな顔をしてゐた。
『他家の方が先へ來てゐるのに、身内の者が遲れて來るなんて』
叔母は後から又こんな言葉をさへもつけ足した。然し、恭一はそれ以上取り合つては事が面倒になると思つたので、

もはや再び返事らしい返事は與へなかつた。そして、そのまま横を向つて、默つて本堂の中を眺め廻した。

ここの本堂へ恭一は、かつて十何年か以前、母方の祖母の葬儀の時に、唯一度來た事がある。その時は大して氣にも留めなかつたが、好く見ると思つてゐたよりも割合に立派な本堂であつた。疊數も可なり多いし、柱や天井などもなかなか見事であつた。殊に、眞言宗の様式に依つて飾られた須彌壇は、少し薄暗い正面の奥のあたりに落ちつきのある古色を帶びた金色の光を、ちらちらと氣持好く漂はしてゐた。そして、左右の佛壇の直ぐ前には、中央の壇を挾んで、幾組かの花だの花輪だの、供物だのが、ずらりと横に並んでゐた。

「一寸、こちらへ來て下さい、あなたに見て貰ひたいものがありますから」

暫時たつと、叔母は氣持を直したらしく、から云つて恭一を佛壇の方へ伴つて行つた。そして、故人の靈前に多くの知人から供へられたいろいろのものを指差しながら、順々に説明して聞かせた。海軍の或る高貴の御方から御菓子料を始めとして、生花や、花輪や、菓物などには、どれにも一つ一つ、大將とか中將とか軍港や艦隊の司令長官とか、乃至は侯爵とか子爵とか云ふ人々の名を書いた大きな札が添へてあつた。

「みなさん方から、こんなにまでして下さつたんですよ」

叔母は如何にも滿足さうな微笑を浮べて、恭一を省みた。恭一も穩かに眼で答へた。

式は如何にも軍人らしく豫定の正二時をもつて始められた。

二三の大將の人々が、廊下の方からぞろぞろと軍服姿で入つて來た。親族席の中程に、叔父や叔母の後の方に座を占めてゐた恭一は、それ等の人々の中から。有名な將星達を一人でも多く探し出さうと努力しながら、近頃になく物珍しい氣持でもつて眺め續けた。然し、矢張、みんなが大抵羽織、袴であるためか、一人の元帥と、軍服を着た現役の大將三人との外は、遂にはつきり見分ける事が出來なかつた。

ところがさうやつて一人一人を見てゐる裡に、何か恭一は、思ひもかけない別な事實を發見して、今更のやうに心を驚かされざるを得なかつた。何となればそれ等の人々が、本堂の三方にずらりと並んだところを見ると、みんながみんな全く意想外であるほどまでに、甚しい老人ばかりであり過ぎたからである。

それは單に頭が禿げてゐるとか、髮や髯が眞白であるとか云ふだけではない。脊中がひどく曲つてゐたり、腰がひよろひよろとしてゐたり、或は歩く度に膝頭ががくがくして今にも折れさうに見える人さへある。

『實際、よくもこれほどの老人達が、これほど大勢一堂に集つて來たものだ。否、よくもこれほどまでに狩り來めて來られたものだ』

こんなつまらない事にさへ、恭一は思はず感心されて終つた。そして、H中佐達の努力の容易でなかつたであらうと云ふ事が始めて解つた。

然かも、これ等の人々はかつては日淸、日露の戰役に於いて一國の運命を脊負つて立つた事もあるのかと思ふと、人間と云ふもののあまりに早く衰へすぎる事に對して、心から落寞たる感じを抱かざるを得ない。みんなの顏を一人一人好く見ると、誰も彼も如何にも孫などを可愛がりさうな好々爺らしい顏附をしてゐる。然かも、それでゐてこれ等の老いたる好人物が團結すると、所謂軍閥と呼ばれるところの、一寸堪へ難いほどに特別な臭氣を發散するのかと思ふと、恭一にはそれが却つて不思議な位である。

『軍人なんて云ふものも、軍服を脱がすと案外人の好ささうな者ですね。それに、あんまりお爺さんなんで、一寸變ですね』

恭一は出來るだけ小聲でもつて、側に坐つてゐる姉に囁いた。

『さうね。何んだかみんな村長さん見たいね』姉は下を向いて一寸笑つた。そして、恭一ももう少しで噴き出しさうになるのを、僅かに喰ひ止めた後で、同じやうに下を向いた時、讀經の聲は靜かに堂の中に廣がり始めた。

讀經はかしこまつて坐つてゐる恭一の足にしびれを切らさせない程度に於いて終つてくれた。それはH中佐始め幹事連が、讀經は出來るだけ短かく切り上げてくれろと賴んだ結果らしい。それが恭一には少なからず有難かつた。

讀經が一とわたり濟むとS大將が發起人を代表して一場の挨拶を述べた。その間、故人の甥の各々である、恭一とM君とT君と、そして叔母の義息とは、大將の直ぐ後の所に立つてゐた。

S大將は思ひ切り大柄な、がつしりした骨組の人ではあるが、矢張、寫眞で見たよりは遙かにひどく老けてゐた。そして、ともすれば聲が入齒のためにかすれ勝ちであつた。それを氣にするらしく、折々、言葉を切りながら、慇懃に、然かも莊重に、故人に關する追憶を語り續けた。無論、故人が前後二十年に亘る海軍生活の大體であつたが、話が故人の最初の海外留學に及ぶと、大將は一寸心持顏を上げて、

『無論、その時英國の艦隊へ乘り組まれたのは、大佐の外にもう一人薩藩出身の侍で前田十郎左衛門と云ふ方がありましたが、その方は不幸にも途中で亡くなられたさうであります』

と一言附け加へた。そして、一端言葉を切つて暫時何かを躊躇した揚句、再び靜かに後を續けた。

『もう少し打ち明けて申せば、何かの事情で突然發狂されて、船中で自害されたさうであります。遺骸は大佐が南米のバイヤで厚く葬られたさうでありますから、多分いまだあるだらうとは思ひますが、その後日本人で參つたものがありますか如何か。日本の船がバイヤへ寄港したと云ふ事もあまり聞きませんので、その後の事は一向知れて居りませんがまことにお氣の毒の事だと思ひます』

S大將はこれだけの事を云つて、言葉を直ぐ又故人の追憶へ移して行つた。

その時、恭一の心の中に前田氏の痛ましい最後に關する故人の手記が、[illegible]と叫びながら甲板を降りて行つたと云ふ話や、簞笥の引出から短刀を出したと云ふ話や、所謂『プロテシタント』宗の一寺院へ葬つたと云ふ話などが、いろ〳〵の空想を伴つて次から次へと思ひ返された。『ムガイ』『ムがイ』と叫んだと書

いてあるのは、多分、無念無念と叫んだのを、外國人が聞き損なつたのではないかしら。それにしても如何なる事がそれほどまでに無念であつたのであらうか。長い〱航海の、然かも生れて始めの航海の、孤獨と單調とから自身を死にまで追やらざるを得なかつたその時の苦しさと、遠い異郷に於ける孤獨な墓を、三十年間唯の一度も訪ふた人がないほどに打ち捨てられてゐるいたましさとを思ふと、恭一は何故か自分自身がパイヤまで出懸けて行つて、前田氏の墓を訪ねたいやうな氣持までした。

その上、故人はかうして多くの知人と親戚とに依つて、盛んな追悼を催されるのにも拘らず、前田氏は今後に於いても、全く忘れられたまゝ省みられずに終るのだらう。さう思ふと、これだけ大勢の人々の中で、前田氏の最後に關する一番正確で、一番詳しい記錄を讀んだのは、恐らく自分一人切りであるだらうと思ふと、尙更前田氏に對して一層の親しみを感じるためか、恭一は尙更忘れられたまゝになつてゐるその人が、氣の毒で氣の毒でたまらなかつた。

やがてS大將の言葉が終つて恭一達が來會者に挨拶をした後でも、否、燒香が終つてみんながぞろ〱と座を立ち始めた後になつても、前田氏の事が深く〱恭一の頭の中に喰ひ入つてゐた。

本堂の後にある故人の墓へ參つた後で、園遊會に赴く可く、恭一達が揃つてH侯爵邸の門をくゞつたのは、かれこれ四時近い頃であつた。

思ひ切り大きく取つてある玄關前の車寄を廻つて、瀟洒とした茶室風の柴折戸をくゞると、一面鮮かな朝鮮芝を植へつけたひろ〱とした庭へ出た。見ると、芝生を隔てた向ふ側の、榎の大樹が十幾本も鬱蒼と叢立つてゐる一隅には眞新しい紅白の幔幕が張り廻してあつた。そしてその前の白布に覆はれた數多くの圓卓を圍んで、既に墓參を濟して來た人達が、三々伍々、到る處に各々の團欒を造つてゐた。幔幕の右の端の近くには、幾旒かの小形な彩旗が飜つてゐた。その旗の下あたりから、白服のボーイ達が、飲料や菓物を運び出しては、卓と卓との間を忙しさうに動いてゐた。

四五日前、恭一は友人にすゝめられて、上野の精養軒で催された、相模の優勝旗祝賀會の園遊會に行つて見た。所謂園遊會と云ふものは、恭一にとつてそれが生れて始めてであつた、ところが廣くもない精養軒の庭は、上も下も、一杯人で埋められ殆ど滿足に歩く事が出來なかつた。そして、とうとう三十分ほど人波に揉まれ揉まれた揚句、友人の異常な努力に依つて、僅かに一串の團子にありつけただけであつた。それ以來、園遊會にはこりこりしてゐた。ところが、今日のは遠方から一寸見ただけでも如何にも氣持が好かつたので、恭一は始めて先刻から持つてゐた暗い氣持を僅かに救はれたやうな感じがした。

恭一達親戚は一とかたまりになつて、とある片隅の卓を占めた。

『成程、こんな庭でなら園遊會も惡くないね』

友人から借りた夏外套を脱いで、近くの巨石に置いた後で、格子の一つに腰を卸した恭一は、向側にゐる弟をみてこんな事を云つた。

『さうですね。……ほんとうに毎日やつてくれても惡くなささうだ』

弟も笑ひながら答へてサイダのコップを乾した。

『この園遊會の費用は、みんなお邸からお出しになつたんですよ。みんなで千圓近いさうです。こんどは殿樣も大した御奮發です』

叔母はかう云つて、わざわざ恭一に説明した。

『さうですか。それは……でも現在の侯爵が若い時分、倫敦へ行つた時には、大變死んだ叔父さんの世話になつたんださうですねそれで今度は奮發したわけなんでせう』

『ええ。ええ。それはほんとうにお世話申したんださうですよ』

『その時、侯爵が華族の息子のくせに、まるで吝嗇なんで、叔父さんがひどく困つたさうですね。その吝嗇坊が好くて

んなに奮發しましたね』

恭一がかう云ふと、叔母は俄かに不機嫌な顔をしたまま、默つて眼を膝に落して終つた。多分、親しみのある洒落まを好く云はれなかつたためであらう。

恭一は後から後からボーイが運んで來る菓物を喰べたり、平野水のコップを傾けたりしながら、叔母にはそれつ切り話しかけずに、一人で熱心にあたりの光景を眺め始めた。そつちでもこつちでも一つ塊りづつの老紳士達が、如何にも互の久濶を辭すらしく、愉快さうに話をしてゐる。恭一達の卓とは反對の一番端れにある卓の上には故人の手記や寫眞が置いてあるので、十數人の人々が圓く圍んで、頻りにそれを眺めてゐる。右手の大樹の下ではM君の父である横濱の叔父が、胸に垂れ下る白髯を動かしながら、見事な白髮のN藥學博士と話してゐる。博士は維新前に故人と一緒に長崎へ行つた人であるから、多分その時の話でもしてゐるんだらう。それ等の卓の間を、H中佐が忙しさうに廻つて歩いてゐる。今日來てくれた上官達に一人一人禮を云つてゐるらしい。

『私。昔知つてゐた方に、一寸御挨拶したいんですが』

やがてH中佐が恭一達の側に來た時、叔母はかう云つて、軀をねぢつた。

『いや。今日は親戚の人はどうかこのままにして居て下さい。こんな時に、親戚の者があんまり顔を出すと變なもんだから』

H中佐の樣子には、どこかに落ちつかない處が見える。

『でも、みな樣がこれまでにして下さるのに、親戚の者があんまり知らん顔してゐるのも、變ぢやありませんか』

『いや。それは吾々幹事がちやんと好くしますから』

『さうですか』

叔母は不服らしく言葉を切つた。

『私。今日一寸お願があるんですが』
叔母の言葉の終るのを待つて、恭一は漸くH中佐に話しかけた。
『實は昨日北海道の叔父から手紙が來まして、記念のために、今日お集り下すつた元帥や大將方に是非寄せ書きをしていたゞきたいと云つて來たんですが‥‥で今日T君が絹をもつて來ました』
『それは、今日は到底もいかんわ。こんなにごたごたしとるんぢやから』
『無論、無理だらうとは思ひますが、叔父にしてみれば一生の願なんでせうから。‥‥私、墨も筆も用意して來たんですが』
少し氣の毒だとは思つたが、叔父の欲しがつてゐる心持も解つてゐるので、もう一度云ひ張つて見た。するとH中佐は一寸困つたらしい顔を見せたが、
『そりや到底いかんな。先刻寺の受附で一人一人に芳名錄ぁ書いて貰ふた位なんぢやから、二度と同じやうな事を頼めんわ。それに第一、今頃、云ひ出しては時機を失しとる』
『ああ。さうですか。ぢやどうも仕方がありませんね』
H中佐がかなり困つてゐるらしく見えたので、かう云つて話を切つた。すると中佐は、軍帽を脫いで額の汗を拭いたと思ふと、一とわたり親戚の者を見渡した後で、
『とにかく今日はみなさんが好くからうまで集つて來てくれましたんで。元帥や大將がこないに集る事は、めつたに無い事なん人すぜ。無論、大佐のために來てくれたんぢやから、大佐の力がこれだけ大きいわけなんぢやが、これにはわしも隨分骨を折りましたぜ。何しろ個人の力でこれだけの大將がたを集めやうたつて一寸出來るもんぢやない』
と、云ひながら、如何にも滿足さうに微笑を洩した。
『それはもうさうでございますとも。さぞお骨が折れたでございませう』

叔母が恭しくかう云つて、頭を下げると三四人の者が同じやうにそれに倣つた。

『それが、もう一つ一寸お話があるんですが』

恭一は再び中佐の方へ向いた。

『最初の洋行の時に一緒に行つた前田つて云ふ人の事が、委しく叔父の日記に出てゐますが。その下にはつてある附箋に依ると、以前に海軍省から取調べの命令があつたがその時は日記の所在が解らなくつて返事を上げられなかつたが、やつと出て來たと云ふ事を當局の方に話してくれろと云ふ意味が書いてありますが、今日どなたかにその事をお話していたゞきたいんですが』

恭一は北海道の叔父が日記へつけた附箋通りの事を云つた。すると中佐は突然、何かに脅かされたやうな落ち着かない樣子を見せるとともに如何にも恭一の言葉を押へるやうな調子でもつて、

『前田の事は、今日はどうか云はんと置いて下さい。何しろ今日は鹿兒島の人が大勢來とるんぢやから、あれを云はれると困るんぢや。前田と云ふ人の死に方が死に方ぢやから。尙更、その事を云はれると大佐ばかりを褒めるやうになつて困るんぢや。先刻、S閣下の挨拶の時にひやひやしたんぢや』

『だつて、死んだ人の事跡が海軍省に解つてゐなければ、尙更死んだ人に氣の毒ぢやありませんか』

『いや。略、解つとるんぢやらう。とにかく今日はその事はどうか云はんで置いてくれたまへ』

かう云つたH中佐の態度には、少なからずおどおどしてゐるところが見える。もしも今日この席上で前田氏の事が鹿兒島出身者の耳へ入つては、後で餘程の面倒な事件が起るだらうと云ふ心配が、如何にもありありと溢れてゐた。

その樣子があまりに氣の毒であつたので、無論、恭一はそれつ切りその話を中止したが、H中佐はそれ以上云ひ出されては困るとも云つた風に、間もなく恭一の側を離れて他の卓へ行つて終つた。

恭一に與へた中佐の答と、今見せたおどおどとした樣子とは、恭一にとつて全く意外の事であつた。……前田氏の事

實を、單にかつて在つた一つの事實として述べるでさへ、何故これほどまでに憚られるだらう。或は死に方が死に方であるから、殊更憚られるのかも知れない。然し、恭一に云はせれば自殺であるからこそ尚更氣の毒でならないのだ。前田氏の悲慘な自殺を、自殺として明らさまに云ふ事は、何も無事に歸朝して來た故人を傷くする事には少しもならない。その上、前田氏の自殺そのものが鹿兒島出身者にとつて何の不名譽になる事だらうか。假令、途中で不幸にして自殺したにしても、日本の海軍に於ける最初の海外留學生の一人を鹿兒島から出した事は、むしろ、鹿兒島の名譽ではないか。或は一緒に行つた一人の中の、一人だけの法要をして、他の一人を捨てて置くと云ふ事が片手落ちであるから、同藩の人に惡いと云ふのかも知れない。それならば尚更この機會に前田氏の事跡を確めて、法要を營むなり、遺族を搜すなり進んで墓の所在を尋ねたりすればいい。否、その事こそ、この際是非ともしなければならない大切な事なのだ。それだのに、殊更前田氏の名を隱さうとする譯が、恭一にはどうしても解らなかつた。

　然し、或は所謂藩閥と云ふものの世界は、恭一などには全く想像する事も出來ないやうな不思議な心と心とで組み立てられてゐるのかも知れない。そして、その不思議な心の組み立てが、善良なH中佐の心をまでも、これほどに烈しく脅かすのかも知れない。かう思つた時、藩閥と云ふ世界の中味の不可思議なのと、不可思議であるが故に一層威力の強大なのに、今更ながら驚嘆した。然かも前田氏は自分の閥の威力があまりに強大なために、却つてそつとして置かれてこのまま永久に弔はれずに終るのかも知れない。さう思つた時、恭一は尚更、前田氏が氣の毒でならなかつた。その裡に、座を立つ人が殖へ始めた。多くは幹事に挨拶をして歸つて行つたが、中には大樹の叢立つてゐる直ぐ後の崖下にある、もう一つの庭を見るために段を降りて行く人もあつた。

「下の方のお庭を御拜見になりませんですか。唯今、お花畑の花が綺麗に咲いとります」

　侯爵邸の家扶がこんな事を云つて、あつちこつちを廻つては勸めてゐた。恭一の姉や妻も、それを見るために恭一を誘つたが、恭一はどうしても一緒に見に行く氣になれなかつた。それは、「お花畑」と云つた家扶の言葉が、恭一に少な

からざる反感を與へたからである。

『花壇と云へば解るものを、殊更、お花畑などと變に業々しい物言ひをしなければ、主人に氣に入らないのであらうけれども、何と云ふ物々しい敬稱なのだ。一つの花壇にさへそれほどの敬稱を附けて呼ばなければ生きて行けない家扶の生活も生活だが、さう云ふ敬稱がなければ嬉しがらない主人の生活も生活だ』どつちも淺猿しいと云ふよりはむしろ氣の毒と云はざるを得ない』

こんな事を考へた時、今まで氣持好く眺めてゐた周圍の凡が、一面に朝鮮芝で覆はれた大きな芝生も、鬱蒼として叢立つてゐる榎の大樹も、巨きな庭も、石燈籠も、否、芝生の向ふに見える大きな邸宅まで、全く彼とは異る世界のものであると云ふ事をはつきり感じた。そして、それが不愉快で不愉快でたまらなくなつた。

やがて人が大方居なくなつた頃になつて、突然、横濱の叔父が向ふの卓から恭一達の方へ來た。

『あの方が兄の昔譚を是非みなさんに聞いて貰ひたいつて云はれるから、みんな彼處へ集つたら好いだう』

かう云つて、遠くの卓の一つを指差した。

みんなが叔父の後についてその方へ行つて見ると、その卓にだけにはまだ七八人の人が殘つてゐた。その中には精悍な眼附をしたF大將だの、膝ががくがくするほどよぼよぼになつてゐるU陸軍大將だの、恭一が子供の時に知つてゐたA中將などの顔も見えて、恭一はA中將に一揖すると、その直ぐ側の椅子に懸けた。

恭一と向き合つた椅子を占めてゐた老紳士がやがて間もなく立ち上つた。大島の袷に黒の夏羽織を着た、風采の堂々とした紳士である。歳は六十を越したらしいが、その形の整つた鼻と、明るく光る瞳と、艶々とした顔の色には、なかなか青年に敗けないほどの、生き生きとした力が溢れてゐた。

『遲れて來ましてまことに申し譯がありませんが、……私は今日こゝへ參りまして、故人と兵學寮に一緒に暮した五十年以前の事を回想しますと、實に感慨に堪へませんので、是非、當時の故人の事を幾分なりともみなさんにお傳ひした

いと思ふのであります」

から云つて、いろ〳〵と昔譚を仕始めた。

故人は色が黒くつて小柄であつたが、何時も元氣で快濶で大言壯語が好きであつたと云ふ事や學生仲間の親分として、常に始終してゐたと云ふ事や、多數の中から選ばれて英國の軍艦へ乘り組を命ぜられたのは單に語學が秀でてゐたためばかりではない。矢張、人物もしつかりしてゐたゝめであると云ふ事などを、それからそれへと話して行つた。

恭一は先づその老紳士の言葉使がてきぱきしてゐて、聲の朗らかなのに心を曳かれた。その上、聲と言葉使ひとがその力強くいき〳〵としてゐる凡ての風采に如何にもぴつたり合つてゐるのに感心した。そのため、とう〳〵最後まで老紳士の言葉に氣持好く耳を傾けた。

やがて老紳士が話し終つて靜かに椅子に腰を卸したと思ふと、突然、U大將の横にゐたフロックの老人が立ち上つた。

「唯今、いろ〳〵と面白いお譚しがあつた後で、私のやうな吶辯の者がやりましては、どうもお聞き苦しいだらうとは思ひますが……」

老人は卓の縁を逆にとかしてゐる兩手でどもつて、前屈みになつてゐる軀を支へながら、から云つた。短い毛が疎らに生へてゐる圓い頭やしぼ〳〵とした小さな眼や、背中から首へかけての曲り加減や、殊に、薄い赤い上一面白く粉が吹いてゐるやうな顏の色には、前の老紳士とは比較にならないほど、よぼ〳〵とした處が見える。

「先刻お寺であつたS大將のお話も、又、唯今のお話しも、大變結構ではありましたが皆海軍側のお話でありまして、故人が海軍同様陸軍の建設にも、どの位力を盡されたかと云ふ事に就いては、どなたもまだお話しがありません。でここに居られる先輩のお許しを得て、[illegible]潜ながら私が一寸お話しゝたいと思ひまして」

「先輩」と云つた時、老人はU大將の方へ目禮した。U大將は老人らしく首を垂れて默つて煙草を吸つてゐた。

どんな話をするのかと思つて、恭一は趣味深く耳を傾けてゐると、それは唯故人が明治十何年とかに藩で造つた陸軍軍人の志望者を養成する會の、發起人の一人であつたと云ふ事にすぎなかつた。無論その當時、故人は軍人の少ないその藩出身の軍人中では先輩の一人であつたに違ひないから、假令、海軍に籍を置いてゐても、そんな會が出來れば發起人の一人になつたのは當然だらう。その上、元來が世話ずきであつたから、相當の盡力もしたであらう。その左程でもない事を、そのフロックの老人は國家のために非常な一大貢献をたてやうに、繰り返し繰り返し云ひ續けた。然かも、國訛のある上に、歯が無いので、ともすれば聞き分け難いほどに不明晰になる言葉でもつて、一つ事ばかりを如何にもくどくどと話してゐる。

恭一は我慢にも聞いてゐられなくなつて、とうとう隣にゐるA中將に話しかけた。

『あのフロックの方はどなたです』

『あれですか。あれはTと云ふ陸軍の退役中將で同藩の人です』

『あの方はどなたです』

恭一は眼附でもつて、前に話をした老紳士の方を指した。

『あの方は古く海軍を止して代議士になつた事のあるYと云ふ方です』

成程あの人が英國に十三年もゐて英國人を夫人にしてゐるY氏、不平のために海軍を止したY氏なのかと思つて、恭一は更めてその顔を見詰めた。

T中將の話はなかなか終らない。『その上』『先輩のお許しを得まして』とか『唯今、先輩もお話しになつた事ですが』とか、云ふ言葉が小五月蠅いほどあまり度々繰り返へされるので、恭一はすつかりいやになつて終つた。その上、T中將の態度には海軍側に敗けまいとする樣子がありありと見えたので尙更恭一は我慢が出來なくなつて行つた。それとともに、今日眼の前に見たこれ等の異つた世界に對する不愉快が、又新しく心の中に湧き始めた。

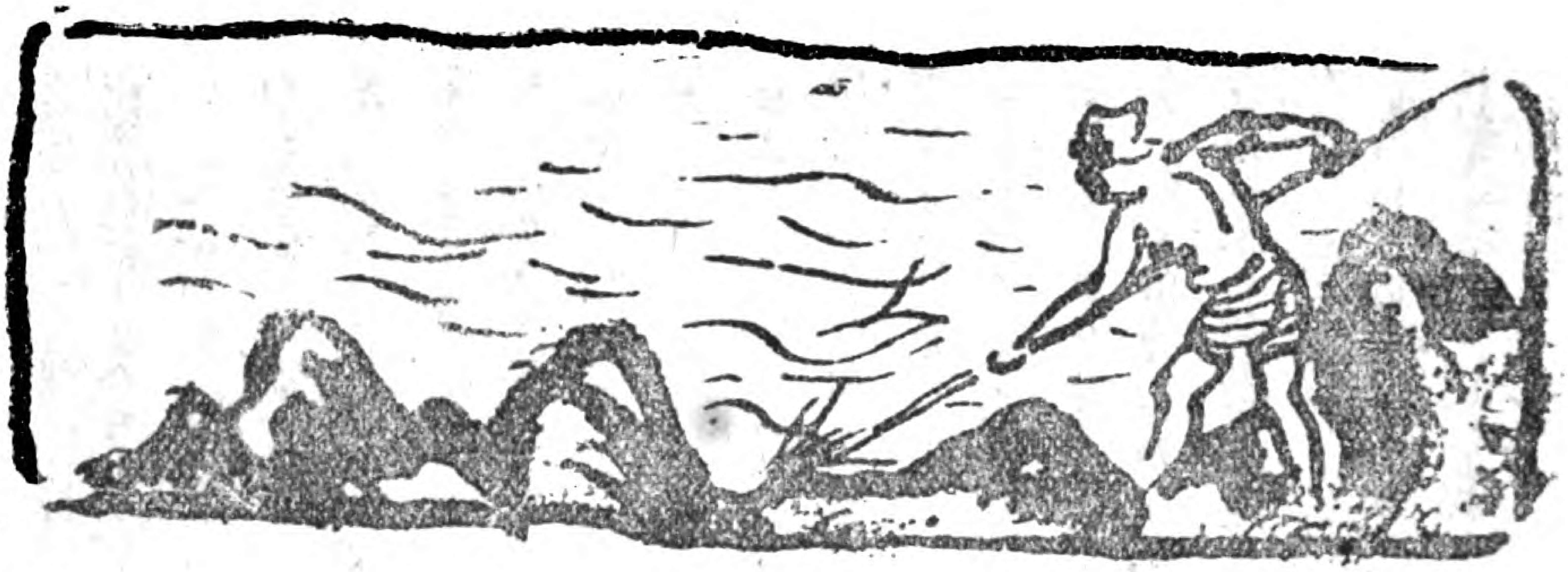
「唯今、殿樣がお出でになります」とわざわざ家扶が寺へ先觸れに來た事や、前田十郎左衞門と云ふ名前を聞いて、H中佐が鹿兒島出身者に對する氣兼から、無闇におどおどとなつた事や、海軍側で故人の事跡を述べたのを聞くと、敗けてはゐられないとばかりに、立ち上つて、左程でもない事を大業に述べ立ててゐる眼の前のT中將の事などから、さてはお花畑だとか、御前だとか云ふ風な言葉そのものさへも、云ふに云はれないほどの不愉快な感じをもつて、彼の心に迫つて來た。そして、それ等の凡てのものが、恭一達の作つてゐる年若き自由思想家の世界とは、全く種類を異にし、色彩を異にしてゐる、無價値なものであると云ふ事をはつきりと知つた。それとともに、是れ等の世界と自分達の世界とが如何に遠く距つてゐるかと云ふ事を始めて知つて、今更ながら驚かざるを得なかつたのであつた。

T中將のどくどくとした言葉があまりに長く續くのでY氏はとうとう我慢が出來なくなつたものか、一人中途で立ち上つてさつさと向ふへ行つて終つた。それが恭一にはむしろ痛快であつた位である。唯、氣持好く光る精悍な瞳を眼鏡の奥から覗かせてゐるF大將が、軍服に包んだ軀を少しも崩さずに聞いてゐるのが、却つて少なからず氣の毒であつた。

「もう好い加減に止さないかな」

かう思つた恭一が止むなく頭上の空を仰いだ時、どんよりと垂れ下つてゐる鼠色の空からは、糠雨が何時かまばらに降つて來るのが見えた。

（大・六・二〇）



招かれざる客

久米正雄

朝、例によつて可なり遲く眼を醒ました許りの處へ、J新聞のN君がやつて來た玄關でいゝと云ふので、出てみると、何か文藝欄に載せるやうな消息はないかといふのだつた。

『さあ、別にありませんなア。』

私はそんな答へが、N君に滿足を與へて去らしめるに足りない事を解つてゐながらさう云つて答へる外なかつた。果してN君は追窮の手を弛めなかつた。今度は搦手へ廻つた。

『何か面白い事はありませんか。』

『ありませんなア。近頃ひどく沈滯し切つてゐるんですから………』

『さうでもないでせう。何か惡友側の消息でも聞かして下さい。』

『それこそありませんよ。近頃はみんな大人しくなりましたからなア。それに此頃僕とは滅多に付合つて吳れなくなりました。』

『すると此頃は良友付合の方が多いんですね。今日も一緒にいらつしやるんでせう。』

『どこへです。』私は不審に思つて聞き返さゞるを得なかつた。

『相撲を見に——今日はK雜誌社の招待ぢやないんですか。』

『いゝえ、僕は知りませんよ。K社が誰を招待したんです。』

『知らないんですか。そいつは可怪しいな、今、H氏やE氏の所を廻つて來たんですがね。今日はA氏やU氏なんぞとみんな一緒に、K社の招待で、相撲見物に行くんだつて云つてましたよ。だから勿論貴方もその仲間だと思つてゐました。ちやアさうぢやないんですか。けれども貴方が入つてないのは少し妙ですね。』

N君は少し氣の毒だといふやうな顏をした。

『いや、別に何でもないぢやありませんか。僕は別に招ばれなければならないやうな譯がないんだもの。』

『だつて御仲間がみんな行くんでせう。』

N君は行きむゝり上私の意を迎へるやうに、幾らか憤慨めいて云つた。

『その位の仲間外れなんさ始終ですよ。此頃では良友からも惡友からも落伍しました。』

『ハ、、、、ハ』

N君が笑殺して呉れたので、僕も笑ひはしたが、鳥渡妙に胸に閊へるやうな氣がした。而してN君が去つて了つた後まで、其心持は尾を曳いて殘つた。何だか心の底を、突き濁されたやうな氣持だつた。飯を食つて、机に向つてみたが、どうしても落着けなかつた。

『ヲ俺は例の嫉妬を起してゐるな。こんなつまらぬ事に、女々しくこだわつてゐるなんて、俺も隨分下らない奴だ。』

と、思ひ直してみたがだが、何だか淋しいやうな恨みがましいやうな、滿たされぬ思ひが殘つてならなかつた。それは根本から云へば、撰擇に取殘されたといふ、自尊心を傷けられたのが主だつた。而して、さう云ふ仲間から、から云

ふ風にだん／＼疎外されて行くのが、淋しく思はれたのに違ひなかつた。其上、K社の極く私人的な催しには違ひないから、特別に關係もない自分なぞは、招ばれるべき理由はないと思つても、さういふ差別をつけたK社のT君に、一種の恨みに似た反感を持ない譯には行かなかつた。『俺だけを除外した』といふ僻み心が、理由もなく湧きひろがつて、T君がもと／＼自分の存在を認めてゐないやうにさへ思はれ、そんならばそれでもいゝぞ、といふやうな反抗的な氣分にさへ一時はなつた。

けれどもさういふ僻みが、醜いのは自分でも氣付いてゐた。こんな僻みを起せば起す程下等だとは、僻む直ぐ後から反省された。而して其反省があるたけに、心持の動揺は更に鎭まらなかつた。今度は自分の下等さが、情けなく思はれてならなかつた。

『相撲見に招ばれない位の事で、女が拗ねるやうな心になるなんて、貴樣の人格に耻ぢろ。』

さう思ふと、實際耻しい氣にもなつた。それでくよ／＼家でそんな思ひに囚はれてゐるよりは、散歩でもして來たら、すつかり氣が變つて、忘れてゞも了ふかと思つて、私はぶらりと戸外へ出た。

何處をどう歩くといふ當もなかつた。が、横町を出た坂の角で、煙草を一つ買つて、ゆつくり喫しながらK坂の通りを歩いてゐる中に、私の足は獨りでにHの家の方へ向つた。

それは、實際殆んど無意識とも云つていゝ位、衝動的な心の動きだつた。私の心の中には、誰かに會つて此の心持を、放散して了ひたい氣があつたのだ。而して近處に訪ねるべき友と云つてはHの外にはないのだつた。

併し其Hとても、今日の場合に於ては、此の心持を訴へる譯には行かない狀態にあつた。何となればHは、其のK社から招待された一員であつた。而して自分の彼らに對する嫉妬を表白すべく最も耻しい對手の一人でなければならなかつた。だからひよつとするとHに會へば、益々その心持を增長させるかも知れなかつた。

けれどもHより外に、此際訪ねるべき人はなかつたのだ。而して其心を訴へない迄も、何か話してゐる中にはこの心

持はどつちかに轉向して了ふだらうと思はれたのだ。又却つて事態が惡くなつて、まざ〳〵と其心持を經驗するのも、毒を以て毒を制する一種の抵抗療法のやうにも思はれたのだつた。

私はそんな事を思ひ返しながら、薄日のちわ〳〵と洩れてるT坂を、ゆつくりHの家の方へ上つて行つた。すると向うから、其當のHが、丁度坂を下りて來る所にばつたり出會つて了つた。Hは、もう國技館へ行く途中に違ひなかつた。私はそのゆつたりした夏外套姿を見ると、急に慌てたやうに顏を赤めた。何だか、此處で會つて了つたのが、ひどく恥しいやうな氣がしたのだつた。まだ向うが、氣付かないのを幸にして、そつと行き外らして了はうかとさへ思つた。その中に向うでも此方を認めた。

「やア。俺ん所へ來るんたつたのか。」

Hは目をぱち〳〵させ乍ら、立停つて訊ねた。

「うむ。まアさうだ。が、別に用がある譯ぢやないんだから關はないよ。──一體何處へ行くんだ。」

私は何だか恥しくなつて、思はずから白ばくれて了つた。而して、すぐ其後から、取返しのつかぬ嘘を云つて了つたと悔んだ。が、もうどうにもならなかつた。

「是から國技館へ相撲を見に行くんだ。」

「さうか。そいつはいゝなア。」

私はこんな風に云はねばならなかつた。

「君は招待されてゐないのかい。今日はT君の招待で、AやEも行くんだぜ。」

「さうか。」

私は少し苦しくなつて來た。

「どうだい。一緒に行つて見ないか。」

Hは私の氣持も知らずに、突然かう云つて誘ひ初めた。彼はこんな事を、勿論何でもない事と思つてゐた。

私の立場は、苦しくもなつたが、一種の興味も加はつて來た。

「だつて、僕は招かれざる客だもの。行くのは厭だよ。」

「關はないぢやないか。どうせ向うはTで、來る奴は知つてる仲間ばかりなんだもの。行つたつてちつとも差支ないよ。關はないから一緒に行かう。僕も實はあそこまで、一人で行くのは億劫なんだ。」

「だつて、招びもしない客に來られちやア。向うが迷惑するぢやないか。それに場席ももうないだらう。」

「そんな心配は要りはしないよ。どうせ一桝取つてあるんださうだから、幾人入れるのか知らんが、一人位餘計入つたつて、僕らが少し窮窟を我慢すればいゝんだらう。もし入れなかつたら、別な場席を取つていゝぢやないか。」

「それもさうだけれど、招ばれもしないのに行つたり、當てつけがましく別な席を取つたりしちやア、Tに惡いからなア。」

私は少し動かされながらも、まだ行く氣持にはなれなかつた。

「そんな事があるものか、Tなんぞ何とも思ふものか。でも、そんなに君の氣がさすなら、僕がよく云解つてやるよ。來ないと云ふのを無理に連れて來たんだつて。だから行けよ。」

「さうさなア。」

私も、これからHと強ゐて別れて、家に閉ぢ籠つてゐ乍ら、くよくよその問題を思ひ出したりするよりは、折角Hがかう云つて與れるんだから、思ひ切つて、わざと其場所へ行つて見るのも、きつぱりしてゐて却つていゝと思つた。それにしてもかういふ風に、事情が發展しようとは少しも思はなかつたので、何だか可笑しいやうな氣もした。

「別に用はないんだらう。ぢやア行けよ。君が行かないんなら僕もよすよ。」

Hは何故か熱心に勸めた。

『そんなら行かうか。』

私はかう云つて、結果から見れば、Hの所を訪ねて行つたのは、國技館へわざと誘つて連れて行つて貰ふ爲だつたのを、何だか氣耻しく思つた。それに何も知らぬやうにHを欺いてゐるのも氣になつた。が、又一方、かう氣が弱い癖に、わざとさういふ窮境に身を置いて、自分を苦しめて見たいやうな心持が、可なり私には多いので、行くと定まつてみれば、何だかその興味に胸を唆られるやうでもあつた。

そこで二人は電車に乘つて、兩國へ行く事になつた。

向うへ着いてみると、國技館の前は、丁度午後のいゝ潮時だと見えて、隨分人が混んでゐた。自働車や人力車がひつきりなしにそこの茶屋へ横付けされた。私は餘り來た事のない場所の上に、何だか招かれざるの客の意識で、何となく身が引けてならなかつた。

高砂家といふ茶屋は、幸ひすぐそこに在つて、すぐ二人も知れたので、私はHの後について、恐る〳〵其茶屋の中へ入つて行つた、

Hは直ぐに店先の、仕切場みたいな所に座つて、席割表を手にしてゐる男に向つて、いきなり、

『Yですが案内して呉れないですか。』とK社主の名を云つた。

『えへ、Yさんですか。Yさんお二人御案内。――』

その男は出方の方に向つて聲をかけた。而して其Y氏の席へ二人の圓を書き込んだ。私はHの後から、注意深く、其表を覗き込んだ。場席に餘るやうな事が在つてはと、まだ心配だつたのである。すると其桝の中には、まだ圓が三つしかなかつた。私は急いで外の方の桝に書き込まれた數を見た。そこには五つ圓のが二つ三つ在つた。私はやつと少し安心した。

『ではどうぞこちらへ。』

出方が先に立つて、幾らかまごついてゐる二人を、館の口の方へ案内した。
『まだ三人しか來ないやうだつたね。』
私は歩き從ひながら、Ｈに話しかけた。
『きつとまだＡが來ないんだらう。』
『Ａが後から來ても入れるかしら。』
私はまだそんな事を心配しなければ濟まなかつた。
『大丈夫だよ。あの表を見たら、六人詰まつてゐる所が在つたぢやないか。』
『さうか。』
私はＨが、何にも注意してゐないやうで、よく見てゐるのに驚いた。而して更に安心の念を增した。
それでも、場馴れない私たちは、出方の後から小さくなつて從いて行つた。危ふかしい一間ばかりの楷子段を上ると、桝は平棧敷の後の方の、可なり見よい位置に在つた。
桝には果して、Ａ君とＵ君と而してＴ君とがゐた。
『Ｋを連れて來たよ。』
Ｈは、事もなげにかう云つて、太つた身體を桝の中へ入れた。
『やあ。失敬。』『失敬。』
皆は口々に云つて、Ｈの後ろに小さくなつてゐる私の方を見た。
私はＵ君の開けて吳れた、後ろの方の席へ身を縮めて入れながら、Ｔ君に向つて、辛うじてかう云つた。
『僕も見せて貰ひに來ました。』
『いや。――』

T君はかう會釋したきり、何も云はなかつた。而して却つてHに向つて、
『A君はどうしたんだらう。』と問ひかけた。
それが私には、例の廻り氣から、すぐ『おまへのやうな餘計ものはいゝが、肝心のAが來ないのが心配だ。』と云つてゐるやうに思はれてならなかつた。
『Aはきつと來ないんだよ。あんまり好きぢやないやうだから。』
Hは答へてゐた。私はAが、ほんとに來て呉れなければいゝと、其時思つた。Aが來なければ、自分がゐても、さう迷惑ではないと考へられたからだつた。もう、かう場内が一ぱいで、しかも場席といふ場席が、殆んど塞がつてゐるのを見ては、別に席を求めようなどゝ云ふ勇氣は、口先だけにも出なかつた。
角力は、十兩所の取組が初まつてゐた。が、私は招かれざる客の意識と、場馴れない感じと、少しは新聞で讀んではゐても、まだ殆んど名を知らない力士ばかりなので、どうしても氣が乘らなかつた。皆も只漫然と勝負を眺めてゐるらしかつた。
かうして數番は取り進んだ。其中に、私もだん／＼勝負の中へ引込まれて行きさうだつた。
すると幕の内へ入つてから、二三番目の取組の頃だつた。仕切り直しに氣を取られて、皆が土俵の方に眼を集中してゐると、不意に後ろで、『いや、失敬』といふ聲がした。見るとそこにAが立つてゐた。
『やあ、』『よく來たね。』『もう來ないかと思つていた。』皆はこんな事を云つて、喜び迎へた。が私は、彼を純粹に喜び迎へるべく、甚だ苦しい位置にゐる自身を見出した。而して益々身を縮めるやうに、辛うじて一人分の場席を開けた。
『遲くなつて失敬。今日鳥渡芝の家に用があつだもんだからね。でも諸兄と一緒に、かういふ機會に見て置かないと。所謂時勢に遲れると思つたから、遲かつたけれど急いで來て見たんだ。…………大變な入りだね。これぢや新聞の云ふ事も、餘り當にはならんね。』

Aは私の横に入りながら、四邊を見廻して、すぐ快活にかう話しかけた。が、それに對する答へが、同じ程な調子で合せられない程、私は又招かれざる客の意識に捉へられ初めた。…………私はそれから又小さくなつて、息窒るやうな思ひで勝負を見てゐなければならなかつた。

『こんな事なら、矢つ張り來るんぢやなかつた。』と、つくづく今では思はざるを得なかつた。こんな風に押かけて來て自分ばかりか他人までを、いろいろな不愉快な目に會せて、何の甲斐があつたのだらうと、又自分の輕佻と優柔が悔まれてならなかつた。其間にも取組はだんだん進んだ。私は何だか感情の遣り場がないやうな、壓迫されたまゝの思ひで、たゞ勝負を味もなく眺めてゐた。

『今度は兩國だね。兩國つていへば、C社のC氏は來てゐないかしら。』

ふと、Aがこんな事を思ひ付いて云ひ出した。今日皆が招ばれてゐる、此のK社とは殆んど商敵とも云ふべき、C雜誌の主幹のC氏が、角狂であるのは既に知られてゐた。

『きつと來てゐるね。十日間缺かした事がないさうだから。』

『今にきつと兩國つて怒鳴るから、よく聞いてゐたら、どこかにゐるのが解るかも知れないぜ。』

『C氏が兩國を聲援したら、みんなで小牛田山に聲援してやらうぢやないか。』

皆は口々にこんな事を云ひ合つた。而して聞くともなしに、兩國の聲援に耳を傾けてゐた。『兩國ウー!』『小牛田山アー!』といふ聲がそこゝで起り初めた。すると其中に、斜向うの棧敷の中程で、少し濁みながらに疳高い聲が、特別に高く皆の耳に入つた。それは今迄そんなに高いのは聞いた事がないけれども、日常の聲から推して、確かに聞覺えのあるC氏の聲音に違ひなかつた。

『あれがさうぢやないか。』

『さうらしいね、どこだらう。』

『あ、ゐた〳〵。あそこにゐるよ。ほら、あの今赤い羽織を着た男が、立つて歩いてゐるあの五六段下で…………
…あゝ今あそこの出方が行くあの通りさ。ほら。ね。』

と眼ざとくE君が見つけ出した。

『どれどこ。』『やあ成程ゐたゐた。』

そこらにゐる名士などの顔にも、さう知己のない皆は、群集の中からやつと見出したC氏の姿を、珍らしさうに嬉しがつた。C氏はそんな事とは少しも知らず、遠目にも赤い胸を少しはだけて、扇をはた〳〵と使ひながら、一生懸命土俵の方を眺めて、もう一度『兩國ゥ！』と怒鳴つた。

『僕が怒鳴り返して見ようか。』

私はふいに、そんな氣持になつた。何だか先刻から、壓搾されてゐるやうな心持を、どうかして捌かして了ひだいと思つたのかも知れなかつた。而して出來るだけ大きな聲で、

『小牛田山ア！』と叫んでみた。

思ひの外に大きな聲だつた。棧敷の前にゐた五六人が、それを聞いて振り返つた。が、私はそんな事に頓着なく、もう一度、滿身の力を喉に集め、兩掌で口に喇叭型を作らへながら、招かれざる客の鬱憤を、一時に晴らして了ふつもりで、聲を限りに怒鳴つた。

『小牛田山ア！』



曾呂利新左衛門

大泉黒石

一

Antisthenes 末流のお茶坊主曾呂利新左衛門が、ある時、ある處で奇妙な仇討話を豊臣秀吉に聞かせた。秀吉は熱心に聞いてゐた。

二

『五年前、伏見の或吝嗇な酒造家に嘉一郎と申す年若い酒造りが奉公してゐました。嘉一郎は伏見の在の生れだが、幼ない時に兩親を失つた貧しい獨身者でした。人の世話で此酒造家に傭はれてから彼是十年餘りになるけれども、主人の方で目をかけて呉れぬので出世の望みはまるでなかつたと申します。たゞ、彼の兩親が生きて居る頃、同じ町の者の娘を嘉一郎に貰ひ受けて夫婦にすると云ふ約束があつたのを唯一つの希望にして一生懸命働いて居ましたが、その許嫁の娘すら終ひには嘉一郎を棄てゝ、いつの間にか、伏見町の、これも亦或一軒の米問屋に使はれてゐた市藏と云ふ獨身者と密通して、そのまゝ世帯を持つて了つたのです。嘉一郎の憤怒は

非常なもので、到頭その不貞な女を殺害したと御思召し下さい。

口惜しさの餘り夢中で女を殺した時は、これで恨みが晴れたと思つたが、一日過ぎ二日過ぎ、人妻殺しの詮議が厳しくなると、そろ〳〵怖氣づいて來ました。こつそり行つた仕事だから口を拭いて素知らぬ顔で悔の一言も云つて居れば、露見せずに濟んだかも知れないのを、市藏の顔を見てから一層恐ろしくなつて、もう凝乎として居られなくなりました、其處へ市藏が、非業の最期を遂げた女房の三十五日が來る前には、幽鬼になつても此仇は討つて見せると、狂人のやうな有様で下手人を探し廻つてゐるといふことを聞くと、前後の分別を忘れ、伏見の主家を秘かに拔け出して大阪の川口へ遁れて了ひました。それも主家へ斷るか、暇を貰ふかして出れば、さう早く足がつかなかつたこと〻思ひますが、何しろ伏見と云へば、家數から見ても高の知れた百軒足らずの狹い土地のことではあるし、人の目と耳とが針のやうに鋭く光つてゐる此際ですから、嘉一郎の出奔が直ぐ怪しまれたのも無理はございません。

役人が其處へ目星をつけて酒造家の家探しをすると、女を斬つたま〻で床の下へ投げ込んであつた匕首や、兇行の少し前に女から來た詫び狀見たやうな手紙などが出て、それから、了ひには、嘉一郎と女の關係も知れたので、罪人は此哀れな酒造りだと言ふことがすつかり分明りましたが、役人の方では日頃から嘉一郎の素行を見てゐた上に、事情が判明つて見ると、役人も人間の片われだから、流石に厳しい追手を向けることを逡つたのでした。それよりも、反對に相手の許嫁を奪つた市藏が憎かつた位でした。

處が、薄々さうではないかと疑つてゐた女房の仇を愈嘉一郎だと聞いた市藏の心は穏やかでない。どころか、胸の中は復讐の焰が一時に烈しく燃え上りました。そして獄門晒し首は覺悟の上で、法度の仇討ちに發足したのです。仇の嘉一郎を匿まつてやるやうな友人親戚がないことも、酒造家の話では、嘉一郎の懐に大した路銀がないことも知れたので、嘉一郎の逃げ場所は乾度このわたりから大阪へかけての酒造家に違ひない。でないと、食べて行く術がないからだと一人で決めたわけですが、市藏の見當はあたつて居ました。嘉一郎の行先は川口の或る酒屋でした。嘉一郎は女を

殺めたことが一日一日悔ひられたけれども、捕まれば命がない。命は惜しいから、逃げられるまで逃げてそれから先如何しやうと云ふ考へは、まるでありませんでした。伏見を飛び出してから。なまじつか出て來なけりやよかつたと思ひました。市藏が跡を追ふて來るのは解り切つた事だから、態々邊鄙な川口の酒造家を選んだ譯でございます。

嘉一郎は大阪へ逃れて持ち金もないところから、腕に覺えた酒造りの伎を便らねば、翌日からの口すぎに困るので、川口の居酒屋『備前屋』に住み込みました。この備前屋には嘉一郎が伏見に居る時分から酒の取り引きで、ちよい〳〵使ひに來たことがあつたと申します。で、伏見の主家とは折合が惡うて暇取つて來たから、手蔓を求めて相應の酒造家へ住み込む迄を三日でも四日でも、使つて呉れと頼みますと、備前屋の方では、始終人手が足らずにつてゐた矢先で、譯もなく承知して呉れました。備前屋の主人は、伏見の主家を飛び出す位の男だから、迚も居酒屋ごときに辛棒は出來まいと思つて、嘉一郎の様子に目をつけて居りますと、案に相違して、まめ〳〵しく働くので、思はぬ拾ひ物をしたやうに喜びました。で、本人さへ承知なら、何分小店のことで暖簾を分くるとまでは行かないまでも、いつまでもいつまでも逗留して貰ひたかつたと云ふ話でございます。もとより、人妻殺しの罪人とは心づかぬことだから、小使錢も餘分に與へて可愛がつてゐました。處が、嘉一郎の腹へ入つて見ると、此處も。いくら小錢が溜まつたら、それを路銀に一日も早く池田の町へ身を隠さうと云ふ考へでした。何分伏見と大阪とは目と鼻との間、いつ何時跡を追ふて來る市藏と出會ふか知れないと思ひました。池田へ行けば酒造家は、掃く程あるし、何處かで使つて呉れるだらう。それに、大阪よりは、いくらか伏見に遠い。とまあ考へて居つたさうですが。それまでは、止むを得ぬ場合でないと滅多に戸外へ出ず、薄暗い土間で、酒壺や樽擔ぎをして居りました。場末の居酒屋だから、日暮れに近づくと、荷車や馬を曳いて町から戻つて來る空腹の人夫や漁師やお百姓が、一頻り立て混む、嘉一郎は女中と共に斯様な客の間に立ち混つて働いて居りましたが、最初三日か四日で池田へ行く積りだつたのが、つい主人の親切に絆されて何事もなく一年ほど過して了ひました。けれども、用心深く馴らされた嘉一郎の神經は、どうしても此處に彼の心を落ちつかせません。警戒深い彼の目は

一年の後も、人妻を殺した當座の如く、光つてゐました。ある夜、と申しますより、寧ろ夜明け方に、朝酒の用意をする積りで嘉一郎が、暗い土間の片隅に据えてあつた大甕から小桝へ生酒を汲み出してゐると、あの宵を湛へたやうに黝ずんだ酒の鏡へ、壁に仕切つた明り取りの風窓の影が、湖の底から靜かに浮き上る月のやうに、仄白く映りました。その風窓の影に、罌粟粒ほどの黒點が、ぽつつりと現はれた。大甕の口から凝乎と生酒の底を見下ろして居ると、黒い粒の影が、氣味惡く膨らんで來て、了ひには人間の顏に見えて來るのでした。而も餘人でない、恐ろしい、恐ろしいと思つてゐる市藏の顏、煤けた青白い顏が、酒の鏡に映る風窓の隙間から嘉一郎を無心に見詰めて居るのではありませんか。嘉一郎が悸然として甕の側から跳び退かうとした拍子に、酒の鏡が、ゆらゆと微かに揺めいて、影は崩れて消え失せました。今時、幽靈でもあるまい。ことに死んだと云ふ噂も聞かぬ市藏の顏が、甕の底から浮く道理がない。確かに自分の心の迷ひとは知り乍らも、やつぱり氣掛りになると見えて、壁の風窓を仰いで見たが、窓に穿めてある錆びた鐵格子には、夜明けの小蝿一匹這つて居なくて、川の流れに緣を切られた水霧だけが、茫と煙つてゐるばかりでした。それでもまだ安心が出來ないで、ついぞ用がないから外したこともなかつた濕つぽい裏木戸の門を脫りました。そして家の外へ怖々首を差しのべて共邊から、先刻の風窓のあたりを、物に怯びえた目つきで見廻しました。妙に心騷のする曉だと思つた嘉一郎の、心の虫は、案の定、今目の先に迫つて來る危險を彼に知らせて與れたのです。酒倉の壁の外は、こ直く安治川で、幾つも繋いである荷足舟の中から、蜥蜴のやうに、ぬるぬると這ひ上つた黒い人間の影が、風窓を仰いでゐる嘉一郎の足元から、出し拔けに跳びかゝつて來ました。けれども、少か一歩か二歩の相違で、劍道知らぬと見えた刺客の七首は、ほんの閃きを見せたゞけで、肝腎の酒造りを突き損ねたのでござりまする。刺客は市藏でした。

嘉一郎は川べり添ひに闇雲逃げました。そのまゝ池田へ逃げたつきり、備前屋には再び戻つて來なかつたことは無論、池田のさゝやかな酒造家で、備前屋同様に旅人を相手の居酒屋に傭はれるやうになつてからも、恐怖は絶へず嘉一

郎につき纏つてゐました。怖ろしい刺客の幻は何處までも彼に追ひ縋つて來る。その怖ろしさは川口も池田も變りがありませんでした。

我が君よ。哀れな嘉一郎は匕首の影から一歩をも外へ出ないやうに心を鋭かはれて、毎日斯樣な死の脅威に怯えてゐました。池田の居酒屋は河内家とか申しましたが、當時河内家の暖簾を潜つた客は口を揃へて申しませう。酒樽擔ぎの下男は、まるで蛇のやうに光る目と、癩風病者のやうに青褪めた顔を持つてゐたと――往來から暖簾を潜つて入つて來る客があると、その蛇の目が氣味惡く光りました。その癩風病者の顔が刹那の惱ましげな曇りを帶びて物淒く、何となう慘めな青褪めやうをしましたでせう、それほど居酒屋へ川入りの客を發作的に警戒する淺間しい習慣は嘉一郎の窪んだ眼を一刻も落ちつかせなかつたのでございます。酒肴を列べた食臺を前に、顔を肥してゐる客や、空樽を叩いてひなびた上方小唄に笑ひ崩れる旅商人なんどを、酒甕の蔭から羨ましさうに、眺めては、ふと市藏の恐ろしい姿を描き出して、狐つきかなんぞのやうに、きよと/\と身の廻りを見廻してゐる不思議な振舞ひが、段々と河内家の噂に上る頃、嘉一郎は、此處にも居たゝまらなくて、到頭暇を貰つて出ました。市藏は、やがて、河内屋にも巡つてくるに違ひないと信じ切つてゐたからでもございます。其處を出てから彼は何處に落ちつく場所を探したでせう?

伏見を立ち退く時は、悧巧さうな小肥りの躰が、伏見から川口へ、川口から池田へ、池田から更に遠く灘へ彷ふて來た時分には、彼の顔――いつも身だしなみの美しい剃り跡を見せた顔に、疎らな弱々しい髯が、七分ばかりの長さに青青と伸びてゐました。後ろから見た人は、『肺癆』が墓場を求めて歩いてゐる樣、よろばつてゐたと申します。灘でも酒造家に住み込みました。今まで大阪の川口でも、池田でも、酒造家には違ひないが、傍ら居酒屋商だつたゝめに、人の出入が多くて、自然心配が絕へなかつたけれども、この灘では、酒造一方で、人に顔を見られる氣遣ひもなし、また自分も年中倉の中に引込んで居れば濟むことであつたから、そつちの苦勞は幾分減つたので、はじめ今度の家へ乞食同樣にして傭はれて行つた時は、もう此處が自分の死場所だと考へるほど衰え果てゝ居た躰が、十日一月一年と經つうちに

知らず識らず夫丈になつたことには、自分乍ら嘉一郎は驚いたと申します。

我が君よ。我が君も今日あの灘に伊丹屋といふ上方一番の酒造の老舗があることを聞き及びでございませう。

嘉一郎がはじめ駈け込んで、同情を乞ふた家が共處でございました。今でこそ、伊丹屋とか灘の七郎兵衛とか云へば誰知らぬ者もない豪家だが、その頃は葭簾の陰から煤けた軒行燈が覗かれて、形ばかり土藏に凶な不性花葛が囲ひ廻つたほどの陰氣な街道筋の小店でした。それが人の一代から計へて見ると、少かの五年で、御存じの通りに昌へたのも酒造りの腕に惚れ込まれて、伊丹屋の婿養子に貰はれたこの嘉一郎と、主人の七郎兵衛とが必死になつて夜晝稼いだ賜でございます。その間に市藏はどうしたか、何處に仇を探してゐるのか皆目樣子さへ知れません。嘉一郎も流石に以前よりは、穩やかに眠ることも出來たらしい、異樣な目つきも柔らいだ色に還つて、人間らしい心持ちに近づいたらうと想像されますが、實際は、まだ安心も油斷も出來ないで、川口の荷足船から猿のやうな形をして現はれた追跡者の姿が、目先にちらついてゐたらしいので、と云ふ譯は、貰ふ金はあり乍ら、人並以上の才智はありながら、知人や友達や、門口を一歩踏出せば幾らも顔馴染があり、力になりさうな召使や下男もあり乍ら、嘉一郎は一寸横町へ用足しに出掛けるにも、態々深い日傘をさしたり、浪人者の身づくりに網笠被つて姿を變へて、行き逢ふ人に顔を見らるるのを怖れて、これが自分の道樂でございますと、七郎兵衛や女房の手前を取り繕つてゐた氣苦勞を察しても解るではございませんか。嘉一郎はこれ程までに追跡者の目を恐れて、自分を他人に肖せる工夫を凝らしてゐました。金が自由になる贅澤な身分になつたのだから、一思ひに遠國へでも遁れて了へば、苦しみは消えてなくなるものを、凡夫のあさましさに家や女房を棄てかねて、それも思ひ切つて出來なかつたのでございます。人間の運は、何處でどう變るか、全く死んで見なければ定つたとは云へない、と世俗で申します通り、人妻を殺したゝめに、とても出世の見込みが立たゝぬと思つて悲しんで伏見の主家を出奔せねばならなくなつて、立身や出世の考へなどは、大阪の川口へ逃ぐる途中で夙の昔ふり落して了つて、今は、たゞ生命さへ取りとむればよかつたのでしたが、その生命さへ危くなつて池田へ走り、池田から伊丹屋へ

出掛けた時分にはその生命も大詰に近づいてゐたのです。迚も死ぬなら、人並に屋根の下で目を瞑りたいと願つた程の、云はゞ人間よりは亡者に近かつた嘉一郎が、病みほゝけた躰を物好きに引受けて呉れた。と云へば、伊丹屋七郎兵衛が大層な義侠者に聞えますが、その實、給金も仕着せも小使錢も要らぬから暫く手傳はせて貰へば、酒造りの廻國修業が叶つて助かりますと云つたものだから、罪状抱へた男だとは知らずに、慾の目から勘定して、使つてやつた嘉一郎でございます。人殺しが富限者にならうとは市藏も思ひますまい。その不思議な浮世の五年と幾月目に――と申し上ぐると、」五年と幾月目に、さも〳〵變つたことが起つたやうに聞えて大袈裟になりますが、別段に嘉一郎が、どうしたと云ふ譯ではございません。月に一度は例の妙な風をして、結ひつけの髪結ひ床へ剃刀を當て貰ひに出掛けるやうに、出掛けました。いつも三四人の客があるので、自分の番が巡つて來るのを、もどかしさうに待つことが多かつたのでした。その日も二三人の先客がありましたが、待つにも及ばず、一人濟み二人濟みして、自分の方へも亭主の手が廻つて來ました。鏡臺の前に、きちんと坐り乍ら、鏡の中を見詰めて居ますと、往來を通行するさま〳〵な人の顏や後姿が、走馬燈の追つ駈け人形見たやうに、ちら〳〵映るのでした。

　まかり間違つて、鏡に映る顏の中に市藏に肖たものがあれば、どうしやうか、何處へ隱れやうか、自分が此處に坐つてゐることを氣づくかしら、などと餘計な苦勞をするのでした。そうかと思ふと、今度は、伏見を出た時とは違つて、第一鼻の下に髭があるし、髷も商人らしく結つて居る上に、身采がずつと違つてゐるから、表を仇が通り過ぎて、一寸此方を見た位では、まさか自分を嘉一郎だとは感づくまいと思つたりして、泥塗りの厚い疊ふ紙を膝の上に擴げて居るのでした。これが、いつも床屋での癖でした。伊丹屋と床屋とは、町内が違つて、いくらか離れてはゐるけども、暫く通つて居れば、自然、何處の者だとは知れ勝ちのことなのに、口は利くけれども、まだ何處だとは自分の住居も商賣も云はないから、亭主も彼の身分や素情は知らぬやうでした。知らぬと決めてゐたのは嘉一郎だけの考へで、或は薄々位は、知つてゐたかも知れません。それは兎に角、足の痺れを堪へて、月代を剃つて貰ふのでございます。他の客を濟し

て、板の間で一服喫ひ乍ら、七輪の下を煽いてゐた新米弟子に言ひつけて、亭主は金盥に湯を取らせたり、手拭を浸させたりしてから、漸く仕事に取り掛りました。膝元の金盥の中から、ほろ〳〵立ち騰る湯氣や、額を濕す度に濡れ手拭に溶かした剃粉の香ひが、いつもの事ながら、魔睡薬のやうに、嘉一郎をうつとり夢心地に誘ふのでした。月に一度、この時ばかり、自然に筋張つた肩の凝が緩んで來て、張つてゐる氣も和らぐのでした。けれども心からいゝ心地に睡氣がさして來るのでないことは申すまでもないでせう。

嘉一郎は、目をつぶり乍ら、額から首すぢへかけて、氣持よく、する〳〵辷つて行く微かな剃刀の唸りを、うつらうつら聞いてゐると、薄のろな顔つきの弟子が亭主に代つて今度は嘉一郎の顔へかゝりました。亭主は煙管を咬えながら、時々指圖をしてゐるやうでしたが、間もなく來合せた侍風の客へ、亭主は行つて了つた時、よく斯様な稼業の者にあり勝な無駄口を叩き始めたのです。處が、新米の弟子から見ると、成る程、餘計なお饒舌りかも知れなかつたが、目をつぶり乍ら、聞く方の——いや相手になる方の嘉一郎に取つては、それは身顫ひするほど生々しい話だつたのでせう。

『旦那はどちらにお住居ですか』

『お前は？』

弟子は『おや』と思ひました。嘉一郎はこれが癖で、相手が何處だと言へば、自分は、まるで反對の方角にしやうと思つてゐたので、でなければ狭い町だから嘘が露れるからでした。

『私ですか？　私は小さい時分に親に勘當を食つて、道樂半分に、この商賣で諸國を渡つて歩く流れ者でさあ。この町には四日ばかり前にやつて來て、親方の家に厄介になつて居ますよ。生國は京ですがね。』

嘉一郎の耳には京と云つたのが鋭く響きました。それから、

『旦那も言葉訛りが京のやうでございますね』

と云はれた時には、またぞつとしましたが、根が悧巧な男だから、弟子の先を越して、

『そうだ。俺も七つ八つの頃から旅へ出て、一度も家へ歸らないが、その後あちらの方は別段の事もないかね』

『それは、いろ〳〵面白い出來ごともありますが、仲でも、耳新らしいのは、旦那も御存じか知りませぬが、伏見の女殺し。許嫁の女に棄てられたのを恨みに思ふて、可哀相に到頭斬り殺した酒造りがありましたよ、さつと五六年も前のことでね、その女の亭主が酒造りの跡を追ふて探し廻つてゐるが、隨分艱難苦勞をしたと見えて、みじめな有様でしたよ』

と云ひ乍ら、剃刀を砥石で磨ぎ始めました。嘉一郎の背中は汗びつしよりで、着物の下が麻布だからいゝやうなもののそれでも、剃り立ての生え際や小鬢は、しつとり膏がにじみ出てゐました。

『お前さん。その仇討ちに出た亭主が、みじめな様子をしてゐたと云ふが、何處かで、逢つたのかね』

と尋ねる聲も、流石に顫えを帶びて、それは自分の氣の故か、だんだん顏が蒼褪めて來て、目をつぶつてゐられなくなりました。

『その仇討の男に逢つて本人から聞いた話ですから、嘘でなからうと思ひますよ』

と云ひ乍ら、砥ぎ終へた剃刀を濡れ手拭に一寸あてゝから、

『お髭は落しますか』

と云ひ乍ら、髭つきの商人風で、妙に引つ掛つたやうな物の言ひ方をする客の横顏を一寸覗いて、

『お髭は？』

とまた聞き直したが、相手が、何を考へてゐるのか、まるで返事をしないので、また『如何ですか？』と顏を覗いた時、一寸妙な顏をした。嘉一郎は狼狽へたやうに、

『髭はそのまゝでよい。が、先刻の話の仇討ち男とお前は何處で逢ひなすつたかい』

と尋ねた時は、もうわな〳〵してゐた。床屋の弟子は、暫く腰を屈めて、この奇妙な客の顏を鏡の面に見詰めてゐた。

髮を結つて貰ひたいと云ひ乍ら入つて來た時、板の間の隅で蹲んで、振り返つて見た時とは、鬚や眉の亂れ毛が落ちて、別人になつて見えた。ばら／＼に髮を解いて、こうして鏡に映る顏を正面から見詰めてゐた弟子は、むつつりと默り込んで了ひました。其時から、剃刀を握つて居た指が烈しく戰き始めたのですが、咽喉の奧から絞り出すやうな聲で、

『その男とは此灘の町で逢ひました』

と言つたのです。その時の嘉一郎の顏色は眞個に土になりかけた死人のやうでした。

『どゝど、どこで逢つた？　その奴と灘の何處で逢つた。そいつは、そいつは、今何處に居るのだ』

と云ひ乍ら、仰向いて弟子の顏を見る途端でした。

『その仇討の男は、今此處に居るのだ！』

開いたばかりの目を上げた嘉一郎は、剃刀を握り替へて後ろに突つ立つてゐる恐ろしい市藏の、やつれ果てた顏を見詰めてゐるではありませんか。市藏の姿は嘉一郎に劣らず、見違へるまで變つてゐました。それは、話の調子が、變に運んだので、市藏の方から怪しみ出したゝめに、漸く解るやうな譯でした。それまでは、市藏の方でも氣がつきませんし、また、夢見るやうな心地でうつらうつらしてゐた嘉一郎も、自分を殺しに廻つてゐる市藏――云ひ替へますと、殺生禁制の厳しい掟に對して五本の指の一彈はねをも控ゆるやうな男でない市藏の、其五本の指に握られた鋭い剃刀に、首から上を任せて居たとは知りませんでした。新米の弟子が偶然にも市藏だつたことは今更申し上げないでもお解りでございませう。

市藏は大阪の川口で仇の嘉一郎を逸し損ねてから今日までに、見る影もなく零落れてゐました。それでも、女房の復讐は思ひ止らなかつたと見えて、嘉一郎を探す手掛には、衆人の出入頻繁な髮結ひ床を、町から町へと、よく世俗の仇討ち物語に出て來る侍のやうな熱心と氣長さとで、渡つて歩いたわけでした。そして、この灘の町の髮結ひ床で、即ち仇を討つには持つて來いの場で、自分の餌食に飛び込んで貰つたことを、少なからず意外に思ひました。恐らく彼が

仇討ちの祈願をこめた神佛があつたならば、乾度其刹那に、願望を遂げた感謝をしてもよかつたのです。何故かと申しますと、嘉一郎は此恐ろしい弟子の足下に、全く絶望的に首をさしのべて、剃刀の刄を待つてゐたからでございます。剃刀の一辷り！　兇惡な一辷りが、凡ての終りを告ぐるに充分でありましたから。嘉一郎は悲鳴を揚げて、痺れた足に力を込めて、いきなり跳び上らうとしました。けれども、それだけのことでは、迚も逃げる機會は出來ないと考へますと、もう石のやうに固くなつて了ひました。でも、嘉一郎の頭の中は烈しく動いてゐた。土藏付の家や、數棟の酒倉や、七郎兵衞や妻や金が、次第に彼を見棄てゝ飛び去る光景が、火のやうな頭の中を、どんどん駛けて行くのでした、市藏の方では、仇の嘉一郎が、一寸も身動きの出來ない窮地へ陷込んで居ることを見拔いて、剃刀の手を、ぶるぶる顫はせ乍ら、にや〱笑ひ出した處を見ると、愉快な、でも恐ろしい勝利を胸一杯に覺えて、餘程嬉しかつたと思はれます、嘉一郎は、五年幾月の間馴らした上に馴らして來た、どんな微かな物音にも、どんな仄かな物の影にも、鋭く響き、黑黑と映る耳と目に、悲慘にも、斯樣な峻酷の一刹那に、まんまと裏斬られて、敵の前にどうすることも出來ずに居なければならなくなりました。長い長い間の追跡と遁走は、かくて到頭最後に迫つて來たのでございます。』

三

こゝまで來ると曾呂利新左衞門は急に口を緘んで了つた。秀吉は積み重ねた蒲團の上から、辷り落ちやうになるまでに前へ乘り出して、夢中になつて聞き惚れて居たものだが、肝腎の處で話が際どくぷつつり切れたので、せつかちな彼は、怒鳴るやうに催促したのだ。

『それから、どうなつたか。新左衞門！』

『さあ、それから、どうなりましたか、恐れ乍ら此新左衞門奴、先の方はまだ好い考へがついて居りませぬ。さり乍ら、』

と新左衞門はむきになつて。

『新左衞奴考へまするに、御威勢盛んな太閤殿下の御心通りにならぬもの天下に一つもございませぬ今日。私の一存で此仇討の納まりをつけまするのは餘りに恐れ多く、我が君の御指圖に從ひまするでございませう』（完）



槍ヶ岳紀行

芥川龍之介

一

――島々と云ふ町の宿屋へ着いたのは、午過ぎ――もう夕方に近い頃であつた。宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が、青竹の笛を鳴らしてゐた。私はその癇高い音を聞きながら、埃にまみれた草鞋の紐を解いた。其處へ婢が洗い盥に、洗足の水を汲んで來た。水は冷たく澄んだ底に、粗い砂を沈めてゐた。

二階の椽側の日除けには、日の光が强く殘つてゐた。そのせいか疊も襖も、殘酷な程むさくるしく見えた。夏服を浴衣に着換へた私は、括り枕を出して貰つて、長長と仰向けに寢ころんだ儘、昨日東京を立つ時に買つた講談玉菊燈籠を少し讀んだ。讀みながら、浴衣の糊の臭ひが、始終氣になつて仕方がなかつた。

日がかげるとさつきの婢が、塗りの剝げた高盆に湯札を一枚のせて來た。さうして湯屋は向う側にあるから、一風呂浴びて來てくれと云つた。

それから繩の緒の下駄をはいて、石高な路の向うにある、小さな錢湯へはひりに行つた。湯屋は着物を脫ぐ所が、やつと二疊ばかりしかなかつた。客は私一人ぎりであつた。もう薄暗い湯壺に浸つてゐると、ぽたりと何かゞ湯の

上へ落ちた。手に掬つて、流しの明りに見たら、馬陸と云ふ虫であつた。手のひらの水の中に、その褐色の虫がはつきりと、伸びたり縮んだりするのを見る事は、妙に私を寂しくさせた。湯屋から歸つて、晩飯の膳に向つた時、私は婢に槍ケ岳の案内者を一人賴んでくれと云つた。婢は早速承知して、竹の臺のランプに火をともしてから、一人の男を二階に呼び上げた。それは先刻上り口で、青竹の笛を吹いてゐた男であつた。

「槍ケ岳の事なら、この人は橡の下の五味まで知つて居ります。」

婢はこんな冗談を云ひながら、荒らされた膳を下げて行つた。

私はその男にいろ〳〵山の事を尋ねた。槍ケ岳を越えて、飛驒の蒲田溫泉へ出る事が出來るかどうか。近頃噴火の噂がある、燒岳へも登山出來るかどうか、槍ケ岳に峯傳ひに穗高山へ行く事が出來るかどうか。——さう云ふ事が主な問題であつた。男は窮屈さうに畏りながら、無造作にそれらは容易だと答へた。「旦那さへ御歩けになれりや、何處でも譯はありません。」

私は苦笑した。上州の三山、淺間山、木曾の御嶽、それから駒ケ岳——その外山と名づくべき山には、一度も登つた事のない私であつた。

「さうさな。まづ山岳會の連中並みに歩ければ、見つけものと思つて貰はう。」

男が階下へ去つた時、私はすぐに床を敷いて貰つて、古蚊帳の中に横になつた。戸を明け放つた椽側の外には、暗い山に唯一點、赤い炭燒きの火が動いてゐた。それがかすかながら、私の心に、旅愁とも云ふべき寂しさを運んで來た。

やがて婢が戸をしめに來た。戸の走る度に山の上の星月夜が、私の眼界から消えて行つた。間もなく私の寢てゐるまはりは、古蚊帳に四方を遮られた、行燈ばかりの薄暗がりになつた。私は大きな眼をあきながら、古蚊帳の天井を眺めてゐた。するとあの青竹の笛の音が、かすかに又階下から聞えて來た。——

二

――山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから、何匹かの獸が走り去つた。

「畜生、鐵砲さへあれば、逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌々しさうに舌打ちをしながら、路ばたの橡の大木を見上げた。

橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の仔猿をつれた親猿が、靜に私たちを見下してゐた。

私は物珍しい眼を擧げて、その三匹の猿が徐に、梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立ち去り難いやうに、橡の梢を仰ぎながら、礫を拾つて投げたりした。

「おい、行かう。」

私はかう彼を促した。彼はまだ猿を見返りながら、漸々又歩き出した。私は多少不快であつた。

路は次第に險しくなつた。が、馬が通ると見えて、馬糞が所々に落ちてゐた。さうしてその上には、蛇の目蝶が澁色の翅を合せた儘、何羽もぎつしり止まつてゐた。

「これが德本の峠です。」

案内者は私を顧みて云つた。

私は小さな雜嚢の外に、何も荷物のない體であつた。が、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く肩に背負つてゐた。それにも關らず峠へかゝると、彼と私との間の距離は、だんだん遠く隔たり始めた。

三十分の後、とうとう私はたつた一人、山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空氣は、無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇の目蝶と蓙を煽つて行く私と、――それがこの急な路の上に、生きて動いてゐるすべてであつた。

と思ふと鈍い翅音がして、青黑い一匹の馬蠅が、べたりと私の手の甲に止まつた。さうして其處を鋭く刺した。私は半ば動顚しながら、一打ちにその馬蠅を打ち殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」――そんな迷信じみた心もちが一

層私をわくわくさせた。

私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早め出した。……

三

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。

川を埋め殘した森林の上には、飛驒信濃境の山々が、――殊にうす曇つた穂高山が、巑岏と私たちを見下してゐた。私は水を渡りながら、ふと東京の或茶屋を思ひ出した。その軒に懸つてゐる岐阜提灯も、ありありと眼に見えるやうな氣がした。しかし私を繞つてゐるものは、人煙を絶つた谿谷であつた。私は妙な矛盾の感じを頭一ぱいに持ちながら、無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り着いた。

對岸には大きな毛生欅や樅が、うす暗く森々と聳えてゐた。稀に熊笹が疎になると、雁皮らしい花が赤く咲いた、濕氣の多い草の間に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

程なく一軒の板葺の小屋が、熊笹の中から現れて來た。これが小島烏水氏以來、屢槍ヶ岳の登山者が一宿する、名高い嘉門治の小屋であつた。

案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ下した。小屋の中には大きな圍爐裡が、寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた、長い釣竿を取り下してから、私一人を後に殘して、夕飯の肴に供すべく、梓川の山女を釣りに行つた。

私は蓙や雜嚢を捨てて暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると熊笹の中から、大きな赤斑らの牛が一匹、のそのそ側へやつて來た。私は稍不安になつて、小屋の戸口へ退却した。

牛は沾んだ眼を擧げて、じつと私の顔を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引き返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり卷煙草に火をつけた。

蒼天の夕燒が消えかかつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に炙つた山女を肴に、鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を卷いて造つた、原始的な炬火をともしながら、夜が戸の外に下つた後も、いろいろ山の事を話し合つた。

白樺の火と榾の火と、——この明暗二種の火の光は、既に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に、濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話の途切れた時には、今更のやうに原始時代の日本民族の生活なぞを想像せずにはゐられなかつた。

四

——雜木の重なり合つたのを押し開いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者が私を顧みながら、

「此處が赤澤です」と云つた。

私は鳥打帽を阿彌陀にして、眼の前にひらけた光景を眺めた。

私の前に横はるものは、立體の數を盡した大石であつた。それが狹い峽谷の急な斜面を滿たしながら、空を劃つた峯々の向うへ、目のとどく通り連つてゐた。もし形容の言葉を着ければ、正に小な私たち二人は、遠い山頭から瀉り落ちる大石の洪水の上にゐるのであつた。

私たちはこの大石に溢れた谷を、——「黃花駒の爪」の咲いてゐる谷を、虫の這ふやうに登り出した。

暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖を擧げて、私たちの左手に聳いてゐる絕壁の上を指さしながら、

「御覽なさい。あすこに靑猪がゐます」と云つた。

私は彼の杖に沿うて、視線を絕壁の上に投げた。すると荒削りの山の肌が、頂に近く偃ひ松の暗い綠をなすつた所に、小さく一匹の獸が見えた。それが靑猪と云ふ異名を負つた、日本アルプスに棲む羚羊であつた。

やがてその日も暮れかかる頃、私たちの周圍には、次第に殘雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた、

寂しい偃ひ松の群も見え始めた。

　私は時々大石の上に足を止めて、何時か姿を露し出した、槍ヶ岳の絶嶺を眺めやつた。絶頂は大きな石鏃のやうに、夕燒の余炎が消えかかつた空を、何時も黑々と切り拔いてゐた。「山は自然の始にして又終なり。」——私はその頂を眺める度に、かう云ふ文語體の感想を必心に繰返した。それは確か以前讀んだ、ラスキンの中にある言葉であつた。

　その内に寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃ひ松との上を這つて、私たちの方へ上つて來た。さうしてそれがあたりを包むと、俄に小雨交りの風が私たちの顏を吹き始めた。私は漸く山上の高寒を肌に感じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の傾面を登つて行つた。が、ふと異樣な聲に驚かされて、思はず左右を見廻はすと、あまり遠くない偃ひ松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

　小雨に濡れた案内者は、剛情な歩みを續けながら、相不變無愛想にかう答へた。



私の生活から マスク

菊池寛

見かけ丈は、肥つて居るので、他人からは非常に頑健に思はれながら、その癖內臟と云ふ內臟が、人並以下に脆弱であることは、自分自身が一番よく知つて居た。一寸した坂を上つても、息切れがした。階段を上つても息切れがした。新聞記者をして居たとき、諸官署などの大きい建物の階段を駈け上ると、目ざす人の部屋へ通されても、息がはづんで急には、話を切り出すことが、出來ないことなどもあつた。

肺の方も餘り强くはなかつた。深呼吸をする積で、息を吸ひかけても、ある程度迄吸ふと、直ぐ胸苦しくなつて來て、それ以上は何うしても吸へなかつた。

心臟と肺とが弱い上に、去年あたりから胃腸を害してしまつた。內臟では、强いものは一つもなかつた。その癖身體丈は、肥つて居る。素人眼にはいつも頑健さうに見える。自分では內臟の弱いことを、萬々承知して居ても、他人から「丈夫さうだ〱」と云はれると、さう云はれることから、一種ごまかしの自信を持つてしまふ。器量の惡い女でも、周圍の者から何か云はれると、自分でも「滿更ではないのか」と思ひ出すやうに。

本當には弱いのであるが、「丈夫さうに見える」と云ふ事から來る、間違つた健康

上の自信でも、あつた時の方がまだ頼もしかつた。

が、去年の暮、胃腸をヒドく壞して、醫者に見て貰つたとき、その醫者から、可なり烈しい幻滅を與へられてしまつた。

醫者は、自分の脈を觸つて居たが、

「オヤ脈がありませんね。こんな筈はないんだが」と、首を傾けながら、何かを聞き入るやうにした。醫者が、さう云ふのも無理はなかつた。自分の脈は、何時からと云ふことなしに、微弱になつてしまつて居た。自分でちつと長い間抑へて居ても、あるかなきかの如く、ほのかに感ずるのに過ぎなかつた。

醫者は、自分の手を抑へたまま一分間もぢつと默つて居た後、

「あゝ、ある事はありますがね。珍らしく弱いですね。今まで、心臟に就て醫者に、何か云はれたことはありませんか」と、一寸眞面目な表情をした。

「ありません。尤も、二三年來醫者に診て貰つたこともありませんが」と、自分は答へた。

醫者は、默つて聽診器を、胸部に當てがつた。丁度其處に隱されて居る自分の生命の秘密を、嗅ぎ出されるかのやうに思はれて氣持が惡かつた。

醫者は、幾度も〳〵聽診器を當て直した。そして、心臟の周圍を、外から餘すところないやうに、探つて居た。

「動悸が高ぶつた時にでも見なければ、充分なことは分りませんが、何うも心臟の辨の併合が不完全なやうです。」

「それは病氣ですか」と、自分は訊いて見た。

「病氣です。つまり心臟の辨が缺けて居るのですから、もう繼ぎ足すことも何うすることも出來ません。第一手術の出來ない所ですからね。」

「命に拘はるでせうか」自分は、オヅ〳〵訊いて見た。

「いや、さうして生きて居られるのですから、大事にさへ使へば、大丈夫です。それに、心臟が少し右の方へ大きくな

つて居るやうです。あまり肥るといけませんよ。脂肪心になると、ころりと衝心してしまひますよ」

醫者の云ふことは、一つとしてよいことはなかつた。心臟の弱いことは兼て、覺悟はして居たけれども、これほど弱いとまでは思はなかつた。

「用心しなければいけませんよ。火事の時なんか、馳け出したりなんかするといけません。此間も、元町に火事があつた時、水道橋で衝心を起して死んだ男がありましたよ。呼びに來たから、行つて診察しましたがね。非常に心臟が弱い癖に、家から十町ばかりも馳け續けたらしいのですよ。貴君なんかも、用心をしないと、何時コロリと行くかも知れませんよ。第一喧嘩なんかをして興奮しては駄目ですよ。熱病も禁物ですね。チブスや流行性感冒に罹つて、四十度位の熱が三四日も續けばもう助かりつこはありませんね。」

此醫者は、少しも氣安めやごまかしを云はない醫者だつた。が、嘘でもいゝから、もつと氣安めが云つて、欲しかつた。これほど、自分の心臟の危險が、露骨に述べられると、自分は一種味氣ない氣持がした。

「何か豫防法とか養生法とかはありませんね」と、自分が最後の逃げ路を求めると、「ありませんね。たゞ、脂肪類を喰はないことですね。肉類や脂つこい魚などは、なるべく避けるのですね。淡泊な野菜を喰ふのですね」

自分は「オヤ／＼」と思つた。喰ふことが、第一の樂しみと云つてもよい自分には、かうした養生法は、致命的なものだつた。

かうした診察を受けて以來、生命の安全が刻々に脅かされて居るやうな氣がした。

殊に、丁度その頃から、流行性感冒が、猛烈な勢で流行りかけて來た。醫者の言葉に從へば、自分が流行性感冒に罹ることは、即ち死を意味して居た。その上、その頃新聞に頻々と載せられた感冒に就ての、醫者の話の中などにも、「心臟の强弱が、勝負の別れ目」と云つたやうな意味のことが、幾度も繰り返へされて居た。

自分は感冒に對して、脅え切つてしまつたと云つてもよかつた。自分は、出來る丈豫防したいと思つた。最善の努力

を拂つて、罹らないやうに、しようと思つた。他人から、臆病と嗤はれやうが、罹つて死んでは堪らないと思つた。

自分は、極力外出しないやうにした。妻や女中も、成るべく外出させないやうにした。そして、朝夕には過酸化水素水で、含嗽をした。止むを得ない用事で、外出するときには、ガーゼを澤山詰めたマスクを掛けた。そして、出る時と歸つた時に、丁寧に含嗽をした。

それで、自分は萬全を期した。が、來客のあるのは、仕方がなかつた。風邪がやつと癒つたばかりで、まだ咳をして居る人の、訪問を受けたときなどは、自分の心持が暗くなつた。自分と話して居た友人が、話して居る間に、段々熱が高くなつたので、送り歸すと、その後から四十度の熱になつたと云ふ報知を受けたときには、二三日は氣味が惡かつた。

毎日の新聞に出る死亡者數の増減に依つて、自分は一喜一憂した。日毎に增して行つて、三千三百三十七人まで行くと、それを最高の記録として、僅かばかりではあつたが、段々減少し始めたときには、自分はホツとした。が、自重した。二月一杯は殆んど、外出しなかつた。友人はもとより、妻までが、自分の臆病を笑つた。自分も少し神經衰弱の恐病症(ヒポコンデリヤ)に罹つて居ると思つた。が、感冒に對する自分の恐怖は、何うにもまぎらすことの出來ない實感だつた。

三月に、は入つてから、寒さが一日一日と、引いて行くに從つて、感冒の勢威も段々衰へて行つた。もうマスクを掛けて居る人は、殆どなかつた。が、自分はまだマスクを除けなかつた。

「病氣を怖れないで、傳染の危險を冒すなどゝ云ふことは、それは野蠻人の勇氣だよ。病氣を怖れて、傳染の危險を絶對に避けると云ふ方が、文明人としての勇氣だよ。誰も、もうマスクを掛けて居ないときに、マスクを掛けて居るのは變なものだよ。が、それは臆病でなくして、文明人としての勇氣だと思ふよ」

自分は、こんなことを云つて友達に辯解した。又心の中でも、幾分かはさう信じて居た。

三月の終頃まで、自分はマスクを捨てなかつた。もう、流行性感冒は、都會の地を離れて、山間僻地へ行つたと云ふやうな記事が、時々新聞に出た。が、自分はまだマスクを捨てなかつた。もう殆ど、誰も付けて居る人はなかつた。が

偶に停留場で待ち合はして居る乘客の中に、一人位黑い布片で、鼻口を掩ふて居る人を見出した。自分は、非常に頼もしい氣がした。ある種の同志であり、知己であるやうな氣がした。自分は、さう云ふ人を見付け出すごとに、自分一人マスクを付けて居ると云ふ、一種のてれくさゝから救はれた。自分が、眞の意味の衞生家であり、生命を極度に愛惜する點に於て、一個の文明人であると云つたやうな、誇をさへ感じた。

四月となり、五月となつた。遉の自分も、もうマスクを付けなかつた。ところが、四月から五月に移る頃であつたまた、流行性感冒が、ぶり返したと云ふ記事が、二三の新聞に現はれた。自分は、イヤになつた。四月も五月にもなつて、まだ充分に感冒の脅威から、脱け切れないと云ふことが、堪らなく不愉快だつた。

が、遉の自分も、もうマスクを付ける氣はしなかつた。日中は、初夏の太陽が、一杯にポカ／＼と照して居る。どんな口實があるにしろ、マスクを付けられる義理ではなかつた。新聞の記事が、心にかゝりながら、時候の力が、自分を勇氣付けて與れて居た。

丁度五月の半であつた。市俄古の野球團が來て、早稻田で仕合が、連日のやうに行はれた。帝大と仕合がある日だつた。自分も久し振りに、野球が見たい氣になつた。學生時代には、好球家の一人であつた自分も、此一二年殆んど見て居なかつたのである。

その日、快晴と云つてもよいほど、よく晴れて居た。青葉に掩はれて居る目白臺の高臺が、見る目にも爽やかだつた。自分は、終點で電車を捨てると、裏道を運動場の方へ行つた。此の邊の地理は、可なりよく判つて居た。自分が、丁度運動場の周圍の柵に添ふて、入場口の方へ急いで居たときだつた。ふと、自分を追ひ越した二十三四ばかりの青年があつた。自分は、ふとその男の横顏を見た。見ると、その男は黑いマスクを掛けて居るのだつた。自分はそれを見たときに、ある不愉快な激動を受けずには居られなかつた。それと同時に、その男に明かな憎惡を感じた。その男が、何となく小憎くらしかつた。その黑く突き出て居る黑いマスクから、いやな妖怪的な醜くさをさへ感じた。

此の男が、不快だつた第一の原因は、こんなよい天氣の日に、此の男に依つて、感冒の脅威を、想起させられた事に違なかつた。それと同時に、自分が、マスクを付けて居るときは、偶にマスクを付けて居る人に、逢ふことが嬉しかつたのに、自分がそれを付けなくなると、マスクを付けて居る人が、不快に見えると云ふ自己本位的な心持も交じつて居た。が、さうした心持よりも、更にこんなことを感じた。自分があの男を、不快に思つたのは、強者に對する弱者の反感ではなかつたか。あんなに、マスクを付けることに、熱心だつた自分迄が、時候の手前、それを付けることが、何うにも氣恥しくなつて居る時に、勇敢に傲然とマスクを付けて、數千の人々の集まつて居る所へ、押し出して出く態度は、可なり徹底した強者の態度ではあるまいか。兎に角、自分が世間や時候の手前、やり兼ねて居ることを、此の青年は勇敢にやつて居るのだと思つた。此の男を不快に感じたのは、此の男のさうした勇氣に、壓迫された心持ではないかと自分は思つた。

天の配劑

自分が京都に居たとき、いろ／＼な物が安かつた。食費が月に六圓だつた。朝が六錢で、晝と晩が八錢づゝだつた。一日二十二錢の譯なのだが、月極めにすると二十錢に負けて呉れるのだつた。素人の家の間を借りて居たが、間代が二圓だつた。尤も、自分は大學生として、最もつましい生活をして居たには違ない。が、食と住とが僅か十圓以下で足りたかと思ふと、隔世の感がある。

二十四圓足らず送つて貰つて居た學資でも、さう不自由もしなかつた。その頃の五圓十圓は、それほど有難かつた。

大正二年の十一月だつた。河合武雄の公衆劇團が京都へ來た。一番目が『茶を作る家』と云ふ狂言だつた。愛蘭土劇

を、翻案したものだつた。友人の久米が、東京で見て、面白いから是非見ろと云ふハガキを寄越して來た。その頃、近代劇を尊敬して居た今よりも、芝居に對して熱心だつた。自分は、初日が開くのを、待ちあぐんで居た。忘れもしない十一月八日が初日だつた。丁度土曜日だつた。

その時自分の蟇口には、六圓と幾何かあつた。それが、その月中の小遣だつたのだ。京都座の前で、自分は何等を買はうかと、一寸思案した。が、その頃は極度に節儉だつた自分は、四等を買つてしまつた。三十錢の觀覽料が、初日だつたので半額の十五錢だつたのだ。

汚い四等席の疊の上に、自分は腰を落付けた。が、自分はこんなことを考へた。たとへ、四等に蹲くまつて居て、茲に集まつて居る見物の殆ど、凡てよりも芝居に付いては、判つて居るのだ。さう思ふと、淋びしい痩我慢が出來た。自分は、可なり熱心に見て居た。

一幕目が了つたときだつた。自分の横へ、一人の職人風の若い男が來て坐つた。青い棒縞の汚い着物を着て居た。『これ、何と云ふ芝居だすか』と、云つたやうな調子で、狂言に對する自分の註釋を求めた。芝居に對する智識を、内心で得意にして居た自分は、さう訊かれると、得意になつて話し出した。公衆劇團の性質やら、狂言の主題や、新劇運動の主旨と云つたやうなものを、得意になつて話したやうに覺えて居る。若者は、熱心に聽いて居るやうな風をして居た。

二幕目が始まる前に、自分は便所へ立つた。席へ歸らうとしたときに、もう幕が開いて居た。強いて歸るほどの席でもなかつた。廊下へも澤山の人が立つて見て居たので、自分も其處で立つて見ることにした。さうした方が、四等席で見るよりも、よく見えたのである。二幕が、もう了りかけた時であつた。四十ばかりの女が、自分の背後から凭れかゝるやうにした。自分は、その容子を變に思つた。自分は掏摸ではないかと、直覺的に思つた。自分は、急いで左の袂を探つて見た。自分が怖れた通り、蟇口が無くなつて居たのである。念のために、右の袂を探ぐつた。が、其處に自分の

手に觸れたのは、堅い下足札丈であつたのである。

自分は、てつきりその四十女が、盗んだものと確信した。

『君は、僕の蟇口を知らないか』と、自分はそんな風に、露骨に云ひ出したやうに記憶して居る。

『まあ！　けつたいもないこと云ひなはんな』と、その女も怒つた。自分達が、二三度推し問答をして居る内に、相手の女は二三人の味方を得た。氣が付くと、その女は劇場のお茶子であつたのである。同類らしい女達が、見る〳〵内に、二七八人も集まつた。口不調法な自分は、手もなく云ひくるめられてしまつた。その中に、相手の方には、お茶子の取締らしい男まで加はつてしまつた。

その四十女は、可なり周圍の者から、信用があるらしかつた。自分が、幾何云ひ爭つて、何も證據はなかつた。おしまひには、自分の方が旗色が惡くなつて、謝罪までさされさうになつた。自分は、口惜しかつた。金を取られた上に散散云ひくるめられて、謝罪まで、せなければならないやうになつたのが、殘念だつた。自分は、臨場の巡査にまで訴へた。が、少しも取り上げては吳れなかつた。お茶子達の云ひ分を、信じて居るらしい巡査は、その女を調べて見ることさへしなかつた。

が、自分もその中に、ふと四等席で、自分の橫に坐つて居た若者の事を、思ひ付いた。自分が、芝居のことを訊かれて、得意になつて、喋べつて居るときに、まんまとやられたのだと云ふ氣がした。自分は、さう氣が付くと直ぐ、四等席に歸つて見た。其の若者は、もう其處には居なかつた。

芝居を見る氣持などは、少しも殘つて居なかつた。その月中の小遣を、スツカリ盗られてしまつた上、間違つた云ひがゝりをして、散々やつ付けられたことが、可なり不愉快であつた。快々として、少しも樂しまなかつた。他人から學資を仰いで居た自分は、他に一錢だつて算段する當はなかつた。一文も小遣なしに、その月中は辛抱しなければならなかつたのだ。自分は、ケチ〳〵して四等には入つた事までが、不快であつた。盗られてしまふ金だつたら、十錢でも二十錢

でも、澤山使つて行くにはいいと思つた。

月末まで、二十日あまりも、一文もなしに暮さねばならぬことを思ふと、自分は消氣切つてしまつた。

翌日は、日曜日だつた。平素は、早く起きる自分だつたが、その日起きる元氣がなかつた。十二時過ぎになつてから漸く起き上つた。自分は、起きると下へ行く梯子段に、萬朝報が置いてあるのを取り上げた。京都では東京の各新聞は丁度一時頃に配達されるのだつた。自分は、何氣なく萬朝報を取上げた。その日は、丁度日曜であつた。自分が、ふと四面へ目をやると其處に、自分が二月も前に投書した、懸賞小説が當選して居るのだつた。投書してから一月位は、當選するか〳〵と待つて居たが、幾何待つても出ないので、もうスツカリ忘れて居たのであつた。

自分は、近き過去に於て、此時位嬉しいとはなかつた。その時に得た懸賞金の十圓位、有難く忝い金はなかつた。自分は嬉しさの餘り、思はず涙ぐんだほどだつた。その時まで、自分は運命と云ふものを、全體として悪意のあるものだと感じて居た。が、此時初めて馬琴の小説にあるやうに、天の配剤と云ふことを感じた。攝理（プロビデンス）と云ふやうなことを感じた。

自分は、其懸賞金を受取ると、盗難に逢つた六圓を補つた殘りで、晩秋の大和へつましい小旅行を企てたのであつた。

ある青年

二年前から、自分に手紙を呉れる關西の少年があつた。神戸に近い町の少年だつた。自分も三度に一度位の割合で返事を書いた。作者と愛讀者との此文通は、割合長く續いた。その町の土産などを送つて呉れた。

昨年所用があつて、大阪へ行つたとき、自分は此の少年と會つた。此少年は、無論自分に會ふために、大阪へ來たのだつたが、會ひ方が可なり偶然だつた。自分が、大阪の丸善へ行つて居るとき、其處に居合はした一人が名乗りかけて來たのが、此少年であつた。何でも、自分の宿屋を訪ねて留守だつたので、一寸丸善へ寄つたとの事だつた。廣い大阪

で、偶然逢ふと云ふことが、一寸奇遇のやうな氣がした。

少年は、その時自分に、町の物産らしい燒き物を呉れた。自分は、その純朴な好意を嬉しく思つた。が、旅行中で持ち扱つたので、知り合になつた人に呉れてやつた。少年とは、その時一度合つた切りで、何かの都合で、ロク／＼話もしないで分れたまゝ、大阪を去つた。

自分と會つたのを、轉機としたやうに、此少年にいろ／＼な不幸が襲つて來たらしい。自分が歸京してから、間もなく此少年が、突然父を失つたと云ふ報知を受け取つた。それに續いて、大事な姉を失つたと云ふ手紙を受け取つた。自分は、二度ともそれに對して、哀悼の手紙を送つた。が、其裡に少年の手紙が、だん／＼センチメタルになり、たわいもない悲嘆が續くやうになつたので、自分は返事の仕樣がなかつた。自分は、手紙を貰ひぱなしにして返事をしなかつた。その裡に、少年からも手紙が來なくなつた。

所が、つひ此間自分は、突然此少年の來訪を受けた。此少年が上京したと云ふことを、少しも知らなかつた自分は、可なり駭いた。少年は名刺に、青年改造會々員と云ふ肩書を、ペンで書いて居た。その事も、自分には可なり意外だつた。會つて見ると、去年見たやうな少年らしい面影は、スッカリ無くなつて居た。もう、スッカリ青年になり切つてしまつて居た。それよりも、もつと駭いたことは、此少年の思想や話し振が、半年の間に激變して居ることだつた。去年會つた時、少年は、たわいもない世間並な文學愛好者だつた。自分に寄越した手紙なども、甘つたるいセンチメタルな子供／＼した手紙だつた。それだのに、僅か半年の間に、もうスッカリ一個の立派な青年社會主義者と云つたやうな者に、なり切つて居るのだつた。

少年の話に依ると、彼は境遇の激變のために、大阪で職工になつたのだつた。そして、三月ばかりの職工生活の間に、スッカリ社會主義の洗禮を受けたらしかつた。

自分を前にして、日本の社會主義者の批評や、社會主義學者の品隲をした。自分などが雜誌などで讀んで居ること

と、餘り違つて居なかつたが、然しそれが生々とした實感で語られるのだつた。それから話は進んでギルドソーシャリズムだとか、サンヂカリズムだとか過激主義とかソヴヰエットなどの話をした。ウヰリヤムモリスとか、ジョオジムーアなどの社會主義文學者などの名前まで、引き合に出して、いろ〳〵な事を話した。

愛讀者の訪問を受けたときなどは、自分はいつでも、相手の幼い文學談に合槌を打つのが、苦しい退屈な仕事だつた。それだのに、此少年との談話は、可なり自分に對して興味を與へた。此少年が、昔の通りの文學青年だつたら、去年と今年の間に、一歩も進んで居なかつたゞらう。たゞ、一寸方向を換へた爲に、僅か半年の間に、別人のやうな進歩をして居るのだつた。

『僕の親戚にも、大阪と神戸とに、千萬長者があります。頼めば學資位出して呉れないことはありません。が、資本家の手下になるのは、嫌ですから』と、云つた。

『現代の學制では、秀才は皆資本主義の番兵になつてしまふのです。不遇なひねくれた人間丈が、社會主義の爲に戰ふのです』と。そんなことも云つた。

彼は、一時の流行感化だと思はれない程、激しい熱情を持つて云つた。少年は、自分と一緒に晝飯を喰つてから歸つて行つた。自分は玄關へ送つて行つてふと見ると、彼は帽子を着て居なかつた。自分は忘れて居るのではないかと思つた。

『君、帽子は？』と、云つて注意した。

『イヤ、持つて居ないのです。』と、云つて帽子を着て居ない彼は、昂然として歸つて行つた。

自分は、彼の後姿を見ながら思つた。社會主義の理論を聞く毎に、自分はそれが眞理であることを疑つたことはない。が、青年時代を、資本主義全盛の世に過した自分は、此少年が資本家に對して持つて居るやうな意識と感情とは、少しも持つて居ない。理論では、資本主義の諸惡を知りながら、それを憎くむ生々しい實感は、容易に生れて來ない。勞働者に對する意識も感情もやつぱり同じだ。此少年が持つて居るやうな意識と感情とは、新しい時代に生れた青年のみが、有し得る新しい何かではないかと思つて見た。文學者として、時勢に遲れて居るなどと、云はれると、嫌氣になる自分だが、自分などは持たなかつた社會組織に對する、新しい感情を持つて居る、より若き時代の存在し始めたことを、自分は此少年に依つて、朧ろ氣ながら感じたやうに思つた。

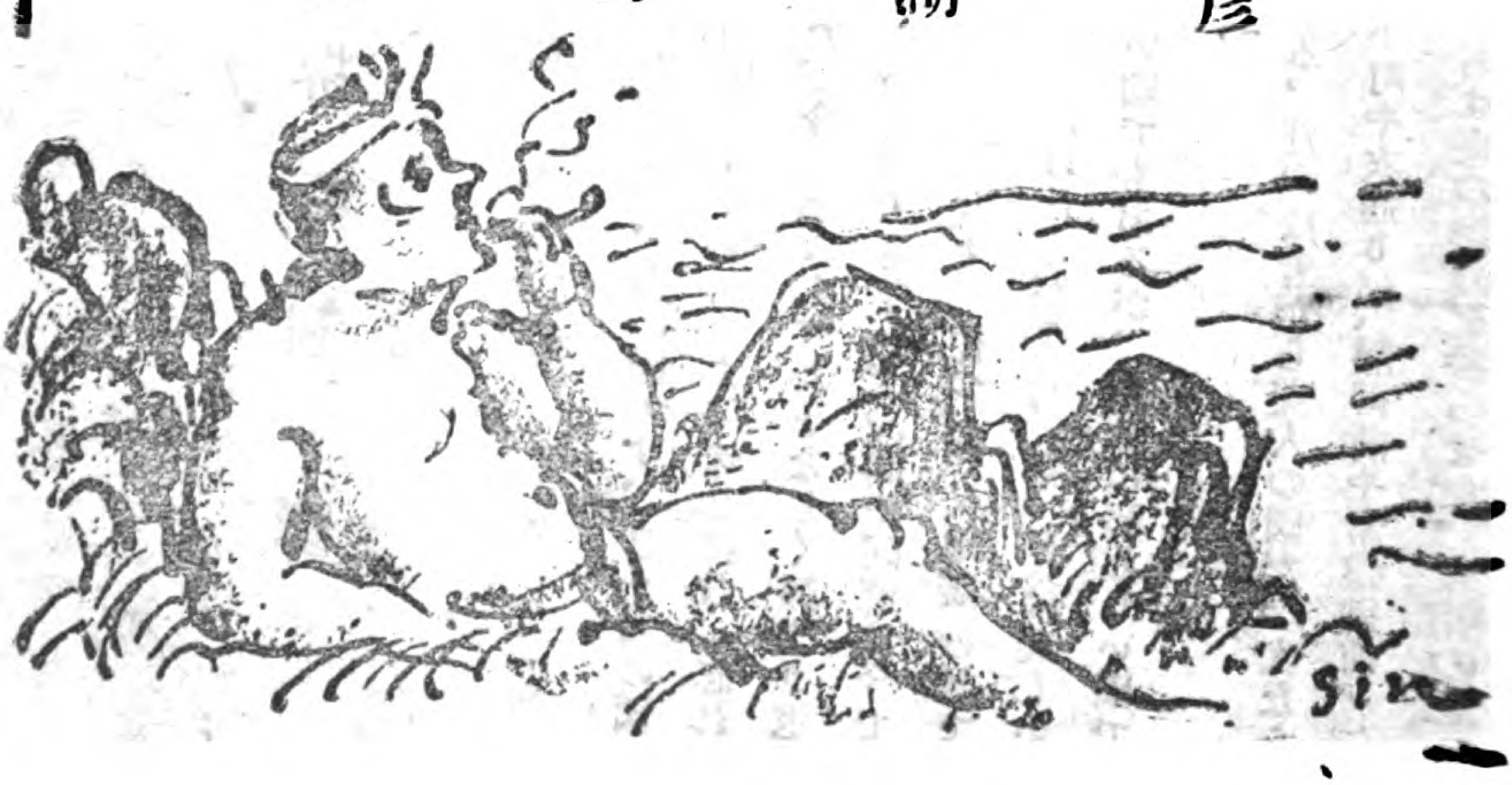
社會講談

◇鑄掛け松の話　　堺利彦

◇藤十郎と富藏　　白柳秀湖

◇英傑サウル　　沖野岩三郎

◇石川五右衞門　　上司小劍





鑄掛松の話

堺利彦

前口上

え〜皆さん！　イヤ『諸君』で行かう。

そこで諸君！。日本は實に美しい國です。櫻の國です、菊の國です、富士山の國です、こんな美しい國に生れ合せた我々日本國民は實に幸福です。然し諸君、忘れてはイケナイ。富士山は其の昔し火山であつた。今はあゝしておとなしく靜まり返つてゐるが、いつ又恐ろしい火焔を吹きだすまいものでもない。淺間や阿蘇は今でも絶えず黒煙を擧げてゐる。だから日本は火山の國です。從つて又地震の國です。富士山が日本一の名物である以上、どうも之は仕方がない。菊と櫻は美しいが、地震と火山は恐ろしい。日本は實に美しい國でもあるが、又實に恐ろしい國でもある。困つたものだ。

所が諸君、もひとつそれに似た樣な事がある。日本は昔から美人の國だ。女ならでは夜の明けなかつた國だけあつて、小野の小町や衣通り姫、靜御前や常盤御前。勾當の内侍は新田義貞を迷はせ、鹽谷高貞の奥方は高の師直を參らせた。大閤の思ひもの淀君は誰でも知る。傾城では高尾、小紫、今紫。明治の御代と相成つては、西

京の加代千代を初めとして、近くは新橋のポン太があつた。猶又最近に於きましては、萬龍と申す優物があつた。更に現在幅利の藝妓諸君女優諸君、女中諸君女給諸君、の類は申すに及ばず、華族富豪大家名家の夫人令孃乃至は未亡人の方々に至るまで、數へ立てれば際限がない。如何にも日本は美人の國だ。二千五百年の歴史を通じて、美人系統が連綿として續いてゐる。此の點に於いても日本は實に世界無比である。宇内に冠絶し、萬邦に卓越した特殊國である。特殊部落が新平民の村を意味し、特殊學校が貧民學校を意味する樣な、そんな言葉使ひは此ごろサツパリはやらない。先ごろ米國ワシントンに開かれた國際勞働會議の其時以來、日本は更に光榮ある特殊國になつてゐる。八時間勞働を九時間十時間、十一時間に負けて貰つた所に値打がある。勞働なんといふ者は時間の長いだけ好いに極つてゐる。分り切つた事である。それを分らんなどと申す勞働者は、西洋にばかりあつて日本には一人もない。そこが即ち亦た特殊國の特殊國たる所以である。

イヤ之は飛んだ横道に話がそれて申譯がない。扨て日本は美人國である。然し諸君、忘れてはイケナイ。日本は美人國であると同時に泥棒國である。『濱の眞砂は盡くるとも』といふ最後の悲鳴を擧げて釜いりになつた石川五衛門君は、實に古今の大眞理を喝破したものである。鼠小僧、稻葉小僧などいふ大先輩から、近來のピストル强盗清水定吉、スリの親分仕立屋銀次などに至るまで、世に泥棒の種は決して盡きない。日本は實に美人國でもあるが、泥棒國でもある。美しい國でもあるが、恐ろしい國でもある。困つたものだ。

然し諸君、明らめて下さい。之も特殊國の特殊國たる所以だと明らめて下さい。私なんぞはモウ疾つくの昔しから明らめてゐる。尤も、私には別に取られる程の財産が無いんだから、明らめが付きやすいのかも知れない。諸君も明らめが付きにくかつたら早く無財産になる事だ。イヤもう大抵そこまで漕ぎつけてお居でゞせう。失敬な申分だが、諸君の中に餘んまり金のありさうなお顔が見えない。何しろ川向ふの火事を見るのは面白いものです。自分の家の焼ける氣遣ひさへ無ければ、火事ほど景氣の好いものはない。露西亞や獨逸の革命騷動を電報で見るのも同じ事だ。ツアールが

やられた、ヤレお痛はしい、カイゼルがやられた、ヤレお氣の毒な、などと思ひやりのありそうな事を云ふ者もあるか知らんが、諸君の其のお顏つきは、失敬ながら餘んまり『お痛はしい』の『お氣の毒』のといふ、そんな殊勝な聲の出そうな柄ではない。

オヤ又大ぶん話が横道にそれかけたが、要するに諸君、どうせ我々はお互に貧乏人だ。今日は一つ『鑄掛松』と云ふ泥棒の話でもして、川向ふの火事見物と洒落ようぢやありませんか。

一　蛙と人間との違ひ

蛙の子は蛙になる。将軍の子は将軍になる。大名の子は大名になる。サムライの子はサムライになる。町人の子は町人になる。百姓の子は百姓になる。大工の子は大工になる。肴屋の子は肴屋になる。鑄掛屋の子は鑄掛屋になる。そういふ世の中の仕組になつてゐた徳川様の御時代、今からザット八十年ばかり前の天保何年、お江戸は神田新銀町の一丁目に鑄掛屋の松五郎といふ若い者が住んでゐた。松五郎の親爺も勿論鑄掛屋だつた。若し松五郎が正直に其の稼業を續けて、やがて女房を持つて子を産んだら、其の子も矢張り鑄掛屋になる筈だつた。所が松五郎不圖ヒヨンな氣を起して泥棒になつた。そこで人間と蛙との違ふ所だなと、私は今これを書きながら初めて悟つた。

尤も、松五郎が一生涯鑄掛屋をやり、其の子も一生涯鑄掛屋をやつたとしても、其の中には徳川幕府が政權を朝廷に返上して明治といふ新らしい世の中になり、百姓や町人が金持となり、紳士となり、實業家となり、代議士となり、資本家となり、富豪となり、士族は兩刀を棄て、商賣をやつて見たが、大抵は皆な失敗して公債證書を無くなし、結局、小役人や巡査や小學教員や勞働者になつて了つたのだから、其の士族と百姓町人との間に挾まつてゐた鑄掛屋の松五郎の孫や曾孫が、必ずしも親譲りの鑄掛屋になつたらうとは限らない。存外、何かで儲けだしてエライ實業家にでもなつて居ないものでもなし、或は何かの拍子に小學問でもして官吏などになり、相當立身して居まいものでもない。然し又、ど

ザせ貧乏人のウダツがあがらないで、どこかの工場の職工にでもなつて不平を起し、今ごろは勞働組合でも拵へてストライキの何のと騒いで居る様な事かも知れない。けれども何しろ天保何年の當時はまだ、アメリカの黒船の來ない前で、葵の御紋の御威勢は天壤と共に窮まりなしと思はれてゐたのだから、鑄掛屋松五郎の血筋を引く者は、子々孫々に至るまで矢張り貧乏鑄掛屋で一生を終る者だと思はれてゐた。僅か三十年かそこらの後にあの御威勢の徳川様が脆くも仆れて、謂ゆる御維新の世の中が出來ようなどとは、夢にも考へられない事だつた。そこで松五郎がついヒヨンな氣を起す様な事にもなつた。人間の子は蛙の子と違つて不料見を起すから困る。

二　俺も不仕合せだが親爺も不仕合せだ

扨、松五郎の親爺は松藏と云つた。松藏は至極ノンキな男で、確つかり者の女房に早く死なれて一時は大ぶん當惑したものゝ、貧乏暮しには口の少いが一番だ、結局この方が氣樂でいゝと、伜の松五郎と只つた二人で、蛆をわかしながらノラクラと過してゐた。

『オイ松や。』『何だい、お父つさん。』『おめえ毎度濟まねえがなア……』『お父つさん又お酒かい。およしよ。』『マアそんなに云ふなツて事よ。おめえは本當に孝行者だ。サア早く行つて買つて來てくれな、いつもの通り三合だよ。可いかい。ソラおあしだ。』

こんな風で、松藏は少しでも稼ぎだめの錢が殘れば直ぐに酒ばかり飲むのだつた。そして松五郎はいつでも澁々ながらそれを買ひに行くのだつた。

『お父つとさん、俺ア一生懸命はたらくから、お父つさんも餘んまりお酒なんか飲まない様にして、二人でおあしを溜めようぢやねえか。ヱお父つさん。』松五郎は毎度こんな事を云つては親爺に意見をした。十八の浮かれさかりがこんな殊勝な事を云つてるのに、親爺は一向平氣なもので『馬鹿を云ふなよ酒なくて何んのおのれが鑄掛かなだ。ハツハツ…

…どうせ一生この通りだ。飲めなくなつたら死ぬるまでよ。ケチ〳〵するない、江戸兒ぢやねえか。俺ア眞黒になつて稼ぐ奴の氣が知れねえ』と、斯ういふ調子だ。松五郎は仕方がないから、只だ自分だけ食ふ物も食はない樣にして獨りでセッセと稼いでゐた。

然し松五郎は折々考へた。本當に仕樣のない親爺だ。どうしたらあんなにグウタラなんだらう。親爺があんなぢやア俺だつに稼ぐ張合もありやしない。馬鹿々々しい。本當に仕樣のない糞親爺だ。俺は忘れても親爺の眞似なんかしやしない。酒なんぞ一つたらしだつて飲むものか。

然し又松五郎は考へ直した。あゝお母アがゐたらなア。お母アのゐた時分は親爺もこんなぢや無かつたつけ。お母アが死んでくれて、俺も不仕合せだが親爺も不仕合せだ。考へて見りや親爺だつて可愛そうだ。マア仕方がない。俺がお母アと親爺と二人ぶん稼ぐんだ。そして親爺に死ぬるまで飲ませてやらう。

松五郎は斯うして親爺のグウタラに憤慨しながら、それが又逆樣に勵みになつて、脇目も振らず一心に働いた。そこには確つかり者の母親の遺傳といふ奴もあつたらう。そうしてそれが父親のグウタラに對する反動といふ奴になつて現はれて來たのでもあつたらう。然し又一方には、其のお人好しの父親の血を受けて、自分が一つたらしも飲むまいと決心した其の酒を、親爺には死ぬまで飲ませて喜ばせてやらうといふ、柔しい氣心も出るのだつたつたらう。それで、松公は若いのに感心だ、稼ぎ者だ孝行者だと、近所界隈の評判だつた。取りわけ禿茶瓶の大家さんは、無暗と松五郎に惚れこんでしまつて、外の若い者に意見をする度んびに、お前達もチト松五郎を見習ひなさい、あれの爪の垢でも煎じて飲ませたいと、いつでも松五郎を引合に出すのが癖だつた。其の松五郎があとで大泥棒になつたのだから、嘸ぞ大家さんはビックリしたらう。

三　俺ア之から獨りで寂しいやい

或年の暮の事、雪の降りだした寒い夕方に、松藏が鰒を一疋さげて戻つて來た。『有りがてい。今日は之で一杯いたゞけらア。なア松、鰒のチリといふ奴ア天下の珍味だ』なんて云ひながら、例の三合を樂しんだ、松五郎は何んにも云はない。と云つて別段悪い顏もしない。茶漬をサプサプとかつこんだきりで、夜なべ仕事の鍋の底を冷たい土間でコンコンと叩いてゐた。

所が其の晩、夜中過になつて、親爺がウンウン唸りだした、『お父つさん、どうした？』『痛てい！　痛てい！　腹が痛てい！　あゝ痛てい！　あゝ痛てい！。マ、マ、松や、俺ア死にそうだ！。』松五郎はコイツ大變だといふので、『お父つさん、暫く我慢してゐてくんなよ。俺アお醫者に走つて來るから』と、行きなり雪の中を駈けだした。

やゝ暫くして松五郎が轉がりこむ様にして戻つて來た時には、親爺はもう死んでゐた。『お父つさん、お父つさん、今にお醫者が來るよ。……オヤ冷ていや。……お父つさん、おめえ死んだんかい。……ワアアツ！　俺ア厭だ厭だ。……オイ、お父つさん、お父つさんお父つさん。』泣き聲でいつまでもいつまでも呼んでゐたが、固より返事の出ようがない。醫者はとうとう來なかつた。

松五郎は薄暗い行燈の前で親爺の死骸を見守りながら、寒い事も忘れて考へこんだ。玄菴の畜生、とうとう來やがらねえ。俺の内を貧乏だと思やがつて、馬鹿にしてらア。貧乏人だつて親は親だい。醫者にも見せねいで殺して濟むけい。お父つさん勘忍してくんなよ。こんな事と知つたら酒の一升も飲ませてやるんだつた。あゝあゝ俺アとうとう獨りボツチになつちやつた。オイお母ア、お父つさんも死んだよ。俺ア之から獨りで寂しいやい。

夜が明けると近處の人達も來てくれた。禿茶瓶の大家さんも早速來た。松五郎は無暗と線香を親爺の枕元に立てゝゐた。

『蚊いぶしぢやあるまいし、松さんこんなに線香を立てゝどうするんだい』と、隣りのおかみさんが仆れた線香を立て直したり、灰の落ちたのをよせたりしてくれた。松五郎はどうする事も出來ないので、せめて線香でもノベツに立てるのが慰めだつた。

『大家さん、マア聞いておくんなさい。ゆうべ俺が行つてあれほど頼んだのに、玄菴の畜生、とうとう來やがらねえ。小半時も表の戸を叩かせやがつて、ヤットの事で起きたかと思や、ヤレ雪が降るの、寒いのと拔かしやがつて、雪の晩に病人が出來ねえと極つてやしめえし、人を馬鹿にするにも程があらア、ねえ大家さん、醫者なんて奴ア病人のお陰で食つてるんぢやねえか。そりや俺の內は貧乏に極つてるさ。だけど大家さん、俺だつて藥代を拂はねえと云やしめいし、俺アいめいましくて仕樣がねえ。とうとう親爺に藥一服のませねえで殺しちやつた。大家さん俺ア本當に悔しい。』『それで何かい松さん。玄菴さんはどうしてもおめえの內に見舞に來るのは厭だつていのかい。』『ナニ、そうでもねえ。まさかそうは云へねいやな。だけど何のかのと勿體をつけて、ぐずつか〳〵やつてる中に、又一つ外から迎へが來たアね。それが本石町の松坂屋さんだつから堪らねえ。玄菴の畜生、二つ返事で突走つて行きやがつた。歸りにお前の內にも廻つてやるよなんかと拔かしやがつて、とう〳〵それつきりスッポかしさ。俺ア大家さん悔しくて仕樣がねえ。』

『成程なア。松坂屋さんは名代の吳服屋だ。同じ松でも松さんの內とは比べ物にならねえ。マア仕方がねえ、松さん明らめなせえ。饅といふ奴は兎かく之だが、それも矢張り人の運だ。松さん仕方がねえ、明らめなせえよ。』大家さんは斯う云つて松五郎を慰めた。そして吊ひの指圖などを親切にして、禿茶瓶を光らせて歸つて行つた。

然し松五郎は明らめられなかつた。

四　欲しいのは只だ金だ

親爺の吊ひを濟ませて松五郎はいよ〳〵獨りボッチになつた。そして間もなく寂しい正月を迎へた。然し松五郎は之

でいよ〳〵本當の獨り立の男になつた。年は取つて十九歳、貧乏鑄掛の見る影もない暮しではあるが、身の丈は五尺三寸ばかり、鐵のような堅宍で、どこから見ても倔強な若者だ。注文どほりの苦味ばしつた顔が、親爺に死なれてから一層苦味ばしつて來た。恰好なり心持なり總てが急に大人らしくなつて來た。

やつと七草の過ぎた或日、松五郎は親爺の殘した一張羅を引つかけて大家さんの處に出かけた。

『イヨウ！　見違へるほど立派な男になつた。ウヽ、ウヽ、成ほど親爺の着物か。イヤ好く似合ふ、好く似合ふ、何んしろおめえも之からいよ〳〵一本立だ。容易な事つちやねえ。尤も、おめえの事だから心配は入らねえが、俺ア、松さんおめえの事なら何でも相談に乘るよ』と、禿茶瓶は相變らず機嫌が好い。

『有りがたう御座います。實はあツしも相談にあがつたんですが、大家さん、あツしやモウ鑄掛屋はやめます。』松五郎は突然こんな事を云ひだした。

『ホウ、鑄掛屋をやめる！　折角習ひ覺えた手職をやめてどうしようていんだ。そりや松さん、考へもんだぜ。』『あツしや大家さん、呉服屋になります。』『ナニ呉服屋！』『あツしや大家さん、松坂屋ほどの店持にならなきや承知が出來ねえ。』『ハヽア成あるほど。おめえは親爺の死んだ時、……』『えゝそうですよ。あツしや玄庵の畜生が松坂屋にばかり行きやがつて、あツしの内に來て呉れなかつたのが癪にさわつて堪らねえ。だけど考へて見ると、それも無理がねえんでさア。大家さんの仰しやつた通り、松坂屋と松藏の内とは同じ松でも比べ物にならねえ。だからあツしも呉服屋になつて、ウント金を溜める積りだ。大家さん一つ相談に乘つておくんなせい。』『成あるほど。おめえの云ふなア尤もだ。俺にも其の心持や好くげせる。だけど松さん、矢つ張りおめえは若けい。商人は商人、職人は職人だ。滅多に稼業の變へられるもんぢやねえ。殊に呉服屋なんていふもなア、小僧の時から年期を入れてサ、十年二十年の辛抱を積んでサ、それで御主人のお眼鏡に叶つて、ヤツトの事で暖簾分でもして貰はうといふわけのもんだ。十九の歳まで鑄掛屋で通して來たおめえが、どうして今から呉服屋なんぞに成れるもんかい。そんな夢みたいな事を考へねいで、慣れた稼業を一心

にやる事だ、のう松さん、おめえは堅人だ。好い若けいもんだ。一心不亂に稼ぎなせい、今に俺が素敵なおかみさんでも世話してやらうぢやねえか、のう松さん。サアまあズツトこちらに來て火鉢にでも當たんなせい。今日は馬鹿に寒いや。』

斯う云はれて見ると松五郎も我が折れた。然し今の松五郎には寒いも暑いもない。素敵なおかみさんなんぞ欲しくもない。欲しいのは只だ金だ。『ぢや大家さん。呉服屋は駄目ですかねえ。詰らねえ世の中だ。一生涯「鑄掛屋で御坐アい！」か。馬鹿々々しいなア。』松五郎は不服な顔でスゴスゴと歸つて來た。何だか禿茶瓶が憎らしい樣な氣がした。

五　どうあつても一旗擧げてえ

『鑄掛屋で御座アい！』『鑄掛屋で御座アい！』松五郎は又虫を殺して毎日々々一生懸命に稼いだ。然し彼は決して玄菴の家の前を通らなかつた。五町十町の廻り道はしても、二度とアン畜生の住んでる處に足は向けまいと決心した。若し途中で向ふから玄菴の來るのに出つくわすと、彼はフイゴの荷をかついだまゝ往來の眞中に立ちどまつて、ヤツの濟ました坊主姿を睨みつけるのだつた。然し彼はどうしても折々松坂屋の前を通らないわけに行かなかつた。黑塗の高い土藏造りが近所の家々を押へつける樣に突立つて、大きな白字で松坂屋と染めぬいた紺暖簾が、朝日を受けて本石町の角を折り廻してゐるのを見たりすると、松五郎は玄菴を睨みつけるのとはスツカリ違つた心持で、自分の體が急に縮まる樣な氣がした。フイゴの荷をかたげた、洗ひさらしの絆天着の身すぼらしさが、ヒシヒシと自分の胸に感じられた。羨ましいと、耻かしいと、忌々しいと、馬鹿々々しいとが、ゴツチヤになつて腹の中に煮えくり返るのだつた。

それでも松五郎は虫を殺して、毎日々々、『鑄掛屋で御座アい！』『鑄掛屋で御座アい！』と觸れあるいては、鍋の底や釜の底をコツコツ叩いてゐた。

夏が來た。今年は又滅法暑い。働きどには寒さもつらいが暑さもつらい。然し暑い夏にも凉しい夜がある、眞黑にな

つて騒いでゐる松五郎も、今夜はいつになく仕事を休んで、小ざつぱりした浴衣か何かで、近所の店先に始まつてゐる賭将棊を見物してゐた。

『オーヤオヤ、ひでい目に會はしやがつたなア。雪隠詰たアまア何てい哀れな王様だらう。俺アもう厭だ厭だ。一生涯将棊はさしツこなしだ。今日は之で一貫三百負けちやつた。忌めいましいぢやねえか。あの歩を一つ突き損つたのが運の盡サ。馬鹿ばかしいや。あゝあゝけえつて寝よう寝よう』と、運の盡きた人は歸つて行く。それかと思ふと、跡はまた入れかはつて、あんまり運の宿つてゐそうもない顔付のが一生懸命でやつてゐる。松五郎は之にも又一つ考へさせられた。どうせ人の一生は賭将棊の様なものぢやないか。歩を一つ突きそこなつたか、銀を一つ打ちそこなつたか知らないが、何しろ負けた奴が馬鹿を見る。俺ア一生涯の負将棊をさしたくない。鋳掛屋で御坐アいで鍋の底を叩いてゐたんぢやア、どうせじりじり貧乏の其の果が雪隠詰の王様だ。一貫二貫のマケカチぢやねえ。一生のマケカチだ。俺アどうあつても一旗擧げてえ。

賭将棊の連中は、若い鋳掛屋の頭の中にこんな大それた考へが浮かんでゐようなどとは勿論知らない。夢中になつて百か二百の目の前の勝負を爭つてゐた。松五郎は『一旗擧げてえ』と腹の中に繰返しながら、矢張り默つて跡の勝負を見てゐたが、フト又今度は、表の竹床几の上で始まつてゐる浮世話の聲が耳に入つた。

竹床几の上では、蟇がへるの様な口つきをした、歯の一本もないらしい老人が、折々澁團扇でパタパタと蚊を追ひながら、自慢そうに『俺の若けい時分』の事を話してゐた。『其の時分はおめえ、あの松坂屋の角店のとこれえ、まだ辻番のあつた頃だ。此あたりもまだ寂しかつたものだよ。』松坂屋と聞いて松五郎の耳はピリッと動いた。『松坂屋があの大身代になつたに就いちやア、いろいろ面白い話があるわサ。何しろ今ぢやアあの通り折廻はしの角店で、裏にやア塗ごめの大土藏が幾戸前もあつてさ、云はば大名のお城見ていなもんだ。大名ばかりが城を持つてると思つたら大間ちげえだ。町人にも店といふ城があらア。大名は城持、町人は金持なんだが、其の金持は松坂屋なんといふ呉服城を持つてる

わけサ。のう若けいの、そうぢやねえか。』藂がへるの老人は得意の浮世哲學に餘念がない。『おとつさん、松坂屋があの大身代になつたについて、いろいろ面白い話があるていなア、それは一體どんな話ですかい。』松五郎はとうとう其そばにやつて來て斯う問いた。『おう鑄掛屋の松さんかい。そりやアおめえ、恐ツそろしい話だわナ。マア聞きねえ、斯うだ。』

六　松坂城の富の由來

松坂屋の今の主人といふのは丁度松五郎と同い年の十九で、手前物の贅を盡した澁い好みの着付で、色町に入りびたりといふお極りの若旦那。それは勿論松五郎も知つてゐた。然し今までそういふ御大家の若旦那と自分の身の上とを、幾ら同い年だと云つても、比べて見ようなどとは思ひもかけなかつた。

扨この若旦那德次郎は、勿論店の商賣などには掛り構がない。商賣の方は髮を染めた六十近い後家のお銀がまだ頑張つて、男妾兼番頭の忠造を相手にして、中々確かりやつてゐた。之だけの事は勿論松五郎も知つてゐた。所でそれから逆登ると、お銀の亭主、德次郎の父親、即ち先代松坂屋德之助は無事な人で、萬事女房に切つて廻はされてゐたといふより外に話がない。然るに其の又先代の德兵衞といふのがエライ物で、之がショイ呉服から身を起して、一代の中に又スク〳〵と松坂城を築きあげた英雄である。

然し幾ら英雄でも、エラ物でも、正直正路にショイ呉服ばかりやつてゐたのでは、一代や二代の中に小城の一つでも築きあげるわけには行かない。そこに世の中のカラクリがあるのさ、と藂がへの老人が得意の浮世哲學を講釋した。松五郎はスツカリこの老人の物識りに感心した。

德兵衞は只ショイ呉服ではなかつた。實は内々でケイズ買をやつてゐた。『お父つさん、ケイズカイたあ何んのこつてすい？』松五郎はそういふ言葉を知らないほどのウブだつた。故買とはソレ、早い話が、泥棒の盜んで來た品物を買

ふ事さ。泥棒が衣類反物なりを盜んで來る。ウッカリ質屋にでも持つて行くと直ぐに足がつく。そこで平生からグルになつて、それのハカシ道をつける相棒が入用だ。徳兵衞はつまり泥棒の相棒だつたんさ。そこでヤツは泥棒の持つて來る上等の衣類なり反物なりを只の樣な値段で買取つておいて、自分はシヨイ呉服が稼業だから何をしようと人の目には付かない、其の品を方々に廻つて高い値に賣りつける。それなら儲けもハカが行くわけだアね。そうぢやアねえか、のう若けいの、世間には隨分ぬけ道や、裏道や、近道があるもんさ。」墓がへる老人はいよいよ得意に話し進んだ。

俺だつて自分の目で見て來たわけぢやねえんだから好くは知らねえが、何んでも徳兵衞はそれから段々手を廣げて故買の大元締に成りすました。ハカの行く儲けを五年十年と續けてゐりや、而もそれが段々大仕掛になつて見りや、ウント金も溜つたらうぢやねえか。そこで徳兵衞、もう好い加減に足の洗ひ時だと考へて、初めて松坂屋といふ呉服店をおつぱじめた、シヨイ呉服からやりだして。とうとう店持になつたとすりや、如何にも堅氣なアキンドだ。ヤツはどこまでも其の堅氣なアキンドに見せかけた。徳兵衞さんはエライもんだ、辛棒の報いはあの通りだナンテ、知らねえ奴等は感心したり、賞めそやしたりしたものだ。徳兵衞の野郎、さぞ腹の中でおかしがつて居たらうよ、少しはクスグツタイとも思つたかも知れないが、そういふ圖太い野郎だから、世間は甘めえもんだ位にしか考へてゐなかつたらう。

尤も、最初の松坂屋はまだホンの小城よ。それが十何年目に一度燒けて、ザマア見ろと云つてやりたい樣だつたが、悪運の強いヤツは仕方のないもので、メキ〱と燒け太りよ。それでとう〱今のあの素晴らしい大城が出來あがつた。そして徳次郎の女狂ひくらゐぢやア、一ゆるぎもしそうにない。

松五郎は息をはづませて此の話を聞いてゐた。淺黒い苦味ばつた其の顔が、先年親爺の死骸の手をおさへて、『オヤ冷てい！』と思はず叫んだ其時よりも引締つてゐた。當今のはやり言葉で云へば、極度の緊張を示してゐたとやる所だ。そして折々はキユツ、キユツと、其の締つた口元の筋が引き釣る樣に見えてゐた。兩方の目からは其の締つた口元の筋から焰のような者が迸きだしてゐた。

七　世の中のカラクリの底の底

ウム、それからまだ若けいの達、斯ういふ大事な話があらア。蟇がへるの老人は更に話しつゞけた。徳兵衛の娘、徳之助の妹にお菊といふ器量よしがあつた。徳兵衛はそれをオトリにして上州の或る織元をつかまへた。呉服屋が織元をつかまへりや鬼に金棒だ。何んでも其ときお菊には、近處の若い男とネンゴロにしたのがあつたと云ふが、可愛さうに、徳兵衛は金輪際そんな事に頓着しなかつた。徳兵衛の眼中には、娘であらうと何んであらうと、總ての人間が皆んな自分の金もうけの道具に過ぎなかつた。人情と金もうけは昔しから敵同志だからの、と老人は得意の警句を吐いて若い衆達の顔を一わたり見わたした。それでお菊は結局、泣顔の上におしろいを塗つて上州の織元田原屋に嫁入した。嫁入すりやア泣いても笑つても子が出來る。其の子は男だつた。そして運よく（徳兵衛に取つてはだよ）其の田原屋の主人が急病で死んだ。娘の不幸はいつでも親爺の幸ひだつた。徳兵衛は早速そこに駈けつけて、若後家の娘と跡とりの三つ兒との後見役になつた。娘と孫とが之ほど都合よく金もうけの道具になつて呉れようとはさしもの徳兵衛も思ひがけなかつたらう。然し何と云つても現在の父なり祖父なりがシャ〳〵り出て采配を振らうと云ふのだから、親類一同も異存の云ひ様がなかつた。それからと云ふもの、徳兵衛は江戸と上州との間を毎日の様に行つたり來たりして、田原屋の織元商賣をスッカリ自分でキリモリした。いよ〳〵以て鬼に金棒だアね。内幕を知らない世間のお人よしは、こゝでも矢張り徳兵衛に感心して、子や孫の爲とは云へ、よくもマアあれほど眞身になつて、面倒を見てやる事だ、あれなら田原屋も萬藏だと、讃めたりソヤしたりしてゐた。世間といふものは甘めえもんだよ。

一體、この織元といふのは、何百人といふ大勢の織子を使つて、其の旨い汁を吸ふのが商賣だ。あの邊に行つて見なせえ、どこの内でもキーコンパタリコン、と年が年中、機を織つてゐる。それが皆んな織元に御奉公だ。尤も、『上州名物、嬶ア天下にカラッ風』といふくらゐで、上州の野郎共は女房と娘とがセッセと機を織つて食はせて呉れるものだと

心得て、好い氣になつて尻に敷かれてゐるのださうだから、其の女達の稼ぎ高も相應いゝには違ひないのだが、何と云つても旨い汁は織元が吸つてしまふ。それを吸ふより外に織元のズンズン太つて行くわけがあるめえぢやねえか。あの蛭といふヤツを見なせえ。細い長い黒い物が水の中をチラチラ游いでゐるが、あれが人の足に吸ひついて生血を吸ふと、見る見るうちに膨らんで來て、とうとう眞丸い大きな玉になつてしまふ。あれと同じだ。身代が太るには人の生血を吸ふより外に道がないのだ。して見ると、金持といふ者ア先づ人間の中の蛭だね。(老人の浮世哲學がいよいよ面白くなつて來た)。だからさ、何百人といふ女房達や娘達の生血を吸ふ織元が太らなくてどうするもんかい。それを其の女達は何ンにも知らないで、織元の方から自分達にもうけさせてでも呉れるかの様に、織元様、織元様と上め奉つてゝ好い御奉公をしてるんだからお芽出たいものさ。亭主を立て養ひにしたり、色男に入れあげたりして、女の腕を自慢にしてゐる其の間に、有りがたい織元様からズンズン生血を吸はれてる事を御存じないとは、イヤハヤ氣の毒なわけのものさ。

所がさ、其の生血の塊まりの蛭の玉を、又横から吸はうといふ大蛭があるから驚くぢやないか。つまり田原屋といふ蛭の玉を松坂屋の德兵衞といふ大蛭が吸つたんだ。其後、田原屋の若後家と息子とはどんな事になつたか、そこの所はよく知らないが、何んでも今ぢやア田原屋といふは名目ばかりで、先づは松坂屋の出店と云つた格ださうだ。鬼が金棒を持つたどころの段ぢやなくて、三本指の鬼の兩腕が其まゝで毛だらけの金棒になつた様なものだ。

だからよ、何んにしろ松坂屋のあの大身代は、泥棒の上前を上手に刎ねたが元の起りで、あとは娘の身の代金と云つてもいゝし、上州から流れこんだ何百人の生血の海だと云つてもいい。どうだ若けいの達、兎かく世の中は斯うしたものだ。オツト喋つてるまに大ぶん夜がふけた。さすがに少し冷々として來たわい。どりや歸つて寢るとしよう。だがのう、若けいの達、今の話は極内だよ。松坂屋さんは分限者だ、貧乏人が分限の影口をきくと罰が當る。こわやの、こわやの、桑原々々。蟇がへるの老人は長物語にスツカリ溜飲をさげて、好い氣持になつて歸つて行つた。

跡に松五郎、どこまでが本當の事で、どこからが拵へ事か分らない樣な話だとは思つたが、兎にかく物知りの云ふ事に動きのない道理があると思つた。そして世の中のカラクリの底の底を初めてハツキリト見せられた心地がした。目はいよいよ焰を吹いて來た。息はいよいよはづんで來た。折々唾をゴクリと飲みこんでは、只だ押しだまつて考へてゐた。

八　千兩箱が山ほど積んである

其の翌日からも松五郎は矢張りセツセと稼いでゐたが、『鑄掛屋で御座アい』の觸れ聲が何だか妙に尖つてゐた。そして人と出會つても餘り口數をきかなくなつた。然し其の年の暮には、辛抱の塊まりが五兩ばかりの金になつて、彼れの胴卷にはいつてゐた。酒は固より一ツたらしだつて飲まないし、遊びなんかといふ事は夢にも知らないし、只だ胴卷の少しづゝ重くなるのだけを賴りにしてゐたが、『一旗揚げてい』といふ大それた心が芽を吹いてから、少しばかりの其の賴りがタヨリなくて仕方がなかつた。或日、松坂屋の横丁で、尖つた聲を一段尖らせて『鑄掛屋で御座アい』を觸れてゐると、松坂屋の勝手口から呼び止められた。厭とも云へないで、女中の出した眞鍮の鍋を受取り、道ばたにフイゴをすゑて寒い風に吹きさらされながらコツ〱とやりだした。『此の鑄掛屋さんはチヨツト好い男前だねえ。鑄掛屋さんには惜しいもんだ』と、あばずれの女中が赤い半分、愛相半分に話しかけたが、松五郎が返事もせず見向きもしないので、膨れた顔をして引込んでしまつた。向ふからチヤラチヤラと雪駄の音がするので、ツイ顔をあげて見ると、若旦那の徳次郎だ。成ほど、自分と同い年の十九くらゐだらう。何といふ物か知らないが、意氣な小袖を眩かさうに重ねて、結いたての水々した髮と、剃りたての靑々したサカヤキとが、色白の細おもてを引立たせて、如何にも御大家の若旦那である。松五郎は其の姿を見るのが癪にさわつて、直ぐに俯向いて鍋の底をヤケに叩いた。若旦那は鑄掛屋なんどに氣もつかないで鷹揚に行き過ぎてしまつた。

暫くすると、今度は使の戻りらしい小僧が側に來て突立つて『鑄掛屋さん、之がフイゴといふもんかい。面白いなア。火が眞赤に燃えてらア。俺に一度そのフウフウといふヤツをやらせて見せて與んないか』などと云ふのが松五郎にはウルさくて堪らない。然し小僧はとうとうしやがみこんでしまつた。そして『今、内の若旦那がこゝを通つたらう。又女の處に行くんだぜ』などと話しかける。此の話には松五郎も相槌が打ちたくなつた。『女の處つて何處だい。』『兩國さ。何たらいふ藝妓が構つてあるんだツさ。それで若旦那は湯水の樣にお金を使ふんだツさ。』『へエ！湯水の樣に使ふんかい。』『そうだツさ。だけど幾ら湯水の樣に使つたつて、減りつこはありやしねえや。三番の藏に行つて見ねえ、千兩箱が山ほど積んであらア。』『おめえ共の千兩箱を持つて見た事があるかい。』『持てるもんかい、俺なんぞに。そりやア重いんだツさ。だが本當の事を云や、俺アまだ見た事もねえ。』『馬鹿だなア此の小僧は。見た事もねえ者が山ほど積んであらアなんて云やがつて。』『だつて、そりや本當だよ、鑄掛屋さん。皆がそう云つてるんだもの。本當に山ほど積んであるんだツさ。だけど之や内證だよ。鑄掛屋さん泥棒がはいると大變だから。』

そこに勝手口の戸があいて先刻の女中が顔を出した。小僧はビツクリして飛んで行つてしまつた。松五郎は鍋を仕上げて二百文の賃錢を受取つて、そして又フイゴをかついでスタスタと歩きだした。『鑄掛屋で御座アい』の觸れ聲はそウ出ない。頭の中には三番の藏に山ほど積んである千兩箱がアリアリと見える樣な氣がした。それが皆んな泥棒の上前を刎ねた金なんだ。上洲の生血の流れこんだ金なんだ。そして若旦那の徳次郎がそれを湯水の樣に使つてるんだ。そして小僧はそれを泥棒に取られては大變だと云つてるんだ。いつそ本當に泥棒がはいつて、根こそぎ引浚つて行つてしまつたら、どんなに氣持がいゝだらう。

松五郎は今二百文かせいだ。そういふ二百文が一年あまり積もり積もつて胴卷の中の五兩ばかりになつてゐる。此上いつまで辛抱したらそれが千兩になるだらう。松五郎は歩きながら胸算をやつて見た。先づ一年に五兩と見て、十年に五十兩、二十年に百兩、三十年に百五十兩、四十年に二百兩、五十年に二百五十兩。千兩になるには百五十年でも足り

ない。馬鹿々々しい、人間がそんなに生きてゐられるかい。松五郎は鑄掛の荷物を放りだしたい樣な氣がした。年が年中『鑄掛屋で御座アい』と觸れあるいて、ヤット五兩の目くされ金を溜めて、後生大事にそれを胴卷に入れてゐる自分の腑甲斐なさに愛相が盡きた、一旗擧げるのはいつの事だか、此分ぢや見當もつかない。

九　覺えずブルブルと震へあがつた

松五郎は又一つ寂しい詰らない正月をへて、いよ〳〵廿歳の男になつた。もう好い加減に女房を持つちやアどうだと、例の禿茶瓶の大家さんが會ふ度に勸めてくれる。俺が一つ素晴らしいのを世話してやらうと、口ぐせの樣に云つてくれる。松五郎も萬さら女の匂ひの嗅ぎたくない事はない。現に此あいだも、湯屋から出て來た、拔けるほど色の白い、あだな姿の新造にツイ見とれて、あぶなくフイゴの片荷を往來の人にブッつけようとした事があつた。鑄掛屋に相應したシミツタレな女房など持つ氣はないが、美しい女の顏は千兩箱と同じ樣に、折々頭の中にチラついてゐる。それにつけても洗ひさらしの、はげちよろ絆天の自分の姿が淺ましくなつた。此ザマアして女どころの話しかいと、自分で自分を嘲らずにゐられない。それでも何しろ五尺三寸の堅宍の、苦味ばしつた立派な若い衆だ。たまには近處の娘達から。松さん松さんと味な目付で呼びかけられたりする事もあつたが、そんな者に目を吳れるには、餘りに大望がありすぎた。

それでも又半年ばかり『鑄掛屋で御座アイ』を每日尖り聲で觸れあるいて、汗が目ににじみこむ夏が來た。涼み床几の、蟇がへるの老人の話が此ごろ頻りと思ひだされる。世の中のカラクリがいよ〳〵ハツキリと見え透いて來る。親があるぢやなし、獨り身の氣樂さだ。身內と云つても、別にシミジミ話しあふ程のは一人もない、友達は無いでもないが、ケチくさい野郎ばかりで相手になれない。いつも親切にしてくれる大家さんばかりは少し懷かしいが、之とても、只の世話好で一旗擧げる相談は掛けられない。お母ア、お父つさん、俺アいよ〳〵獨りボツチだ。何をやりだす

か知れねえよ。二人で草葉の蔭から見てゐてくんねえ。
松五郎は胸の中でこんな獨りごとを云ひながら歩いてゐたが、フト道ばたに少しばかり人だかりのしてゐるのが目についた。荷をかついだまゝ立止まるともなく側に寄つて覗きこむと、白髯の長い心學の先生が、土塀をうしろに小床を控へて、何か頻りに説法をやつてゐる。説法が面白いよりも、見越しの松の凉しい蔭が往來の人の足をとめてゐるらしい。
『總じて人といふ者は心の持方が肝腎だ。例へば此の松が枝だ、斯うして土塀の上から往來にさし出てゐるが、此の下を通る人の心は樣々だ。或者は何か心配事でもあつて夜ふけにトボ〳〵やつて來る。月の影にフト仰向いて松を見上げる。あゝ首を釣るに恰好な枝振だと考へつく。そこで死神が直ぐに取りつく。えゝもう寧ろ死んでしまはうと、急に死ぬ氣になつて泣く〳〵三尺帶とフンドシとを繋ぎあはせたりする事になる。それかと思ふと或者は、又頬冠りの黒裝束か何かで、麻繩の先に石ころをくゝりつけたヤツを、行きなりアノ枝の少し凹んだ所へ目がけて投げかける。繩の先が石の力でクルクルクルクルと枝に卷きつく。其の手練は如何にもあざやか千萬だ。手練はあざやかだが料見が宜しくない。こやつ卽ち泥棒であつて、繩をたぐつてスルスルと塀の上に這ひあがり、忽ち邸內に忍びこんで惡事を働く。同じ枝振の松を見ながら、一人は首釣りに恰好と考へる、一人は忍び込みの手がかりと考へる、そこが卽ち肝腎な心の持方といふものだ。俺の樣に此の松蔭を心學道話の定席に使ふか、それでなくとも此の凉しい松蔭でまゝよ一寢入りやらかさうと云つたフウな鹽梅式に考へると、自分も仕合せ、人も仕合せ、そこで世の中が天下太平と相成る。どうぢや皆さん合點が行つたか。』
松五郎はいつの間にやら釣りこまれて、荷をおろして聞いてゐたが、黒裝束の泥棒が繩をたぐつてスルスルと塀の上に這ひあがつといふ話の所で、松坂屋の裏通りの景色がヒラリと頭の中を掠めて通つた。松坂屋の裏通りにも丁度これと同じ樣な松の枝が差し出てゐるのだ。續いて三番の藏に山の樣に積まれてある千兩箱の景色もチラチラと目の中に閃

いた。松五郎は覺えずブルブルと震へあがつた。

『そこで皆さん斯ういふ道歌がある。』心學の先生は又やりだした『上見れば及ばぬ事の多かりき、下見て暮せおのが心に。何んと旨い事を云つたものだ。尤も、兩國橋に行くと之が逆になる。下見れば及ばぬ事の多かりき。涼み船や何かが羨ましい。そこで上見て通れ兩國の橋。上を見れば空と雲とばかりだ。目の毒になる者は一つもない。……』

『松さん、明らめなせえよ』と禿茶瓶の大家さんが、親爺の死んだ時、繰返し繰返し言つた事を松五郎は思ひだした。』

そして心學も、禿茶瓶も、一切の世の中も、馬鹿臭くて堪らなくなつて、其まゝスタスタと歸つて來た。

十　身代を半分呉れてやつた

其翌日の事でもあつたらうか、松五郎は又『鑄掛屋で御座アい』に出かけた。するど柳原の邊で十二三の小娘がシクシク泣きながらションボリ立つてゐるのを見つけた。

『オイねえちやん、どうしたい』と、柔しく背中を叩いて聞いて見ると、お父つさんが病氣でお醫者を呼びに行つたが、藥代が滞つてるので來てくれない。それで仕方がないから今ま生ぐすり屋に熊の膽を買ひに來たが、今度はおあしを落してしまつたのだと云ふ。松五郎は親爺の死んだ時の事を思ひだして身につまされた。女房の畜生に對する憤りが悉く此の小娘に對する憐みに變つた。自分の親爺が今ま饑に中つて苦しんでゐる樣な氣持もした。それで早速熊の膽を買つて小娘に持たせたが、どうも其まゝ獨りで歸したくなくなつた。

『よし〳〵おぢさんも一緒におめえの内まで行つてやる』と、松五郎は娘を先に立てゝ狹い裏町にはいつて行つた。ナりこそ薄ぎたないが、娘の後ろ姿にどこやら少し品がある。松五郎はそれが可愛くて堪らない樣な氣がした。

『おぢさんこゝだよ』と娘が導いた路次奥の長屋にはいつて見ると、暑くるしい西日の部屋に、痩せさらばうた年寄がひとり蝿にたかられて死んだ樣に寢てゐた。『ウヽお父つさんは寢てゐなさる樣だ。起しなさんな、起しなさんな。そし

て今に目がさめたら其の熊の膽を飲ませなせえ。俺ア又あすでも見に來てやるからの』と云つてゐる中、松五郎はいよいよ其の娘が可愛くなつた。

暫くジツト考へてゐたが、やがて懷ろの胴卷から小粒で三兩取りだした。そしてそれを紙に包んで娘に渡した。『之はの、おぢさんがおめえにあげる。おめえが孝行者で感心だから御褒美だ。お父つさんが目をさましたら、それを見せてお醫者を呼びに行きなせえ。可いかい。氣をつけなせえ。おぢさんは又きつと來るからの。』

娘がおどおどしてゐる間に松五郎は表に出たが、又あともどつて來て、『おめえの名は何て云ふ。何、お紺？。お紺ちやんか。お丶好い名だ。おぢさんはな、松五郎ていんだ。鑄掛屋の松五郎ていんだ。覺えておいてくんなよ。』

松五郎は又鑄掛の荷をかついでサツサと兩國の方に足を向けた。あ丶好い心持だ。けふくれえ好い心持はねえや。俺の身代を半分呉れたつた。俺ア目腐れ金なんぞ欲しくねえ。『鑄掛屋で御座い』とさへ云つてりや、幾ら馬鹿臭くたつて其日々々の食ふだけの事は取れらア。食へなくなりやア死ぬるまでだナンテ親爺は云つたけが、俺ア死ぬ前に是非とも大きく食つて見せる、あ丶好い氣持だ。人を助けたなんて云やロはばつたいが、あの可愛いお紺と死にかかつた爺さんとに俺の身代を半分投げだしてやつたと思や、俺ア嬉しくて仕樣がねえ。マア之で又、今日は今日だけ稼ぐんだ

十一　サア之からだぞ、之からだぞ

松五郎け兩國橋の袂まで來て、影になつた涼しい處に荷をおろして暫く休んだ。今日は生れて初めての大手柄をした樣な氣がする。いつそのこと、殘つてゐる三兩あまりの金も誰かに呉れてやりたい樣な氣がする。金を溜めるといふケチな料見が無くなつて見ると、何んだか今日から新らしい世界が開けて來た樣な氣がする。急に氣が大きくなつて仲々した樣な氣がする。何んしろ獨りで心うれしくて仕樣がない。

『おう鑄掛屋さん、丁度い丶所だ。こいつを一つ見てお呉んなせえ。』之も隣りに休んでゐた屑屋の爺さんが、屑籠の中

から古鐵瓶を一つ取出して松五郎に渡した。内側から日に透して見ると小い穴が二つ三つあいてる。『どうにかなりますかい。』『えゝ、どうにかなりませう。』松五郎は氣輕くフイゴの火をおこしはじめた。

其の時橋の下から急に賑かな三味線の音が響いて來た。續いて張りあげた歌の聲が聞えた。

松五郎と屑屋とは思はず顔を見あはせた。

『好い聲だなア』と先づ屑屋が感嘆した。『ふざけてやがらア』と松五郎は吐きだす樣に云つた。屑屋は立上つて欄干にもたれて。『鑄掛屋さん、マアちよつと見なせえ。若けい衆にやア目の毒だが。』松五郎は立たうともしなかつた。『マアちよつと見なせえ。意氣な屋根舟に差向ひでやつてやがる。』それでも松五郎は立たなかつた。

暫くすると今度は屑屋が、『女は藝妓に違えねえが、男は何んだらう。あの風俗ぢやア上州あたりの生糸あきんどかな。何んしろ金に厭ひの無さそうな樣子つぷりだ。』と獨りごとの樣にやりだした。上州といふ言葉が松五郎の耳に特別の響きを與へた。其の時丁度、歌の聲が更に新らしく起つた。松五郎もとうとう鐵瓶を提げたまゝで、立上つて欄干から見おろした。どつしりした四十男の顔が正面に見えてゐた。女の方は三味線の頭と横顔とだけ見えてゐた。『あやつもどうせ生血で膨らんだ蛭だらう。』松五郎は斯う云ひすてゝ又仕事に掛つた。藁がへるの老人に聞いた織元の話が頭の中を往つたり來たりした。屑屋には蛭の意味は通じなかつたらうが、『あゝあゝ、上見て通れ兩國の橋だ』と溜息をついで元の處に尻をすゑた。『屑屋のお父つさん、おめえさんは中々物識りだなア』と、松五郎は心學の先生の事を思ひだして云つた。『全くだ。之でも生れながらの屑屋ぢやアねえからな。何しろ若けい時の事だ。おめえさんは羨ましい。もう斯うなつちやアどうにも斯うにも仕樣がねえ。正直は馬鹿の異名だ。正直物の身の終りは大抵かうしたもんなんだよ。時に鑄掛はもう出來たか。オツト有りがてい。之で一歩にでも有りつけりやア見つけものだ。』屑屋の爺さんは鑄掛賃を三百文拂つて、鐵瓶を屑籠に放りこんで行つてしまつた。

『成アるほど、正直物の身の終りは大抵あゝしたもんなんかなア。俺アどうあつても、あんな一生涯の負將棊はさした

くねえ。耻つさらしだ。見つともねえ、だが俺もモウいよいよハタチだ。其ハタチもモウ半分は濟んぢやつた。一日一日で年が寄らア。うかうかしてると矢つ張り貝將桒だ。全くだ、モウうかうかしちやアゐられねえんだぞ。』

松五郎は荷物をかたげて立上つた。松坂屋の裏通りの松が枝が又胸に浮かんだ。千兩箱も目の中にチラチラしてゐた。

『旦那、水の上もモウ飽きましたねえ。梅川にでも行つて飲み直しとしませうか。ぢや船頭さん、梅川につけてお呉れ。』松五郎は此の襞を開いて又橋の下を見おろした。丁度今度は女が船べりに顔を差しだしてこちらを見てゐた。此あいだ見とれた湯歸りの女よりか一段美しかつた。松五郎はゾツとした。廿歲の男の血が煮え立つた。船はそんな事に頓着なく、スルスルと離れて行つてしまつた。

『畜生！』松五郎は肩の天秤棒を背中に廻はして兩手を掛けた。其の兩手はヌツト高く空中に差し延ばされた。鑄掛の道具は天秤棒の兩端に搖れながら、欄干を越して靜かに橋の外に突き出された。松五郎は川の面を見つめながら一度に其の兩手を放した。道具も天秤棒もスウーツと落ちて、波の間にドブーンと沈んだ。隅田川は平氣で元の通りに流れ、兩國橋は知らん顏で元の通りに横たはつてゐた。往來の人々も丁度とだえて、誰も氣のつく者はなかつた。

松五郎はニヤリとして欄干を離れた。『あゝ胸がスツトした。之でいよいよ鑄掛屋の足が洗へた。サア之からだぞ！之れからだぞ！。』彼はシヨザイのよい兩手をぶくつかせながら悠々として歩み去つた。

▲以上書き終つた夜、私の夢に松五郎がやつて來た。曰く、『わツしも今の時節に生れてりやア、泥棒なんといふ馬鹿な眞似はしねえて、先生のお仲間にでもなつて働きまさア』。私は松五郎君に先生と云はれたのが嬉しくて、『僕も其の時節に生れてりやア、君の子分にでもなつてたか知れない』と答へると、松五郎はニコニコと笑つて消えてしまつた。



藤十郎と富藏

白柳秀湖

はしがき

敎へられた藝術論の根柢を爲す敎へられた美論に對して深き疑を懷くに至つた私が、至らぬながら其疑惑の最初の發表を許された本誌に於いて講談の書き直しといふ可なりに大それた叛逆の旗を擧げさせて貰ふことは、よく〳〵因緣の深いことと思ふ。

併し、講談の書直しといふことは、人間の生存慾を本とする私の藝術論とは直接何の關係もない。要するに敎へられた藝術論に服することの出來ぬ私が、文壇の無籍者として自分の思ふ存分のことをして見るといふだけに止まる。

私は昔から講談が好きで、いつぞやも改造社が精養軒に私達を招待して吳れた席上、論壇一粒擢りの人氣役者が顏を揃へて居る前で、黴臭い自分の名を名乘らねばならぬこととなり、仕方がないから『講談の愛讀者白柳秀湖』と名乘つてお茶を濁したことがあつた。私の講談に對する意見は『淑女畫報』の五月號に載つて居る。氣まぐれにでもお讀み下さらば光榮です。

藤岡藤十郎と犬塚無宿の富藏とが共謀して、江戸城内の金藏を破り、四千兩の大金を盜み出したといふことは、江戸時代の社會種としては最も新しく、安政五年二月二十八日兩人が江戸市中を引廻しになつた時の光景を目擊した老人が、ツイ此ほどまで生きて居た。此は講談全體に亘つて安政といふ時代の大背景を作ることに力を用ゐたので、『淑女畫報』の『太閤記』とは少し覘ひ所が違つて居る。玆に揭げるのは其長い物語の一節で、初めての讀者の爲に其梗概を述べると、主人公の藤岡藤十郎といふのはもと新身主膳といつて千八百石を領した旗本の用人であつたが女と博奕とに身を持崩して江戸市中を漂浪する中、幼馴染で犬塚の富藏といふ無賴漢とめぐり合ひ、安政二年三月四日共謀して江戸城の濠を乘越え、幕府の金藏を破つて四千兩の大金を盜出し、それを山分けにして巧に罪跡をくらまして居たが、フトした事から發覺して兩人とも召捕りになり、安政五年二月小塚原に於いて獄門の刑に處せられたといふのが大體の骨子である。此編は成るべく講談を放れぬやうに書くことを努めて見た。

(一) 安政の大地震

その後、藤岡藤十郎は田安家の家來で夏目幸太夫といふものと懇意になつたのを幸ひ、巧(うま)く田安家に取入つて其御用達しとなり、家號も尾張屋と改めて、多くの番頭小僧を使ひ、先づ立派な商人になり濟ました。

處が富蔵の方は藤十郎ほどに狡く出來て居ない。二千兩といふ大金を掴んだのを好いことにして又もとの遊人にかへり、先づ赤城下から四谷の鹽町に引越し、四谷の鹽町から芝の金杉に移り、相變らず諸方の部屋を渡り歩いて博奕は下手でも金放れがよいので唐草の兄イ、唐草の親分と持囃され、好い顔になつて段々其金をスリ減らして行つた。

處が茲に意外の事變といふのは安政二年十月二日の大地震で、此日は朝から降りみ、降らずみしぐるる初冬の雨物さびしく、夜に入つて纔に歇んだけれども、天色朦朧として暮るるけじきもなきに、市民は何れも早くから戸を閉ぢて、さしも繁華を極めた府内も暗澹として死の如き寂寞にかへつた。折しもあれ、轟々たる鳴動と共に俄然として起つた大地震は忽ちにして眼前に阿鼻叫喚の活地獄を現出した。スハこそ事よと人々夢うつゝに戸外に飛出す間もなく、梁は落ち、柱は裂け、武家町家はもとより神社、佛閣に至るまで家の全きはなく、柱の下に敷かれて救ひを呼ぶもの、屋根の下に埋れて生きながら燒き殺さるゝもの其慘憺として天地に滿ち、子を忘れて飛出したる母親、親を喪ひてさまよふ幼兒の叫びは夜をこめて、見るに膽冷え、聞くに魂消ゆる有樣であつた。

かゝる間にも大小の震動は襲ひ來り、夜の明方までに三十餘度、十一月朔日までに百二十餘度と註せられ、府内はすべて三十二ヶ所の火の手となり、炎々天を焦して翌る三日の五時過ぎまでに、江戸の目貫きを大半焦土に歸せしめた。

一代の俊傑と稱せられた藤田東湖が小石川水道橋の藩邸で悲慘の最期を遂げたのも此時であつた。初めて米國との通商條約に調印をした幕府が、續いて起つた英吉利、露西亞の强談判に惱まされつゝ此大變災に接して、殆ど策の出づる所を知らなかつたのも此時である。

何時の世にも多くの人の災難に乘じて奇利を博せんとする怜悧者はあつた。

尾張屋藤十郎は幸ひにして此地震の中に無事なるを得たが、一夜を戸外に明かして、八方に燃えあがる火の手を見な

から材木の買占を思ひたつた。

　彼は豫て蓄へて置いた小判を取出して人を八方に走らせ、ドシ〳〵材木の買占めをやつたので、此變災がいよ〳〵一段落となつて諸大名を始め町家がイザ普請といふことになつた時は、材木の値が天井知らずに奔騰して、藤十郎は忽ちに俄分限、今日の語でいへば成金の一人となつてしまつた。

　か〻る間に富藏は何をして居たかといふに金杉から下谷の長者町に移り、更に深川の六間堀に越し、博徒仲間の大立物となつたはよいが、二千兩の金は殘らず費ひ果し、今は元の杢阿彌となつてしまつた。

　處が藤十郎、或る日田安家に夏目幸太夫を訪ねての歸るさ神田橋御門外へ差しか〻ると、其處で計らずも絕えて久しい唐草の富藏に行合つた。

『ヤア其處へ行くのは兄貴ぢやねえか』

『ヤア富藏か。不思議な所で遇ふものだ。シテ、お前は今何處に居る。』

『今じや本所の林町に燻つて居るが兄貴お前は何處に居る。』

『己れか、己れは近頃スツカリ堅氣に化け、此先の上槇町で尾張屋藤十郎と云つて、田安家の御用達しをして居る。』

『ナニ、尾張屋…………』

『そうよ。』

『それぢや兄貴、アノ藤十郎と云ふのはお前の事か。巧くやつて居やがるナア。現在兄弟分の己れでさへ氣が付かん位だもの、何うして世間の奴等に知れるものか、兄貴ヤツパリお前は偉いナア。』

『さう煽てるな。』

『煽てるんぢやない。それぢや此間の大地震に材木の買占めをして多くの人の難儀を外にウンと金儲けをしたといふのもお前のことか』

『マアそんなものよ。』

(二) 奸　商

『酷い事をしやがつたナア。』

『大きい聲をするな。何が酷い事があるもんか。先を見越して安い時に品物を買占めるのは商賣の正道といふものだ。手前は一口置きにや多くの人の難儀とか何とか云ふが。そんな事にかまつて居て商賣が成立つかイ。』

『商賣が成立つか、成立たねえか知らんが、御府内何萬人と

いふ人が宿なしになつてふるえて居る時に、材木を買占めるといふのは酷い。』

『酷けりや商賣を許して居るお上に苦情をいへ。己れは天下御免の商賣をして居るんだ。』

『多くの人の難儀を見て己れ一人の懐を肥すのが商賣の正道なら、商賣なんて云ふものはイツソ止めさせるが好いぢやねえか。』

藤十郎は輕く笑つた。

『ハヽヽヽ馬鹿なことをいふなよ、今になつて此商賣といふものが御法度になつたら、世の中は暗だぜ。公方樣でも御大名でも己れ達が手を引いた日にや、朝晩のことにも支障へるんだ。』

『町人々々と見くびつて貰ふめえ、立派なお留守居の旦那方が、陰へ廻ると此尾張屋の前に手を突かねばかりにしての御頼みだ、大きい聲ぢや云はれねえが、お大名の一つや二つ、起すも寢すも己れ達の料見次第といふものだ。』

『ソリヤ公方樣やお大名はそれでもよからう。したがむごいのは吾々貧乏人だぜ。早い話が兄貴、お前の儲けた材木にしてからが、木を伐り出したり、運んだりする人間は命がけの仕事に汗水たらしてカツカツ食ふだけしか稼ぐことは出來ず、而も燒出されて雨露にさらされて居る御府内何萬と云ふ人間は、血の出るやうな金で目の玉の飛出すやうな高え材木を買つて居るんだが、その金は兄貴みんなお前達の懐へ落ちてしまつて些とでも働く方の人を潤すんぢやねえ。結好なものを食ひ、結好なものを著て懐手をしながら何萬といふ金を儲ける。世の中に商賣ほどひどいものはねえ。』

『其處は智惠の廻る人間と、智惠の廻らぬ人間で仕方があるめえ、世の諺にも浮世の馬鹿は起きて働くといふぢやねえか』

『智惠が廻るといふけれど、兄貴お前の智惠が一文なしの己れの智惠より、千倍も萬倍も立優つて居るといふ譯でもあるめえ。又越後屋や、鴻池のやうな百萬長者は生れ落ちる時から己れ達の百千萬倍智惠を持つて生れたといふ勘定だがチト聞えぬおかしな話だぜ。己らア今度の地震で沁々考へた。商賣といふものは何うしても正直なもんぢやねえ。』

『見つともねえ。アンマリ大きな聲をしなさんなよ。久し振りで會つたんだから、そんな理窟はよしにして、何處かで一杯やり度えが、己れも今は恁うした堅氣の商人、身扮りの異つ

たお前と一處ぢや人が目をつけていけねえ。近い中に一度訪ねて來なさるが好い。大かた怎んなこともあらうかと、店の者へは、弟が一人あると云つて置いた。』

『流石ア兄貴、其奴ア有りがてえ、それぢや近い中にキットお訪ねしますぜ。』

『アヽ好いとも、併し富藏、アンマリ目に立つ風をして來て呉れるなよ。』

『其奴ア承知で御座えやす。』

富藏は藤十郎の後姿をツク〴〵と見送つて、成る程藤十郎は己れから見ちや人間が立勝つて居る。併し此奴ア好い穴を見付けたワイと、それから二三日した處で、スッカリ堅氣の町人に化込み、上槇町の尾張屋方を訪ねた。

店の者は豫て主人から云ひ含められて居たので、直ぐに藤十郎に取次ぐ、藤十郎は富藏を自分の部屋へ通し、人を遠ざけて一別以來の身上話に時を移したが、藤十郎の安樂な身分になつたのに引かへ、富藏はもとの杢阿彌でふるへて居るときいて見れば、只で歸す譯にも行かず、當座の小遣ひといふので百兩渡した。

處が、富藏の方には強味がある。といふのは、藤十郎が今の身代を造り上げた元はといへば、自分が御金藏の鍵の型を取つて置いて、御城內の案內をしてやつたからである。其處は藤十郎もよく知つて居るので、今になつて昔の緣は切つて呉れといふこともならず、內心は困つたものだと思ひながら、表面は好い顏をして迎へなければならなかつた。

富藏は來る每に無心を云つた。五十兩貸せ、百兩貸せと云つて持つて行く金が段々に積つて千兩近くになつた時、藤十郎は思ひ切つて富藏にいひ出した。

『富藏!! 今日はチットお前に考へて貰ひ度え事がある。外でもねえが今日は五十兩、明日は百兩といつて己の手元からお前の持つて行つた金が今までゞ丁度千兩になる。何も水臭え事をいふのぢやねえが、お前と己れとしてものした金は四千兩、それを二千兩づつ山分けにしたが互に命をかけて取つた金だ、處がお前はそれを博奕に費ひ果たし、己れは何うやら怎うして商賣に有り付いたやうなものゝ際限もなしに云つて來られると、如何に兄弟分でも末は妙なことにならうも知れぬ。お前もそれを考へたら、もう好い加減に山を見せて呉れても好いぢやねえか。』

『兄貴何うも濟まねえ、よく分つて居る。併し今日やつて來

たのは些と譯がある。實は兄貴も知つてゐる犬塚に殘して來た己れの親父が…………………』

『ウム犬塚の太左衛門さんが何うかしたか。』

『昨日、フトした風の便りに聞きや、今老ひさばへて加賀の淺香川に居るさうだ。』

（三）身に泌みる月

『ナニ加賀の淺香川だと‥‥そりや又何うしてだ。』

『譯をきいて實は己れもビツクリしたんだが、何でも己れが家出をした後で、藤井村の萬右衛門と乾兒の勘太の野郎が殺されて居たのでお上の詮議が嚴しくなつた處へ、小山の嘉藏の奴に睨まれてトウ／＼土地に居られなくなり、身内のものを便りに加賀の淺香川へ移つたが、何しろ寄る年波で意氣地なく、此頃ぢや床へついたまゝ枕も上らず、阿母が傍へついた切りで困つて居るといふ事だ。就いちや毎度で濟まねえが、モウ是つきりだから三百兩都合して呉れ。賴む!!』

藤十郎は何を此野郎が口から出任せに好い加減なことを云やがると思つたけれども、それは色にも現さず、

『全くそれに違ひねえのか。それぢや今此處に現金はねえが、深川の木場まで一處に來い。[illegible]歩町の材木屋に掛金の取るのがあるから、それをお前に廻してやらう。』

『兄貴!!　何とも云はねえ、これだこれだ。』

富藏は涙ぐんで掌を合せた。藤十郎は何を此野郎が空涙をこぼしやがつて、と心の中にせゝら笑ひながら

『ナーニ、心配する事アねえ。』

『それぢや直ぐに出かけるとしようか。ちやうど己れも本所へ歸るんだ木場ぢや大した廻り道でもねえ。』

やがて二人は連立つて上槇町の尾張屋を出た。町人とはいへ藤十郎は田安家の御用達しで帶刀御免の身分である。唐棧の羽織に一本差込んで途々昔のことなど話しながら新大橋を渡り、深川八幡の境内へ出て、松本といふ茶屋へ立寄り、酒肴を命じて晩餐を濟まし、外へ出るとモウたそがれの火とも し頃であつた。

『いゝ月だナア。』

『ホントに今夜の月は身にしみるやうだ。それに加賀へ行つちや、當分兄貴の顏も見られめえと思やなほ更らだ。』

『そんなにお前が云ふなら、何うだい、是から洲崎を廻つて堤へ上り、海の景色を見ながら、後々の事も相談して置くと

しようか。問屋の方はそれからでも澤山だ。』

『さうしよう。一杯(ぺえ)飲んだ所へ此ヒヤリとした風は又格別だ。』

二人は洲崎へ出て、堤の上に腰を下した。

『好い景色ぢやねえか。』

『ポントに好い景色だ。何うだ恁うお月様の波に砕ける工合は…………』

『何時見ても剛勢なのはお臺場だナア。公方様の勢ひといふものは大(たい)したものぢや。是ぢや幾ら異國の船が強くても、一寸近くへ來られねえぢやねえか。』

『江川様が之を築く時に、御殿山の土を運ぶ人足が、アンマり骨が折れるので厭がつて逃げて仕方がなかつた。其處で役人が狡(づる)いことを考へてお臺場の土を運ぶ人足には御褒美に金を摑み取りにさせてやると觸れ出したものだ。』

『成る程ナア。』

『其處で慾の深え野郎どもが諸方から山のやうに集まつて、我こそ少しでも餘計に摑んで見せようと息まいた。』

『ウム、面白いナ。』

『お役人は人足どもが大勢集つた時分を見計らつて、小粒を入れた口の狹い甕を幾つも並べ、大きい聲をして云渡した。サア皆此甕の中から摑み出せ、摑めるだけ呉れてやる。其代り御用は一生懸命で勤めるんだ。』

『誰が一番餘計に摑み出したらう。掌(て)の大きい野郎が勝つたらうナア。』

『處がさうでねえ。』

『ヘーエ、何うして？』

『だつて甕の口が小さいんだもの、幾ら摑んでも、口もとまで來るとポロ〱こぼれる。こぼさなきや手が出ねえ。』

『畜生!!! 考へやがつたナ。』

『だから結局掌(てのひら)の小さいもの丶方が餘計に摑んだ位のもので、大勢の奴がアノ恐ろしい命がけの仕事に引かかつてしまつた。』

『何しろ大したもんだ。』

『江川様のお考へぢや、アノ品川の天王洲(てんわうず)から此洲崎の鼻まで拵へる積りだつたんださうだが、勘定方の川路様が反對でトウ〱あんな所で止めになつてしまつた。』

『品川と云やア、向ふにチラ〱灯の見えるのがさうか。』

『さうよ。アノお臺場の左手にチラ〱と灯の見えるのが品

川の宿だ。それから此方に黑い山の見える所があるだらう。』
『何處に？　もやでよく分らねえ。アノ左手か……。』
『ウム、モツト左手だ。アレが八ツ山御殿よ。』
『ドレ…………。』
富藏が立上る所を藤十郎は拔く手も見せず、エツと叫んで斬り付けた。富藏も流石に心得のある男、ヒラリ體を交すと、飛鳥の如く飛びのいて小さい松の木を小楯に取り、
『オイ兄貴!!!　冗戯をしなさんな、お前ホントに此富藏を斬る氣か。』
『ウム、實は濟まねえが殺す氣になつた。迷はず成佛して呉れ。』
『何故そんな事をする。』
『何故つて手前、度々己れの所へ來やがつて無心を吹かけるさへあるに今日といふ今日は圖圖しくも嘘を付きやがつてよくも三百兩といふ大金をねだりやがつたナ。己だつて金のなる木じやあるめえし、ソウ〳〵無心に來られちや遣り切れねえ、結局お互に氣を惡くして何うの態うのと云ひ合つた末、僅かなことから一件の尻が割れりや、是までの苦心も水の泡だ。可愛さうだが一命は貰つた。觀念しろ。』
『オイ〳〵冗談云つちやいけねえぜ、今度加賀の淺香川へ行つて親父に別れて來るまでは、お前の手にかかつて遣り度くも遣られねえ。今度融通して呉れりや、己れも唐草の富藏だ。モウ決して無心は云はねえ。金がなけりや、金がねえと云ひなせえナ。幾ら兄弟分だつて、さう無法に斷りもなく殺すといふ法があるけえ。』
白刄の下をくゞつてビクともせぬ面魂、一生懸命に親父の事を云つて居るので藤十郎も漸とそれが出鱈目でないことを知つた。

（四）漂泊者の悲哀

『富藏!!!　それぢや手前加賀の淺香川へ行くといふのは嘘じやねえか。』
『嘘なもんか。度々無心をした揚句だから、嘘と思ひなさるナア無理もねえが、親父の大病はホントの事だ。』
『ウム、白刄の下でビクともせず、何處までもそれと云ひ張るからにや、餘程深く思ひ込んだことであらう。ヨシ、それぢや其三百兩は己れが立替へてやる。』

『其奴ア有り難え。併し是から木場へ行くんだらうが。』
『ナーニ、三百兩ばかりの端た金、木場へ行かんでもチヤンと此處に持つて居らア。』
『流石は尾張屋の旦那樣だ。』
『馬鹿にするナイ。サア善く調べて受取るが宜い。』
『何うも濟みません。』
『併し富藏、モウこれ切りで忘れても來て呉れるなよ。それが互の身の爲だ。』
『兄貴!!』
『何だイ鼻をつまらせやがつて!』
『無心處か、此金で加賀の淺香川へ行つたら、己らア珠によるとモウ歸つて來ねえ。是が永の別れになるかも知れやしねえぜ。』
『そりや人間は老少不定と云つて明日が日にも何んなことがあるか分るもんぢやねえ、隨分途中も氣をつけて行きなさるが好いよ。』
『就いちや兄貴!! 己らア此處で云つて置くが、若しもアノ一件が露顯をして、己れから先へ食ひ込んだ其時にや、キツト己れが一人で背負ひ込んでしまふから、お前はヤキモキしなさんなよ。其代り己れがお召捕りになり、お處刑になつたといふことをきいたら、何うか手向けの一つもしてお呉んなせえ。そればつかりが賴みだ。』
『富や、よく云つて呉れた。隨分身體を大切にして、決してヤケを起しなさんな。』
『ヂヤ兄貴!』
『オー』
と云つた時藤十郎も今迄殺さうと思つた富藏だが、自然に涙が湧いて來て、思はずそむけた顏に月の光も曇つて見えた。
洲崎の堤をスタスタと別れて行く富藏の寂しい後姿を見送つた藤十郎は何とも知れぬ一種の悲しみに囚はれて、アー富藏といふ男も氣前の好い氣の利いた奴だ。あんな奴を堅氣の番頭にでもして、商賣を手廣くやつたら嘸面白いことだらうがア、身體へ傷がついてしまつちやモウつぶしが利かねえ。惜しいもんだと思ひながら、其夜は何食はぬ顏で上槇町なる我家へ立歸つた。
それから一月ばかりすると尾張屋へ田安家から四千兩といふ金子の御用があつた、藤十郎も成金で身代はいゝが、資本はそれからそれへと固定して居るので、却々四千兩といふ金

が遊んで居る譯はない。先づ自分の手元から、二千兩だけ納めて置いて、殘金は本所松井町の山田屋源右衛門といふ質兩替屋が取引先になつて居るので、其處から融通をすることにした。

藤十郎は自身山田屋へ出かけて二千兩の融通を頼んだ。

何がさて當時の日の出の尾張屋藤十郎からの申込みではあるし、用談は直ぐに纒まつて酒肴となり、四方山の話の末、本所松井町なる山田屋源右衛門方を出たのがちやうど其日の黄昏であつた。

藤十郎は微醉機嫌の銜楊枝で、ブラ〱とやつて來たのが松井町河岸、ちやうど大地震の後で吉原が未だ此處へ假宅を出して居つた時の事であるから、藤十郎の足は自然に明るみへ〱と引つけられた。

（五）假　宅

俗に吉原に火事がありや廓中丸燒きと極つたやうになつたものだ。之は何故かといふに、丸燒けになれば普請中と云ふ名義で假宅營業を許される。處が此假宅營業といふものは、廓の妓樓が數ケ所に散らばつて一切の規約申合せから脫し、自由に簡便に營業をすることが出來るので、其利潤は優に火災の損失を償うて餘りあるものがあつた。其處で吉原では何うせ火事が出たのなら、廓を燒いてしまふと云ふ事になつて居た。此假宅の營業は最初が一ケ年の許可で、その延期の歎願が大抵半ケ年は利くものと極つて居たから、先づ一ケ年半は假宅でウンと儲けることが出來た。

假宅設置の場所は時によつて異つたが大抵淺草では花川戶、山之宿聖天町、新鳥越町、山谷町、淺草町邊、深川では新地、仲町邊、本所では松井町、石原、割下水邊ときまつてをつたものだ、安政の大地震にも吉原は丸燒けとなつて松井町にも假宅が出來た。

假宅の氣分は廓と異つて何となく殺やかに、客の我儘が利く所から、其賑はひは又格別であつた。假宅といつても瓦屋根のシツカりした普請は柿葺の外許されなかつた廓と異つて却々立派なものである。張見世の格子に纒はつた美しいのが、兩側からカナリヤといふ鳥の囀るやうな聲を出して、

『お上んなはいよ。チョイト〱』

と煙草をすゝめる中を、藤十郎は半ば夢心地で、ブラリ〱とやつて行く。

突然!!!

藤十郎の前に立つて歩いて居た男が後を振り向きざま

『金藏!!!』

と呼んだ。脛に疵もつ藤十郎はイキナリ金藏と呼ばれてギヨツとした。

フト見ると視線のパッタリ合つた三十五六の苦み走つた男は、一目にそれと知れる八丁堀の旦那、シマツタと思ふ自分の直ぐ後で。

『ヘエ、御用で御座いますか。』

此御用といふ聲がガンと頭腦に響いたから臆病者の藤十郎はモウ堪らない。アタフタとして右手の女郎屋へ飛込んでしまつた。

前に立つて歩いて居たのは、藤十郎の鑑定通り、八丁堀の旦那で小林源十郎といふ敏腕家、此日は手先の金藏、喜兵衛の兩人を引連れて松井町の假宅を巡回中、人混みに紛れて源十郎と二人との間が少し距たつた間へ、偶然にも藤十郎が挾まれて歩いて居たのであつた。

『今のは何だ。ひどく狼狽へて飛込んだぢやないか。』

金藏は流石に商賣柄、藤十郎をよく見知つて居た。

『ヘエあれは上槇町の尾張屋藤十郎で御座いませう。田安様の御用達しで素晴らしい勢ひで御座います。』

『アーあれが尾張屋か、それならば宜いけれども、身共の顏を見ると泡を喰つて飛込んだから怪しい奴かと思つた。併しそれにしても今の様子は變だナ。』

『大便(てつ)でも詰つたのぢやありますまいか。』

『そんな事かも知れん。』

源十郎はそのまゝ行過ぎてしまつた。藤十郎の飛込んだのは丸總樓といふ中店である。

『入らつしやいまし。』

『何でも好いから一口出して、女を一人呼んで呉れ』

『旦那!!! 大層お顏の色が惡う御座いますが、何うかなさいましたか。』

『少々寒氣がして來たから、休んで行かうと思つて…………』

『それはいけませんねえ。熱い御酒でも上つたら治りませう。』

酒肴が出る。一口飲んで居ると敵娼(あいかた)がきまつて引合せが濟んだけれども、藤十郎は女の顏を見る處ではない、

が騒々しくなるか。それとも何かの間違ひであつたかと、あらぬ方にのみ氣を奪はれて居る。

女は藤十郎の顔を一目見ると、ギョッとした樣子で、俯向勝ちに一二つ酌をしたが、藤十郎はなほ夢中で一生懸命に今の出來事をあれか、これかと考へて居る。

藤十郎の顔色が餘り惡いので、取卷きの連中が氣を利かして直ぐにお引けといふ事になり、藤十郎は立つて便所へ行つた。

便所へ行つた時に階段を下りてチラリと店頭(みせさき)を見たが、別に變つた樣子もないので、藤十郎始めてホツト安心した。それでは今のは氣の迷ひであつたか。何だ馬鹿々々しいと思ふと急に胸の騷ぎも靜まつて、落着いた氣分になつて來た。

トントントンと階段を上つて部屋へ來て見ると、モウ、チヤンと屏風が立て廻し床がのべてある。床の上に坐り込んでヤント重荷をおろした時の心持ちになり、傍に置いてある朱羅宇の煙管を取りよせて、パクリ、パクリと煙草を喫んで居る。

屏風の陰から羞しそうにして現はれた以前の女。

『藤岡樣!! お久しう御座います』

『エツ!!』

『モウ御見忘れで御座いますか。』

『さう云ふ其方は?』

『ハイ、押田の娘袖で御座います。不思議な所で御目にかゝりました。』

『ナニ!! アノお袖樣で…………』

『面目次第も御座いません。』

『ウーム、何時ぞや牛込の揚場で死んだと思つたお袖樣、何うしてマア斯ういふ所におゐでなさる。』

『ハイ、それはモウ御話申すも涙の種、アノ時は貴方樣にお目にかかつた上で何うせ添はれぬ緣なれば、イツソ殺して貰ひたいと番町の櫻井の邸を拔出して牛込の御門外まで參りますと、運惡くアノ源吾奴に捕へられ、揚場の蔭で、已に身を汚されやうと致しましたのを漸くの事で逃れは致しましたものの、かよわい女の悲しさにまた追付かれて、帶の端に手をかけられましたから、モウ是れまでと夢中でお濠の中へ身を投げてしまひました。』

『お待ちなさい、アノ時に貴方樣の帶の端をとつてお止め申したのは、源吾ではなくて、此藤十郎でございます。』

『エッ!!! そんならアノ時追かけて來た人は？』

『實はアノ晩番町のさるお邸に所用あつて夜を更かし、一人寂しく牛込の御門外へ來かゝる鼻先をアレー人殺しとあはただしく驅抜ける若い女、續いて追縋らうとする一人の曲者、何にせよ奇怪千萬と立塞がつて取押へようとする私の髻をききつけて、日頃の恨み思ひ知れとイキナリ斬つてかゝりましたのはかの山田源吾、不憫とは存じましたが一刀の下に斬り捨て、貴方様の跡をしたひ、揚場の橋詰でヤット近付きは致しましたものゝ、貴方様は夢中で私の聲は耳へ這入らず、後から抱き止めやうとする間に、帶が解けて、貴方様はアノ深いお濠の中へ身を投げて早まつたお最後、アー申譯のない事をした。私故に歴とした家柄のお孃様、可惜蕾の花を散らしてしまつたと、それから思ひ立つて生涯定まる妻は持つまいと、コレ今日が日まで鰥暮しを致して居ります。』

『初めてきいたアノ夜の經緯。そんなら貴方は未だ奥様を持たずにか。』

『それはモウ、雨につけ、風につけ、貴方様のお情を忘れた日とては御座りませぬ。其眞情が天に通じてか、此處で斯うして思ひがけない御無事な御顔を見る事の出來た嬉しさ。お孃様あれから一體どうしたことで御座います。』

『それを訊かれては穴へでも這入り度いやうな此身の因果、アノ晩夢中でお濠の中へ飛込みはしたものの、アンマリ崖が高いので水へ落ちるまでに氣を失つて居たものか、水も呑まず浮いて居た處を、穴釣りの甚平とかいふ素性卑しき男の手に助けられ、散々な憂目に遇はされた上、トウトウこんな所へ身賣りされて了ひました。何といふ淺猿しいことで御座いませう。これといふのも親にそむき、家を捨て、不義淫奔に身を持崩した天の罰、藤十郎様!! お察しなされて下さりませ。』

『ア、今更何とお詫を致しませうやら、是といふのも皆私から起つたこと。此上は少しも早く苦界の勤めを免れるやうにして上げたう存じまするが、金子は幾らあつたらお身受けが出來ませう。』

『三百五十兩なればよいといふことで御座います。』

『三百五十兩それなれば今の私にとつては何程のことでも御座いません、何れ後でユックリ御話は致しますが、私は今上槇町に尾張屋といふ店を出し、田安様の御用達しをして、何うやら安穏に其日を送つて居りまする。』

『それはマア嬉しう御座いますが、折角身受けをして下すつて昔と違ひ、恁んな卑しいつとめに、身を沈めた私、とても貴方樣の奥樣には成れませぬ。』

といひさして、よゝとばかりに伏沈む。藤十郎はお袖が我身の變り果てたる姿を羞らひつゝも、なほ初戀の美しい影を追うて自分を昔のまゝの藤十郎と認めて居るその心のいぢらしさを思はずには居られなかつた。さうして今更のやうに富士見馬場の夕日に立つた淸い、美しい少年の心がしのばれた。

『何を仰しやいます。其お詫は皆私から申し上げねばなりませむ。今夜はモウそんなことは一切忘れて久し振りで積る話に昔のまゝの、うれしい笑顔をお見せなされて下されませ。』

(六) 中産階級論

丸龜樓の小雛が押田甲斐守の令孃お袖と知つた尾張屋藤十郎は、何卒して一日も早く苦界の勤めを遁れさせてやりたいものと、その夜からしきりに工面をするけれども、持つた金は手一ぱいに貸付けてしまつたし、それにツイ二三日前田安家から四千兩の御用を仰付かつて、漸く其後金を納めたばかりであるから、却々身受けの金がオイソレと云つて纏まる筈がない。

小雛のいふ所によると身受けの金は三百五十兩であるけれども、綺麗に受出して元の令孃お袖にする迄には何うしても五百兩の金が入用である。

藤十郎は萬一の場合と思つて拵へて置いた黄金の銚子盃を取出した。これはもと御金藏から盗み出した小判で今の地所建物を買つた時の殘りである。藤十郎は土藏の中からソツと其銚子盃を取出して、同町の家主をして居る道具屋の喜兵衛といふものを呼びにやつた。

尾張屋からの使ときいて家主喜兵衛は急いでやつて來た。

『只今は御使ひで御座いましたが、何か御用で御座いますか。』

『これはお忙しい所をお呼立てして誠に相濟みません。實は久し振りで一口差上げたいと存じまして…………』

『左樣で御座いますか、それは何うも有り難う存じます。』

見ると今土藏から出したばかりと思はれる道具類がそこに雜然と散らばつて居る。喜兵衛は商賣柄直ぐとそれに眼をつけた。

『今日は御藏掃除で御座いますか。結構なもので御座います

ナア』
『ナーニ一寸探しものがあつた次手に出して見たんですが、皆ガラクタばかりです。』
『ウム、それはそうと喜兵衛さん!! 折角入らしつたんだから、今日は此黄金の銚子盃で一口差上げませうか。』
藤十郎はさりげなく云ひながら散らばつた道具の中から、箱入れの銚子盃を取出して、包みを解いた。
『ヘー大層なもので御座いますナ』
『ナーニ大した品でもないが、それでも金無垢ですから、三百や四百がものはあるでせう。』
『私も恁んなお盃で御酒を頂きますれば壽命が延びます。』
『そんなに驚く事はない。家には道具と云つて碌なものはないが、さういふ潰し値の利くものなら未だ同じやうなのが外に一組ある。』
『ヘー、未だ此外に一組、勿體ないやうで御座いますナア。黄金といへば天下の資、立派に小判で通用致しますものを、恁うして置けば只重寳といふだけで…………』
『通用と云つて餘り通用させた日にはお上の目が恐ろしい。自分で働いて自分で溜めた金が自由にならぬのは私どもも町人の悲しさです。遠くは淀屋辰五郎、近くは加賀の錢屋五兵衛、之等はみんな自分で働いて自分で溜めてお上からお取潰しになつたものゝ好い手本ぢやありませんか。世の中がデングリ返つて私共町人が幾ら金を溜めても仔細ないことにならない限り、恁んなものを拵へて置くのも時にとつての用心で御座いませう。』
『成る程さう仰しやられて見れば昔深川の紀文が吉原で馱々羅遊びをして金を使つたのも、お上から睨まれて、根も葉も枯されて了ふのが怖く、紀文は金を溜めた、金持になつたといふ世間の噂を打消す爲めの計略であつたと申す人も御座います。』
『弱いものは町人だ。地獄の沙汰も金次第とやら云つて金さへあれば何んなことでも出來るやうにいふけれども、何うして兩刀の威光には勝てぬ。律氣に正直に汗水流して溜めた金でも高い所からグッと一つ睨まれたが最後、一寸したことを云ひ立てに根も葉も枯されて了ふ。それに此頃のやうに、世間が騷々しく冥加金々々と云つて取立てられる時勢には、ウツカリ金持顔も出來ませんよ。』
『大きにさうで御座います。』

『ハヽヽ、思はず話に身が入つて理屈がましいことになつた。時に喜兵衛さん!!!』

『ヘエ。』

『實は今の話だが、恁うして同じものを二組も持つて居た所で仕方がない。此頃少し差迫つた入用があつて困つて居る。お前さんの手で此品を何處かへ賣つて貰ふことは出來ますまいか。』

『それは宜しう御座います。一つ御周旋致しませう。』

喜兵衛は商賣であるから心安く引受けた。さうして十分に馳走になつてホク〲もので我家に引かへし、翌る日倚よく其品を檢めて見ると實に申分のない立派なものである。すべて恁ういふものは仲間内へ捌いたのでは儲けが薄いといふので先づ大名家敷を目當てにそれからそれへと手蔓を求めて賣りに歩いて見たが町人でこそ驚くべき貴澤品であれ、裕福な大名となつては、餘りに平凡な品で見返るものもない。さればといつて恁ういふ品の持合せがないといふ程の貧乏大名では、差當つて之を求めるだけの餘裕がないといふやうな譯で、喜兵衛もホト〲持て餘し、今度は河岸をかへて裕福な町家がよからうと右の銚子盃を諸方の大家に持廻ることゝなつた。

處が、流石は商賣柄で、此噂をチラリと耳に致したのが佃の八丁堀の旦那小林源十郎、道具屋喜兵衛が金無垢の銚子盃を諸方の大家に持廻つて居る。ヘテ何處から出たものであらう、黃金の銚子盃などといふものは先づ十萬石以上の大名か左もなくば古い百萬長者でもなければ造るものでない。そんなものが何處から何うして喜兵衛の手に入つたか。黃金といへば油斷のならぬのは江戸御城内の金藏から四千兩といふ大金を盗み出した不敵の曲者が未だ縛に就かざることである。一件以來、前代未聞の怪賊とあつて上役人の督促も厳しく、草を分け瓦をめくつて詮議をするけれども、未だその賊の手がゝりが得られない。黃金の銚子盃といふのは近頃耳寄りなことである。去んぬる天保の饑饉に續いて大鹽平八郎の騒動以來、町家も謹愼をして表向きに黃金の銚子盃などを拵へるものは、先づ尠くなつた。然るにそれを道具屋の手に渡して諸方に持廻らせるといふのはチト怪しい。調べて見たら案外手がかりが得られるかも知れぬと氣が付いたから先づ喜兵衛を呼出して取調べることになつた。

（七）搜索の端緒

小林源十郎は早速道具屋喜兵衛を三四の番屋へ呼び出した。

『アイヤ喜兵衛!!!』

『是は何うも旦那様…………』

『今日呼出したは餘の儀でない。聞く所によると、其方近頃黄金の銚子盃をもつて諸方を廻つて居るそうであるが、それは何處から出たものであるか。』

『ヘエ、實は上槇町の尾張屋藤十郎さんから出ましたもので、私がお預かりして何處かへ賣付けようと思つて居りますもので御座います。』

『ウーム、尾張屋藤十郎の所持品か。』

『左様に御座います何しろ尾張屋さんといへば、田安様の御用達しで當時日の出の勢ひ、藏の中にはまだ同じものが一組殘つて居るといふ事で御座います。』

『ナニ、然らば黄金の銚子盃がまだ外に一組あると申すか。』

『ヘエ』

ウム尾張屋藤十郎といへば評判の假分限者、右から左へと運轉する金が幾らあつても足りない筈であるのに黄金の銚子盃を拵へて樂しむといふのはチトおかしい。それに何時ぞや松井町の假宅で、自分の顔を見ると遽に狼狽して丸龜樓へ飛込んだのも今から思ひ合せると腑に落ちぬと氣が付いた小林源十郎は一段と膝をすゝめて、

『コレ喜兵衛、此方に於ては何も藤十郎を疑ふといふ譯ではない。唯平常から何事にも念を入れて置くのが此方の役目だ。黄金の器などが賣ものに出た時は、一應取調べて置かねばならぬ。決して驚くことはない。』

『ヘエ、之は何うも、御丁寧なお言葉で恐れ入ります。道具屋が旦那様方の御調べを受けますのは當り前の事で、其邊はよく辨へて居りまする。』

『然らば申すが、其方藤十郎の身元素性をよく存じて居るか。』

『畏れながら家主として其邊の事はよく存じて居なければならぬ筈で御座いますが、私も外ならぬ女房の御主人筋、田安様の御家中夏目幸太夫様からの御頼みでモウ安心して居りました處から、未だ身元素性はよく調べて居りません。』

『ア、左様か。ヨシ〳〵それから喜兵衛。』

『ヘエ』
『其黄金の銚子盃といふのを念の爲め一度此方に見せて呉れ。』
『承知仕りました。歸りまして直ぐ差出します。』
『云ふまでもないが、今日此方が取調べたことに就て藤十郎はもとより一切世間へ洩らさぬやうにして貰ひ度い。』
『それはモウ御念には及びませぬ。』
喜兵衛歸つて、直に件の銚子盃を三四の番屋へ持たせてやる。源十郎は一通りそれを見ると直に使のものに下渡したので、喜兵衛もこれを只のお調べであらうと餘り氣にも止めんで居た。
處が源十郎に於いては、品物を見て愈々怪しいと目星をつけ、それ〴〵手先に命じて藤十郎の生ひ立ちから、身元素性の取調べにかゝつた。
一方には藤十郎の身邊に穩密が附く。及一方には小林の手先が八方に手分けをして尾張屋藤十郎の身元調べをする。それからそれへと糸を手繰つて行つて見ると、藤十郎の素性は大した面倒もなしに分明となつた。藤十郎はもと藤岡といつて牛込富士見馬場なる新身主膳といふ旗本の用人であつたこと、それが不都合の廉あつて主家を放逐せられ、小日向水道町の旗本池田四郎五郎方に寄食して、諸方の賭場をゴロ付いて歩く中、トン〳〵拍子に好い目が出て、少しは小金も溜めて居たこと、併しそれは千と纏まつた金でなく、到底黄金の銚子盃を二つまでも拵へて藏つて置くほどの高でなかつたことなどがハツキリした。
其處で藤十郎の財産は愈々疑はしいものとなつて來た。彼が池田四郎五郎一味の無賴漢から離れて、田安家の夏目幸太夫を籠絡し、今の土地建物を買收して立派な兩替屋となる其間には、何か一つの大きい秘密が横はつて居る筈である。其處で江戸城中御金藏の怪賊を彼として當て嵌めて見ると丁度時日が刎合する。何か一つの尾を押へて召捕つた上、嚴重に吟味を加へなければならねと、小林源十郎は愈々熱心に其部下を督勵して、尾張屋藤十郎の舊惡調べに取りかかつた。
處が此探偵の結果として、思ひも掛けぬ收穫といふのは、先年牛込御門外の揚場に於いて何ものかの手に慘殺せられて居た引取手のない身元不明の死體が藤十郎と同じ家中で同じ役を勤めて居た山田源吾といふものであるといふこと、及び其の下手人を藤十郎として疑ふべき種々の材料であつた。

此材料は源十郎の手先の喜兵衛が藤十郎の身元、素性を取調べる必要から、段々に秘密の糸を手繰つて其昔藤十郎の同役で、二人の間に何か深い事情のもつれて居たらしい、山田源吾の在所を探ねん爲め、當時本所の割下水なる里方の親類に身を寄せて居た源吾の母のおもんを訪ねたことによつて上げられた。源吾の母のおもんは未だ伜源吾の死んだことを知らずに居た。今日は在所が知れるか、明日は行方が分るかと果敢ない望みを命の綱に人の賃仕方などをしてわびしい寡婦暮しを續けて居た所へ、喜兵衛が訪ねて行つて藤十郎の素性から源吾の行方に就いてくどくどしい老ひの繰言をきかされて居る中、フトした事から自分が先年取扱つたことのある牛込御門外の慘殺死體の事に思ひ當つた。其處で其當時源吾が帶びて居た差添へを出して見せるとそれは擬ふ方もなき源吾の父の所持品で、源吾が出家する時に差して行つたものであるといふことが分つた。

其處で段々に當時の事情を綴り合せて考へると、源吾殺しの下手人は、藤十郎であらうといふ概略の見當が付いたので、源十郎は雀躍して喜び、いよ〳〵尾張屋藤十郎召捕りの手配りをつけることゝなつた。(以下次號)



英傑サウル

沖野岩三郎

一

乳と蜜の流るゝイスラエルの地を侵畧しようとする王達が、絶えず其の國境を踏荒しに來るので、國民は最う今までのやうに、空漠とした『神意政治』だとか、弱々しい且つ統一の無い『民衆政治』だとか云ふやうなものにのみ縋つてゐる事が間怠くなつて來た。で、彼等はミズハの廣場に集つて『民の會議』を開いた。

强力と美貌とで名高いキシの子サウルは、群集が何んな相談をするのか、夫れを聞きたいと思つて、朝夙くからミヅハの廣場に出て行つて、レバノンの谷から移し植えられたといふ大きな白檀の樹蔭に佇んでゐると、四方の入口から三人五人宛續々と廣場の中に入つて來る十人十色の樣々な服裝や態度が非常に面白く見えた。

老人もあつた。若い婦人もあつた。しかし百人の六七十人までは血氣熾んな青年達であつた。全體で五六千人もあらうと思はれる群集は、彼方の香柏の蔭に百人、此方の無花果の葉蔭に七八十人といふやうに、思ひ／＼に小い團體になつて、頻

にワア〳〵と話し合つて居た。

政治といふ事にも、イスラエル國の將來といふ問題にも、未だ甞て毫しの注意をも拂つた事の無かつたサウルは、此の群集が餘り熱心に其樣な問題を論議して居るので、全體彼等は何んな事を言ふのだらうと思つて、兩手を後に廻して、少しく首を右に傾げ乍ら、靴音靜かに彼方の一團、此方の一團を覗きあるいた。

『我々イスラエル民族はエデンの園で、エホバに造られた神の子の直系である。我々はエホバの子供であるから、直接エホバの默示を受けて總てを行動すれば宜いのである。此のイスラエル獨特の國體を變更しようとする者は、直ちに石以て打ち殺すべきだ！』

夫れは五十恰好の顔髯の眞黒い男の主張であつた。

『我々には最う、其樣な傳統的な考へは毫しも無い！（神意政治）成程言葉は立派だ。しかし我々の過去は何うだツた。ミデアンの強敵が兩刃の劍を振翳して、我々の同胞を屠つた時、豫言者の祈りが何の役に立つたか、祭司の儀式が何の用をなしたか、イスラエル國民の最重最貴の神靈ともいふべき彼の（エホバの櫃）さへ七ケ月の間も敵國に携へて行かれたではないか。力に對しては力を以て對しなければならない。我々には王を要求し英雄を要求する權利がある！ 我々は單に殺され屠られんが爲に産れて來たのでは無い！』

頰べたの林檎のやうに紅い青年は、地べたを踏み鳴らし乍ら斯う言つた。

サウルは二人の話を靜に聽いてゐたが、双方共に相當の理屈があると思つた。

金雀花の咲匂つてゐる傍に、百姓姿の男女が二三十人一團となつて、地に物書き乍ら、頻りにヒソ〳〵と語つてゐた。

『神はアブラハム一人を惠んだのでは無い、イサク一人を愛したのでは無い。イスラエル全地を惠み愛したのだ。苟も此の國土に生を受けてゐるものは、悉く平等に神の愛を受けるのである。政治は民の心でなければならない。國家は民衆の國家でなければならない。神の國家でも無ければ英雄豪傑一個の所有物でも無い、我等に英雄の要はない。』

夫れは麥搗場から此の集會へ驅けつけたらしい三十恰好の色の赭黑い男の言葉であつた。

サウルは夫れを聞いた時、夫れも理屈のある議論だと思つた。

しかしサウルは思つた。俺にはそんな議論は、どうでも宜いのだ。可愛い妻のアヒノアムが亡くなつてから、マダ三月にもならないのに、煩さく後妻を勧めに來る親類や友人達を何うして防いだら宜いだらう？といふ事が、もつと大きい問題だ。死んだ二人の子供達の墓の傍に蒔いた草花の芽を小鳥に啄まれはしないかと思ふ事が、もつと大きな心配だ。可愛い息子のヨナタンと、娘のメラブとミカルの着物の色を考へてやる事が、俺には更に困難な事件だ。片腕の力で彼の牝牛を捻ぢ伏せたいといふ事が俺の畢世の願ひだ。

斯んな事を考へながら、其所の一團此所の一群の話を聞くとはなしに立聞してゐると、廣場の東の方で、

『豫言者、豫言者……』と叫ぶ聲が聞えた。

其聲を耳にした群集は、皆なばた〱と廣場の中央へ馳せ集つた。サウルも群集と一緒に走つて行つて見ると、中央の小高い祭壇の所へ現はれたのは、年の齢は最う八十にも近いと思はれる腰の屈んだ髯の眞白い老人であつた。

『サムエル、サムエル、豫言者サムエル。』

民衆は口々に然う言ひ乍ら老人の周圍を十重廿重に取捲いた。

『我等に英雄を與へよ！』と一人の若い者が叫んだ時、民衆の多くが等しく其の聲に和した。しかし默つて何にも言はない者もあつた。

『神意政治に御身達は何故不平であるか。』

サムエルは髯をしごき乍ら訊いた。

『貳千九百年來我々は神意のまゝに政治を行つて來た、我々には王がなかつた。だから我々の國は段々と領分を狹められた。カルデヤもメソポタミヤもスリヤも皆な我々祖先の所有であつた。けれども我々は今、此のイスラエルの小い領地へ追込められてゐる。そして此の土地も今にアンモン人に奪はれるだらう、ペリシテ人に占領されるだらう。アマレク人に司配されるだらう。我々の要求する者は一人の英雄だ、唯一人の英傑だ。』

熱狂した一人の青年が斯う言つた時、群集の六七分までが、

『我等に英雄を與へよ！』と熱心に叫んだ。

『民衆政治に御身達は滿足出來ないのか。』とサムエルは老の眼を瞬り乍ら言つた。

『民衆には統一がない、我等は集權を要求する。イスラエルの東の境にも南の境にも、此の乳と蜜の流るゝ肥えた土地を狙つてゐる強敵が、日毎に劍を磨いで居るではないか。我等に一人

の英雄を與へられないなら、我々は再び埃及に奴隷に賣られねばならない。夫れは我々に堪へ得る所では無い。吾等に英雄を與へよ！』

筋骨逞ましい一人の老人が斯う言つた時、群集の八九分までが、

『我等に英雄を與へよ！』と熱心に叫んだ。

『エホバを信じない國にすら、數多の英雄があるでは無いか。まして我々神の選民に全世界をも統一する程の英雄が與へられないで何うする？　我等は神を疑ふ事が出來ない。神を信ずる我等には世界無比の英雄を與へらるべき筈だ！』

夫れは羊牧の持つ長い杖を提げた三十恰好の若い男であつた。肩に垂れかゝる黒い房々した長い髪を風に搖がせながら彼が斯う言つた時、群集の殆ど總てが、

『我等に英雄を與へよ！　我等に英雄を與へよ！』と叫んだ。

其の聲は段々白熱になつて來た。

不圖氣付いてみれば、サウルも何時の間にか、群集の聲に引入れられて、我等に英雄を與へよ！　と叫んだのであつた。

其時豫言者サムエルは、右の手を高く擧げて夫れを振り動かし乍ら、

『然らば、私は御身達に與へる英雄の習慣を話さう！』と言つた。民衆は皆な聲をひそめてサムエルの顔を見詰めてゐた。

『御身達が若し英雄を得て、其の英雄に治められるに到つたなら、御身達の息子達は悉く其の英雄の爲に車の御者にせられ、騎兵にせられ、其の車の前驅とせられるだらう。』

『我等に斯る英雄を與へよ！』と群集は叫んだ。

『御身達の望む英雄は、御身達の娘を拉し去つて、英雄の妃の香造りとし、厨人とし、パン炙とするであらう！』

『我等に斯る英雄を與へよ！』と一同は叫んだ。殊に婦人の群は繰返して其の言葉を叫んだ。

『御身達の望む英雄が、御身達を治めるやうになつたなら、御身達の田畑と葡萄畑と橄欖畑との最も善い所を沒收して、自分の家來に與へ、又た御身達の肥えた牛と驢馬とを取つて英雄自身の爲に働かせるだらう。』

『我等に斯る王を與へよ！』と群集は悉く繰返し〳〵叫んだ。

しかし此時サウル一人だけは俯向いて、

『此の群集の中には叔父のネルが來てゐる。從弟のアブネルも來てゐる、あの二人は俺の心の中に、可愛い妻のアヒノアムが、マダ生きてゐる事をも知らないで、煩さく後妻を勸めるんだ。

今夜も亦た煩さく説きに來るだらう、どうすれば俺は彼等の口説から逃れる事が出來るのだ?』といふやうな事を考へてゐたので、群集が、『我等に……』と言つて了つたあとで、不圖氣付いて自分も一緒に叫ばうとしたが、其時最う群集は靜まりかへつて右の手を高く擧げたサムエルを見上げてゐるのであつた。

サウルも群集と等しくサムエルを見た。しかし意外にも其時サムエルの眼が、凝然と自分を見詰めて居るのに氣がついた。サウルは身が縮まるやうに恐ろしかつた。だから少しく肩を竦めて前の男の端に隱れようとしたが、サウルの體格は群集の總ての人達の誰よりも肩から上だけ高かつたので、何ともする事が出來なかつた。

サウルは眞紅な顔色をしながら、群集を押分け〱東の門から出て、急いで家の方へ飛んで歸つた。

家の表ではヨナタンが弓を射る稽古をしてゐた。メラブとミカルとは芝生の上で星の歌を歌ひ乍ら踊つてゐた。

二

其の翌日であつた。サウルが畑から歸つて來て見ると、父のキシが大變迷惑さうな顔付をして小首を傾げてゐた。

『どうしたのですか。』と訊いて見ると、

『俺の驢馬が居ない、彼所の無花果の幹に繋いであつたのだが、多分繩が解けて逃げたのだらう?』と言つた。

『では其所いらを尋ねて來ませう?』

『うん、行つて來てお吳れ。彼のケナズを伴れて……』

『では、行つて來ませう、多分エフライムの山の麓で草を食んでるのでせう?』

サウルは然う言つて、下男のケナズと一緒にエフライムの山の裾まで行つてみた。が、其所には放たれた驢馬が見えなかつたので、羊を牧つてゐる子供に聞いて見ると、驢馬はシャリシャの方へ走つたといつた。で、シャリシャまで行つて見ると、ベニヤミンの方まで走つたと言つた。

で、二人は汗みどろになつて、丘を踰え、野を横ぎつて、とう〱五つの村を通り過してツフといふ村まで來た時は、もう夕日が西の小山の橄欖の樹の枝に紅々と輝いてゐる頃であつた。

サウルは畑に鋤を使つて居る農夫に、驢馬の事を訊いて見ると、

『夫れは、(神の人)に聞くが善からう？』と答へた。
『神の人？　夫れは何所に居られすか。』
『彼の小高い杜の中で祭壇を築いて祭りをしてゐるから、早く行くが宜い。』
農夫は親切らしく然う言つて、又た忙しさうに鋤を動かし初めた。
サウルは急いで阪を驅け上つた。そして麓の井戸へ水を汲みに行く女達に途を聽いて、森の中の大きな門のある家に行つて、門を潜らうとすると、其所には一人の老人が少しく腰を屈めて此方を眺めてゐた。
『呀！』と言つてサウルは老人の顔を見詰めた。
『おう！』と唸るやうに言つた老人は叮嚀に頭を下げた。
『御願ひ申します、父の驢馬がエフライムの山裾から逃げまして、行方が判りませんので、甚だ迷惑してゐます……』
サウルは然う言ひ乍ら懐を探つて、其所に謝禮の銀が僅か一シケルの四分の一しか無い事を考へたりしてゐた。
『驢馬が見えない？　僅か驢馬が一疋？』
サムエルは歯の無い口を大きく開けて、ハヽヽと笑つた。サウルは夫れが若し神の人で無かつたなら、大きな拳を固めて其の横すッ頬をいやといふ程毆つたかも知れない程腹が立つた。
『驢馬一匹、夫れは私共に取つては、大變なものでございます。』
サウルは顔を紅くして言つた。しかしサムエルは靜かに頭を掉つて、
『イスラエルの總ての寳は誰のものだと思ふ？　夫れは皆な御身と御身の父の家のものではないか。』と言つた。
『私には、あなたの仰せられる事が、些とも解りません！』
サウルは然う言つて、此の人を調戯ふ老人から離れて歸らうとした。しかしサムエルは強いてサウルを奥の一室に招じた。訝り乍ら入つて行つて見ると、其所には立派な人品の人が三十人ばかり、ずらりと並んでゐた。
サムエルと三十人の人達は慇懃を盡してサウルと僕のケナズとを欵待した。二人はとう〳〵サムエルの家に一夜の宿を借りて、翌日朝疾く歸る事にした。

三

サウルとケナズはサムエルの家の屋根の上で、涼しい一夜を眠つて、翌朝夙く出立する事になつた。

夫れは奇怪な一夜であつた。失つた驢馬の事は何にも言つて呉れないで、あらゆる山海の珍味を饗應された上、國の名高い學者達にまで慇懃に歡待された。そして此の百姓仕事と腕力自慢の外、何の話題も有たない自分に對して、殆ど夜一夜サムエルの語つた話は、自分に取つては餘りに高尚で大きなものであつた。天下國家の話よりも、イスラエル二千九百年の歴史談よりも、神意政治と民衆政治と英雄政治との區別利害得失談よりも、自分には、ナタナエルが夜着を踏脱いで風邪を引くのでは無いか知らといふ事が氣懸りで堪らなかつた。

斯んな事を考へ乍らサムエルの家を出ると何うしたものか、サムエルは『私も御身と一緒に村外れまで歩かう。』と言つて、杖を引きずり乍ら、跟いて來た。

そして村外れまで來た時、サムエルは、

『下男のケナズを先に歸らすが宜い、私は御身に言ひたい事がある。』と言つて立停つた。で、サウルはケナズを一町ばかり先に行かして置いて。サムエル老人が自分に何を言ふのか、氣味惡い思ひで默つて其の唇から洩れる言葉を待つてゐた。

『お坐りなさい！』とサムエルは莊嚴な口調で言つた。

サウルは路傍の青草の上に膝を突いて俯向いてゐた。膝の所には黄色な小い圓い花が四つ五つ咲いてゐた。赤い蕾をもつた名も知らない草が牛の蹄に蹂躙られてゐた。

ひやり！と髪に冷い滴りが落ちかゝつた。しかしサウルは別に驚きもしないで俯向いてゐると、言ひ知れない佳い香りが柔かい朝風に揺ぎながら匂つて來た。

『神は汝を立ててイスラエルの王となし給ふ。汝は今日より其の產業の長なり！』

嚴かな聲が聞えた。しかしサウルは其の聲を信じ得る筈が無かつた。

『左様なら！』

サムエルは幸福に充たされたやうな顔でサウルを見た。

『左様なら！』と云つたサウルは、急いで下男の待つてゐる丘の方へ走つた。彼は全く夢の國に彷徨うてゐるやうに不思議な世界を夢中になつて走つたのであつた。

二人はラケルの墓の側まで來た。すると向ふから百姓姿の男が二人伴立つて來て、サウルをジロジロ眺め乍ら、

『あなたはキシの息子のサウルさんではありませんか、御宅では貴方の事を大變心配してゐますよ。驢馬は早くに自分で歸つて來たんだが、肝心のあなたが歸らないツて、息子さんや娘さ

んが大騒ぎですよ。』と云つた。

　二人はドン〳〵と走つた。そしてタボルの樫林の所まで來ると三人の旅人に出合つた。

『御機嫌克うございます、最初の王様！』と言つて、三疋の山羊を引張つた男は、サウルの前に叩頭をして、さツさと摺違つて行つた。

『お早うございます。サウル王！』と言つて第二の旅人は袋の中から大きなパンを二つ取出して呉れた。

『左様なら！』と酒の嚢を背負つた第三の旅人は靜かに言つて頭を下げた。

　サウルは何が何だやら、薩張り解らなかつた。で、一生懸命にギベアの自分の家に馳せ歸つて、息子のヨナタンや、娘のメラブやミカルを集めて、彼等が淋しかつた一夜の物語りを聞いた。凝然と眼を閉ぢて子供達の話を聞いてゐると、小狐が裏の葡萄畑に出て來たり、驢馬がコツ〳〵と壁板を蹴つたり、鼠が寢臺の下を走つたり、屋守が白い壁を這つたりした有樣が、はつきりと如實に見えた。

四

　其日の夕方であつた。町外れの祭壇のある所へ行つて見ると、一群の豫言者達が、瑟と皷と笛と琴とを鳴らしては、何とか言つて豫言をしてゐた。

　其時サウルは、全で眼に見えない強い〳〵力にでも引摺られるやうに、其の預言者の群に入つて、彼等と一緒に坐つてみた。豫言者達は別に何とも言はなかつた。

　サウルは眼を閉ぢて音樂の音を聞いてゐると、最初の程は唯騷がしい雜音であつたが、暫くすると瑟と琴と笛との音が別に明瞭と聞えて來た。皷の音だけ聞きたいと思ふと、他の音が皆な消えて、皷だけ聞え、琴だけ聞きたいと思つても矢張り同じやうに琴だけ聞く事が出來た。

『はて、變だナ、俺は少しどうかしたぞ。』と思つてゐるうちに、彼は大きな聲で、

『神は汝を立てゝイエラエルの王となし給ふ。汝は今日より其の產業の長なり！』と叫んだ。

『わあアッ！』と聲を揃へて笑ふ聲が聞えたと思ふと、サウルは愕然として吾に歸つた。そして眞紅な顏をして周圍を見ると、其所には町の人達が、

『サウルさへ豫言者になれる世の中だ！』と言つて笑つてゐ

た。サウルは此時、何で自分が斯んな所へ飛び込んで坐つてゐたのだか夫れを知る事が出來なかつた。しかし今一度思を靜めて音樂の音を聞いて見ようとしたが、どうしても今度は雜然とした騷がしい音ばかりであつた。

サウルは豫言者の群から逃げるやうに飛出して來た。そして家へ歸つたが、其日から最う何となく自分は以前の自分で無いやうに感じられた。

七日の後であつた。代官から町々村々の戸毎へ通知があつた、夫れは月の朔日に皆なミヅハの廣場へ集れといふお觸れであつた。

朔日になるとサウルもミゾハへ行つてみたが、最う先の日に自分が休らつた白檀の木の下も、青年の議論を聞いた無花果の蔭も、皆な人で一杯であつた。

サウルは群集の中に交つて祭壇の方を見てゐると、嘗て豫言者サムエルが、美しい衣服を着て壇の上に現はれた。群集は夫れを見た時一時に響動いた。しかしサウルは急に此間の事を想ひ出して恥かしくなつたから、香柏の木の蔭に、商人が大きな行李を積重ねて、此の騷ぎを見て居る傍へ行つて、其の行李の間に身體を匿しながらサムエルの方を見てゐた。

サムエルは大きな聲を張り上げて、

『神は今日キシの子サウルを立てゝ汝等の王とした。彼は今日から汝等の產業の長であるぞ！』と言ひ渡した。

其聲を聞いた群集は、どつと地の搖ぐやうな大きな聲を出して喚いた。

『キシの子サウル、キシの子サウル。』といふ聲がサウルの耳に入つた時、サウルは最う逆上せあがる程苦しかつた。

『キシの子サウルを群集の中から此所に伴れて來なさい！』とサムエルが叫んだ時、群集の中の一人が、行李の間に隱れて顫へてゐるサウルを見付けて、遮二無二夫れを引摺り出した。そしてサムエルの所へ伴れて行くとサムエルは、

『御身等は神の撰み給ひし人を御覧なさい。イスラエル全國の民の中に、これ程强き人なく、これ程美しい人もない。これは御身達の久しく求めて止まなかつた强き王である、强き英雄である。』と言つた。一同は、

『願はくば王、いのち永かれ！』と叫んだ。

五

サウルは遂にイスラエルの王として民衆から認められた。英

雄として承認せられた。神の人豫言者サムエルが公衆に對して宣言したのである。しかし肝心の本人は、どうしても自分をイスラエルの王だとは思へなかつた。人に優れた英傑だとも思はれなかつた。

　サウルは矢張り翌日から畑へ行つて、牛の尻ッぺたを打ち乍ら土を耕した。畑の傍を通る人が時々、

『王様、お早うございます。』と言つた。けれども夫れは自分を揶揄ふやうな嘲笑の聲であつた。

『サウルさへ豫言者になる世の中だからなア。』を聞えよがしに言ひ乍ら過ぎ行く者もあつた、サウルは今更のやうに、世の中の大仕掛な悪戯が嫌になつた。

『俺はどうかしてゐるのぢやないか知ら？　俺の心が狂つて、王だの英雄だのといふ誇大な忘想に浮されてゐるのでは無いか知ら？』とも考へてみた。で、彼は田の畔に立つて、靜に頭を左右に掉つて見たり、一から百千まで數字を勘定してみたりしたが、自分の診斷では決して自分を發狂だとも馬鹿だとも思ふ事は出來なかつた。

　サウルはサムエルの爲に祝福されて以來、何となく沈鬱で一日として晴々とした愉快な日は得られなかつた。彼は最う人に顔を見られるのも嫌で堪らなかつた。で、全く世間から離れた山の奥へでも逃げて行きたかつた。

　所が或日の夕方、例ものやうに畑から牛を曳いて歸つて來ると、町の人達が、あちら、こちらで、わア〳〵と大聲を擧げて泣いてゐるのを見た。

　其の泣聲はサウルの魂を非常に刺激した。

『何事だ！』

　サウルは大聲で呼んだ。町の人達は驚いて振返つたが、其所にサウルの立つてゐるのを見た時、此男が嘗てミツハの廣場でイスラエルの王としてサムエルから推薦された人だといふ事を想ひ出したので、

『イスラエルの王者！』と叫び乍ら、ばら〳〵と百二百の人達が馳集つて來た。

『何事だ！　そんなに泣いてゐる所以は？』

　サウルは凛然とした聲で叫んだ。

『王様に申上げます、アンモン人、ナハシ王が、ギレアデに攻寄せて來まして御座います！』

『何と？　アンモン人が攻寄せて來たと申すか？』

『左様にござります。新しき王、サウルと一合戰試みたいと申

すのでございます。』

『して、其の使は如何致した？』

『ギレアデのヤベシの人々が談判の結果、一先づ引取つて貰つた次第でございます。』

『アンモン人の使者が引取つたとあるに、何で左様に多くの人人が泣き喚いてゐるのであるか。』

『左様にございます。イスラエルには天子も兵隊も武器もござりませぬ。さればアンモン人と戦争をしては敗北に定つてござりますから、和議を申込みましてございます。』

『和議？　如何なる和議を？』

『アンモン人は、イスラエルの人々の老若男女総ての右の片眼を抉り取る事の條件で、イスラエルの全地を侵略しないで軍を退さうとの事でございます。夫れは今日から七日限りの約束でございます。』

『なアに、右の眼を抉り取る？　あのイスラエル人全體の？……』

サウルは顔色を真蒼くして、ワク／＼と顫へてゐたが、何を思つたが、突如、曳いて居た大きな牝牛の角に両手を掛けたと思ふと、『うん！』と力を籠めて、其の牛を仰向けに引ツくり返した。

不意を打たれた牛は、恐ろしい聲を立て乍ら撥ね返らうとしたが、サウルの右の足が其の腹に載つたと思ふと、前肢の一つは、ぶり／＼と音を立て／＼折られた。

『ひやアーッ！』と狂人のやうな聲を立てたと思ふと、牛の脚は四本共別々に引裂かれた。サウルは鮮血淋漓とした其の四肢を四人の僕に肩げさせて、

サウルの命を奉じて、明日ミヅハの廣場に集まらない者があるなら、其人々の牛も斯の如く引裂かれるだらう！

と觸れさせたのであつた。

六

サウルは其夜一夜を眠らないで、遥かにギレアデの方を睨んで居た。そしてアンモン人の陣屋に打入る方法を考へた。此時サウルは自分の身體が火のやうに燃えてゐるのを感じた。頭の中には全世界を征服し得る程の大きな計畫が貯へられてゐるやうに思はれた。

窓を開けて外を見ると、月に照された夜の木々が皆な自分を拝んでゐるやうに思はれた。大小の丘陵は皆な自分の前に低頭

平身してゐるやうに思はれた。

とう／＼夜が明けた。山も川も田も畑も、あらゆる草も木も皆な手を擧げて歌つてゐた。鳥も獸も皆な高らかにサウル王を讃めてゐた。道行く人も位ある人も悉く庸凡暗黒の樣に見えた。

サウルは、とう／＼自分で自分を英雄だと信じた、王者だと信じた。そして彼は直ちにミツハに馳せつけたが、其所にはイスラエル人三十萬、ユダ人三萬が集つてゐた。

サウルは彼等を三隊に分つてヤベシに攻め入つた。そしてアンモン人を數限りなく殺した。もう其時、サウルの目には敵國のアンモン人は人間だと思ふ事の出來ない程、淺ましい醜いものであつた。だから其人達を殺す事は、正にしなければならない一つの善い行のやうに感じられた。

戰の終つた時、サウルは高い山の上に登つて遙に下の方を瞰下した。人間の屍は山の如く血は川のやうに流れてゐた。

サウルは自分の手に塗れてゐる血を見て、大聲で笑つた。衣服に着いてゐる血痕を見て武者振ひをした。其時靜かに彼れの肩に手をかけた者があつた、振返つて見ると、夫れは豫言者サムエルであつた。

『アンモン人は、御身に何を要求しました？』

『イスラエル人の右の眼を……』

『片眼を要求した時、御身は彼等に何を酬ゐましたか。』

『彼等の生命を奪ひました。』

『片方の眼と、全生命と何れが大切だらうか、御身は夫れを御承知の筈だ！』

『いゝえ、私は英傑だ、私は王だ、私には大きな力がある、特權がある。山も川も木も草も鳥も獸も皆な私を讃めてゐる。太陽も月も星も……私の命令は全地のあらゆるものに對して絕對の服從を强ふる事が出來る！』

サウルは然う叫んでサムエルに背を向けて山を降つた。そして直ちにイスラエル全國に令して總ての耜、鍬、斧、耒の類を悉く鎗と劍とに作らせた。そして彼は時の來るを待つてゐた。

七

サウルは王位に即いた。彼の邸宅は俄かに空に聳ふる宮殿となつた。百官有司は綺羅星の如くに居並んだ。威儀を整した彼の生活はイスラエルの凡ての民を威壓する事が出來た。

イスラエルに斷る英傑が突如として現はれたと聞いたペリシテ人は、いで一合戰せばやと、直ちに兵車三百、騎兵六千、步

兵幾萬とも知れぬ軍勢を催して蝗の如くに攻め寄せて來た。

王威を示すは此の時ぞ！　と叫んだサウルは、アブネルを大將軍として、民の總てに武器を取らしめ、ミクマシの渡頭に軍を進めた。そして軍を發するに望んで彼は嚴命を發した。

『戰の終るまで、何物をも飲み又は食つてはならない、王の命令を犯す者は悉く殺されるであらう！』といふのであつた。

戰は初まつた。王の嚴命を守つたイスラエルの兵士は、飲まず食はずで、必死に戰つた。そして敵兵を一人も殘らず追放つた時、サウル王の愛兒ヨナタンは森林に入つて憩んでゐる時、地に流れてゐる蜂蜜のあるのを見た。あまり空腹だつたので、杖の尖に其の蜜を掬つて甞めて見た。

『あゝ私の眼は明かになつた！　もう倒れるやうなつてゐた私は、これだけの蜜で元氣を恢復出來た。』と云つたヨナタンは、

『父上は間違つた布令を出したものだ、食を奪つて、そして戰はせようとしたのは過つてゐる。十分に食べさせて、十分に戰はせるべき筈だつた。

其の聲を聞いた多くの民は、直ちに牧場に居た羊と牛と犢とを斬殺して、血のまゝで爭ひ食つた、貪り食つた。彼等は皆な餓えた獅子のやうに血に塗れて狂ひ歩いた。

これを聞いたサウルは非常に憤慨した。

『王の命令に背くものは、假令可愛い可愛い吾が兒でも、夫れは殺さねばならない、さもなくば布令を汚すものだ、王の威嚴を損ずるものだ、假令我が唯つた一人息子のヨナタンでも、必ず殺さねばならない！』と叫んだ。

しかし其時、民の總ては王に反抗した。そして叫んだ。

『渇いた時に飲み、餓えた時に食ふのは、我等人間の特權である。そんな暴令の下に、王子ヨナタンの髮の毛一筋だに、地に落してはならない！』

サウルは獅子のやうに吠えて見た、虎のやうに齒を咬み鳴らした。しかし其時最うサウルの前には、山も川も木も草も彼れを讃めて居なかつた。日は暗く月にも星にも光りが無かつた。鳥も獸も彼れを嘲り顏に啼いてゐた。

サウルは山犬のやうに狂ひ乍ら天幕を出て行つて、大將軍アブネルを呼んだ。其時アブネルは、一枚の大きな板を提げて來た。夫れには斯んな文字が書きつけられてあつた。

我ら諸々の罪に又た英雄を求むるの惡を加へたり。

虛しき物に迷ひ行く勿れ、是れは空しき物なれば、汝等を助くる事も、救ふ事もなし得ざるなり。（サムエル前書十二章十九、二一）

＝一九二〇年六月十日＝



石川五右衛門

上司小劍

一

生立の記

文吾（五右衛門の幼名）は、唯一人畦の小徑を急いでゐた。山國の秋の風は、多のやうに冷たくて、崖の下の水車に通ふ筧には、槍の身のやうな氷柱が出來さうであつた。布子一枚で其の冷たい風に慄へもしない文吾は、實つた稻がお辭儀してゐる田圃の間を、白い烟の立ち騰る隣り村へと行くのである。

隣り村には、光明寺といふのがあつて、其處の老僧が近村の子供だちに手習して實語敎なんぞを讀むことを敎へてゐる。文吾も今年の春から其の寺へ通ひ初めたのであるが、朝寢坊の癖があるので、いつも遲れ勝ちで、朋輩が双紙を半分も習ひ終つた頃、文吾の小まちやくれ姿が、庫裡の入口に現はれるときまつて了つた。

『文吾はん、早う起きいしいや。』と、母は朝の支度が出來た時、文吾の枕邊に立つて、優しく呼び起すのであるが、文吾は微かに眼を見開いて、母の世帶疲れのした顏を見守つたばかり、また眼を閉ぢて、スヤ〳〵と眠つて了う。こんなに眠むがる

ものをと、母は足音を忍ばせつゝ、勝手の方へ立つて、井戸端に絞り上げてある洗濯物を竿に懸けてから、御飯は文吾が起きてからと、お膳を片寄せて置いて、板の間につくねてある賃仕事の縫ひ物にかゝらうとしたが、幾ら何んでも、あんまり遲い。もうお寺通ひの子は殘らず行つて了つて、表には子守り唄が、のんびりと聞えてゐる。文吾は狸寢入りをしながら、母のすることを一つ〳〵手に取るやうに、座敷の寢床の中で知つてゐるのである。

ねんねこ、さんねこ、
酒屋の子。
樽にもたれて、
寢た心。
こい〳〵

子守り唄は文吾の耳へもハッキリと聞えて來る。こんな、眠りを誘ふやうな唄をうたはれても、文吾は更に眠くないのである。もう起きてやらうかと、小さな身體（からだ）をもぐ〳〵さしてゐる枕頭（まくらもと）へ、母の足音が、遠くから響くやうであつた。また起しに來たのだなアと思ふと、文吾は起きるのが厭やになつた。さうして。ヂッと眼を瞑つて熟睡を裝ふてゐた。

ねんねこ、さんねこ、
酒屋の子。
樽にもたれて、
寢た心。
こい〳〵。

さらに近く子守り唄が、窓の外で聞えた。母の足音は、文吾の枕邊まで來て、はたと止まつたが、今度は「文吾は

ん、起きいしいや。』といふ聲も聞えないで、たゞ側に近く人が立つてゐるといふ氣色を、文吾の狸寢入りの魂魄に感じさせるだけであつた。

ぽつり。……………

雨の日に、この荒れた家の天井から落ちるやうな雫が、文吾の頬に垂れかゝつて、冷りとした心持ちは、文吾の全身をビク〳〵と慄へさせた。文吾はまた細く眼を見開かうかと思つたが、チッとこらへて、頬にかゝつた雫の、全身に滲み渡るのを感じつゝ何か劇しい藥でも付けられて、肉を爛らし、骨を燒く苦みが、今にもやつて來るやうに思はれてならなかつた。

頬にかゝた雫が、母の涙であることを、文吾は直ぐ悟つたのであるが、母の涙には恐ろしい毒でも混つてゐるやうに思はるゝことがあつた。愛兒の枕頭に立つて、其の寢顏に見入つてゐる母の爲めに、文吾はいつまでも狸寢入りをしてゐなければならないやうな氣がした。

文吾が寺へ手習ひに行くのは、毎朝こんな風で遲れるのであつた。お師匠さんも、もう小言を言はなくなつた。朋輩もあまり待たされるので、誘ひに來なくなつた。文吾の机は、みんなが双紙を半分から習つて了うまで、毎朝必ず空であつた。文吾が來るまでに、欠伸の一つや二つは、お師匠さんの齒のない口から漏れた。

二

寺へ手習ひに行く道で、文吾は大きな柿の木に、京紅で染めたやうな眞ッ赤の御所柿が枝もたわゝに熟してゐるのを見た。

『可味さうだなア。』と、文吾は思つて、唾液を呑み込み呑み込みした。『喰べたいなア。』と思つて立ち止まつた。それが爲めに、寺へ行くのが遲れた上をなほ遲れた。

『一つ取つてやらうか。』と思つて、身の輕い文吾は、其の柿の木に登りかけた。人が見てゐやしないかと思つて、一番下の枝に足をかけながら、方々を眺め廻はした。誰れも見てゐるものはなささうであつた。文吾の小さい身體は、恐しく實つた御所柿の中へ滑り込むやうにして入つて行つた。一匹の蟻をば砂糖壺の中へ投げ込んだやうに、文吾は可味さうな柿の實に包まれて了つて、まご〳〵した。どれから捲り取らうかと、手のやり場に困つた。

さうして、一番小ささうなのを一つ取つて袂へ入れた。この時どうして、一番小ささうなのへ手が行つたのか、文吾は後で考へて見て、どうも解らなかつた、一生解らなかつた。五右衛門になつてからも、この折りの心持ちを考へてみて、幾度首を傾けたか知れなかつた。

忙しい手付きで、小さな柿を一つ取つて、袂へ入れると、次ぎにはまたどれを取らうかと、手がまごつき始めた。左の手にシッカリと枝を握つて、右の手では、近まはりの柿の實を撫で廻はした。何んだか捲り取るのが可哀さうにも思はれて來たのである。

『どいつちや。……柿盗人、奴盗人。』

大きな聲が、眞下から鐵砲丸か花火のやうに打上げられた文吾は、足を踏み外さんばかりに驚いたが、兩手でしツかり枝に捉まりながら、柿の實の間から下を覗くと、弓矢を持つた獵師が、眞ツ赤な口を開いて立つてゐた。あの大きな口の中へ、柿の實を一つ投げ込んでやりたいと思ひながら、文吾は默つてゐた。

『どいつちや。人んとこの柿を盗みさらして。……さア下へ降りて、取つた柿を出せ。降りやがらな、打つぞツ。』と怒鳴つて、獵師は弓に矢を番へつゝ、キリキリと引き絞つた。それでも文吾は動かなかつた。打つなら打つてみいと思つて動かなかつた。すると、獵師の引き絞つた滿月のやうな弓は、八日頃の月くらゐに縮つて、弱々しいひよろ〳〵矢が、ぴゆうとも音せずに飛んで來ると、文吾の眼の前の、この木では一番大きいと思はれる實に、ぐさとばかり突き刺さつた。味なことをする獵師だと感心して、文吾は木から降りてやる氣になつた。

初めは喫驚しても、文吾の小さな度胸は、もうスッカリ据わつて了つた。矢でも鐵砲でも持つて來いといふ氣になつた。一番下の枝まで傳うて來て、其處から草原へ飛び降りると、獵師は持つてゐた弓矢を投げ棄て、手甲のかゝつた大きな手で、ぐいッと文吾を引き据えた。

「こらやい。この柿何家の柿やと思ふてけつかる。」

獵師の罵る聲は、雲に響くばかりに高かつた。文吾はいよ〳〵度胸を据えて了つて、もう少しの恐怖もなかつた。

「さア取つた柿を返せ。返したらお上へ突き出すことだけは宥してやる。」と　獵師は稍靜かに恩に着せるやうに言つた。

「返さん。……俺の取つた柿は俺のもんや。……お前の腰に提げてる鳩がお前のもんなら、俺の袂に入つてる御所柿は俺のもんや。」

文吾が落ち付き拂つて言ふ言葉と、小まちやくれた態度とは、實に〳〵踏み潰してやりたいほど憎らしかつた。

「何んちや、この鳩が俺のもんなら、この柿は貴さまのもんちや？　阿呆吐かせ。」と、獵師は呆れ返つた顔をした。さうして餘りな圖々しさを憎むのあまり、文吾の襟元を摑んで突き轉ばした。其の途端に袂の柿がころ〳〵と草原に轉がり出た。選りに選つて見窄らしい小さな柿なのを、獵師も意外に思ふ風で見てゐたが、更に文吾を捻ぢ伏せて、兩の袂から、懐中までを改めた。

「何んちや、たつた一つか。」と、獵師の言つた言葉は、文吾の耳へ嘲笑はれたやうに響いた。もつと大きなやつを、ドッサり取つてやれば好かつたと、文吾は殘念でたまらなかつた。さうして彼れは怨めしさうに、大きな御所柿の木を見上げた。

三

それから文吾は、夜になるのを待つて、其の御所柿を取りに行くことにきめた。しツとりと夜露に濡れた柿の實の風味は、また格別であつた。

『これ貰うて來たんや。』と言つて、大きなのを二つばかり母に持つて歸つてやると、柿の好きな母は、何も知らずに、ほく／＼喜んで、研ぎ減らした小刀で、薄く細く長く皮を剝いた。都は三條の大橋の欄干に凭れて、白い玉を溶かしたやうに美しい水の上まで、剝いた柿の皮を屆かしたといふのが、母の自慢話の一つであつた。若い頃都で御殿奉公をしてゐた母の言葉には、京訛りが殘つてゐた。

『關白さんの上る柿や。』

さう言つて、母はもぐ／＼と淡紅色の御所柿の一片を前齒で嚙んでゐた。奧齒の一つもない母は、馬のやうに前齒でばかり物を喰べるので、嚙んだものが膝の上へぼろ／＼とこぼれ落ちた。

あんまり毎晩、見事な御所柿を持つて來るので、母はそろ／＼怪み始めた、文吾はそれを知らないのではなかつた。母の心を疑はせるといふことが、文吾には何んとなく面白いのであつた、

『文吾はん、あんたこの柿を何處のお方に貰うといなはるね。こないによう毎晩呉れはりまんな。』

母は少しむづかしい話になると、いつもかうやつて、目上に物を言ふやうにして、文吾に對するのであつた。そら來たな、……と文吾は思つた。

『人に貰へやしまへん。天から授かりまんね。』

文吾はかう言つて、ニヤリと笑つた。それがどうして、七歳や八歳の幼いものゝ口から出る言葉かと、母は呆れて了つて、文吾の幼顏に浮ぶ不敵の面魂を見詰めてゐた。さうして急に差し俯向くと、文吾の小さい膝の前にひれ伏して、め

そ〱と泣き出した。母の方が幼い者のやうになつて了つた。

けれども、母は滅多に外出をしないで、家で賃仕事をしてゐるから、隣り村の大きな御所柿の木のことは知らなかつた。木に生つたのを盗んで來るのか、何處かの家に蔵つてあるのを掇つて來るのか、ハッキリとは分らないが、どうしても正しい品ではないと思ふと、母は今まで喰べたお美味い御所柿を、殘らず吐き出したいと思つたのであらう。いきなり首を擡げると、前にあつた二つの大きな御所柿を取つて、表の方へ投げ付けた。さうして、

『文吾はん、何んであんたはそんなさもしい心になつて呉れたんや。』と言ひ〱、小さい膝を。皺だらけの手で揺り動かした。

『阿母さん、柿はあゝやつて、自然に生つてゐるんやおまへんか。人間に喰べさせようと思ふて生つてゐるんやおますまい。あの井戸の水が人間に飲まれようと思ふて湧くのやないのと同なしこツちやらう。柿を取つて喰べるのが盗人なら、井戸の水を汲んだり川の水を掬うたりして飲むのも盗人や。』と、文吾の幼い智恵は、えらいことを考へ出して來た。

『無茶言てなはるな。……川の水と柿とが一所になりますかいな。』と、母は百結衣の袖でそつと涙を拭いた。

『取つて喰べるのが惡いのんなら、人の見る前で生らん方がえゝ。生るよつて喰べるのは、當り前やないか。これは俺の柿や言ふて、自分一人のもんと勝手にきめたかて、柿の方では、そんなこと知りよれへん。持つてる人が木へ登つて捥らな、ほかのもんでは堅うて取れんし、また木へも登れん、よしんば登つて柿を取つて來ても、持つてる人やなけれや、皮も剝けんし、歯も立たんといふのんなら、ほんまに其の人の持ち物ときめることが出けるけど、誰れでも登らうと思ふたら其の木へ登れるし、持つてる人の手でなうても、捥ると取れるし、取つて來たらかうやつて、誰れにでも喰べられるんやもん、これは俺の柿やときめるのは嘘や、誰れの柿でもない柿は柿の柿や。そやなかつたら、皆んなの人の仲間持ちや。』と、文吾は母の前に片肱怒らして、小憎らしいことを言つた。

『無茶ばつかり言ふて、そんなら文吾はん。あんたはこれから、人のもんも自分のもんもない、欲しなつたら、何んでも取りなはるんか。』と、母は涙の眼を輝かして、文吾の小さな膝に詰め寄つたが、また忽ち崩れるやうにひれ伏して、わつと泣き出した。

四

『文吾はんあんたはお父つあんの顔を知らんのやなア。……』

夜も更けて、母子枕を並べて寢てゐる時、母はこんなことを言つた。文吾がよく眠つてゐると思つて、獨言のやうに言つたのを、折節眼を覺ましてゐた文吾は、『うツすら覺えてる。顔の平たい、大けな人やつた。』と、寢惚け聲でかう言つて、何か喰べてでもゐるやうに、口をむにや／＼さした。

『あゝあんた起きてなはつたのか。』と、母はきまりわるさうにして、向ふへ寢返りをした。其の途端、蒲團が狹いので、足がドタリと疊の上へ滑り落ちた。この村で疊の敷いてあるのは、この石川の家のほかには、莊屋ぐらゐのものであつた。家は荒れ果てゝも、破れ疊に昔し榮えた名家の跡を見せてゐた。疊の敷いてある家と言へば、それがどんなに破れてゐても、人は其の家を敬ふことを忘れなかつた。古疊の上へ足を滑らせると冷りとした氣持ちが、得も言はれぬ感じを母の胸に與へて、痩せても枯れて石川の家には、まだ疊が敷いてあるといふ誇りが、全身に漲るのであらう。母は古疊の上へ足をバク／＼させてゐた。

『文吾はん、あんたの四歳の時に死んだお父つあんはなア、あれは……』と、母は向ふをむいたまゝ言ひかけて、もう泣き聲になつた。文吾は母がまた何を言ふことかと、頓着もしないで、もう御所柿にも飽きたから、明日は一つ、手習ひに行つた時、お師匠さんの菓子簞笥にある饅頭を喰べてやらうと思つて、頻りに其の方法を考へてゐた。喰べたくなるのは自然だ、欲しいものを取つて喰べるのは當り前だといふ考へは、文吾の魂魄に深く／＼植え付けられて、なか／＼

抜き去ることの出來ぬものになつてゐる。

『文吾はん……』と、母はまたくるりと此方へ寢返りをして、疊の上へ滑り落した足をバタ／＼やつてゐる。

『阿母さん……』と、文吾も夢のやうな聲で呼んだ。

『文吾はん、あんたのお父つあんはなア。……』と言ふなり、母はむつくと起き直つて、床を這ひ出し、文吾の側へ寄つて來て、ひしとばかりに其の寢姿に取り付いた。

『文吾はん、あんた、死んだお父つあんの代りになつて、わたしの言ふことを聽いてくれ。』と、母の聲は涙とゝもに塞いであつたものを取り除いたやうに溢れ出た。――

文吾の父は由緒ある武士石川左衛門の後裔で、先祖代々伊賀の郷士であつたが、だん／＼に家が衰へて、多くあつた山林田畑も賣り拂て、其の日の米や鹽にも困るやうになつた。しかし酒だけはどうしても缺かすことが出來ないといふので、母が瓶子を抱いて、遠い山路を濁酒など求めに歩いたものであつた。何處の酒屋でも石川と言へば相手にしなくなつてゐるのを、無理やりに瓶子を突き付けて、推し込んで行かねばならぬ母は、どんなに辛いことであつたらう。

『酒がないのは、生命がないのも同じことぢや。』と父は毎朝必ずさう言つて、母に酒の才覺を促したさうである。

酒のほかにもう一つ、父の求むる心の甚だ强いものがあつた。それは子だ。『男の子が一人欲しい。仕方がなけれや女でもよい。』と、父は熱心に考へてゐた。酒と子供……それが父の求むる二つの大事なものであつた。しかし酒は母の苦心によつて、毎晩のこなからは缺かさないが、子供だけは、母一人の力でどうにもならなかつた。

『石川の血統が絶える。……』と、父は毎日溜息ばかり吐いてゐた。

ところが或る日、どうしてもこなからの濁酒の手に入らぬことがあつた。母は八つ時の頃から草履の尻を摺り切らして、山一つ越えて向ふの里まで行つたが、酒を借して呉れる家がなかつた。家へ歸ると膳の上に瓶子のないのを憤つたのは、『もう生きてゐられん。酒がなけれや死んでしまう。』と、狂氣のやうに駄々を捏ねる。

もう當てはないけれど、父の憤りをチツト見てゐることは出來ないので『母はまた瓶子を持つて外へ出た、五月の空はどんより曇つて、村の家々は、燃ゆるやうな青葉の匂ひに包まれてゐた。破れ草履を脫ぎ棄てたので、足の裏が冷たく、濕ひをもつた土に吸ひ付くやうであつた。

酒のありさうな家へは、皆行つて了つたので、この上は神の力に縋るよりほかはないと思つて、母は毎朝跣足まゐりをしてゐる隣り村の平井明神の森へと志ざした。神の青葉は人の青葉よりも更に美しかつた。それが夜だから、こんもりと雲か山かのやうに見えてゐる中へ、鳥居の下を通つて進んで行くと、燈明もない拜殿の中は、洞穴のやうに思はれた。

近付くほど餘計に願ひ事が叶ふかと考へられるので、階段を足で探つて、砂だらけの板の間へ上つて行くと、暗に馴れた眼は、眞正面に据えてある八足臺の上に注がれて、木の間を漏るゝ星明りに映し出された錫の神酒瓶子が一對、母を引き寄せるやうにして立つてゐた。母は覺えず手を伸ばしかけたが、神さまのものを勿體ないと思つて、躊ふ手を引ッ込めたが、其の手はまたいつの間にか伸びて、錫の瓶子にかゝつてゐた。殆んど無意識に、其の瓶子を振つてみると、酒か水かトプン〳〵と音がした。夫の喜ぶ顏を想ふ嬉しさに、勿體なさも忘れて、瓶子の口に鼻をあてゝみると、芳醇な匂ひが、ぷうんと來た。

『平井大明神……この賜物を頂いて、夫を喜ばせます。それからどうか子供を一人お授け下さりませ。』と、母は覺えず大きな聲で禱つた。

其の時、何處から現はれたか、白衣を着けた大きな男の姿が、母の眼の前にあつた。母は『きやツ』と叫んで、氣絕せんばかりに驚いたが、其のかよわい手を摑んで、ぐいツと引き寄せた白衣の男は、母の耳に口を寄せて言つた。

『わしはお前に、美い酒を授けてやつた。これからえらい子供を授けてやる。……』

それは、ほんたうに神の聲のやうであつた。——

此處まで語つて、母はあとを言ふことが出來ないで、泣き噦りになつた。

『文吾はん、わたしはなア、お父つあんを喜ばさうと思ふた餘り、お酒と子供が欲しさに、言はうやうのない大きな罪を犯したんや。神さんのお宮を穢したんや。お父つあんが生きてゐるうちに、何遍白狀しようと覺悟したか知れんが、言ひそゝくれて、臨終の床にも間に合はんことになつた。お父つあんの代りに、文吾はん、あんたに白狀したのやよつて、どうでもしてわたしを責めとくれ。』と、母の言葉は、矢張り涙とゝもに溢れ出た。

けれども、それから母がまた涙とゝもに言ふところに據ると、文吾はどうも、自分のほんたうの父は、其の暗黑の中から出た怪しい白衣の男だと思はれた。『あんたの四歳の時に死んだお父つあんはなア、……』と、母が泣き顏をして言ひかけては、後を止めて了つた言葉の破片が、殘りなく拾はれたやうな氣がした。

都にまで響いた大盜賊の何某が、六十六部に姿を扮して、長いこと平井明神の拜殿に隱れてゐたといふこと。……

父は文吾を、平井明神の申し子だと信じ切つて、有り難がつてゐた。自分の面差しに少しも似てゐなければ、性質もまるで反對な文吾をば、却つて餘計に可愛がつた。……。

文吾は母の口からこんな風の痛ましいことばかり、いろ〳〵と聽かされて、深く自ら心に決するところがあつた。

新刊紹介

■**續ロタンの言葉**　（高村光太郎氏譯）數年前出版されたるロダンの言葉の續篇として譯されたものにして眞摯なる譯文で綴られたる價値多き書として必讀すべきである（定價貳圓五十錢牛込横寺町叢文閣發行）

■**水野仙子集**　閨秀作家中一代の才人として文名を馳せたる故水野仙子女史の遺著を蒐めたものにして『醉ひたる商人』以下二十二篇を收め裝幀亦頗る落付いた氣持ちの好い書である。（定價貳圓七十錢牛込横寺町叢文閣發行）

■**葡萄の花**　（大橋房子氏著）最近文壇各方面から驚異の眼を以て迎へられて居る若き氏の燃ゆるやうな内部生活の迸りである。人間の持つ有ゆる惱み―殊に目覺めたる若き女性の味ふ苦しく堪へ難い惱み―を嚴肅な自由なそして靜かな哀愁と幻想と感激とに充ちた孤獨を虔し乍らぢつと凝視しつゝ堪へ忍んで來たる過去の記錄である。『孤島の想ひ』『閃光』『暴君の惱み』の數篇など涙ぐましい中に人生に對する鋭い皮肉とそして生を愛する火のやうな情熱とを見る。同時にそこに著者の内部生活をも窺ひ知る事が出來よう。氏は今或クライマックスの上に立つて居ると云はれる。果して其行先に映ずるものは何であらう？　それは兎も角全體を通じて非常に緊張した嚴肅な而も熱烈な著者の態度が極めて齒切れのいい文章で現はされてある。夫れ丈け讀者をして何かしら心地よい魅惑を感ぜしめる。（定價金二圓二十錢東京銀座警醒社書店發行）

■**文化問題十五講**　井上哲次郎、村上專精、吉田靜致、澁澤男爵氏以下十五氏の現代文化問題に對する論文集である。（定價二圓八十錢神田南神保町日進堂發行）

■**文化生活研究**　第一卷　森本博士を主幹とし吉野博士有島武郎氏を顧問とせる文化生活研究會發行講義錄にして現代文化生活に關し各專門大家が懇切且平易に説述されたるものにして在來の講義錄と異り高尙且有益也。（會費壹ケ年十五圓六十錢警醒社書店内同研究會）

■**格言全集**　（難波經幸氏著）政治、法律、文藝其他各方面に亘る格言を蒐めたるものにして文章演説材料として有益也　定價七十錢東京堂發行）

■**ブラッキイ教養論**　（牛山充氏譯）智育、體育、德育の三篇に分ち青年學生に對する心得が例の親切なる筆致で諄々と説かれてある。原著者ブラッキイ自ら青年學生必携書と稱して居る如く青年學生の價値ある讀物である。（定價八十錢越山堂發行）

■**唯物史觀説**　（山川均氏監修島田保太郎氏譯）第四級民衆書としてマルクスの學説體系の出發點であり中心思想である唯物史觀を親切に書かれて居る。（定價七十錢三田書房發行）

■**軍人優遇論**　（武藤山治氏著）我軍人の給與の薄きを慨せる溫情主義資本家たる武藤氏の著である。（定價七十錢ダイヤモンド社發行）

編輯室より

▲七月號は增大にする筈であつたが、都合に依り普通號としたので、山川菊榮夫人の興味ある『男女同賃問題の研究』（五十枚の長評論）賀川豊彦氏の力作たる百三十枚の長論文『勞働組合の心理』の二大勞作を來月號に延したことは、呉々も殘念であつた。又村松梢風氏の快作『お七吉三』及び伊藤野枝氏の痛快な『引越しさはぎ』と云ふ雜錄も、共に八月號に延期したことも、併せて筆者と讀者諸君との御諒承を仰がねばならない。

▲六月號の『思想系統總覽』に就て一二訂正して置かねばならぬことが出來た。北澤新次郎氏の擧げられた凡ての人々は、主張者としてゞはなく、何れも研究者として擧げたものなること、及び『勞働資本主義者』の一項は、室伏高信氏の書いたものとしてあるのは、高畠素之氏の書いたものなること、右二項の訂正をして、粗漏を謝す。

▲本號より連載する『社會講談』は、本誌に於て計畫發表以來、續々同樣計畫を進め、專門の雜誌さへ出來ると云ふことを耳にしてゐる。講談をして意味あるものたらしめ、之を藝術化し、思想化し、民衆教化の、一助ともなると云ふ氣運が、斯くして昂まりつつあるのは洵に喜ばしいことである。

毎月一日發行 一回

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

外國行郵税は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候

▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし
但し郵券代用一割增の事

▼御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北隆館　上田屋　至誠堂

大正九年六月二十七日印刷納本
大正九年七月一日發行

本號定價 金七十錢

編輯兼發行兼印刷者 東京府中目黒七七〇 横關利藤太

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番 秀英舍

發行所 東京芝區櫻田久保町七 改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可 大正九年六月廿七日印刷納本
大正九年七月一日發行（毎月一回一日發行）
第貳卷第七號 定價七十錢